

薬師堂東遺跡Ⅱ

(C・D地点)

—本庄市立本庄東中学校校舎・プール棟の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

(第2分冊)

2019

本庄市教育委員会

薬師堂東遺跡Ⅱ
(C・D地点)
(第2分冊)

目次

(第2分冊)

目次

第IV章 薬師堂東遺跡D地点の調査	709
第1節 調査の概要	709
第2節 検出された遺構と遺物	712
1 竪穴住居跡	712
2 掘立柱建物跡	797
3 地下式墳	799
4 土坑	804
5 堀跡および柱穴列、溝跡	822
6 ピット	835
7 遺構外出土遺物	835
第V章 薬師堂東遺跡C地点出土ガラス小玉鑄型、棒状土製品集成	837
第VI章 自然科学分析	881
第1節 薬師堂東遺跡C地点出土のガラス小玉の鑄型および鑄型付着ガラスの 自然科学的調査	881
第2節 薬師堂東遺跡C・D地点出土の人骨・獣骨の同定	893
第VII章 まとめ	899
第1節 薬師堂東遺跡C・D地点出土の古墳時代中期～平安時代の土器について ..	899
第2節 薬師堂東遺跡C地点出土のガラス小玉鑄型、棒状土製品の時期について ..	919
引用・参考文献	923
図版	

插图目次

(第2分册)

D地点

第792图	药师堂東遺跡D地点全体图	710	711	第831图	第343号住居跡出土遺物	746
第793图	第324号住居跡平面・断面图	713		第832图	第344号住居跡出土遺物	746
第794图	第324号住居跡出土遺物	713		第833图	第345号住居跡平面・断面图	748
第795图	第325・326号住居跡平面・断面图	714		第834图	第345号住居跡出土遺物	749
第796图	第326号住居跡出土遺物	714		第835图	第346・347号住居跡平面・断面图	750
第797图	第327号住居跡平面・断面图	715		第836图	第346号住居跡出土遺物	751
第798图	第327号住居跡出土遺物	715		第837图	第348号住居跡平面・断面图(1)	752
第799图	第328号住居跡平面・断面图	716		第838图	第348号住居跡平面・断面图(2)	753
第800图	第328号住居跡出土遺物	718		第839图	第348号住居跡出土遺物	754
第801图	第329号住居跡平面・断面图	720		第840图	第349号住居跡平面・断面图	755
第802图	第329号住居跡出土遺物	720		第841图	第349号住居跡出土遺物	755
第803图	第330号住居跡平面・断面图	721		第842图	第350号住居跡平面・断面图	756
第804图	第330号住居跡出土遺物	721		第843图	第350号住居跡出土遺物	756
第805图	第331号住居跡平面・断面图	722		第844图	第351・352号住居跡平面・断面图	757
第806图	第331号住居跡出土遺物	723		第845图	第351号住居跡出土遺物	757
第807图	第332号住居跡平面・断面图(1)	724		第846图	第353・354号住居跡平面・断面图	758
第808图	第332号住居跡平面・断面图(2)	725		第847图	第353号住居跡出土遺物	758
第809图	第332号住居跡出土遺物(1)	726		第848图	第354号住居跡出土遺物	758
第810图	第332号住居跡出土遺物(2)	728		第849图	第355号住居跡平面・断面图	759
第811图	第333・334号住居跡平面・断面图(1)	729		第850图	第355号住居跡出土遺物	759
第812图	第333・334号住居跡平面・断面图(2)	730		第851图	第356号住居跡出土遺物	760
第813图	第335号住居跡平面・断面图	731		第852图	第356号住居跡平面・断面图	760
第814图	第335号住居跡出土遺物	732		第853图	第357号住居跡平面・断面图	761
第815图	第336号住居跡平面・断面图	732		第854图	第358号住居跡平面・断面图(1)	762
第816图	第337号住居跡平面・断面图	733		第855图	第358号住居跡平面・断面图(2)	763
第817图	第337号住居跡出土遺物	733		第856图	第358号住居跡出土遺物	764
第818图	第338号住居跡平面・断面图	734		第857图	第359号住居跡平面・断面图	764
第819图	第338号住居跡出土遺物	735		第858图	第359号住居跡出土遺物	765
第820图	第339号住居跡平面・断面图(1)	737		第859图	第360号住居跡平面・断面图	765
第821图	第339号住居跡平面・断面图(2)	738		第860图	第360号住居跡出土遺物	766
第822图	第339号住居跡平面・断面图(3)	739		第861图	第361号住居跡平面・断面图	767
第823图	第339号住居跡出土遺物	739		第862图	第361号住居跡出土遺物	768
第824图	第340号住居跡平面・断面图	740		第863图	第362号住居跡平面・断面图	769
第825图	第340号住居跡出土遺物	740		第864图	第363号住居跡平面・断面图	770
第826图	第341号住居跡平面・断面图	741		第865图	第363号住居跡出土遺物	770
第827图	第341号住居跡出土遺物	742		第866图	第364号住居跡平面・断面图(1)	772
第828图	第342号住居跡平面・断面图	743		第867图	第364号住居跡平面・断面图(2)	773
第829图	第342号住居跡出土遺物	744		第868图	第364号住居跡平面・断面图(3)	774
第830图	第343・344号住居跡平面・断面图	745		第869图	第364号住居跡出土遺物	774
				第870图	第365・368・369号住居跡平面・断面图(1)	775
				第871图	第365・368・369号住居跡平面・断面图(2)	776

第872図	第365号住居跡出土遺物……………	776	第915図	第1号地下式竈出土遺物図(2) ……	802
第873図	第366号住居跡平面・断面図……………	778	第916図	第1号地下式竈出土遺物図(3) ……	803
第874図	第366号住居跡出土遺物……………	778	第917図	第429～435号土坑平面・断面図(1) ……	805
第875図	第367号住居跡平面・断面図……………	778	第918図	第429～435号土坑平面・断面図(2) ……	806
第876図	第368号住居跡出土遺物……………	779	第919図	第426～442号土坑平面・断面図 ……	806
第877図	第370・371号住居跡平面・断面図 ……	780	第920図	第443～449号土坑平面・断面図(1) ……	807
第878図	第370号住居跡出土遺物……………	780	第921図	第443～449号土坑平面・断面図(2) ……	808
第879図	第371号住居跡出土遺物……………	780	第922図	第450～452号土坑平面・断面図 ……	808
第880図	第372号住居跡平面・断面図……………	781	第923図	第453～459号土坑平面・断面図 ……	809
第881図	第372号住居跡出土遺物……………	781	第924図	第460～468号土坑平面・断面図(1) ……	810
第882図	第373号住居跡平面・断面図……………	782	第925図	第460～468号土坑平面・断面図(2) ……	811
第883図	第373号住居跡出土遺物……………	782	第926図	第469～475号土坑平面・断面図(1) ……	811
第884図	第374号住居跡平面・断面図……………	783	第927図	第469～475号土坑平面・断面図(2) ……	812
第885図	第375号住居跡平面・断面図……………	783	第928図	第476～482号土坑平面・断面図 ……	812
第886図	第375号住居跡出土遺物……………	783	第929図	第483～492号土坑平面・断面図 ……	813
第887図	第376号住居跡平面・断面図……………	784	第930図	第493～504号土坑平面・断面図 ……	814
第888図	第377号住居跡平面・断面図……………	784	第931図	第429・430・434～439号土坑出土遺物 ……………	817
第889図	第377号住居跡出土遺物……………	785	第932図	第439・450～452・459・470・475号 土坑出土遺物 ……	819
第890図	第378号住居跡平面・断面図……………	785	第933図	第476・486～488・496・501号土坑出土 遺物 ……	821
第891図	第378号住居跡出土遺物……………	786	第934図	第1・2号堀跡、第1号柱穴列平面図 ……	823
第892図	第379号住居跡平面・断面図……………	787	第935図	第1号堀跡等高線・断面図(1) ……	825
第893図	第379号住居跡出土遺物……………	787	第936図	第1号堀跡等高線・断面図(2) ……	826
第894図	第380号住居跡平面・断面図……………	788	第937図	第1号堀跡等高線・断面図(3) ……	827
第895図	第380号住居跡出土遺物……………	789	第938図	第1号堀跡出土遺物 ……	827
第896図	第381号住居跡平面・断面図……………	790	第939図	第2号堀跡、第1号柱穴列等高線・ 断面図(1) ……	830
第897図	第381号住居跡出土遺物……………	790	第940図	第2号堀跡、第1号柱穴列等高線・ 断面図(2) ……	831
第898図	第382号住居跡平面・断面図……………	790	第941図	第2号堀跡、第1号柱穴列平面・断面図 ……………	832
第899図	第383～385号住居跡平面・断面図(1) ……………	791	第942図	第2号堀跡出土遺物 ……	833
第900図	第383～385号住居跡平面・断面図(2) ……………	792	第943図	第1号柱穴列出土遺物 ……	834
第901図	第383号住居跡出土遺物……………	792	第944図	第6号溝跡平面・断面図 ……	834
第902図	第383号住居跡土器位置跡平面・断面図 ……………	793	第945図	D地点・遺構外出土遺物 ……	836
第903図	第383号住居跡土器位置跡出土遺物 ……	793	ガラス小玉鋳型、棒状土製品集成		
第904図	第386号住居跡平面・断面図……………	794	第946図	ガラス小玉鋳型出土遺構分布図 ……	837
第905図	第386号住居跡出土遺物……………	795	第947図	棒状土製品出土遺構分布図 ……	838
第906図	第387号住居跡平面・断面図……………	795	第948図	ガラス小玉鋳型集成図(1)(No. 1～10) ……………	839
第907図	第387号住居跡出土遺物……………	795	第949図	ガラス小玉鋳型集成図(2)(No. 11～18) ……………	840
第908図	第388号住居跡平面・断面図……………	796	第950図	ガラス小玉鋳型集成図(3)(No. 19～29) ……………	
第909図	第1号掘立柱建物跡平面・断面図 ……	797			
第910図	第1号掘立柱建物跡出土遺物 ……	797			
第911図	第2号掘立柱建物跡平面・断面図 ……	798			
第912図	第2号掘立柱建物跡出土遺物 ……	799			
第913図	第1号地下式竈平面・断面図 ……	800			
第914図	第1号地下式竈出土遺物図(1) ……	801			

.....	842
第951図 ガラス小玉鈿型集成図(4)(No. 30~38)	843
第952図 ガラス小玉鈿型集成図(5)(No. 39~46)	845
第953図 ガラス小玉鈿型集成図(6)(No. 47~55)	846
第954図 ガラス小玉鈿型集成図(7)(No. 56~61)	848
第955図 ガラス小玉鈿型集成図(8)(No. 62~72)	849
第956図 ガラス小玉鈿型集成図(9)(No. 73~83)	851
第957図 ガラス小玉鈿型集成図(10)(No. 84~91)	852
第958図 ガラス小玉鈿型集成図(11)(No. 92~104)	854
第959図 ガラス小玉鈿型集成図(12)(No. 105~112)	855
第960図 ガラス小玉鈿型集成図(13)(No. 113~119)	857
第961図 ガラス小玉鈿型集成図(14)(No. 120~130)	858
第962図 ガラス小玉鈿型集成図(15)(No. 131~147)	860
第963図 ガラス小玉鈿型集成図(16)(No. 148~153)	861
第964図 ガラス小玉鈿型集成図(17)(No. 154~156)	863
第965図 ガラス小玉鈿型集成図(18)(No. 157~164)	864
第966図 ガラス小玉鈿型集成図(19)(No. 165~175)	865

第967図 ガラス小玉鈿型集成図(20)(No. 176~188)	867
第968図 棒状土製品集成図(1)(No. 1~22)	869
第969図 棒状土製品集成図(2)(No. 23~46)	870
第970図 棒状土製品集成図(3)(No. 47~70)	872
第971図 棒状土製品集成図(4)(No. 71~99)	874
第972図 棒状土製品集成図(5)(No. 100~125)	876
第973図 棒状土製品集成図(6)(No. 126~149)	877
第974図 棒状土製品集成図(7)(No. 150~163)	879

まとめ

第975図 第1期の土器	900
第976図 第2期の土器	901
第977図 第3期の土器	902
第978図 第4期の土器	903
第979図 第5期の土器	904
第980図 第6期の土器	906
第981図 第7期の土器	907
第982図 第8期の土器	908
第983図 第9期の土器	909
第984図 第10期の土器	910
第985図 第11期の土器	911
第986図 第12期の土器	912
第987図 第13期の土器	913
第988図 第14期の土器	914
第989図 第15期の土器	915
第990図 第16期の土器	916
第991図 第17期の土器	916
第992図 第18期の土器	917
第993図 第19期の土器	917
第994図 第20期の土器	918

挿表目次

(第2分冊)

D地点

第346表 第324号住居跡出土遺物観察表	713
第347表 第326号住居跡出土遺物観察表	714
第348表 第227号住居跡出土遺物観察表(1)	715
第349表 第327号住居跡出土遺物観察表(2)	716
第350表 第328号住居跡出土遺物観察表(1)	717
第351表 第328号住居跡出土遺物観察表(2)	719
第352表 第329号住居跡出土遺物観察表(1)	720
第353表 第329号住居跡出土遺物観察表(2)	721
第354表 第330号住居跡出土遺物観察表	722

第355表 第331号住居跡出土遺物観察表	723
第356表 第332号住居跡出土遺物観察表(1)	725
第357表 第332号住居跡出土遺物観察表(2)	727
第358表 第332号住居跡出土遺物観察表(3)	728
第359表 第335号住居跡出土遺物観察表	732
第360表 第337号住居跡出土遺物観察表	734
第361表 第338号住居跡出土遺物観察表(1)	735
第362表 第338号住居跡出土遺物観察表(2)	736
第363表 第339号住居跡出土遺物観察表	739
第364表 第340号住居跡出土遺物観察表	740
第365表 第341号住居跡出土遺物観察表	742

第366表	第342号住居跡出土遺物観察表……………744	第411表	第1号地下式竈出土遺物観察表(1) …… 801
第367表	第343号住居跡出土遺物観察表……………746	第412表	第1号地下式竈出土遺物観察表(2) …… 803
第368表	第344号住居跡出土遺物観察表(1) …… 746	第413表	D地点・土坑計測および観察表(1) …… 815
第369表	第344号住居跡出土遺物観察表(2) …… 747	第414表	D地点・土坑計測および観察表(2) …… 816
第370表	第345号住居跡出土遺物観察表(1) …… 748	第415表	第29・430・434～439号土坑出土遺物 観察表(1) …… 816
第371表	第345号住居跡出土遺物観察表(2) …… 749	第416表	第429・430・434～439号土坑出土遺物 観察表(2) …… 818
第372表	第346号住居跡出土遺物観察表(1) …… 750	第417表	第439・450～452・459・470・475・ 476・480号土坑出土遺物観察表(1) …… 820
第373表	第346号住居跡出土遺物観察表(2) …… 751	第418表	第439・450～452・459・470・475・ 476・480号土坑出土遺物観察表(2) …… 821
第374表	第348号住居跡出土遺物観察表…………… 754	第419表	第476・480・486～488・496・501号土 坑出土遺物観察表(1) …… 821
第375表	第349号住居跡出土遺物観察表…………… 755	第420表	第476・480・486～488・496・501号土 坑出土遺物観察表(2) …… 822
第376表	第350号住居跡出土遺物観察表…………… 756	第421表	第1号堀跡出土遺物観察表 …… 828
第377表	第351号住居跡出土遺物観察表…………… 757	第422表	第2号堀跡出土遺物観察表(1) …… 833
第378表	第353号住居跡出土遺物観察表…………… 758	第423表	第2号堀跡出土遺物観察表(2) …… 834
第379表	第354号住居跡出土遺物観察表…………… 758	第424表	第1号柱穴列出土遺物観察表 …… 834
第380表	第355号住居跡出土遺物観察表(1) …… 759	第425表	D地点・遺構外出土遺物出土遺物観察 表(1) …… 835
第381表	第355号住居跡出土遺物観察表(2) …… 760	第426表	D地点・遺構外出土遺物出土遺物観察 表(2) …… 836
第382表	第356号住居跡出土遺物観察表…………… 760		
第383表	第358号住居跡出土遺物観察表…………… 764		
第384表	第359号住居跡出土遺物観察表…………… 765		
第385表	第360号住居跡出土遺物観察表…………… 766		
第386表	第361号住居跡出土遺物観察表(1) …… 768		
第387表	第361号住居跡出土遺物観察表(2) …… 769		
第388表	第363号住居跡出土遺物観察表…………… 771		
第389表	第364号住居跡出土遺物観察表…………… 774		
第390表	第365号住居跡出土遺物観察表(1) …… 776		
第391表	第365号住居跡出土遺物観察表(2) …… 777		
第392表	第366号住居跡出土遺物観察表…………… 778		
第393表	第368号住居跡出土遺物観察表…………… 779		
第394表	第370号住居跡出土遺物観察表…………… 780		
第395表	第371号住居跡出土遺物観察表…………… 781		
第396表	第372号住居跡出土遺物観察表…………… 781		
第397表	第373号住居跡出土遺物観察表…………… 781		
第398表	第375号住居跡出土遺物観察表…………… 784		
第399表	第377号住居跡出土遺物観察表…………… 785		
第400表	第378号住居跡出土遺物観察表…………… 786		
第401表	第379号住居跡出土遺物観察表…………… 787		
第402表	第380号住居跡出土遺物観察表(1) …… 788		
第403表	第380号住居跡出土遺物観察表(2) …… 789		
第404表	第381号住居跡出土遺物観察表…………… 790		
第405表	第383号住居跡出土遺物観察表…………… 792		
第406表	第383号住居跡土器埋置跡出土遺物観察 表 …… 793		
第407表	第386号住居跡出土遺物観察表…………… 795		
第408表	第387号住居跡出土遺物観察表…………… 796		
第409表	第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 798		
第410表	第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 799		
		ガラス小玉鉤型・棒状土製品集成	
		第427表	ガラス小玉鉤型観察表(1)(No. 1～20) …………… 841
		第428表	ガラス小玉鉤型観察表(2)(No. 21～38) …………… 844
		第429表	ガラス小玉鉤型観察表(3)(No. 39～55) …………… 847
		第430表	ガラス小玉鉤型観察表(4)(No. 56～74) …………… 850
		第431表	ガラス小玉鉤型観察表(5)(No. 75～93) …………… 853
		第432表	ガラス小玉鉤型観察表(6)(No. 94～112) …………… 856
		第433表	ガラス小玉鉤型観察表(7)(No. 113～132) …………… 859
		第434表	ガラス小玉鉤型観察表(8)(No. 133～153) …………… 862
		第435表	ガラス小玉鉤型観察表(9)(No. 154～172) …………… 866
		第436表	ガラス小玉鉤型観察表(10)(No. 173～188) …………… 868

第437表	棒状土製品観察表(1)(No. 1~34).....	871
第438表	棒状土製品観察表(2)(No. 35~68).....	873
第439表	棒状土製品観察表(3)(No. 69~102)....	875
第440表	棒状土製品観察表(4)(No. 103~136)	878
第441表	棒状土製品観察表(5)(No. 137~163)	880

自然科学分析

第442表	資料および調査結果一覧.....	882
-------	------------------	-----

第443表	蛍光X線分析定量結果(FP法).....	884
第444表	型穴内残存鉛ガラス(Group L11B)の鉛 同位体比分析結果.....	890
第445表	薬師堂東遺跡C・D地点出土人骨.....	896
第446表	薬師堂東遺跡C・D地点出土獣骨.....	897

まとめ

第447表	薬師堂東遺跡C地点出土ガラス小玉 鈔型、棒状土製品個体数一覧.....	920
-------	----------------------------------------	-----

写真目次

(第2分冊)

写真1	第381号土坑出土人骨右上腕遠位端
写真2	第381号土坑出土人骨左右尺骨近位端
写真3	第381号土坑出土人骨左大腿骨近位端
写真4	第394号土坑出土人骨下顎大白歯
写真5	第404号土坑出土人骨下顎大白歯

写真6	第457号土坑出土人骨右下顎骨
写真7	第458号土坑出土人骨上顎右臼歯
写真8	第459号土坑出土人骨下顎大白歯
写真9	第130号住居跡出土獣骨上顎臼歯
写真10	第73号土坑出土獣骨左橈尺骨
写真11	第365号住居跡出土獣骨上顎臼歯

図版目次

(第2分冊)

C地点

図版1	薬師堂東遺跡C地点調査区南西半全景
図版2	薬師堂東遺跡C地点調査区全景(1)・(2)
図版3	薬師堂東遺跡C地点調査区全景(3)・(4)
図版4	第30~33号住居跡
図版5	第34~36号住居跡
図版6	第37・38号住居跡
図版7	第38~41号住居跡
図版8	第42~44号住居跡
図版9	第45~47号住居跡
図版10	第48・49号住居跡
図版11	第50~53号住居跡
図版12	第53・54号住居跡
図版13	第55~57号住居跡
図版14	第57~59号住居跡
図版15	第60~63号住居跡
図版16	第63~66号住居跡
図版17	第67~71号住居跡
図版18	第72~77号住居跡
図版19	第78・79号住居跡
図版20	第79~83号住居跡
図版21	第84~87・89号住居跡
図版22	第92・93・95~99号住居跡

図版23	第100~102号住居跡
図版24	第102~105号住居跡
図版25	第106・107号住居跡
図版26	第108~111・113・114号住居跡
図版27	第114・115号住居跡
図版28	第116・117号住居跡
図版29	第118・122~124号住居跡
図版30	第125・127・128号住居跡
図版31	第129・130・132号住居跡
図版32	第133~135号住居跡
図版33	第135~138号住居跡
図版34	第139・141~143号住居跡
図版35	第143~147号住居跡
図版36	第148・150~154号住居跡
図版37	第154~156号住居跡
図版38	第157・158・160・161号住居跡
図版39	第162~164号住居跡
図版40	第165・167・169・176号住居跡
図版41	第178~182号住居跡
図版42	第183・184・186・188・191号住居跡
図版43	第192・195~197号住居跡
図版44	第199~201号住居跡
図版45	第202~205号住居跡
図版46	第205・206号住居跡

- 图版47 第207·208号住居跡
 图版48 第208~212号住居跡
 图版49 第213·214号住居跡
 图版50 第216·217号住居跡
 图版51 第218·219号住居跡
 图版52 第220·221号住居跡
 图版53 第222~224号住居跡
 图版54 第225~227号住居跡
 图版55 第228~231号住居跡
 图版56 第231~234号住居跡
 图版57 第234·235号住居跡
 图版58 第235·236·238~240号住居跡
 图版59 第241·242号住居跡
 图版60 第243号住居跡
 图版61 第244~246号住居跡
 图版62 第247~249号住居跡
 图版63 第251~254·256号住居跡
 图版64 第257号住居跡
 图版65 第258~262·264号住居跡
 图版66 第265·267·268号住居跡
 图版67 第269~271号住居跡
 图版68 第272·273号住居跡
 图版69 第274~276号住居跡
 图版70 第277~279号住居跡
 图版71 第280~282号住居跡
 图版72 第282~285号住居跡
 图版73 第286~290号住居跡
 图版74 第291~295号住居跡
 图版75 第296·297号住居跡
 图版76 第297~302号住居跡
 图版77 第303·306~308号住居跡
 图版78 第308~313号住居跡
 图版79 第313~318号住居跡
 图版80 第319·321~323号住居跡
 图版81 第3~15号土坑
 图版82 第16~27号土坑
 图版83 第28~43号土坑
 图版84 第44~57·65号土坑
 图版85 第58~64·66~72号土坑
 图版86 第73~83号土坑
 图版87 第84~95·97·98号土坑
 图版88 第99~112号土坑
 图版89 第113~125号土坑
 图版90 第126~138·140·141号土坑
 图版91 第142~149·151~155号土坑
 图版92 第156~161·163~170·177号土坑
 图版93 第171~176·178~186号土坑
 图版94 第187~191·193~202号土坑
 图版95 第203·204·206~217号土坑
 图版96 第219~221·223~232号土坑
 图版97 第233~238·241~248号土坑
 图版98 第249·251·253~265号土坑
 图版99 第266·270·272~274·276~280·282·285·286·288·289号土坑
 图版100 第290~295·298·299·301~304·307·309号土坑
 图版101 第312~314·317~325号土坑
 图版102 第326·327·329~341号土坑
 图版103 第342~353号土坑
 图版104 第354~365·367~369号土坑
 图版105 第370·371·373~384号土坑
 图版106 第385~395号土坑
 图版107 第396~404·406~410·412号土坑
 图版108 第413~420·422~427号土坑、第3号溝
 图版109 第30~32号住居跡出土遺物、第33号住居跡出土遺物(1)
 图版110 第33号住居跡出土遺物(2)、第34·35号住居跡出土遺物、第36号住居跡出土遺物(1)
 图版111 第36号住居跡出土遺物(2)、第37号住居跡出土遺物、第38号住居跡出土遺物(1)
 图版112 第38号住居跡出土遺物(2)、第39~43号住居跡出土遺物
 图版113 第44·46号住居跡出土遺物、第47号住居跡出土遺物(1)
 图版114 第47号住居跡出土遺物(2)
 图版115 第48号住居跡出土遺物(1)
 图版116 第48号住居跡出土遺物(2)、第49·50号住居跡出土遺物
 图版117 第51·52号住居跡出土遺物、第53号住居跡出土遺物(1)
 图版118 第53号住居跡出土遺物(2)、第54~56号住居跡出土遺物
 图版119 第57号住居跡出土遺物(1)
 图版120 第57号住居跡出土遺物(2)、第58~62号住居跡出土遺物
 图版121 第63号住居跡出土遺物
 图版122 第64~66号住居跡出土遺物、第67号住居跡出土遺物(1)
 图版123 第67号住居跡出土遺物(2)、第68~70号住居跡出土遺物
 图版124 第72~75·78号住居跡出土遺物
 图版125 第79号住居跡出土遺物(1)

- 图版126 第79号住居跡出土遺物(2)、第81~86号住居跡出土遺物
- 图版127 第87·89·93~96·99·100号住居跡出土遺物
- 图版128 第101~105号住居跡出土遺物
- 图版129 第106·107号住居跡出土遺物
- 图版130 第108~110号住居跡出土遺物、第111号住居跡出土遺物(1)
- 图版131 第111号住居跡出土遺物(2)
- 图版132 第113号住居跡出土遺物、第114号住居跡出土遺物(1)
- 图版133 第114号住居跡出土遺物(2)、第115号住居跡出土遺物
- 图版134 第116号住居跡出土遺物(1)
- 图版135 第116号住居跡出土遺物(2)、第117号住居跡出土遺物、第118号住居跡出土遺物(1)
- 图版136 第118号住居跡出土遺物(2)、第119号住居跡出土遺物
- 图版137 第120~124·127号住居跡出土遺物
- 图版138 第128号住居跡出土遺物、第129号住居跡出土遺物(1)
- 图版139 第129号住居跡出土遺物(2)、第130号住居跡出土遺物
- 图版140 第131·132号住居跡出土遺物、第133号住居跡出土遺物(1)
- 图版141 第133号住居跡出土遺物(2)、第134号住居跡出土遺物、第135号住居跡出土遺物(1)
- 图版142 第135号住居跡出土遺物(2)、第136号住居跡出土遺物、第137号住居跡出土遺物(1)
- 图版143 第137号住居跡出土遺物(2)、第138号住居跡出土遺物(1)
- 图版144 第138号住居跡出土遺物(2)、第140~142号住居跡出土遺物、第143号住居跡出土遺物(1)
- 图版145 第143号住居跡出土遺物(2)、第144·145号住居跡出土遺物
- 图版146 第146~149号住居跡出土遺物、第150号住居跡出土遺物(1)
- 图版147 第150号住居跡出土遺物(2)、第151·153·154号住居跡出土遺物、第156号住居跡出土遺物(1)
- 图版148 第156号住居跡出土遺物(2)、第157号住居跡出土遺物(1)
- 图版149 第157号住居跡出土遺物(2)、第158~161号住居跡出土遺物
- 图版150 第162~165号住居跡出土遺物
- 图版151 第166~169·172·173号住居跡出土遺物
- 图版152 第176·179~181号住居跡出土遺物
- 图版153 第182~186·188·190号住居跡出土遺物、第192号住居跡出土遺物(1)
- 图版154 第192号住居跡出土遺物(2)、第195号住居跡出土遺物(1)
- 图版155 第195号住居跡出土遺物(2)、第196·200号住居跡出土遺物
- 图版156 第201号住居跡出土遺物、第202号住居跡出土遺物(1)
- 图版157 第202号住居跡出土遺物(2)、第203~205号住居跡出土遺物、第206号住居跡出土遺物(1)
- 图版158 第206号住居跡出土遺物(2)、第207号住居跡出土遺物(1)
- 图版159 第207号住居跡出土遺物(2)、第208·210·211号住居跡出土遺物
- 图版160 第212~214·216号住居跡出土遺物、第217号住居跡出土遺物(1)
- 图版161 第217号住居跡出土遺物(2)、第219·220号住居跡出土遺物、第221号住居跡出土遺物(1)
- 图版162 第221号住居跡出土遺物(2)
- 图版163 第222·223号住居跡出土遺物
- 图版164 第225~228·230号住居跡出土遺物
- 图版165 第231~235号住居跡出土遺物
- 图版166 第236~241号住居跡出土遺物
- 图版167 第242号住居跡出土遺物、第243号住居跡出土遺物(1)
- 图版168 第243号住居跡出土遺物(2)、第244·247~249号住居跡出土遺物
- 图版169 第250~253号住居跡出土遺物
- 图版170 第254号住居跡出土遺物
- 图版171 第256号住居跡出土遺物、第257号住居跡出土遺物(1)
- 图版172 第257号住居跡出土遺物(2)
- 图版173 第258~267号住居跡出土遺物
- 图版174 第268~272号住居跡出土遺物
- 图版175 第273·274号住居跡出土遺物、第275号住居跡出土遺物(1)
- 图版176 第275号住居跡出土遺物(2)
- 图版177 第276~280号住居跡出土遺物
- 图版178 第282~286·288·289·291号住居跡出土遺物
- 图版179 第292·294~298·301·302·304·307号住居跡出土遺物

図版180 第308号住居跡出土遺物(1)
図版181 第308号住居跡出土遺物(2)、第309・311~313・318・319・321・322号住居跡出土遺物
図版182 第13・15・18・19・21号土坑出土遺物
図版183 第21・22・24・49・54・56・61・62・64・73号土坑出土遺物
図版184 第73号土坑出土遺物
図版185 第73・75・80・81・90~92・110・121・124・125・127・129・153・167・179・181・186・203・211・220・224・237号土坑出土遺物
図版186 第237・238・243・248・250・269号土坑出土遺物
図版187 第290・295・300・305~307・309・316・319・320号土坑出土遺物
図版188 第311・321・356・390・396・404・405・420・423~426号土坑出土遺物、C地点・遺構外出土遺物(1)・1
図版189 C地点・遺構外出土遺物(1)・2、C地点・遺構外出土遺物(2)・1
図版190 C地点・遺構外出土遺物(2)・2、C地点・遺構外出土遺物(3)・1
図版191 C地点・遺構外出土遺物(3)・2、C地点・遺構外出土遺物(4)

D地点

図版192 薬師堂東遺跡D地点全景(1)・(2)
図版193 薬師堂東遺跡D地点全景(3)
図版194 薬師堂東遺跡D地点北西・南西部分
図版195 薬師堂東遺跡D地点北東・南東部分
図版196 第324~327号住居跡
図版197 第328~330号住居跡
図版198 第331~332号住居跡
図版199 第333号住居跡
図版200 第335~338号住居跡
図版201 第339号住居跡
図版202 第340・341号住居跡
図版203 第342~344号住居跡
図版204 第343・345号住居跡
図版205 第345~347号住居跡
図版206 第346・348号住居跡
図版207 第348~353・358・359号住居跡
図版208 第358・360~362号住居跡
図版209 第364号住居跡
図版210 第364・365号住居跡
図版211 第366・368~374・377号住居跡

図版212 第378~381号住居跡
図版213 第382~384・386~388号住居跡
図版214 第1・2号掘立柱建物跡(1)・(2)
図版215 第2号掘立柱建物跡、第1号地下式壇(1)
図版216 第1号地下式壇(2)、同土層断面
図版217 調査区北東部土坑群、第430~432・434・435・437・439・441・442・446号土坑
図版218 第448・450・452~454・456~459号土坑
図版219 第461・463~469・471・473~480号土坑
図版220 第481・483~493・495~498・500・504号土坑
図版221 第1号堀跡(1)・(2)
図版222 第1号堀跡(3)・(4)、同土層断面
図版223 第2号堀跡・第1号柱穴列(1)・(2)
図版224 第2号堀跡・東堀跡、同土層断面
図版225 第324・326・327号住居跡出土遺物、第328号住居跡出土遺物(1)
図版226 第328号住居跡出土遺物(2)、第329~331号住居跡出土遺物、第332号住居跡出土遺物(1)
図版227 第332号住居跡出土遺物(2)
図版228 第335・337~339号住居跡出土遺物、第340号住居跡出土遺物(1)
図版229 第340号住居跡出土遺物(2)、第341~345号住居跡出土遺物、第346号住居跡出土遺物(1)
図版230 第346号住居跡出土遺物(2)、第348~351・353~356号住居跡出土遺物、第358号住居跡出土遺物(1)
図版231 第358号住居跡出土遺物(2)、第359~361号住居跡出土遺物、第363号住居跡出土遺物(1)
図版232 第363号住居跡出土遺物(2)、第364~366・368・370~373・375号住居跡出土遺物
図版233 第377~381・383号住居跡出土遺物、第383号住居跡土器埋地跡出土遺物、第386・387号住居跡出土遺物、第1・2号掘立柱建物跡出土遺物
図版234 第1号地下式壇出土遺物(1)
図版235 第1号地下式壇出土遺物(2)、第429・430・434~438号土坑出土遺物、第439号土坑出土遺物(1)
図版236 第439号土坑出土遺物(1)・(2)、第450・451号土坑出土遺物
図版237 第452・459・475・476・480・486~488号土坑出土遺物

図版238 第496・501号土坑出土遺物、第1・2号堀跡出土遺物

図版239 第1号柱穴列出土遺物、D地点・遺構外出土遺物

自然科学分析

図版240 銻型および関連遺物の写真・X線透過画像・顕微鏡写真①

図版241 銻型および関連遺物の写真・X線透過画像・顕微鏡写真②

図版242 銻型および関連遺物の写真・X線透過画像・顕微鏡写真③

図版243 銻型および関連遺物の写真・X線透過画像・顕微鏡写真④

図版244 銻型および関連遺物の写真・X線透過画像・顕微鏡写真⑤

図版245 銻型および関連遺物の写真・X線透過画像・顕微鏡写真⑥、No. 8のX線CT画像

図版246 蛍光X線スペクトル①

図版247 蛍光X線スペクトル②

図版248 蛍光X線元素マッピング(No. 9)、蛍光X線元素マッピング(No. 21)、棒状土製品付着白色物質のX線回折スペクトル(No. 1)

図版249 朝鮮半島および日本出土の鉛ガラスの鉛同位体比との比較

第IV章 D地点の調査

第1節 調査の概要

薬師堂東遺跡D地点は、薬師堂東遺跡の立地する段丘平坦面の北西側の段丘崖線の直ぐ脇に位置する。調査範囲北縁から崖線までは、10mほどしか離れておらず、D地点全体が崖際にあると言ってよい立地である。

この立地の特徴から、D地点には、他の調査地点にはないいくつかの特徴が見られた。ひとつは、表土層が極めて厚いことである。また、他の調査地点は、総じて平坦であり、起伏が少なかったが、D地点では、北東側から谷が彎入しており、全体に地山が起伏をもって崖に向かって傾斜していた。不安定な堆積環境のためか地山のローム層がシルト化しており、遺構覆土も含めて、乾燥すると手掘りが困難なまでに硬化したことも特筆される。

表土層が厚いことは、D地点に最も近いB地点（太田 2013：「第2地点」）でもその兆候が見られたようであるが、崖線寄りでは、地山のローム面自体が崖線に向かって傾斜をもち、崖線に近づくにつれ、傾斜が強まり、表土層が厚くなった。因みに、遺構確認面のローム層上面の標高は、D地点の北西隅で51.17m、北東隅で50.37m、南西隅で51.39m、南東隅で51.39m、であり、南側から北側に向かって地山のローム層がゆるやかに傾斜するとともに、崖線寄りでは、西側から東側に向かって、調査範囲全体では、南西側から北東側に向かってローム層の上面が強く傾斜していることが判る。また、上記した地山の傾斜とも関連して、調査範囲の北東部分には、大きな傾斜の強い谷が彎入しており、東西、南北方向のトレンチを入れて遺構確認作業を行ったが、遺構は見られなかった。この部分に関しては、南東部分の旧校舎の基礎、浄化槽により遺構が残存しない範囲とともに、調査範囲から除外している。調査から除外した範囲の北端、谷部の彎入する部分では、表土層の層厚が3mを越えた。

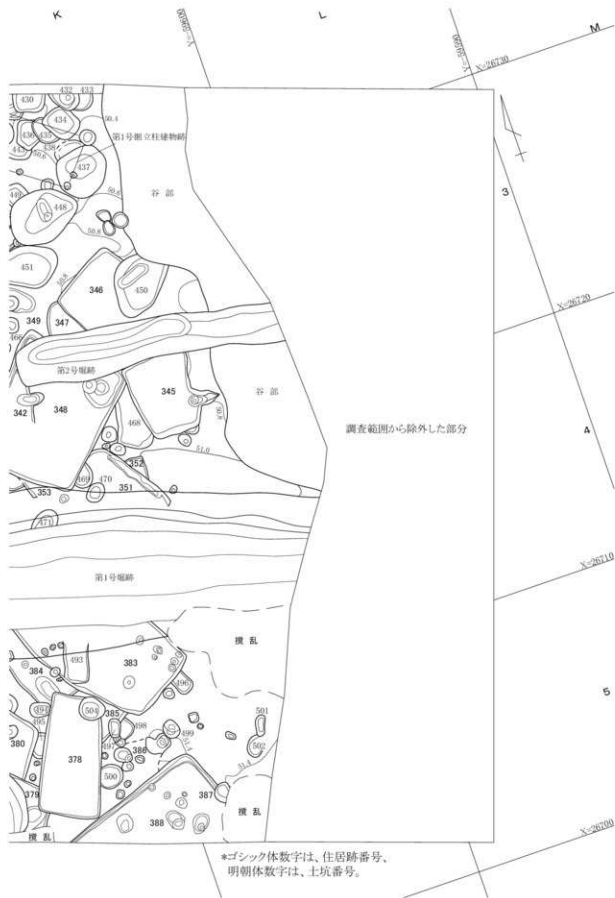
なお、浄化槽が埋設されていた範囲は、第1・2号堀跡（本書：822～834頁）が伸長すると思われる範囲にあたるが、浄化槽が堀底以下に達する深さで埋設されていたため堀跡が壊されていることを、浄化槽撤去時に工事立会を行い確認している。

台地や段丘上に通有の堆積土が見られたC地点とは、やや異なる堆積土が見られたため、以下にD地点の標準土層を略記しておく。

- 第I a層：暗褐色～灰黄褐色土層。暗褐色～灰黄褐色土を主に、ローム粒をかなり含み、ローム小ブロックを含む。所々レンガや廃材のコンクリート塊や大小の礫を多量に含む。現表土層。
- 第I b層：暗褐色～灰黄褐色土層。第I a層に近いが、ところによりAs-Aが多量に含まれる。乾燥すると硬くしまる。現表土層以前の、おそらく近世以降を主とする古い表土層。
- 第II a層：暗褐色～灰黄褐色土層。ローム粒・ローム小ブロックを含み、焼土粒・土器粒を含む、微妙に灰色みを帯びた暗褐色土、あるいは灰黄褐色土である。台地上の古墳～奈良・平安時代の遺構を覆って堆積する暗褐色土層の上部に相当すると考えられる。次に記す第II b層よりやや黒みが弱く、As-Bが混入するためか局所的にシャリシャリしている。



第792图 柔師堂東遺跡D地点全体图



今回の調査では、古墳～奈良・平安時代の遺構を覆うこと、中世の堀跡に関しては、この層の下面ないしはこの層中より掘り込まれており、堀跡覆土の上部をなす土は、この層の土がベースとなることが確認できた。なお、堀跡に関しては、この第Ⅱa層の層中で確認でき、引き続き開掘したため、第Ⅱa層に被覆された古墳～奈良・平安時代の竪穴住居跡を主とする遺構とは、部分的に遺構検出面自体が異なることとなった。

第Ⅱb層：暗褐色土層。第Ⅱa層と同じローム粒・ローム小ブロックを含む暗褐色土であるが、第Ⅱa層よりやや黒みが強い、あるいは灰色みが弱い。遺構の有無により焼土粒、土器粒・土器片などの含まれる量に多寡がある。古墳～奈良・平安時代の遺構は、この層の下面ないしはこの層中より掘り込まれており、それらの時期の遺構覆土のベースとなる暗褐色土は、基本的にこの層の土である。

第Ⅲ層：黄褐色～灰黄褐色ローム層。ローム層の最上層部のいわゆるソフトロームである。調査範囲北東側の谷部に近づくにつれシルト化が進み、白みを帯び粘性が増すようであった。このシルト化した灰黄褐色ロームは、乾燥するとコンクリートのように硬化した。台地上に見られる通常の黄褐色ロームが見られたのは、後述する第2号堀跡の北側、北西側の一角に限られた。

D地点の調査面積は、1,341㎡であるが、上述したように調査範囲の東側は、遺構の見られない谷部が彎入しており、また旧校舎の基礎や浄化槽により遺構が壊された部分もあり、最終的に精査した範囲は、852㎡である。D地点で検出した遺構は、竪穴住居跡65軒、掘立柱建物跡2棟、柱穴1基、地下式墳1基、土坑76基、堀跡2条、溝跡1条、多数のピットである（第792図）。

第2節 検出された遺構と遺物

1 竪穴住居跡

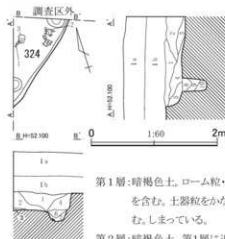
第324号住居跡（第793・794図、第346表、図版196・225）

調査地点の北西隅、I 2グリッドに位置する住居跡である。北側、西側の大半は調査範囲外であり、南東壁と床面のわずかな範囲が残存する。確認面は、黄褐色のローム層上面である。

南東壁の残存部分の長さは、1.64mである。床面はほぼ平坦で、壁際を除いて明瞭に硬化している。南端、北東端での壁高は20cm、25cmであり、壁の立ち上がりも比較的急峻である。床面で2つのピットを検出したが、位置的に見て、主柱穴ではないようである。南側のピットの深さは18cm、北西側のピットの深さは38cmである。

住居跡の覆土は、5層に分けられた。暗褐色土を主とする土で、壁側からの流入土に続いて、中央が埋まっていた模様である。第6～10層は、ピットの覆土である。

第794図1の土師器杯、2・3の須恵器杯が床面よりやや浮いた高さで出土している。他には、土師器片を主とする遺物が少量覆土中から出土したのみである。出土遺物から見て、奈良時代末から平安時代前期初頭にかけての遺構と考えられる。



第324号住居跡土層説明

- 第1a層:暗褐色～灰黄褐色土。現表土層。
 第1b層:暗褐色～灰黄褐色土。As-Aを多く含む古い表土層。
 第1層:暗褐色土。ローム粒・ロームブロック(5～8mm)を含む。土器粒をかなり含む。炭化物を少量含む。しまっている。
 第2層:暗褐色土。第1層に近いが、ロームブロック(5～20mm)がかなり多い。50mm大のロームブロックを1点含む。
 第3層:暗褐色土。第1層に近いが、ロームが少ない。
 第4層:暗褐色土。第1層に近いが、ロームがやや多い。
 第5層:暗褐色土。第3層に近いが、ロームが少ない。
 第6層:暗褐色土。ローム粒を含む。焼土粒・土器粒を微量含む。
 第7層:暗褐色土。第6層に近いが、ロームブロック(5～10mm)を含む。
 第8層:暗褐色土。ローム粒を含む。
 第9層:暗褐色土。第8層に近いが、ローム粒が多い。
 第10層:暗褐色土。第8層に近いが、ローム粒が多く、ロームブロック(5～20mm)を含む。

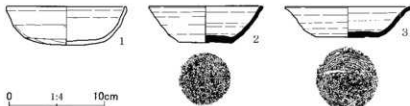
第793図 第324号住居跡平面・断面図

第346表 第324号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	環	口径 12.5 底径 8.7 器高 4.1	丸みを帯びた平底。体部は内彎気味に開き、口縁部は短く内屈する。粘土組織みずびによる成形。	外面－口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面－口縁部へ体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	石英・白色粒・角閃石 内外－橙色	1/2残存
2	須恵器環	口径 11.9 底径 5.6 器高 3.9	平底。体部から口縁部にかけて直線的に開く。ロクロ成形。	外面－ロクロナデ。底部回転糸切の後、圓線を回転ヘラケズリ。「十」の線刻あり。内面－ロクロナデ。	白色粒 内外－灰色	ほぼ完形 還元焼成
3	須恵器環	口径 13.1 底径 6.6 器高 3.2	平底。体部は直線的に開き、口縁部はゆるやかに外反する。ロクロ成形。	外面－ロクロナデ。底部右回転糸切。内面－ロクロナデ。	石英・黒色粒 内外－灰黄色	3/4残存 還元焼成

第325号住居跡 (第795図、
図版196)

調査地点の北西隅近く、I 2グリッドに位置する住居跡である。第326号住居跡を切っている。北半は調査範囲外



第794図 第324号住居跡出土遺物

であり、南東・南西壁に囲まれた三角形の範囲のみ残存する。確認面は、黄褐色のローム層上面である。

平面形は、やや歪な方形、長方形になろうか。規模を壁長で示すなら、南西壁の長さは2.45m、南東壁の長さは2.04mである。床面はほぼ平坦で、壁際を除いて明瞭に硬化している。壁高は、3、4cmである。南西壁脇でピットを1つ検出したが、支柱穴や貯蔵穴などではなさそうである。

覆土中から土器小片などが少数出土しているのみである。重複関係から見て、古墳時代終末期以降の遺構と考えられる。

第326号住居跡 (第795・796図、第347表、図版196・225)

調査地点の北西隅近く、I 2グリッドに位置する住居跡である。第325号住居跡と重複し、南東壁側を壊されている。北半は調査範囲外であり、南東・南西壁に囲まれた範囲のみ残存する。確認面は、

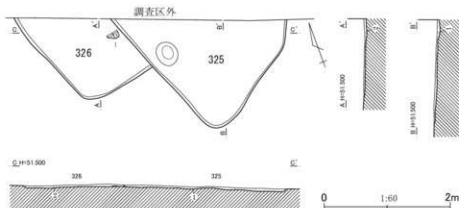
D地点

黄褐色のローム層上面である。

規模を壁長で示すなら、南西壁の長さは1.75m、南東壁の長さは1.10mである。床面はほぼ平坦で、壁際を除いて不規則に硬化している。壁高は3、4cmである。

第796図1の甕破片は、床面より若干浮いた位置で出土した。他には、覆土中

から土師器片を主とする遺物が少数出土しているのみである。出土遺物から見て、古墳時代終末期頃の遺構である可能性を考えたい。



第325・326号住居跡土層説明

第1層:暗褐色土、ローム粒・ロームブロック(5～30mm)を含む。しまっている。第325号住居跡覆土。
第2層:暗褐色土、第1層と大きな違いはないが、若干ロームが多い。第326号住居跡覆土。

第795図 第325・326号住居跡平面・断面図

第347表 第326号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (22.4) 底径 — 器高 (11.6)	口縁部は外反する。胴部は膨らみをもたない。粘土細積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	石英・チャート 内外一褐色	口縁部～胴部 上位

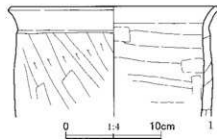
第327号住居跡 (第797・798図、第348・349表、図版196・225)

調査地点の北縁沿いのほぼ中央、K2グリッドに位置し、南壁あるいは南東壁に付設されたカマドのみ調査した住居跡である。当初密集する土坑群の覆土を住居跡の覆土と見誤り、北西壁に付設されたカマドと見て、精査した。最終的に土坑をあらかた掘り上げた段階で、北側の住居跡本体は、調査範囲外であることが判った。第444号土坑に切れ、

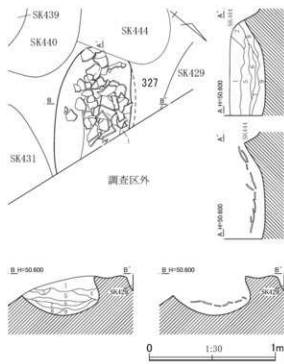
カマドの一部を壊されている。また、第1号掘立柱建物跡とも重なるが、直接の重複関係を捉えることはできなかった。確認面は、黄褐色～灰黄褐色のローム層上面である。

カマドは、燃焼部のみ残存する状態であった。燃焼部は、平面形が長楕円形で、燃焼面は丸みをもって掘り込まれており、煙道側はゆるやかに立ち上がる。右側の側壁はえぐり込むようにハンクしている。袖は、残存していない。中軸線状での現存長は76cm、横幅は63cmである。燃焼部の被熱赤化の痕跡は、顕著ではない。

カマドの覆土は、第1～9層の9層に分けられた。第2～6層には、焼土が多量に含まれる。大小の焼土ブロックを多量を含む第5層は、天井部や側壁の崩落土層であろう。この第5層下から、第



第796図 第326号住居跡出土遺物

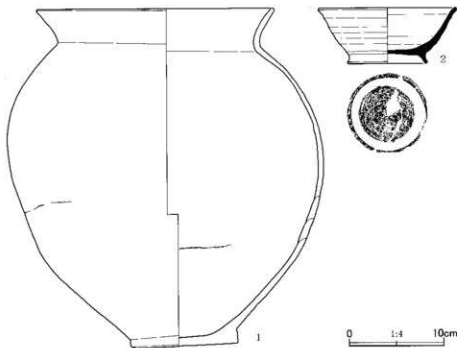


第797図 第327号住居跡平面・断面図

798図1の甕が押し潰されたような状態で、燃烧部全面を埋めるようにして出土している。

第798図2の須恵器碗は、本住居跡を壊している土坑に伴うものであろうか。いずれにせよ混入した遺物と見られる。

カマド内から出土した1の甕から見て、古墳時代中期末葉頃の遺構と考えられる。



第798図 第327号住居跡出土遺物

第327号住居跡カマド土層説明

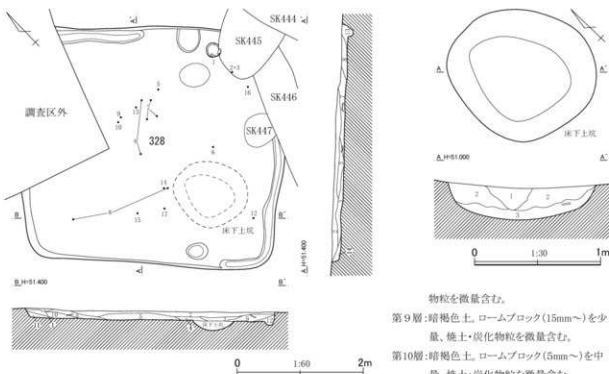
- 第1層:暗褐色土。黒みの強い暗褐色土を主とし、ローム粒を含む。焼土粒・炭化物を少量含む。
- 第2層:暗褐色土。第1層に近いが、焼土粒が多く、焼土粒・焼土小ブロックを含む。焼土ブロック(～8mm)もある。ロームも若干多い。
- 第3層:暗褐色土。第2層に近いが、焼土が若干少ない。
- 第4層:暗褐色土。第1層に近いが、焼土が若干多い。
- 第5層:明赤褐色土。大小の焼土ブロック(大きいものは50～60mm大)を主とし、間に暗褐色土が入る。上部にはロームブロックを含む。
- 第6層:暗褐色土。第2層に近いが、焼土が多い。第4層より焼土が多く、よりしまる。
- 第7層:灰黄褐色土。ロームブロック(5～10mm)、焼土・炭化物を微量含む。第7～9層は、いずれも、しまっており、粘性が強い。
- 第8層:灰黄褐色土。ロームブロック(5～10mm)を少量、焼土・炭化物を微量含む。
- 第9層:灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。

第348表 第327号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	大甕	口径 25.2 底径 11.4 器高 36.6	口縁部は外反する。胴部は中位に膨らみをもつ。輪台状の平底。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部-底部不明瞭。内面-口縁部ヨコナデ。胴部-底部不明瞭。	石英・白色粒・黒色粒 内外-褐色	4/5残存

第349表 第327号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
2	須恵器 高台付 埴	口径 14.5 底径 8.2 器高 5.9	体部は脚らみをもち、口縁部は緩やかに外反する。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。底部右回転糸切り、高台貼付時周縁ナデ。内面-ロクロナデ。	白色粒 内外-灰色	口縁部2/3次損



第328号住居跡土層説明

- 第1層:灰色土。白色軽石(2mm)を微量含む。しまっており、粘性がやや強い。
- 第2層:暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)を主とし、焼土を少量、炭化物粒を微量含む。しまっており、粘性が強い。以下、いずれの層も、しまっており、粘性が強い。
- 第3層:暗褐色土。ロームブロック(5mm)・焼土・炭化物粒を少量含む。
- 第4層:暗褐色土。ロームブロック(5~20mm)・焼土・炭化物粒を少量含む。
- 第5層:暗褐色土。ロームブロック(5~20mm)を多量に、焼土・炭化物粒を少量含む。
- 第6層:暗褐色土。ロームブロック(5~20mm)を少量、焼土・炭化物粒を微量含む。
- 第7層:暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)を中量、焼土・炭化物粒を微量含む。
- 第8層:暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量に、焼土・炭化

物粒を微量含む。

第9層:暗褐色土。ロームブロック(15mm~)を少量、焼土・炭化物粒を微量含む。

第10層:暗褐色土。ロームブロック(5mm~)を中量、焼土・炭化物粒を微量含む。

第11層:黒褐色土。ロームブロック(5mm~)を中量、炭化物粒を微量含む。

第12層:黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、焼土・炭化物粒を微量含む。

第13層:暗褐色土。ロームブロック(5~20mm)を多量に、焼土を少量含む。

第14層:黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、焼土を微量含む。

第328号住居跡床下土坑土層説明

- 第1層:暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、炭化物を少量、焼土を微量含む。第1~3層は、しまっており、粘性がやや強い。
- 第2層:暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、ローム粒・焼土・炭化物を微量含む。
- 第3層:暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)・焼土・炭化物を微量含む。

第799図 第328号住居跡平面・断面図

第328号住居跡(第799・800図、第350・351表、図版197・225・226)

調査地点の北縁沿いのほぼ中央、J2グリッドに位置する住居跡である。第329号住居跡を切っており、第445~447号土坑に切られ、東隅周辺を壊されている。また、第1号掘立柱建物跡とも重複

するが、新旧の関係を捉えることはできなかった。北隅から北西壁にかけては、調査範囲外である。確認面は、黄褐色のローム層上面である。

平面形は、北西-南東方向がやや長い方形である。第445号土坑と重複する部分の周辺の床面には、粘土や焼土が散っており、倒立する甕などの土器が集中しており、東隅に寄り過ぎてはいるが、北東壁のこのあたりにカマドがあった可能性があるとと思われる。よって、北東-南西方向に主軸を想定しておきたい。規模は、主軸方向で3.75m、副軸方向の残りのよい部分での横幅は、4.03mである。主軸方位は、N-48°-Eである。床面は部分的に貼床がなされており、おおむね平坦である。床面中央や南西壁、南東壁周辺など貼床がなされている範囲を中心に不規則に硬化している。残存する壁はいずれも比較的急峻で、床面から測った壁高は、北東壁で10cm、南東壁で15cm、南西壁で17cm、北西壁で18cmである。北東壁の北西半、南隅周辺から南東壁には、幅15～20cm、深さ5～10cmの壁溝が掘られている。

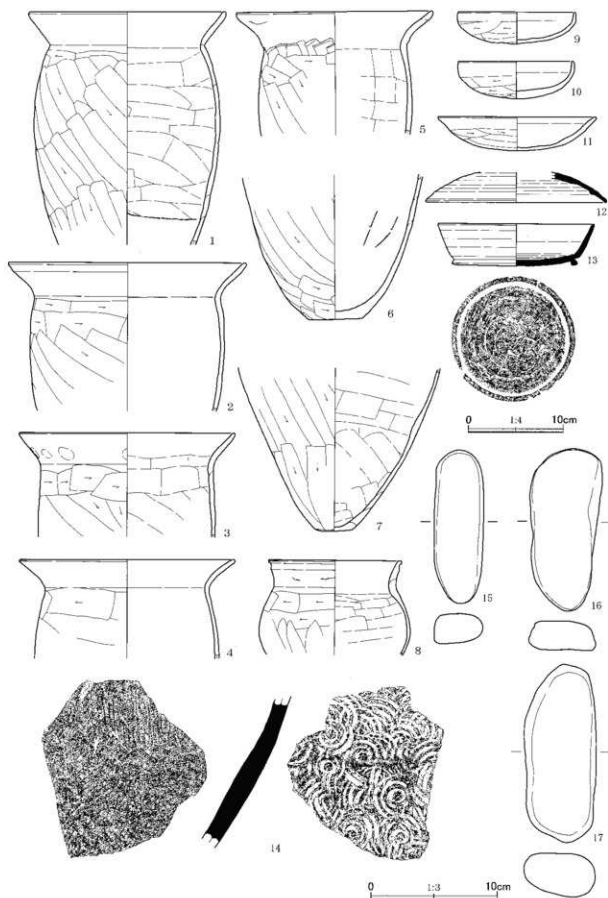
床面でピットを2つ検出しているが、柱穴や貯蔵穴ではないようである。南隅寄りの位置で床下土坑を1基検出している。平面形は、やや不整な円形で、最大径は119cmである。断面形は、船底形に近く、深さは25cmである。

覆土は、14層に分けられた。全体にかなり不規則な堆積状態であり、第2・5・8層のようにロームブロックを多量に含む土層が見られるなど、あるいは埋め戻された可能性も考えられる。

第800図1～3の甕は、第445号土坑に切られた部分の周りの床面から押しつぶされたような状態でまとまって出土している。4～8の甕、9・10の坏、13の須恵器高台付坏、14の須恵器片、15・17の編物石は、住居跡の中央付近の、床面よりわずかに浮いた位置から出土している。重複関係、出土遺物から見て、古墳時代終末期末から奈良時代初頭にかけての遺構と考えられる。

第350表 第328号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (20.6) 底径 — 器高 [24.7]	口縁部は外傾する。胴部は中位にわずかな膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外-橙色	口縁部～胴部2/3残存
2	甕	口径 (25.2) 底径 — 器高 [15.7]	口縁部は外反する。胴部は膨らみをもたない。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部不明瞭。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外-明赤褐色	口縁部～胴部上半1/3残存 内面胴部は磨耗
3	甕	口径 (22.6) 底径 — 器高 [11.0]	口縁部は外反する。胴部は膨らみをもたない。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。指頭圧痕。胴部上位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒	口縁部～胴部上位1/3残存
4	甕	口径 (22.7) 底径 — 器高 [10.5]	口縁部は外反する。胴部は中位にわずかな膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位不明瞭。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外-橙色	口縁部～胴部上位2/3残存 内面胴部は磨耗
5	甕	口径 (20.8) 底径 — 器高 [13.1]	口縁部は外反する。胴部は上位にわずかな膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外-橙色	口縁部～胴部上位1/4残存
6	甕	口径 — 底径 (5.6) 器高 [15.3]	胴部は膨らみをもたない。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面-胴部ヘラケズリ。底部ナデ。内面-胴部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外-明赤褐色	胴部下半～底部1/2残存
7	甕	口径 — 底径 4.0 器高 [17.3]	胴部は膨らみをもたない。丸みを帯びた平底。粘土組織み上げによる成形。	外面-胴部ヘラケズリ。底部ナデ。内面-胴部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 外-明赤褐色 内-橙色	胴部下半～底部1/2残存



第800图 第328号住居跡出土遺物

第351表 第328号住居跡出土土物類観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
8	小型甕	口径(14.0) 底径 — 器高 10.0	口縁部は直立し、上位で短く外反する。胴部は中位に膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部上半ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部上半ヘラナデ。	白色粒・褐色粒 内外一明赤褐色	口縁部へ胴部上半1/2残存
9	坏	口径 12.3 底径 — 器高 3.4	丸底。彎曲する体部から、口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラナデ。	石英・黒色粒 内外一褐色	完形
10	坏	口径 12.0 底径 — 器高 4.0	丸底。彎曲する体部から、口縁部は内彎気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラナデ。	石英・雲母・白色粒 内外一褐色	完形
11	皿	口径 16.5 底径 — 器高 3.6	丸底。体部は浅く開き、口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外一褐色	完形
12	須恵器蓋	口径(18.9) 底径 — 器高 [3.2]	口縁部に返りをもつ。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。天井部回転ヘラケズリ。内面—ロクロナデ。	石英・白色粒 内外一灰色	1/4残存 還元焼成
13	須恵器高台付坏	口径 16.5 底径 12.4 器高 4.5	高台部はハの字状に開く。底部はやや丸みをもつ。体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。「×」の線刻。高台貼付。内面—ロクロナデ。	白色粒・黒色粒 外一灰白色 内一灰黄色	ほぼ完形 還元焼成
14	須恵器甕	口径 — 底径 — 器高 —	タタキ成形。	外面—平行タタキの後ナデ。内面—同心円の当て具痕。	白色粒 内外一灰色	胴部破片 還元焼成
No.	器種	法量(cm)・特徴			備考	
15	石製品編物石	長さ12.2、幅4.0、厚さ2.4、重さ215.68g。石材：泥岩。			完形	
16	石製品編物石	長さ12.9、幅5.8、厚さ2.3、重さ317.63g。石材：緑色岩。			完形	
17	石製品編物石	長さ14.1、幅5.7、厚さ3.5、重さ511.72g。石材：安山岩。			完形	
18	生煎植物	長さ3.2、幅2.5、厚さ1.0、重さ6.00g。			完形写真のみ	

第329号住居跡(第801・802図、第352・353表、図版197・226)

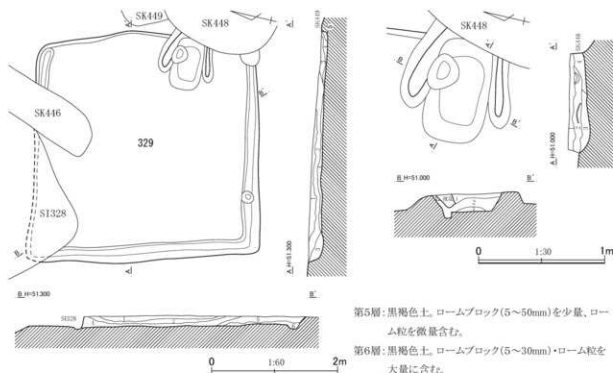
調査地点の北縁寄りのほぼ中央、J2・3、K2・3グリッドに位置する住居跡である。第2号掘立柱建物跡を切り、第328号住居跡、第446・448号土坑に切られ、遺構の一部を壊されている。確認面は、黄褐色のローム層上面である。

平面形は、方形である。規模は、主軸方向で3.60m、副軸方向で3.50m、主軸方位は、N-78°-Eである。床面には細かな凹凸が見られるが、全体としてはほぼ平坦である。床面は、壁際を除いて、硬化している。床面から測った壁高は、東壁で10cm、南壁で13cm、西壁で20cm、北壁で11cmである。南北壁、西壁の残存部分の壁際には、幅14～30cm、深さ2～6cmの壁溝が掘られている。

カマドは、東壁の南東隅に偏した位置に付設されている。ハの字状に開いた両袖に挟まれた隅丸長方形の燃焼部が残存する。燃焼面は、床面を掘りくぼめて作出されている。燃焼部の長さは81cm、横幅は57cmである。燃焼部の被熱赤化は、顕著ではない。燃焼部左袖側の側壁に沿ってピットが1つ掘られている。カマドの覆土は、4層で、煙道側の第4層には焼土が多量に含まれる。

住居跡の覆土は、6層に分けられた。第4・6層のようにロームブロックを多量に含む床面を覆う層が見られるなど、自然流入土と一概に言い切れないように思われる。

第802図1の甕、2の小型甕は、カマド内から出土した。重複関係、出土遺物から見て、古墳時代終末期後葉頃の遺構と考えられる。



第5層: 黒褐色土。ロームブロック(5~50mm)を少量、ローム粒を微量含む。

第6層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を大量に含む。

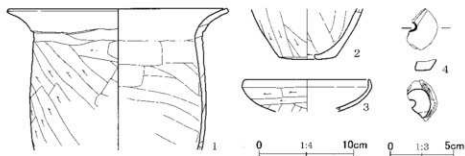
第329号住居跡土層説明

- 第1層: 黒褐色土。ローム粒を多量に、焼土を微量含む。しまっており、粘性が強い。以下、いずれの層も、しまっており、粘性が強い。
- 第2層: 黒褐色土。ローム粒を多量に、ロームブロック(5~10mm)を少量、焼土を微量含む。
- 第3層: 黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、ローム粒・焼土を微量含む。
- 第4層: 黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。

第329号住居跡カマド土層説明

- 第1層: 黒褐色土。焼土を微量含む。しまっており、粘性が強い。
- 第2層: 黒褐色土。焼土を少量、炭化物を微量、土器片を多く含む。粘性がやや強い。
- 第3層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒、焼土を微量含む。しまっており、粘性が強い。
- 第4層: 暗褐色土。焼土を多量に含み、ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量、灰を微量含む。しまっており、粘性がかなり強い。

第801図 第329号住居跡平面・断面図



第802図 第329号住居跡出土遺物

第352表 第329号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (23.1) 底径 — 器高 [15.0]	口縁部は外反する。胴部は膨らみをもたない、粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—褐色	口縁部へ胴部上位1/3残存

第353表 第329号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
2	小型甌	口径 — 底径 6.0 器高 [5.3]	胴部は膨らみをもたない。底部は丸みを帯びた平底で、中央に2.0cmの円孔があく。粘土組織み上げによる成形。	外面—胴部～底部ヘラケズリ。内面—胴部～底部ヘラナデ。	石英・雲母・白色粒 内外—にぶい橙色	胴部下位～底部
3	坏	口径 (13.3) 底径 — 器高 [3.4]	彎曲する体部から、口縁部は内屈する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外—にぶい黄橙色	口縁部～体部 1/4残存
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
4	石製紡錘車	上面径一、下面径(2.6)、孔径(0.6×0.6)、厚さ(0.7)、重さ6.65g。側面に丁寧な研磨。石材：滑石。				1/4残存

第330号住居跡土層説明

第1a層: 褐灰色土。しまり、粘性ともに弱い表土層。

第1b層: 褐灰色土。As-Aを多量に含む旧表土層。ややしまっている。

第1層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5～10mm)・ローム粒を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

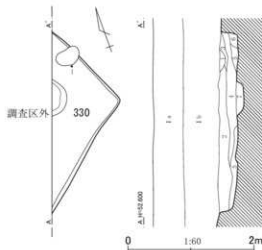
第2層: 黒褐色土。白色軽石・焼土を多量に、ロームブロック(5～10mm)・ローム粒を微量含む。しまっており、粘性が強い。以下、いずれの層も、しまっており、粘性が強い。

第3層: 黒褐色土。白色軽石を少量、焼土を微量含む。

第4層: 暗褐色土。焼土・ロームブロック(5～10mm)・ローム粒を多量に、白色軽石を少量含む。

第5層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)を多量に、焼土・炭化物を微量含む。

第6層: 暗褐色土。ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。



第7層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)を多量に、ローム粒・焼土を微量含む。

第803図 第330号住居跡平面・断面図

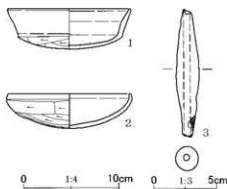
第330号住居跡(第803・804図、第354表、図版197・226)

調査地点の西縁沿いの北西隅寄り、I 2グリッドに位置する住居跡である。第331・332号住居跡を切っており、第453号土坑と接している。なお、遺構の西側の大半は、調査範囲外である。確認面は、黄褐色のローム層上面である。

残存部分が乏しく平面形は不明であるが、東隅は、直角に近くなるようである。規模は、いずれも辺長、壁長の現存値になるが、北西—南東方向で1.25m、北東—南西方向で2.10mである。床面は明瞭に硬化している。壁の立ち上がりは急峻で、掘り込みもしっかりしている。壁高は、北東壁で27cm、南東壁で22cmである。調査区界にまたがってピットあるいは土坑を1基検出している。深さは15cmである。床下土坑の可能性のあるのかもしれない。

覆土は、土坑の覆土を除いて、6層に分けられた。第2～4層は、白色の軽石を含む。第4・5層は、ロームブロックを多量に含み、一挙に流入あるいは投棄された土のようである。

第804図1の坏は、住居跡の北半の覆土の半ばくらいから出土した。2の坏は、小破片であり、混



第804図 第330号住居跡出土遺物

第354表 第330号住居跡出土物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 12.9 底径 — 器高 4.2	丸底。口縁部は体部との境に弱い稜をもち、外反する。粘土細積み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラナデ。	石英・白色粒 内外一橙色	3/4残存
2	坏	口径 (12.9) 底径 — 器高 3.7	丸底。彎曲する体部から、口縁部は内屈する。粘土細積み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラナデ。	石英・黒色粒 内外一橙色	1/4残存
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
3	土鐘	長さ10.1、幅1.9、厚さ1.9、重さ26.93g。	胎土：石英・黒色粒。色調：にぶい黄橙色。			一部欠損

入した遺物の可能性が高いようである。重複関係、出土遺物から見て、古墳時代後期後葉頃の遺構と考えられようか。

第331号住居跡 (第805・806図、第355表、図版198・226)

調査地点の西縁沿いの北西隅寄り、12グリッドに位置する住居跡である。第332号住居跡を切っており、第330号住居跡、第455号土坑に切られ、遺構の一部を壊されている。なお、遺構の西側の大半は、調査範囲外である。確認面は、黄褐色のローム層上面である。

規模は、いずれも最も残りのよい部分での現存長になるが、主軸方向で1.30m、副軸方向で3.00m、主軸方位は、N-99°-Eである。床面はおおむね平坦で、硬化している。壁は比較的急峻に立ち上がり、壁高は、南壁で25cmである。

カマドは、東壁に設けられている。焚口側が広く、煙道側に向かってすぼまる形態で、燃焼面は、

第331号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土。ロームブ

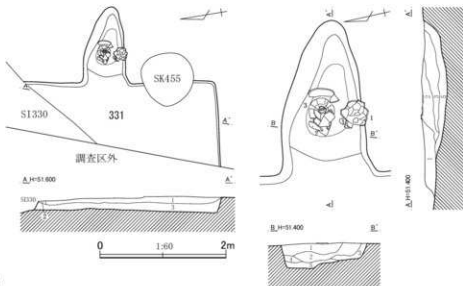
ロック(5mm)を中量、炭化物粒を微量含む。

第2層：暗褐色土。ロームブ

ロック(5~20mm)を中量、焼土・炭化物粒を少量含む。

第3層：暗褐色土。ロームブ

ロック(5~20mm)を多量に、焼土・炭化物粒を微量含む。



第331号住居跡カマド土層説明

第1層：黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・焼土を微量含む。

第1~5層は、いずれの層も、しまっており、粘性がやや強い。

第2層：褐灰色土。焼土を大量に、ローム粒を少量含む。

第3層：褐灰色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第4層：灰黄褐色土。ローム粒を少量、焼土を微量含む。

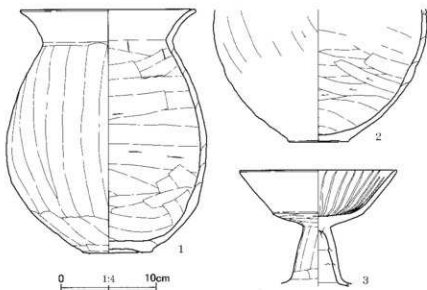
第5層：灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。

第805図 第331号住居跡平面・断面図

掘りくぼめられている。燃焼部の長さは124cm、横幅は67cmである。極軽微ではあるが、側壁は局部的に被熱赤化している。カマドの覆土は5層で、焼土を大量に含む第2層には、天井部や側壁の崩落土が含まれるようである。

住居跡の覆土は、3層で、いずれの層もロームブロックが目立ち、とくに床面を覆う第3層には、ロームブロックが多量に含まれる。

第806図1・2の甕は、カマド内から、3の高坏は、やはりカマド内から倒立した状態で出土している。重複関係、出土遺物から見て、古墳時代後期初頭（新相）の遺構と考えられる。



第806図 第331号住居跡出土遺物

第355表 第331号住居跡出土遺物観察表

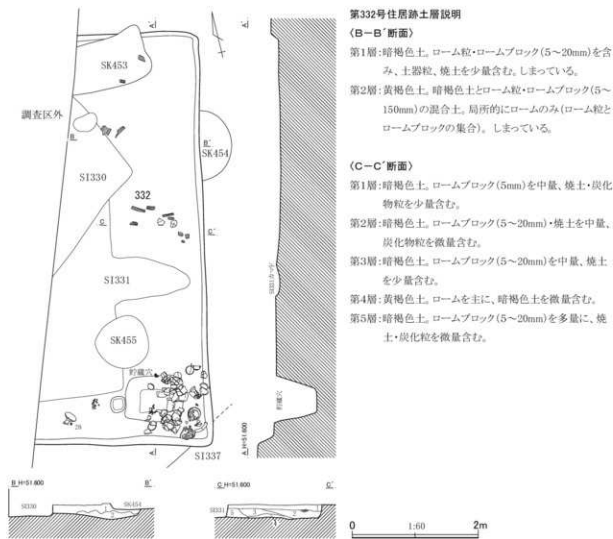
No.	器種	法量(cm)	形部・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 18.3 底径 7.3 器高 25.8	口縁部は長く外反する。胴部は中へ下位に膨らみをもつ。上げ底。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。底部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部へ底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外一橙色	1/3残存 外面胴部に赤色化した粘土が付着
2	甕	口径 — 底径 6.3 器高 14.0	胴部は中位にやや膨らみをもつ。上げ底。粘土組織み上げによる成形。	外面一胴部下半ヘラケズリ。底部ナデ。内面一胴部下半ヘラナデの後に一部ヘラケズリ。底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外一ぶい黄褐色	胴部下半へ底部1/2残存 外面胴部に赤色化した粘土が付着
3	高坏	口径 16.5 底径 12.3 器高 —	口縁部は坏部との境に稜をもち、外傾して開く。脚部は筒状を呈する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。坏部へ脚部ヘラナデ。内面一口縁部へ坏底部放射状暗文。脚部ナデ。	石英・角閃石・白色粒 内外一明赤褐色	胴部欠損

第332号住居跡（第807～810図、第356～358表、図版198・226・227）

調査地点の西沿いの北西隅寄り、12グリッドに位置する住居跡である。第334号住居跡を切っており、第330・331・341号住居跡、第453～455号土坑に切られ、遺構の一部を壊されている。第337号住居跡との重複部分はわずかな範囲ではあるが、同住居跡に切られている模様である。また、遺構の西側の大半は、調査範囲外である。確認面は、黄褐色のローム層上面である。

平面形は、方形あるいは長方形になると思われる。貯蔵穴の位置からすれば、南壁側あるいは北壁側にカマドがあった可能性が高いであろう。よって、主軸方向を南一北と想定する。規模は、主軸方向で6.50m、副軸方向での現存長は2.82mである。主軸方位はN-12°-Eあたりになりそうである。床面には、細かな凹凸が見られるが、全体としてはほぼ平坦である。床面は硬化している。壁高は、北壁で12cm、東壁で21cm、南壁で25cmである。

南東隅近くの土坑は、貯蔵穴であろう。平面形は、やや歪な長方形で、長軸長92cm、短軸長73cmである。長方形の底面に向かってすばまるように掘り込まれており、最深部で深さは69cmである。覆土



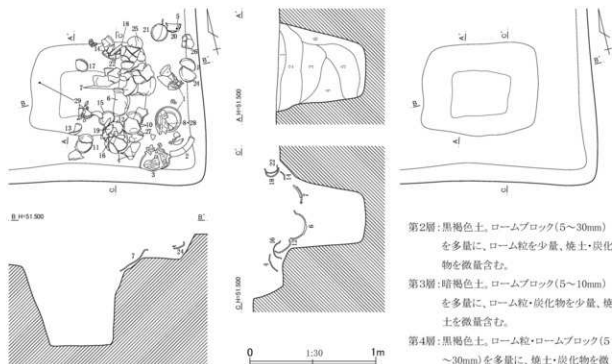
第807図 第332号住居跡平面・断面図(1)

は6層で、第2~6層は、ロームブロックを多量に含み、全体に埋め戻された土と見られる。

住居跡の覆土は、B-B'断面では2層に、C-C'断面では、5層に分けられた。総じてロームブロックが目立つ土である。

貯蔵穴周辺、貯蔵穴上から貯蔵穴覆土上層にかけて多量の土師器、および須恵器壺1個体が出土している。貯蔵穴がかなり埋まった段階に、東壁側の南東隅付近から、土器を投棄、あるいは廃棄した模様である。第809図1~4の甕、5の鉢、8の壺、11・20・21・24の坏、26・27の脚付鉢、貯蔵穴と南東隅、東壁の間、あるいは貯蔵穴近くの住居跡覆土から出土した。6の大型鉢、7の甌、10・12~19・22・25の坏、29の須恵器壺、第810図30の砥石は、貯蔵穴上から貯蔵穴の覆土上層にかけての位置、層位から出土した。貯蔵穴周辺からは、甕、脚付鉢が主に出土し、貯蔵穴内からは、主に大型鉢、甌、坏、須恵器壺などの器種が出土しており、出土位置により主となる器種に偏りが見られるようである。また、住居跡北半を中心に床面からやや浮いた位置で土器片や編物石、炭化材が分散して出土している。

重複関係、出土遺物から見て、古墳時代後期初頭(新相)の遺構と考えられる。



第332号住居跡貯蔵穴土層説明

第1層: 黒褐色土。ローム粒を多量に、ロームブロック(5~10mm)・
 焼土・炭化物を微量含む。第1~6層は、いずれの層も、
 ややしまっており、粘性がやや強い。

第5層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム
 粒・炭化物を少量含む。

第6層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、ローム粒・
 炭化物・焼土を微量含む。

第2層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)
 を多量に、ローム粒を少量、焼土・炭化
 物を微量含む。

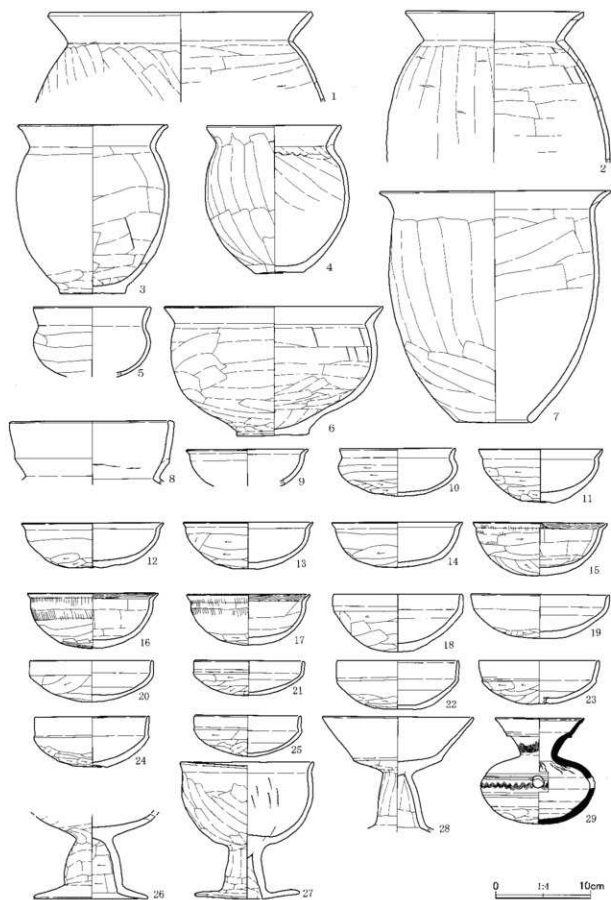
第3層: 暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)
 を多量に、ローム粒・炭化物を少量、焼
 土を微量含む。

第4層: 黒褐色土。ローム粒・ロームブロック(5
 ~30mm)を多量に、焼土・炭化物を微
 量含む。

第808図 第332号住居跡平面・断面図(2)

第356表 第332号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	大甕	口径 27.7 底径 — 器高 9.6	口縁部は外反し、口唇部外面に平坦面をもつ。胴部は膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラナゲ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラナゲ。	石英・白色粒・褐色粒 内外—橙色	口縁部~胴部上位
2	甕	口径 18.7 底径 — 器高 16.0	口縁部は外反する。胴部は中位にやや膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部上半ヘラケズリ、輪積み痕が明瞭。内面—口縁部ヨコナデ。胴部上半ヘラナゲ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外—にぶい橙色	口縁部~胴部上半2/3残存 外面胴部に赤色化した粘土が付着
3	小型甕	口径 (15.7) 底径 (6.9) 器高 17.9	口縁部は外反する。胴部は中位にやや膨らみをもつ。平底で輪台状。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラナゲ。底部ナゲ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部~底部ヘラナゲ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外—橙色	1/3残存 外面胴部は磨耗
4	小型甕	口径 14.1 底径 5.2 器高 15.8	口縁部は外反する。胴部は中位にやや膨らみをもつ。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。底部ヘラナゲ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部~底部ヘラナゲ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外—橙色	胴部一部欠損 外面胴部は磨耗
5	鉢	口径 (12.3) 底径 (7.4) 器高 —	体部は中位が張る。口縁部は外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラナゲ。	石英・白色粒 外—橙色 内—にぶい褐色	口縁部~体部1/3残存 体部は磨耗
6	大型鉢	口径 (23.2) 底径 7.3 器高 13.7	口縁部は外傾する。体部から底部へ向かって窄まる。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラナゲ。底部ナゲ。内面—口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナゲ。	石英・角閃石・白色粒 内外—橙色	3/4残存
7	甕	口径 24.3 底径 7.9 器高 24.6	口縁部は外反する。胴部は膨らみをもたない。底部は筒状。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナゲ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナゲ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—橙色	口縁部1/3欠損 内面胴部下半は磨耗



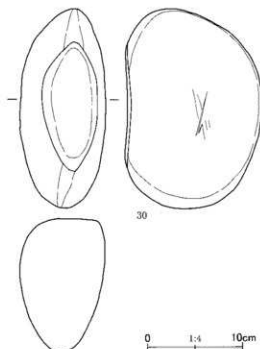
第809圖 第332号住居跡出土遺物(1)

第357表 第332号住居跡出土土物類観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
8	甕	口径 16.8 底径 — 器高 [6.7]	口縁部は内彎気味に直立する。口唇部は平坦面をもち、内側へやや突出する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。内面-口縁部ヨコナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外-橙色	口縁部
9	坏	口径 (12.7) 底径 — 器高 [3.9]	口縁部は内彎し、口縁部は短く外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部は不明瞭。内面-口縁部ヨコナデ。体部は不明瞭。	石英・白色粒 内外-明赤褐色	口縁部~体部 1/4残存 体部は内外面とも磨耗
10	坏	口径 12.1 底径 — 器高 5.0	丸底。体部は上位が張る。口縁部は短く外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラクスリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外-橙色	ほぼ完形 内面体部は磨耗
11	坏	口径 13.0 底径 3.5 器高 5.7	上げ底。体部は内彎し、口縁部は短く外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラクスリ。底部ナデ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外-明赤褐色	口縁部1/3欠損
12	坏	口径 14.8 底径 — 器高 4.7	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上半ナデ。体部下半ヘラクスリ。底部ナデ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外-明赤褐色	口縁部1/2欠損 内面体部は磨耗
13	坏	口径 13.8 底径 — 器高 4.9	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラクスリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外-明赤褐色	ほぼ完形 内面体部は磨耗
14	坏	口径 13.7 底径 — 器高 4.8	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上半ナデ。体部下半~底部ヘラクスリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外-橙色	ほぼ完形 内面体部は磨耗
15	坏	口径 14.1 底径 — 器高 5.6	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデの後ハケメ。体部~底部ヘラクスリ。内面-口縁部ヨコナデの後ハケメ。体部~底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 外-明赤褐色 内-橙色	ほぼ完形
16	坏	口径 13.8 底径 — 器高 5.9	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデの後ハケメ。体部ヘラクスリ。底部ハケメ。内面-口縁部ヨコナデの後ハケメ。体部~底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外-明赤褐色	ほぼ完形
17	坏	口径 13.0 底径 — 器高 5.3	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデの後ハケメ。体部上半ナデ。体部下半~底部ヘラクスリ。内面-口縁部ヨコナデの後ハケメ。体部~底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外-明赤褐色	ほぼ完形
18	坏	口径 13.6 底径 — 器高 6.1	丸底。体部は内彎し、口縁部は内彎気味に直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラクスリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外-明赤褐色	ほぼ完形 内面体部は磨耗
19	坏	口径 14.6 底径 — 器高 4.7	丸底。体部は内彎し、口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラクスリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 外-にぶい褐色 内-にぶい赤褐色	口縁部一部欠損 内面体部は磨耗
20	坏	口径 12.9 底径 — 器高 4.4	丸底。体部は内彎し、口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラクスリ。内面-口縁部~体部上半ヨコナデ。体部下半~底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外-橙色	ほぼ完形体部は内外面とも磨耗
21	坏	口径 11.5 底径 — 器高 3.7	丸底。体部は浅く内彎し、口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラクスリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外-橙色	ほぼ完形内面体部は磨耗。
22	坏	口径 12.8 底径 — 器高 5.2	丸底。口縁部は体部との境に稜をもち、内彎気味に直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上半ナデ。体部下半~底部ヘラクスリ。内面-口縁部~体部上半ヨコナデ。体部下半~底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外-明赤褐色	ほぼ完形 内面体部は磨耗
23	坏	口径 (12.7) 底径 — 器高 4.6	上げ底。口縁部は体部の境に稜をもち、内彎気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラクスリ。内面-口縁部~体部上半ヨコナデ。体部下半~底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外-明赤褐色	1/4残存

第358表 第332号住居跡出土遺物観察表(3)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
24	坏	口径 12.0	上げ底。口縁部は体部との境に稜をもって直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上半ナデ。体部下半へラケズリ。内面-口縁部へ底部ヨコナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外-明赤褐色	口縁部一部欠損
		底径 3.3				
		器高 5.4				
25	坏	口径 11.1	丸底。口縁部は体部との境に稜をもち、やや内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部へ底部ヘラケズリ。内面-口縁部へ体部上半ヨコナデ。体部下へ底部ヘラケズリ。	石英・白色粒・黒色粒 外-橙色 内-ぶい・褐色	3/4残存 内面体部は磨耗
		底径 12.0				
		器高 4.4				
26	脚付鉢	口径 11.0	脚部は中位に膨らみをもつ。裾部は広がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-体部へ脚部ヘラナデ。裾部ヨコナデ。内面-坏底部ヘラナデ。脚部ヘラケズリ。裾部ヨコナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外-明赤褐色	体部欠損
		底径 12.0				
		器高 9.0				
27	脚付鉢	口径 14.0	口縁部は外反し、体部は膨らみをもつ。脚部は筒状を呈し、裾部は広がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部へ脚部ヘラナデ。裾部ヨコナデ。内面-口縁部ヨコナデ。体部へ脚部ヘラナデ。裾部ヨコナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外-褐色	口縁部へ体部2/3欠損
		底径 11.0				
		器高 14.5				
28	高坏	口径 16.0	口縁部は坏部との境に稜をもち、外傾して開く。脚部は筒状を呈する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。坏部へ脚部ヘラナデ。脚部下端ヨコナデ。内面-口縁部ヨコナデ。坏底部へ脚部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外-明赤褐色	裾部欠損
		底径 11.0				
		器高 12.2				
29	須恵器 鉢	口径 9.3	丸底。体部は中位が張る。孔径0.8×0.7cmの円孔。口縁部は外反し、中位に稜をもつ。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。頸部波状文、工具の単位不明。体部中位は横位沈線による区画内に6条1単位の工具による波状文。体部下位へ底部ヘラナデ。内面-ロクロナデ。口縁部上位に横位沈線。体部上位に絞り目。体部下位に指間圧痕あり。	白色粒 内外-灰色	口縁部1/2欠損 環文線 外面肩部へ体部上半、内面口縁部へ頸部・底面に自然釉付着
		底径 11.2				
		器高 11.2				
No.	甕	法量(cm)・特徴			備考	
30	砥石	長さ21.2、幅14.5、厚さ9.0、重さ3444.18g。石材：安山岩。調整：砥面は1面使用、非常に平滑。側面に磨痕あり。			完形	



第810図 第332号住居跡出土遺物(2)

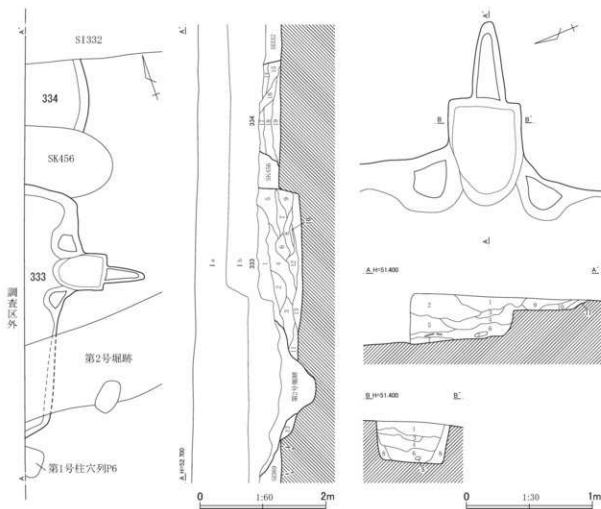
短小であるが、本来はもう少し高さもあったのかもかもしれない。燃焼面は、床面を浅く掘りくぼめて造られており、焚口側は丸くなっている。奥壁までの燃焼部の長さは84cm、横幅は58cmである。燃焼部の左袖側の側壁は被熱赤化の痕跡が顕著であり、右袖側の側壁、奥壁にも部分的に被熱赤化の痕跡が

第333号住居跡(第811・812図、図版199)

調査地点の西縁沿いの中央、H3、I3グリッドに位置する住居跡である。第335・369号住居跡、第456号土坑を切っており、第2号堀跡に切られ、遺構の一部を壊されている。第1号柱穴列と重なるが、直接の切り合い関係にはない。また、遺構の西側の大半は、調査範囲外である。確認面は、黄褐色のローム層上面である。

規模は、主軸方向での現存長が0.84m、副軸方向で3.98m、主軸方位は、S-89°-Eである。床面には微妙な凹凸が見られるが、明瞭に硬化している。北壁は比較的急峻に立ち上がる。壁高は、東壁で29cm、南壁で20cm、北壁で68cmである。

カマドは、東壁に設けられている。奥壁側がボックス形に造作された燃焼部が残存する。両袖は、低平で



第333・334号住居跡土層説明(1)

- 第1a層:褐灰色土。しまり、粘性ともに弱い表土層。
 第1b層:褐灰色土。As-Aを多量に含む旧表土層。ややしまっている。
 第1層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、焼土を微量含む。第1~13層は、第333号住居跡層上。
 第2層:暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)を大量に、ローム粒を多量に、焼土を微量含む。
 第3層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、焼土を微量含む。
 第4層:暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)を大量に、ローム粒を少量、白色軽石・焼土を微量含む。
 第5層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒を少量、白色軽石・焼土を微量含む。
 第6層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を大量に、ローム粒を多量に、白色軽石を少量、焼土を微量含む。
 第7層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒・白色軽石を少量、焼土を微量含む。
 第8層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を大量に、ローム粒・白色軽石を少量、焼土を微量含む。

- 第9層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を大量に、ローム粒を多量に、白色軽石を微量含む。
 第10層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を微量含む。
 第11層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)・ローム粒を多量に、白色軽石を少量、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性が強い。
 第12層:灰黄褐色土。ローム粒を多量に、ロームブロック(5~30mm)・白色軽石を微量含む。ややしまっており、粘性が強い。
 第13層:黒褐色土。ロームブロック(5~50mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。第18~28層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。
 第14層:暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、白色軽石・焼土・炭化物を微量含む。第14~19層は、第334号住居跡層上。
 第15層:暗褐色土。ロームブロック(5~50mm)・ローム粒を少量、焼土を微量含む。
 第16層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、白色軽石・焼土を微量含む。

第811図 第333・334号住居跡平面・断面図(1)

D地点

第333・334号住居跡土層説明(2)

- 第17層:黒褐色土。ローム粒・白色軽石・焼土を微量含む。
第18層:暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)・白色軽石を多量に、焼土・炭化物を微量含む。
第19層:暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、白色軽石・ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第333号住居跡カマド土層説明

- 第1層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、焼土を微量含む。やや湿っており、第1~4層は、いずれの層も、やや湿っており、粘性がやや強い。
第2層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。
第3層:灰黄褐色土。焼土を少量、ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を微量含む。

- 第4層:灰黄褐色土。焼土を大量に、ローム粒を微量含む。
第5層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。やや湿っている。
第6層:褐灰色土。灰を多量に、焼土を少量、ロームブロック(5~10mm)を微量含む。粘性がやや強い。
第7層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量に、焼土を少量含む。第7~11層は、いずれの層も、やや湿っており、粘性がやや強い。
第8層:灰黄褐色土。焼土・ローム粒を少量含む。
第9層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)・焼土を少量含む。第9~11層は、煙道の覆土。
第10層:暗褐色土。焼土を少量、ロームブロック(5~10mm)を微量含む。
第11層:灰黄褐色土。焼土・ローム粒を多量に含む。

第812図 第333・334号住居跡平面・断面図(2)

みとめられる。奥壁中央の上部には煙道が水平方向に断ち割られたような状態で残っていた。奥壁部分での横幅は30cm、縦方向での現存長、縦幅は10cm、全体の現存長は59cmである。奥壁から45cmほど入ったところで上方に立ち上がるようである。煙道入口の側壁も部分的に被熱赤化している。煙道を含むカマド覆土は11層で、焼土を多量に含む第4・11層は、燃焼部や煙道の天井部や側壁の崩落土を含む層であろう。カマド中央やや奥壁寄りの若干浮いた位置から平べったい円礫が出土している。

覆土は、13層に分けられた。かなり明瞭に分層できる堆積単位をなす土のまとまりが繰り返して流入あるいは投棄されて埋没した模様である。覆土の大半(第2・4~9・11~13層)は、ロームブロックを多量に、あるいは大量に含み、ローム層を直接掘り起こした土と暗褐色土、黒褐色土、灰黄褐色土が何らかの形で混ぜ合わさった土によって、一挙に埋め戻されたかに見える。また、白色軽石が多く層に含まれる点も特徴的である。

重複関係から見て、古墳時代終末期以前の遺構と考えられる。

第334号住居跡(第811・812図)

調査地点の西縁沿いのほぼ中央、I2グリッドに位置する住居跡である。第332号住居跡、第456号土坑に切られ、また西半の大部分が調査範囲外であるため、東壁と床面のわずかな部分を調査したのみである。確認面は、黄褐色のローム層上面である。

規模は、南北方向での現存値1.15m、東西方向では1.00mである。床面はほぼ平坦であるが、硬化はさほど顕著ではない。壁高は、東壁で25cmである。

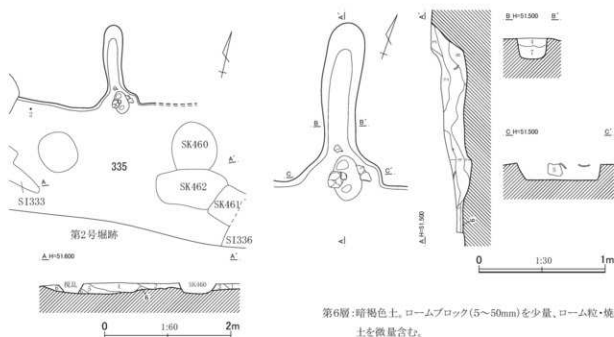
覆土は、第811図中央の断面図の第14~19層の6層で、やはり細かな層が不規則に堆積している。また、第16・18・19層のようにロームブロックを多量に含む層が見られ、白色軽石を含む層が多いなど、上述第333号住居跡の覆土に似ているようである。重複関係から見て、古墳時代後期初頭以前の遺構と考えられる。

第335号住居跡 (第813・814図、第359表、図版200・228)

調査地点の西縁近くのほぼ中央、1・2・3グリッドに位置する住居跡である。第337号住居跡を切っており、第333号住居跡、第457～462号土坑、第1号柱穴、第2号堀跡に切られ、遺構の大半が失われている。第336号住居跡とも重複する可能性があるが、床面がどこまで伸長していたのかははっきりせず、重複関係自体確かめられなかった。確認面は、黄褐色のローム層上面である。

第2号堀跡の南側に本住居跡の床面が伸長しないとすれば、横長の形態の住居跡になることになる。規模は、いずれも床面の残存する範囲の長さということになるが、主軸方向で1.74m、副軸方向で2.15mである。主軸方向が奥壁、北壁にほぼ直交するとすれば、主軸方位は、 $N-13^{\circ}-W$ あたりを指す。床面には微妙な凹凸が見られ、カマド前面以外は、床面の硬化もさほど顕著ではない。

カマドは、北壁に設けられている。袖を有さず、手前の浅く掘り込まれた部分と細長い溝状の部分からなる形態である。手前の浅い掘り込みが燃烧部、細長い溝状部分が煙道であろうか。ただし、この溝状部分は、確認面でも赤化した壁上端から明瞭に輪郭を捉えることができ、また第2・3層とし



第335号住居跡土層説明

第1層: 褐褐色土。ロームブロック(5～10mm)を微量、 $A_s-B?$ を少量含む。粘性がやや強い。

第2層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5～10mm)を少量、焼土を微量含む。第2～8層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。

第3層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5～10mm)を多量に、焼土を少量含む。

第4層: 黒褐色土。ロームブロック(5～30mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第5層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5～50mm)を多量に、焼土を少量含む。

第335号住居跡カマド土層説明

第1層: 灰黄褐色土。焼土を少量、炭化物を微量含む。第1～8層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性やや強い。

第2層: 灰黄褐色土。焼土を多量に含む、ローム粒・炭化物を微量含む。

第3層: 黒褐色土。ロームブロック(5～10mm)・焼土を多量に含む。

第4層: 灰黄褐色土。ローム粒・焼土・炭化物を微量含む。

第5層: 暗褐色土。焼土を少量、炭化物を微量含む。

第6層: 暗褐色土。ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第7層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5～10mm)・ローム粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。

第8層: 灰黄褐色土。焼土を少量、ローム粒・炭化物を微量含む。

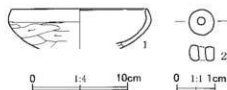
第813図 第335号住居跡平面・断面図

D地点

た焼土を多量に含む天井部や壁の崩落土と考えられる層が見られることからすれば、溝状部分全体が文字通りの煙道ではないのかもしれない。燃焼部と煙道を合わせた全長は141cm、燃焼部の横幅は70cm、煙道の横幅は、中央で30cmである。全体に被熱赤化の痕跡は明瞭ではない。

住居跡の覆土は、6層に分層できた。第3～5層としたロームブロックを多量に含む層が特徴的であり、あるいは埋め戻された可能性も考えてよいであろう。

第335図2の滑石製白玉は、カマドの西側の北壁近くの覆土中から出土している。1の坏は、小破片であり、混入品の可能性が高い。カマドから土器片が出土しているが、復元実測可能な個体は見られなかった。重複関係から見て、平安時代前期末～中期初頭以降の遺構であろうか。



第814図 第335号住居跡出土遺物

第359表 第335号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径(14.2) 底径 — 器高 [4.2]	体部は内彎し、口縁部は内屈する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ、体部へラケズリ。 内面—口縁部へ体部ヨコナデ。	石英・白色粒・褐色粒 内外—ぶい褐色	口縁部へ体部1/6残存
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
2	石製品 白玉	長さ0.7、幅0.7、厚さ0.4、孔径0.2×0.2、重さ0.29g。石材：滑石。調整：表裏面に丁寧な研磨。中央に穿孔1箇所。				完形

第336号住居跡 (第815図、図版200)

調査地点の西半のほぼ中央、I 3グリッドに位置する住居跡である。第461号土坑、第2号堀跡に切られ、遺構の大半を壊されており、北西隅周辺の極わずかな範囲しか残存しない。第337・335号住居跡と重複するが、重複部分の残存状態が悪く、明確な新旧関係を把握することが困難であった。確認面は、黄褐色のローム層上面である。

規模は、残存部分からの推定値になるが、南北方向で0.80m、東西方向で1.75mである。床面はほぼ平坦であり、硬化している。残存する壁は、比較的立ち上がりも急で、壁高は、北壁、西壁ともに13、14cmである。重複関係、出土遺物いづれも時期を決める手がかりとならない。時期不詳の住居跡とせざるを得ない。



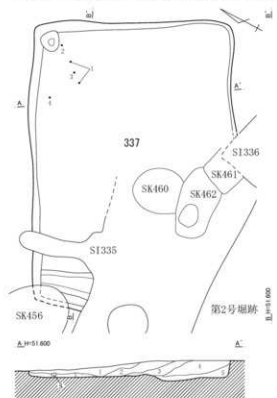
第815図 第336号住居跡
平面・断面図

第337号住居跡 (第816・817図、第360表、図版200・228)

調査地点の西縁近くの中央、やや北寄り、I 2・3グリッドに位置する住居跡である。第332・341号住居跡を切っており、第335号住居跡、第456～462号土坑に切られ、遺構の一部を壊されている。なお、第336号住居跡と重複するが、重複部分の残存状態が悪いので、新旧関係がつかめなかった。確認面は、黄褐色のローム層上面である。

平面形は、長方形と見てよいであろう。規模は、北東—南西方向の残りのよい部分で4.57m、北西—南東方向で3.30mである。カマドが残存していないため主軸が確定できないが、北東—南西方向で推定される中軸線の方は、N—65°—Eである。床面は凸凹しているが、硬化は比較的顕著である。

北西壁、南東壁はかなり急峻に立ち上がる。壁高は、北西壁で23cm、北東壁で7cm、南東壁で27cmである。南西壁側には、南西壁と並行する溝状のくぼみが見られた。床面で本住居跡に伴うと思われるピットを1個検出したが、位置的に見て、柱穴などではないようである。

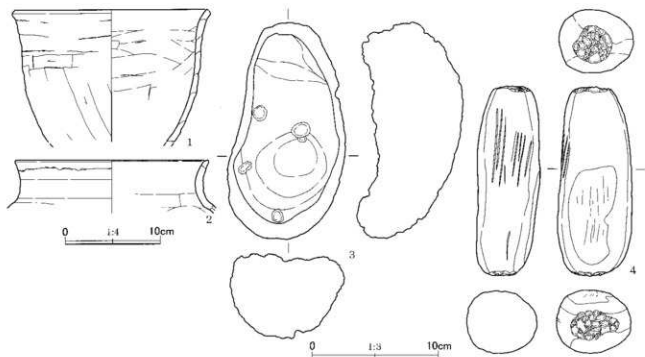


第337号住居跡土層説明

- 第1層：黒褐色土。ロームブロック(5～30mm)を少量、焼土を微量含む。第1～4層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第2層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)・焼土を少量、ローム粒・炭化物を微量含む。
- 第3層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)・ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。
- 第4層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～50mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。
- 第5層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。

0 1:60 2m

第816図 第337号住居跡平面・断面図



第817図 第337号住居跡出土遺物

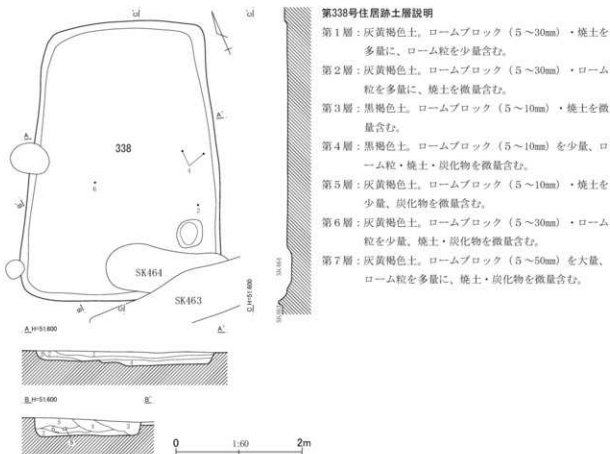
第360表 第337号住居跡出土物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (20.3) 底径 — 器高 [14.0]	口縁部は緩やかに外反し、口唇部は外側に面をもつ。胴部は下方へ向かって窄まる。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部コナデ、輪積み痕明显。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部コナデ、胴部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外—橙色	口縁部～胴部1/4残存 外面胴部は磨耗
2	甕	口径 (20.4) 底径 — 器高 [5.6]	口縁部は直立し、上位で外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部コナデ、胴部上位ヘラケズリ。内面—口縁部コナデ、胴部上位ヘラナデ。	片岩・石英・白色粒・黒色粒 内外—褐色	口縁部1/4残存
No.	器種	法量(cm)・特徴			備考	
3	砥石	長さ17.2、幅9.4、厚さ7.2、重さ764.89g。	石材：角閃石安山岩。調整：砥面は1面使用。			定形
4	敲石	長さ15.15、幅5.9、厚さ5.0、重さ376.43g。	石材：角閃石安山岩。調整：長辺の両端に敲打痕。砥面として1面使用。平滑。砥面の裏面に磨痕あり。			定形

覆土は、5層に分けられた。第4・5層は、壁際に流入したロームブロックを多量に含む土であり、あるいは埋め戻された可能性もあるのかもしれない。第817図1・2の甕、3の砥石、4の敲石は、北隅寄りの位置から出土している。重複関係、出土遺物から見て、平安時代前期末から中期初頭にかけて頃の遺構であろうか。

第338号住居跡 (第818・819図、第361・362表、図版200・228)

調査地点の北西部のほぼ中央、I 2・3、J 2・3グリッドに位置する住居跡である。第339～341号住居跡、第465号土坑を切っており、第463・464号土坑に切られ、南隅周辺を壊されている。確



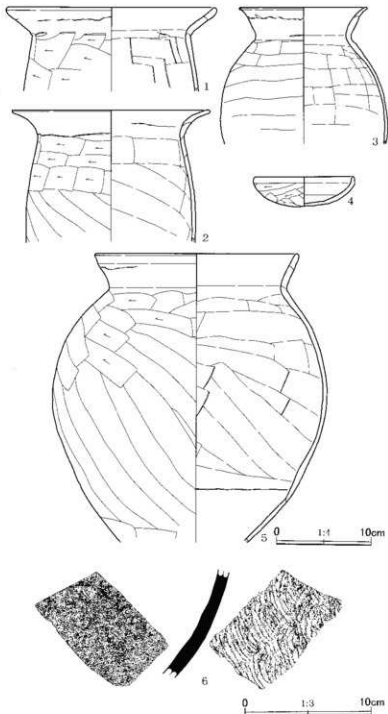
第818図 第338号住居跡平面・断面図

認面は、黄褐色のローム層上面である。

平面形は、北東-南西方向が長いやや歪な長方形である。規模は、北東-南西方向で4.43m、北西-南東方向で3.15mである。北東-南西方向での中軸線方位は、 $N-24^{\circ}-E$ である。床面はかなり凸凹しているが、硬化は比較的顕著である。壁は、残存状態のよいところではおおむね急峻であり、壁高は、北東壁で25cm、南東壁で20cm、南西壁で30cm、北西壁で22cmである。床面で本住居跡に伴うと思われるピットを1つ検出したが、位置的に見て、柱穴などではないようである。カマドがあったとすれば、第463・464号土坑に壊されている南隅付近と思われるが、南隅に近過ぎ、本来カマドがなかった可能性もあるとした。

覆土は、7層に分けられた。全体に大半の覆土が灰色がかかった土であり、第2・7層のようにロームブロックを多量、あるいは大量に含む層が見られる。

第819図2の甕、4の坏は、住居跡東半の床面よりやや浮いた位置から、5の甕は、西半、南西半の下層～最下層から破片がかなり



第819図 第338号住居跡出土遺物

第361表 第338号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (21.9) 底径 — 器高 [9.4]	口縁部は内彎気味に外傾する。胴部は膨らみをもたない。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ココナデ。胴部上位ヘラケズリ。内面-口縁部ココナデ。胴部上位ヘラナデ。	片岩・白色粒・黒色粒 内外-にぶい橙色	口縁部～胴部上位1/3残存
2	甕	口径 (21.0) 底径 — 器高 [14.0]	口縁部は強く外反する。胴部は膨らみをもたない。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ココナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ココナデ。胴部ヘラナデ。	石英・角閃石・白色粒 外-にぶい橙色 内-にぶい黄褐色	口縁部～胴部上半1/2残存

第362表 第338号住居跡出土土物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
3	壺	口径 (13.4) 底径 — 器高 [14.5]	口縁部は外反し、上端で短く外屈する。胴部は中位に膨らみをもつ。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—橙色	口縁部～胴部上半1/3残存 外面は磨耗
4	坏	口径 10.5 底径 — 器高 3.2	丸底。浅い体部から口縁部は短く直立する。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	石英・黒色粒 内外—ぶい橙色	ほぼ完形
5	甕	口径 21.3 底径 — 器高 [30.6]	口縁部は外傾する。胴部は中位が張る。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外—橙色	口縁部～胴部3/4残存
6	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	タタキ成形。	外面—胴部平行タタキ。内面—胴部同心円の当て具痕。	石英・白色粒 内外—灰色	胴部破片 還元焼成

の広がりをもって分散して出土している。1の甕、3の壺は、第464号土坑と重複する微妙な位置から出土しており、あるいは伴わない可能性もあるようである。重複関係、住居跡形態、出土遺物などから見て、古墳時代終末期後葉頃の遺構と考えられる。

第339号住居跡 (第820～823図、第363表、図版201・228)

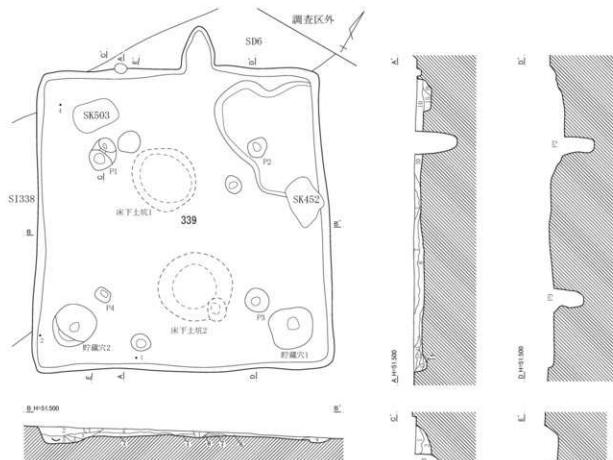
調査地点の北西部の北縁近くの中央、I 2、J 2・3グリッドに位置する住居跡である。第338住居跡、第503号土坑、第6号溝跡に切られ、遺構の一部を壊されている。第452号土坑と重複するが、新旧関係は確認できていない。確認面は、黄褐色のローム層上面である。

平面形は、方形である。規模は、主軸方向で4.78m、副軸方向で4.80m、主軸方位はN-30°-Wである。床面にはかなり凹凸が目立つが、壁際以外はおおむね硬化している。壁は比較的ゆるやかに立ち上がり、壁高は、北西壁で14cm、北東壁で5cm、南東壁で13cm、南西壁で22cmである。土層断面A-A'では、壁際に壁溝状のくぼみが見られるが、局所的であり、溝状にはならない。

P 1～P 4は、主柱穴である。平面形は、やや不整な円形、楕円形で、P 1は、付け替えられたものか2つのビットが合わさった形状である。深さは、P 1が40cm、P 2～P 4が50cmである。貯蔵穴は、東隅近くと南隅近くで検出した。前者を貯蔵穴1、後者を貯蔵穴2と呼称した。貯蔵穴1は、平面形が隅丸方形のような形で、深さは79cmである。貯蔵穴2は、やや不整な円形の平面形で、深さは81cmである。どちらも覆土にロームブロックを多量に含む層が見られる。

カマドは、北西壁の中央若干北隅に寄った位置に付設されている。袖が残っており、壁を掘り込んだ燃焼部のみ残存する。長さは73cm、中央での横幅は50cmである。燃焼面は、浅く掘りくぼめ作出されており、煙道側に向かってゆるやかに立ち上がる。覆土には、焼土のが含まれるが、被熱赤化の痕跡は軽微である。

床面中央のカマド寄り、南東壁寄りの2箇所で検出した土坑を、床下土坑としたが、あるいは住居跡とは時期の異なる土坑である可能性も捨て切れない。一応前者を床下土坑1、後者を床下土坑2と呼称した。平面形は、どちらの土坑も円形に近く、深さは、床下土坑1が35cm、床下土坑2が23cmである。



第339号住居跡土層説明(1)

(A-A'、B-B'断面)

- 第1層: 褐灰色土。As-A'を多量に、ロームブロック(5~10mm)を少量含む。第1~16層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第2層: 黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・焼土を少量含む。
- 第3層: 暗褐色土。焼土を少量、ロームブロック(5~30mm)を微量含む。
- 第4層: 暗褐色土。焼土を多量に、ローム粒を微量含む。
- 第5層: 黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、焼土を微量含む。
- 第6層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、焼土を微量含む。
- 第7層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、焼土を少量含む。
- 第8層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を大量に含む。
- 第9層: 暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒を少量含む。
- 第10層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を大量に、ローム粒を多量に、焼土を微量含む。

第11層: 暗褐色土。焼土・ロームブロック(5~30mm)を微量含む。

第12層: 灰黄褐色土。焼土を大量、ロームブロック(5~30mm)を多量に含む。

第13層: 灰黄褐色土。ローム粒を多量に、焼土・ロームブロック(5~10mm)を微量含む。

第14層: 暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒を微量含む。

第15層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を大量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第16層: 黒褐色土。ローム粒・焼土を微量含む。

第820図 第339号住居跡平面・断面図(1)

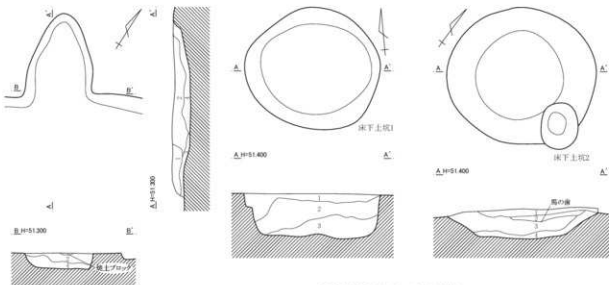
D地点

第339号住居跡土層説明(2)

〈C-C'断面〉

- 第1層：黒褐色土。焼土を少量、ローム粒を微量含む。第1～6層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性やや強い。
 第2層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～100mm)を大量に、ローム粒・焼土・炭化物を微量含む。
 第3層：黒褐色土。ロームブロック(5～50mm)を大量に、焼土を微量含む。

- 第4層：黒褐色土。ロームブロック(5～30mm)を少量、ローム粒・焼土を微量含む。
 第5層：暗褐色土。ロームブロック(5～50mm)を大量に、ローム粒を多量に、焼土を微量含む。
 第6層：黒褐色土。ロームブロック(5～100mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。



第339号住居跡カマド土層説明

- 第1層：黒褐色土。ローム粒を少量、白色軽石を微量含む。しまっており、粘性が強い。
 第2層：黒褐色土。ロームブロック(5～10mm)・ローム粒を多量に、白色軽石を少量、焼土を微量含む。しまっており、粘性が強い。
 第3層：灰黄褐色土。ローム粒を少量、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性が強い。
 第4層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性が強い。

第339号住居跡貯蔵穴1土層説明

- 第1層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)・ローム粒を大量に、焼土を微量含む。第1～4層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性が強い。
 第2層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～50mm)・ローム粒を大量に、焼土を多量に含む。
 第3層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～10mm)・焼土粒を少量含む。
 第4層：暗褐色土。ロームブロック(5～10mm)・ローム粒を微量含む。

第821図 第339号住居跡平面・断面図(2)

第339号住居跡貯蔵穴2土層説明

第1層：黒褐色土。ロームブロック（5～10mm）を少量、焼土を微量含む。第1～4層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層：灰黄褐色土。ロームブロック（5～30mm）・ローム粒を大量に含む。

第3層：黒褐色土。ロームブロック（5～30mm）を少量、ローム粒・焼土を微量含む。

第4層：にぶい黄褐色土。ロームブロック（5～50mm）・ローム粒を大量に含む。

第339号住居跡床下土坑1土層説明

第1層：灰黄褐色土。ロームブロック（5～10mm）を少量、焼土を微量含む。

第2層：灰黄褐色土。ロームブロック（5～50mm）を大量に、ローム粒を多量に含む。

第3層：灰黄褐色土。ロームブロック（5～30mm）・ローム粒を多量に含む。

第339号住居跡床下土坑2土層説明

第1層：黒褐色土。ロームブロック（5～10mm）を少量、焼土を微量含む。第1～4層は、いずれの層も、しまっており、粘性が強い。

第2層：黒褐色土。貼床層。

第3層：黒褐色土。ロームブロック（5～20mm）・ローム粒を大量に、焼土を微量含む。

第4層：灰黄褐色土。ロームブロック（5～30mm）・ローム粒を多量に含む。

第822図 第339号住居跡平面・断面図（3）

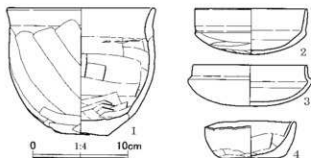
第363表 第339号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	小型甕	口径 15.5 底径 5.5 器高 13.5	口縁部はわずかに外反する。胴部は中に膨らみをもつ。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。底部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒・小礫 内外～にぶい橙色	口縁部～胴部1/2欠損
2	坏	口径 11.9 底径 — 器高 4.9	丸底。口縁部は体部との境に弱い稜をもち、内彎気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	石英・白色粒 内外～橙色	口縁部一部欠損 外面は磨耗
3	坏	口径 12.0 底径 — 器高 4.4	丸底。口縁部は体部との境に稜をもって内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部～底部不明瞭。内面一口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒・褐色粒 内外～にぶい黄橙色	1/3残存 外面は磨耗
4	手捏ね土器	口径 9.7 底径 6.1 器高 3.9	平底。体部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部～底部ナデ。内面一口縁部～底部ヘラナデ。	雲母・白色粒 内外～明赤褐色	口縁部2/3欠損

ビット覆土を除く住居跡の覆土は、14層に分けられた。第4・12層のように焼土を多量に含む層が見られ、また第7～10・13～15層のようにローム粒あるいはロームブロックを多量に含む層が見られるなど、埋め戻された可能性があるようである。

第823図1の甕は南壁近く、2の坏は、南西隅近く、4の手捏ね土器は、北西隅近くの、いずれも床面よりやや浮いた位置から出土し

ている。住居形態、出土遺物から見て、古墳時代後期中葉の遺構と考えられる。



第823図 第339号住居跡出土遺物

第340号住居跡（第824・825図、第364表、図版202・228・229）

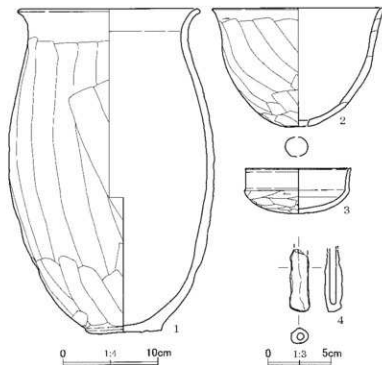
調査地点の北西部の中央、やや南寄り、13グリッドに位置する住居跡である。第341号住居跡と



第824図 第340号住居跡平面・断面図

重複しており、第338号住居跡、第1号柱穴列、第463号土坑、第1号柱穴列および第2号堀跡に切られ、遺構の南側、東側の大半が失われている。黄褐色のローム層上面である。

規模は、いずれも現存長になるが、北東-南西方向で1.95m、北西-南東方向で2.35mである。主軸が確定できないが、北西壁はN-25°-Eあたりを指すようである。床面は、部分的に硬化している。壁高は、北西壁、北東壁で20cmである。



第825図 第340号住居跡出土遺物

第825図1の甕、2の瓶、3の坏は、住居跡残存部分の南半の床面よりやや浮いた位置から出土している。出土遺物から見て、古墳時代後期前葉の遺構と考えられる。

第341号住居跡 (第826・827図、第365表、図版202・229)

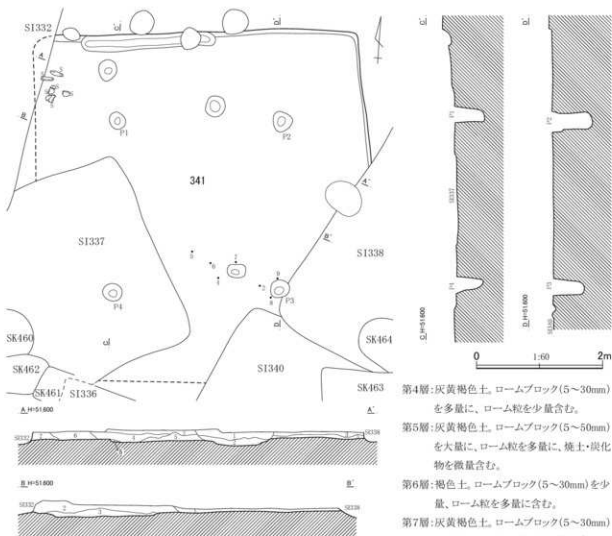
調査地点の北西部の中央、やや西寄り、12・3グリッドに位置する住居跡である。第336～338号住居跡にも重複するが、新旧関係を決めることができなかった。また、第457～462号土坑とも重複する位置関係にあるが、第

第364表 第340号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 18.7 底径 8.0 器高 34.5	口縁部は外反する。胴部は中位に膨らみをもつ。平底。粘土粗積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナゲ。胴部-底部ヘラクスリ。内面-口縁部ヨコナゲ。胴部-底部不明瞭。	片岩・角閃石・白色粒・褐色粒・小礫 内外-褐色	胴部上半1/5欠損 外面胴部に赤色化した粘土が付着 内面は磨耗
2	小型瓶	口径 18.0 底径 (2.5) 器高 12.6	口縁部は外反する。胴部は底部へ向かって窄まる。孔径(2.4)cmの円孔。粘土粗積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナゲ。胴部ヘラクスリ。内面-口縁部ヨコナゲ。胴部不明瞭。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒・小礫 内外-褐色	口縁部1/5・底部1/2欠損 内面は磨耗
3	坏	口径 11.1 底径 — 器高 4.8	丸底。口縁部は体部との境に稜をもって直立する。口唇部に面をもつ。粘土粗積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナゲ。体部-底部ヘラクスリ。内面-口縁部ヨコナゲ。体部-底部ヘラナゲ。	白色粒・褐色粒 内外-褐色	口縁部1/2欠損
No.	器種	法量(cm)・特徴			備考	
4	土製品 不明品	長さ(4.9)、幅1.6、厚さ1.2、重さ10.18g。 尖に径0.5cmの円孔が空く。貫通しない。	胎土：白色粒。色調：にぶい褐色。調整：ナゲ。中			上端部欠損

337号住居跡が介在しているため直接重複関係にはない。確認面は、黄褐色のローム層上面である。

後述する主柱穴の配置などからすれば、平面形は、方形に近い形態と推定できる。カマドは残存しないが、東壁側、あるいは西壁側が可能性としては高いであろう。規模も推定復元するなら、南北方向で5.27m、東西方向で6.03mである。主軸方位は、仮に東壁側にカマドがあったとすれば、N-83°-Eになる。壁際以外の床面は明瞭に硬化しているが、細かな凹凸が見られる。壁高は、東・北壁で9cmである。北壁中央から西半にかけて、幅22~27cm、深さ5cm前後の壁溝が見られる。



第341号住居跡土層説明

〈A-A' 断面〉

第1層: 黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、ローム粒・炭化物を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。平面的にとらえることができなかったが、第1・2層は、土坑の覆土になる可能性もある。以下、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第3層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)・焼土を微量含む。

〈B-B' 断面〉

第1層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に含む。第1~3層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層: 黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、焼土・炭化物・ローム粒を微量含む。

第3層: 黒褐色土。ロームブロック(5~50mm)を大量に、ローム粒を多量に含む。

第4層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒を少量含む。

第5層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を大量に、ローム粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。

第6層: 褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、ローム粒を多量に含む。

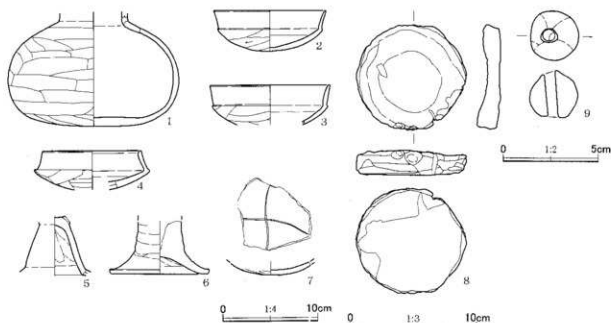
第7層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、ローム粒・炭化物を微量含む。

第826図 第341号住居跡平面・断面図

D地点

P1~P3は、支柱穴であろう。平面形はやや不整な円形、楕円形で、深さは、P1が48cm、P2が65cm、P3が50cm、P4が43cmである。他に床面でピットを3つ検出している。

住居跡の覆土は、A-A' 断面で7層、B-B' 断面で3層に分けられた。A-A' 断面の第2・4・5層、B-B' 断面の第1・3層のようにロームブロックを多量に、あるいは大量に含む層が目立つようである。



第827図 第341号住居跡出土遺物

第365表 第341号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 — 底径 — 器高 [12.1]	丸底。体部は中位が大きく張る。粘土組織み上げによる成形。	外面—体部～底部ヘラケズリ。 内面—体部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外—明赤褐色	体部～底部
2	坏	口径 (11.8) 底径 — 器高 4.3	丸底。口縁部は体部との境に弱い稜をもって外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外—橙色	1/3残存
3	坏	口径 (12.6) 底径 — 器高 [4.2]	口縁部は体部との境に稜をもって外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	白色粒・褐色粒 内外—橙色	口縁部～体部 1/4残存
4	坏	口径 (10.3) 底径 — 器高 [4.1]	体部は浅い。口縁部は体部との境に稜をもって内傾する。口唇部は肥厚する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	白色粒 外—明赤褐色 内—ぶい黄褐色	口縁部～体部 1/3残存
5	高坏	口径 — 底径 — 器高 [6.2]	脚部は下方へ開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—脚部ナデ。内面—脚部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 外—明赤褐色 内—橙色	脚部のみ
6	高坏	口径 — 底径 (10.1) 器高 [5.6]	脚部は中実。裾部は短く、端部でわずかに外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—脚部ヘラナデ。裾部ヨコナデ。内面—脚部ヘラナデ。裾部ヨコナデ。	白色粒・角閃石・城色粒 内外—橙色	脚部1/2残存
7	坏	口径 — 底径 — 器高 [1.4]	丸底。粘土組織み上げによる成形。	外面—底部ヘラケズリ。内面—底部ヘラナデ。	白色粒 内外—ぶい橙色	底部 内底面に「×」の線刻
No.	器種	法量(cm)・特徴			備考	
8	土製品 円板状	長さ8.8, 幅8.8, 厚さ2.0, 重さ140.0g.	胎土: 石英・白色粒・小礫。色調: ぶい黄褐色。調整: ナデ。	ほぼ完形		
9	土玉	長さ2.6, 幅2.6, 孔徑0.7×0.7, 厚さ2.5, 重さ15.35g.	胎土: 白色粒。色調: ぶい黄褐色。調整: ナデ。	完形		

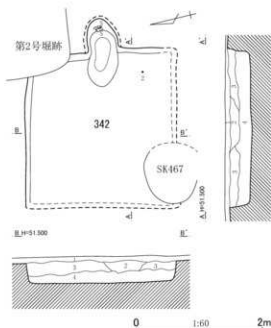
第827図2・4・7の坏、5・6の高坏脚部片、8の円盤状の土製品、9の土玉は、住居跡南東半の覆土上～中層中から分散して出土している。北西隅近くから編物石が6点ほど出土している。重複関係、出土遺物から見て、古墳時代後期中葉から後葉前半にかけての遺構であろうか。

第342号住居跡 (第818・819図、第366表、図版203・229)

調査地点のほぼ中央、J 3 グリッドに位置する住居跡である。第343・348・349号住居跡を切り、第467号土坑、第2号堀跡に切れ、遺構の一部を壊されている。確認面は、灰黄褐色のローム層上面、あるいは第II a層に相当する褐灰色土層直下である。確認面で輪軸を捉えることができず、南壁、西壁に関しては、土層断面で立ち上がりを確認したのみである。

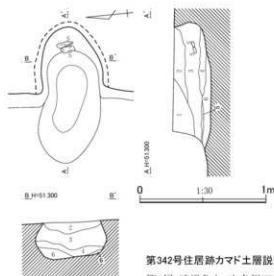
平面形は、方形と見られる。規模は、主軸方向で2.68m、副軸方向で2.40m、主軸方位は、S-12°-Eである。床面はほぼ平坦で、北西隅周辺や床面の南半部分などがやや不規則に硬化している。壁はかなり急峻に立ち上がる。壁高は、東・西壁で39cm、南壁で38cm、北壁で40cmである。

カマドは、東壁の中央に設けられている。やや歪な楕円形の燃焼部のみ残存する。燃焼面は、浅く掘りくぼめられており、奥壁、側壁ともに中位がえぐり込むように掘り込まれている。燃焼部の長さ



第342号住居跡土層説明

- 第1層: 褐灰色土。As-B?を少量、焼土・炭化物を微量含む。第1～4層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第2層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)を少量、焼土・炭化物を微量含む。第2～4層は、第342号住居跡覆土。
- 第3層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)を多量に、ローム粒・焼土を少量含む。
- 第4層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5～50mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。



第342号住居跡カマド土層説明

- 第1層: 暗褐色土。白色軽石を多量に、ロームブロック(5～10mm)・焼土を微量含む。ややしまっており、粘性やや強い。
- 第2層: 暗褐色土。ロームブロック(5～30mm)を少量、白色軽石・焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第3層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)を多量に、白色軽石・焼土・炭化物を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第4層: 赤褐色土。焼土層。天井崩落土か、ややしまっている。
- 第5層: 黒褐色土。灰を多量に、焼土・炭化物を微量含む。ややしまっている。
- 第6層: 暗褐色土。ロームブロック(5～10mm)・焼土・炭化物を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

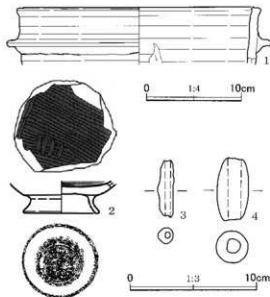
第828図 第342号住居跡平面・断面図

D地点

は112cm、横幅は57cmである。奥壁および側壁の上部は、明瞭に被熱赤化している。カマド覆土の第4層は、天井部や側壁の崩落土であろう。また、第5層は、特異な灰層であり、あるいは第6層の堆積後に再度カマドが使用された可能性もあるのかもしれない。

住居跡土層断面図の第1層は、標準土層の第II a層に相当する住居跡を被覆する土であり、第2～4層が覆土である。住居跡を一次的に埋めている第3・4層には、多量のロームブロックが含まれ、自然な流入土による埋没過程とは異なるかに見える。

第829図2の酸化塩焼成の高台付埴は、南東隅近くの覆土中から出土している。他には、土師器片を主とする遺物が、覆土中より散漫に出土しているのみである。重複関係、出土遺物から見て、平安時代前期末から中期初頭にかけての遺構であろう。



第829図 第342号住居跡出土遺物

第366表 第342号住居跡出土遺物観察表

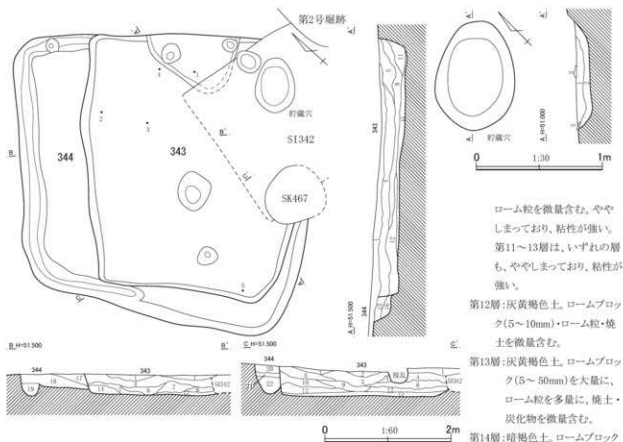
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 大型甕	口径 (26.0) 底径 — 器高 [6.1]	口縁部は直立する。口唇部は面をもち、やや肥厚する。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。踏貼付時回転ナデ。内面—ロクロナデ。胴部一部へラケズリ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外—褐色	口縁部破片 酸化塩焼成
2	須恵器 高台付埴	口径 — 底径 7.9 器高 [3.1]	高台部は高く、ハの字形に開く。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。高台貼付時に底面ナデ。内面—ロクロナデ—底部—方向のミガキ。黒色処理。	雲母・白色粒・黒色粒・褐色粒 外—にぶい褐色 内—黒褐色	底部〜高台部 酸化塩焼成
No.	器種	法量(cm)・特徴			備考	
3	土師	長さ4.5、幅1.2、厚さ0.8、重さ5.77g。	胎土：白色粒。色調：褐色。			定形
4	土師	長さ5.0、幅2.5、厚さ2.55、重さ32.56g。	胎土：白色粒・黒色粒。色調：明黄褐色。			定形

第343号住居跡 (第830・831図、第367表、図版203・204・229)

調査地点のほぼ中央、J3グリッドに位置する住居跡である。第344・349・350号住居跡を切り、第342号住居跡、第467号土坑、第1号柱穴列に切られ、遺構の東半などを大きく壊されている。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

平面形は、北東壁が南西壁に比べてやや長い長方形と推定できる。カマドは、南東壁にあったと見るのが素直であるが、今回の調査範囲では、カマドのない長方形の住居跡がいくつか見られ、予断を許さない。規模は、北東—南西方向で4.18m、北西—南東方向で3.23m、北東—南西方向での中軸線方位は、N-50°—Eである。床面はほぼ平坦で、中央を中心に硬化している。壁は、いずれも比較的急峻に立ち上がる。壁高は、北東壁で43cm、南東壁で42cm、南西壁で45cm、北西壁で30cmである。

第342号住居跡に壊されている東隅寄りの土坑を、位置から見て、本住居跡の貯蔵穴と考えた。貯蔵穴の平面形は卵形に近い楕円形で、長軸長は86cm、短軸長は63cm、深さは12cmである。他に床面で、ビットを5つ検出しており、北西壁沿いには、浅く大きな不整形の掘り込みが見られる。



ローム粒を微量含む。ややしまっており、粘性が強い。
第11～13層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性が強い。

第12層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～10mm)・ローム粒・焼土を微量含む。

第13層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～50mm)を大量に、ローム粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。

第14層：暗褐色土。ロームブロック(5～10mm)を少量、焼土・炭化物を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第15層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～10mm)・ローム粒・焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。第15～22層は、第344号住居跡覆土。

第16層：灰黄褐色土。ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。

第17層：暗褐色土。焼土を少量、ローム粒・白色軽石を微量含む。

第18層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～10mm)・ローム粒を多量に、焼土・炭化物・白色軽石を微量含む。第18～22層は、ややしまっており、粘性がやや強い。

第19層：黒褐色土。ロームブロック(5～30mm)を大量に、ローム粒を微量含む。

第20層：暗褐色土。焼土・白色軽石・炭化物・ローム粒を微量含む。

第21層：暗褐色土。ロームブロック(5～30mm)・焼土・炭化物を微量含む。

第22層：暗褐色土。ロームブロック(5～30mm)を大量に、ローム粒を微量含む。

第343号住居跡貯蔵穴土層説明

第1層：黒褐色土。ロームブロック(5～10mm)を少量、ローム粒・焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層：黒褐色土。ロームブロック(5～10mm)を多量に、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第343・344号住居跡土層説明

第1層：褐灰色土。As-B?を少量、焼土・炭化物を微量含む。第1～7層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)・ローム粒を少量、白色軽石・焼土を微量含む。第2～14層は、第343号住居跡覆土。

第3層：暗褐色土。ロームブロック(5～10mm)を多量に、ローム粒・白色軽石・焼土を微量含む。

第4層：暗褐色土。ロームブロック(5～30mm)・焼土を少量、炭化物・白色軽石を微量含む。

第5層：暗褐色土。ロームブロック(5～10mm)を少量、焼土・炭化物を微量含む。

第6層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。

第7層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～50mm)を大量に、焼土・ローム粒を微量含む。

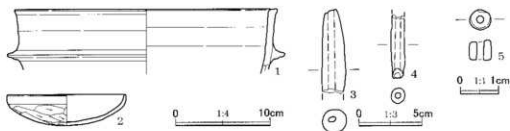
第8層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)を多量に、焼土・炭化物を微量含む。ややしまっており、粘性が強い。

第9層：黒褐色土。焼土を多量に、炭化物を少量、ロームブロック(5～30mm)を微量含む。しまっており、粘性が強い。

第10層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)・ローム粒を少量、焼土・炭化物・白色軽石を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第11層：暗褐色土。ロームブロック(5～50mm)を多量に、焼土・炭化物

第830図 第343・344号住居跡平面・断面図



第831図 第343号住居跡出土遺物

第367表 第343号住居跡出土遺物観察表

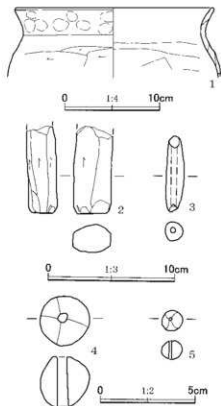
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考	
1	須恵器 大型甕	口径 (28.0) 底径 — 器高 [6.8]	口縁部は直立する。口唇部は面をもち、やや肥厚する。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。髑舘付回転ナデ。内面—ロクロナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 外—橙色 内—黒褐色	口縁部破片酸化腐蝕成	
2	坏	口径 (12.4) 底径 — 器高 2.3	丸底。浅い体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部—底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部—底部不明瞭。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 外—明赤褐色 内—橙色	2/3残存 内面は磨耗	
			法量(cm)・特徴				
3	土鐘	長さ[6.7]、幅1.9、厚さ1.85、重さ22.38g。	胎土：白色粒・黒色粒・褐色粒。色調：明黄褐色。				1/2残存
4	土鐘	長さ[5.1]、幅1.15、厚さ1.2、重さ6.96g。	胎土：白色粒・黒色粒・褐色粒。色調：明赤褐色。				端部欠損
5	石製品 白玉	長さ0.55、幅0.6、孔径0.2×0.2、厚さ0.53、重さ0.21g。石材：滑石。調整：表裏面研磨。中央に穿孔1箇所。					一部欠損

覆土は、第2～14層の13層で、ロームブロックを多量に含む第3・6～8・11・18層や焼土を多量に含む第9層など、総じて自然堆積とは思われない特異な層が見られるとともに、全体として不規則な堆積状態を示すようである。やはり人為的な埋め戻しなどを考えてよいかと思う。

第831図1の大型甕、2の坏、3・4の土鐘は、住居跡北東半、5の滑石製白玉は、南隣近くの、いずれも覆土中から出土している。2の坏は、混入した遺物であろう。重複関係、住居形態、出土遺物から見て、平安時代前期末から中期初頭にかけての遺構と考えられる。

第344号住居跡 (第830・832図、第368・369表、図版203・229)

調査地点のほぼ中央、J3グリッドに位置する住居跡である。第350・355・356号住居跡を切っており、第343号住居跡、第1号柱穴に切られている。確認面は、灰黄褐色のローム層上面、第II a層に相当する褐色土層直下である。



第832図 第344号住居跡出土遺物

第368表 第344号住居跡出土遺物観察表 (1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (20.8) 底径 — 器高 [7.4]	口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ、指頭圧痕。胴部上位ヘラケズリ。内面—ヨコナデ、ヘラナデ。	石英・角閃石・白色粒 内外—橙色	口縁部～胴部上位破片

第369表 第344号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)・特徴	備考
2	脚付土器 脚部	長さ[7.9]、幅3.0、厚さ2.2。胎土：石英・黒色粒。色調：にぶい橙色。調整：ヘラズクリ。	脚部破片
3	土鉢	長さ6.0、幅1.4、厚さ1.5、重さ11.10g。胎土：石英・白色粒・黒色粒。色調：橙色。	一部欠損
4	土玉	長さ1.6、幅1.6、孔径0.5×0.5、厚さ2.6、重さ16.19g。胎土：雲母。色調：赤褐色。調整：ナデ。	完形
5	土玉	長さ1.1、幅1.1、孔径0.15×0.15、厚さ1.0、重さ1.13g。胎土：石英・雲母。色調：灰黄褐色。調整：ナデ。	完形

平面形は、かなり歪ではあるが、方形に近い形態と考えることができる。規模は、北東-南西方向で4.13m、北西-南東方向で4.50mである。北東-南西方向での中軸線方位はN-50°-Eである。床面には細かな凹凸が目立つが、明瞭に硬化している。壁高は、北東壁で30cm、南東壁で33cm、南西壁で15cm、北西壁で21cmである。北東壁から北西壁、南東壁の一部にかけて、幅24～40cm、深さ7～12cmの壁溝が巡らされている。

覆土は、第15～22層の8層で、やはりロームブロックを多量に、あるいは大量に含む第18・19・22層のような層が見られる。土師器片を主とする遺物が覆土中から出土している。重複関係、出土遺物から見て、奈良時代末から平安時代初頭頃の遺構と考えられる。

第345号住居跡(第833・834図、第370・371表、図版204・205・229)

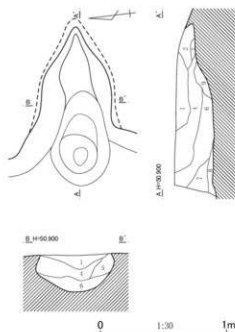
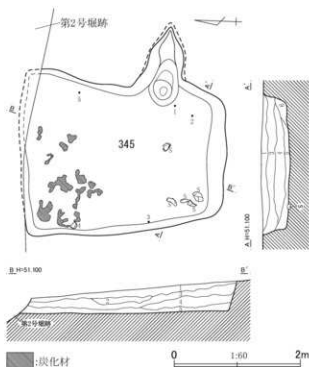
調査地点の中央、やや東寄り、K3グリッドに位置する住居跡である。第348号住居跡、第468号土坑を切っており、第2号堀跡に切られ、北東隅周辺を壊されている。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

平面形は、かなり歪で、北壁に対して対辺の南壁が短い台形に近い形態である。規模は、主軸方向で2.39m、副軸方向で3.27mである。ちなみに北壁長は推定で2.63m、南壁長は1.90mである。主軸方位はN-87°-Eである。床面は、カマド前から西壁中央にかけ帯状に硬化しており、凹凸が目立つようである。壁の立ち上がりはおおむね急峻で、壁高は、東壁で38cm、南壁で47cm、西壁で39cm、北壁で25～30cmである。

カマドは、台形状の住居跡の斜辺にあたる東壁の南東隅に寄った位置に付設されている。浅く掘りくぼめられた燃焼部と1段高くなっている船の軸のような形の煙道に連なる部分からなり、奥壁、側壁ともに中位がえぐり込むようにハンクしている。燃焼面のくぼみの端をカマド前端と見るなら、燃焼部の長さは133cm、中央での横幅は63cmである。燃焼面の両側の側壁は、明瞭に被熱赤化しているが、燃焼面自体の赤化は顕著ではない。カマド覆土は9層で、焼土を大量に含む第5・9層は、天井部や側壁の崩落土を含む層であろう。

住居跡の覆土は、灰黄褐色土、暗褐色土からなる6層に分けられた。住居跡を最終的に埋めている第1～3層、床面を一次的に覆う第5層は、いずれもロームブロックを多量に、あるいは大量に含む層であり、何らかの形で住居跡が人為的に埋められたことを示すと考えられる。

北西隅周辺から北壁にかけての、床面よりわずかに浮いた高さで、炭化材片が分散した状態で出土している。第834図1の羽釜は、カマド焚口手前、2の小型台付甕は、南東隅近くの、いずれも覆土



第345号住居跡土層説明

- 第1層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、焼土・炭化物を微量含む。第1~5層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性が強い。
- 第2層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第3層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を大量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。
- 第4層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、焼土を微量含む。
- 第5層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を大量に、焼土・炭化物を微量含む。
- 第6層: 暗褐色土。ロームブロック(5~50mm)を少量、ローム粒・焼土を微量含む。

第345号住居跡カマド土層説明

- 第1層: 褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、焼土・炭化物を微量含む。第1~4・6~7層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第2層: 暗褐色土。焼土・ローム粒を少量含む。しまっており、粘性がやや強い。
- 第3層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第4層: 褐色土。ローム粒・白色軽石を多量に、焼土を微量含む。
- 第5層: 黒褐色土。焼土を大量に、ローム粒を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第6層: 褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、ローム粒・焼土・炭化物を微量含む。
- 第7層: 褐色土。ローム粒を大量に、ロームブロック(5~10mm)を少量、焼土・炭化物を微量含む。
- 第8層: 黒褐色土。灰層。焼土・炭化物を微量含む。粘性やや強い。
- 第9層: 灰黄褐色土。焼土を大量に、ローム粒を少量、炭化物を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第833図 第345号住居跡平面・断面図

第370表 第345号住居跡出土土物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 羽 釜	口径 (18.5) 底径 — 器高 [7.5]	口縁部は内傾する。跨は断面三角形を呈する。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。跨貼付。内面—ロクロナデ。	石英・チャート・角閃石 内外—橙色	口縁部破片 酸化塩焼成
2	小型 台付壺	口径 — 底径 — 器高 [8.2]	胴部は中位に膨らみをもつ。底径はハの字状に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—胴部ヘラケズリ。台部ロコナデ。内面—胴部ヘラナデ。台部ロコナデ。	石英・チャート・角閃石 外—にぶい褐色 内—明赤褐色	胴部下半~台部

第371表 第345号住居跡出土土物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
3	須恵器 坏	口径(10.3) 底径(4.0) 器高 3.4	平底。体部中位から口縁部にかけて外反して開く。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。底部回転糸切り。内面-ロクロナデ。	雲母・石英・角閃石 内外-橙色	1/3残存 酸化塩焼成
4	須恵器 高台付 埴	口径 10.8 底径 6.3 器高 5.4	高台部は端部で強く外反する。体部は丸みをもつ。口縁部はやや肥厚する。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。底部回転糸切り。高台貼付時に周縁ナデ。内面-ロクロナデ。	チャート・角閃石 内外-橙色	3/4残存 酸化塩焼成
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
5	土錘	長さ4.1、幅2.7、厚さ2.4、重さ22.24g。	胎土：雲母・白色粒。色調：橙色。			一部欠損
6	土錘	長さ3.6、幅0.9、厚さ0.8、重さ3.07g。	胎土：白色粒。色調：褐灰色。			一部欠損
7	土錘	長さ3.4、幅0.8、厚さ0.8、重さ2.24g。	胎土：チャート。色調：黄褐色。			定形
8	土錘	長さ3.1、幅0.9、厚さ0.9、重さ2.12g。	胎土：雲母・白色粒。色調：にぎい黄褐色。			一部欠損

下層から出土している。3の須恵器坏、4の高台付埴は、西壁近く、5の土錘は、東壁近くの、上～中層から出土している。重複関係、出土遺物から見て、平安時代中期前半の遺構と考えられる。

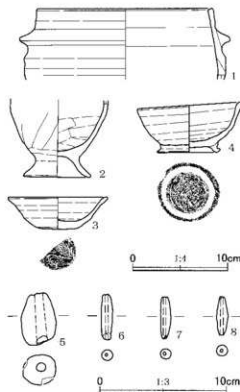
第346号住居跡 (第835・836図、第372・373表、 図版205・206・229・230)

調査地点の中央、やや北東寄り、K3グリッドに位置する住居跡である。第347・349号住居跡、第450号土坑、第2号堀跡に切れ、遺構の一部を壊されている。東側は谷部に連なり、床面がどこまで残存するか見極めきれなかった。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

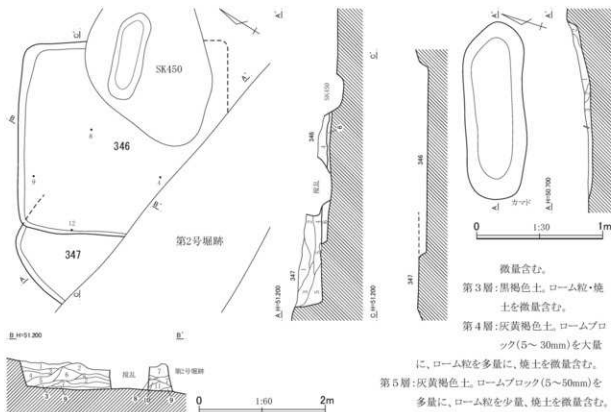
平面形は、方形に近い形態になろうか。一応カマドが北東壁の中央にあったとし、推定値を記すなら、規模は、主軸方向で3.10m、副軸方向で3.40mとなる。同じ推定を進めるなら、主軸方位はN-58°-Eあたりになりそうである。床面はほぼ平坦であり、明瞭に硬化しているが、南東半に関しては、谷地形の影響もあり、床面の範囲を確定し切れていない。壁の立ち上がりは、残存する3辺いずれも比較的急峻である。壁高は、北東壁で29cm、南西壁で10cm、北西壁で40cmである。

カマドは、北東壁に付設されているが、第450号土坑の坑底に燃焼部がころうじて残る状態であった。燃焼部の平面形は、長楕円形で、長径140cm、短径47cmである。燃焼面の被熱赤化は軽微で、かすかに赤みがさす程度である。カマド覆土は、厚さ5、6cmほどしか残っていない。第2層は、側壁や天井部の崩落土であろう。

住居跡の覆土は、A-A'断面では、第347号住居跡覆土と明瞭に分けられたが、B-B'断面では、土層自体が乱れていることもあり、第347号住居跡覆土との分離が困難であった。



第834図 第345号住居跡出土遺物



第346・347号住居跡 土層説明

〈A-A'断面〉

- 第1層：暗褐色土。ロームブロック(5~20mm)を多量に、焼土・白色軽石を微量含む。第1~5層は、第347号住居跡覆土。
 第2層：灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を多量に、ローム粒・焼土を少量含む。
 第3層：黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量に、ローム粒・白色軽石・焼土を微量含む。
 第4層：黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土・白色軽石を微量含む。
 第5層：灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、焼土を少量、炭化物・白色軽石を微量含む。
 第6層：灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を大量に、焼土を少量、炭化物・白色軽石を微量含む。第346号住居跡覆土。

〈B-B'断面〉

- 第1層：灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ロームを少量、焼土を微量含む。
 第2層：灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量に、焼土を

- 微量含む。
 第3層：黒褐色土。ローム粒・焼土を微量含む。
 第4層：灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を大量に、ローム粒を多量に、焼土を微量含む。
 第5層：灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。
 第6層：黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。
 第7層：灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。
 第8層：黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。
 第9層：灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。
 第10層：灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。
 第11層：にぶい黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。

第346号住居跡 カマド土層説明

- 第1層：灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を多量に含む。ややしまっており、粘性がやや強い。
 第2層：暗褐色土。焼土を多量に、ローム粒を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。
 第3層：暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

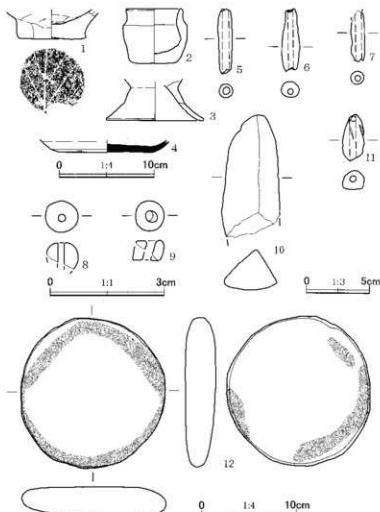
第835図 第346・347号住居跡平面・断面図

第372表 第346号住居跡出土土物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕?	口径 — 底径 6.7 器高 [3.2]	平底。粘土紐積み上げによる成形。	外面—胴部下端へラケズリの後ナゲ。底部木葉痕。内面—胴部下端~底部へラナゲ。	石英・白色粒・黒色粒	底部内外—褐色

第373表 第346号住居跡出土土物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
2	手裡ね土器	口径 (5.7) 底径 4.4 器高 5.8	口縁部は体部との境に稜をもち、外反気味に立ち上がる。体部は膨らみをもたない。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部砂底。内面-口縁部ヨコナデ。体部-底部ナデ。	石英・黒色粒 外-明赤褐色 内-にぶい赤褐色	口縁部-体部 1/2欠損
3	台付甕	口径 — 底径 10.1 器高 [4.2]	台部はハの字状に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-台部ヨコナデ。内面-台部ヨコナデ。	雲母・白色粒・黒色粒 外-明赤褐色 内-橙色	台部1/2残存 内面に赤色化した粘土附着
4	須恵器 坏	口径 — 底径 9.9 器高 [1.8]	平底。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。体部下端-底部回転ヘラケズリ。内面-ロクロナデ。	海面滑針・石英・内 外-灰色	底部 還元焼成
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
5	土鉢	長さ5.2, 幅1.1, 厚さ1.1, 重さ5.85g。	胎土: 石英・白色粒・黒色粒。色調: 明黄褐色。			完形
6	土鉢	長さ5.0, 幅1.5, 厚さ1.3, 重さ9.06g。	胎土: 石英・白色粒。色調: 明黄褐色。			一部欠損
7	土鉢	長さ4.1, 幅1.1, 厚さ1.0, 重さ3.92g。	胎土: 白色粒。色調: 明赤褐色。			端部欠損
8	土玉	長さ0.8, 幅0.8, 厚さ[0.7], 孔径0.2×0.15, 重さ0.45g。	胎土: 雲母。色調: 黒褐色。調整: ナデ。			1/2残存
9	石製品 白玉	長さ0.8, 幅0.8, 厚さ[0.5], 孔径0.3×0.3, 重さ0.30g。	石材: 滑石。調整: 表面面研磨。中央に穿孔1箇所。			1/2残存
10	磨石	長さ[9.7], 幅4.7, 厚さ3.1, 重さ166.46g。	石材: 安山岩。調整: 全面平滑。			端部欠損
11	土鉢	長さ3.7, 幅1.7, 厚さ1.5, 重さ8.34g。	胎土: 黒色粒。色調: 橙色。			一部欠損
12	磨石	長さ16.0, 幅15.4, 厚さ3.3, 重さ1290.90g。	石材: 安山岩。調整: 磨面は一面のみ。縁部付近にスガが付着。			完形
13	炭化種子	長さ1.9, 幅1.6, 厚さ1.4, 重さ1.40g。	バラ科植物(モモまたはウメ)の種子。			ほぼ完形 写真のみ



第386図 第346号住居跡出土土物

4の須恵器坏底部片は、第2号堀跡との重複部分の直ぐ脇の床面よりやや浮いた位置から、13のモモあるいはウメの種は、4のそばの床面直上から出土している。8の土玉、9の滑石製白玉、12の磨石は、住居跡東半の覆土中から出土している。出土土物の中には、時期の新しい土器が見られるが、古墳時代後期中葉前後の第450号土坑に切られているという重複関係を重視するなら、古墳時代後期中葉以前の遺構である可能性が考えられる。

第347号住居跡(第835図、図版205)

調査地点の中央、やや北東寄り、K3グリッドに位置する住居跡である。第346号住居跡を切っており、第2号堀跡に切れ、遺構の

D地点

大半が失われている。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

規模は、南北方向での現存長が1.34m、東西方向では、B-B'断面での現存長が3.07mである。床面は、ほぼ平坦で明瞭に硬化している。西壁は、比較的急峻に立ち上がり、壁高は43cmである。

B-B'断面では、第7～11層の5層が本住居跡の覆土であろうか。いずれもロームブロックを多量に含む層であり、人為的に流入、投棄された土によって埋め戻されたと見てよいようである。重複関係から見て、古墳時代後期中葉以降の遺構と考えられる。

第348号住居跡 (第837～839図、第374表、図版206・207・230)

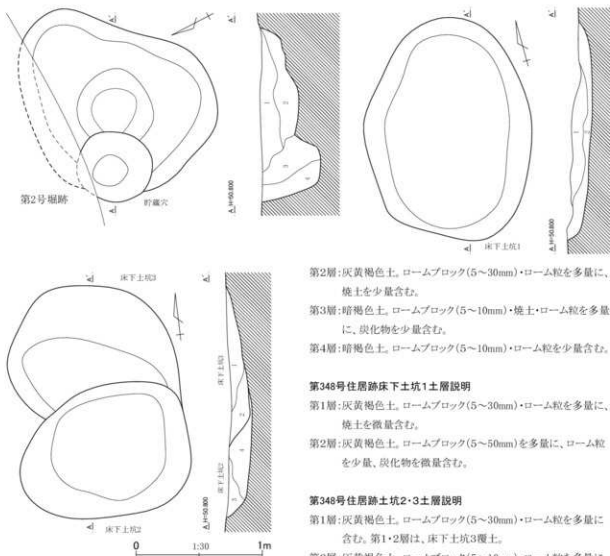
調査地点のほぼ中央、J3・4、K3グリッドに位置する住居跡である。第349・351・353・354号住居跡、第468・469号土坑を切っており、第342・345号住居跡、第467号土坑、第2号堀跡に切れ、遺構の北側部分を壊されている。確認面は、灰黄褐色のローム層上面、あるいは第II a層に相当する褐色土層直下である。



第837図 第348号住居跡平面・断面図(1)

平面形は、南西壁に比し、対辺の北東壁がやや長い長方形である。カマドがあったとすれば、北東壁以外考えられないであろう。よって北東-南西方向を主軸とするなら、規模は、主軸方向での推定値で5.53m、副軸方向で4.26m、主軸方位はN-39°-Eである。床面はほぼ平坦で、硬化している。壁の立ち上がり具合は、全体的にかなり急である。壁高は、北東壁で30cm、南東壁で23cm、南西壁で34cm、北西壁で24cmである。北西壁から北東壁の極一部にかけて、幅20~34cm、深さ6、7cmの壁溝が設けられている。

床面で貯蔵穴を1基、床面下で床下土坑を3基検出したが、床下土坑に関しては、土層断面で床下にある土坑であることを確認しえたのは、床下土坑1とした土坑のみであった。3基に関しては、床下土坑として記載するが、その種の土坑の中には、本住居跡に先行する土坑が含まれる可能性が残る



第348号住居跡貯蔵穴土層説明

第1層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量に、ローム・白色軽石・焼土を微量含む。第1~4層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土を少量含む。

第3層: 暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)・焼土・ローム粒を多量に、炭化物を少量含む。

第4層: 暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量含む。

第348号住居跡床下土坑1土層説明

第1層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。

第2層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を多量に、ローム粒を少量、炭化物を微量含む。

第348号住居跡土坑2・3土層説明

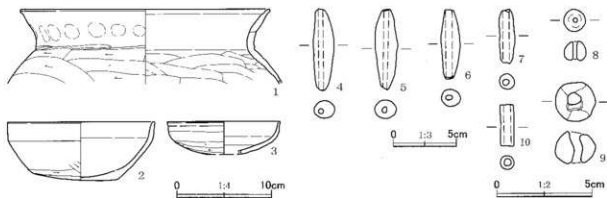
第1層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に含む。第1・2層は、床下土坑3覆土。

第2層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。

第3層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。第3・4層は、床下土坑2覆土。

第4層: 暗褐色土。ロームブロック(5~50mm)を大量に、ローム粒を多量に、炭化物を微量含む。

第838図 第348号住居跡平面・断面図(2)



第839図 第348号住居跡出土遺物

第374表 第348号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (26.4) 底径 — 器高 [7.9]	口縁部は外反する。胴部は張る。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ、指頭庄痕。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—橙色	口縁部～胴部上位1/4残存
2	坏	口径 (15.4) 底径 9.0 器高 6.2	丸みを帯びた平底。体部は深く、口縁部は直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部～底部不明瞭。	石英・白色粒・黒色粒 外—橙色 内—明赤褐色	1/3残存 内外面ともに磨耗
3	坏	口径 (11.9) 底径 — 器高 3.5	体部は内彎する。口縁部は直立し、上位でやや外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部上半ナデ。体部下半ヘラケズリ。内面—口縁部～体部上半ヨコナデ。体部下半ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 外—橙色 内—褐色	1/3残存 内外面ともに磨耗
No.	器種	法量(cm)・特徴			備考	
4	土鉢	長さ6.5, 幅1.7, 厚さ1.4, 重さ14.56g.	胎土: 白色粒・黒色粒。色調: にぶい橙色。			完形
5	土鉢	長さ6.4, 幅1.8, 厚さ1.5, 重さ13.90g.	胎土: 白色粒・黒色粒・褐色粒。色調: 明褐色。			完形
6	土鉢	長さ5.5, 幅1.5, 厚さ1.4, 重さ9.49g.	胎土: 白色粒・黒色粒。色調: にぶい黄褐色。			完形
7	土鉢	長さ4.3, 幅1.3, 厚さ1.2, 重さ5.37g.	胎土: 白色粒。色調: 褐色。			完形
8	土玉	長さ1.2, 幅1.15, 厚さ1.0, 孔径0.2×0.2, 重さ1.35g.	胎土: 白色粒。色調: 明褐色。調整: ナデ。			一部欠損
9	土玉	長さ2.1, 幅2.1, 厚さ1.7, 孔径0.6×0.7, 重さ7.03g.	胎土: 白色粒。色調: 褐色。調整: ナデ。			完形
10	石製品 管 玉	長さ2.2, 幅0.7, 穿孔幅0.4, 重さ2.02g.	石材: 滑石。調整: 丁寧な研磨。			完形

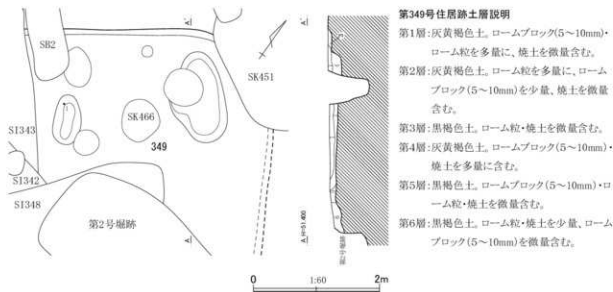
のかもしれない。

貯蔵穴は、東隅近くで検出した。上端での平面形は、卵形に近く、縦の長さは82cm、横幅は現存長で53cmである。中央が丸くくぼみ、西端がビット状に深くなっており、最深部での深さは46cmである。

床下土坑1は、床面のほぼ中央で検出した。平面形はやや不整な楕円形で、長径178cm、短径133cmである。丸みをもって掘り込まれており、最深部での深さは16cmである。床下土坑2は、床面の西隅寄りの位置で検出した。土層断面では、床下土坑3に先行するかに見える。平面形はかなり不整な楕円形で、長径140cm、短径105cm、最深部での深さは19cmである。床下土坑3も西隅寄りの位置で検出した。平面形はやや不整な円形で、最大径137cm、最深部での深さは17cmである。

住居跡を被覆する第1層を除く住居跡覆土は、11層に分けられた。第4～6・8・10・12層のようにローム粒やロームブロックを多量に含む層が目立ち、いわゆる自然流入土とは思われない堆積土である。

第839図1の甕は、住居跡のほぼ中央、2・3の坏は、西隅近くの覆土上層から出土している。4・



第840図 第349号住居跡平面・断面図

5の土鍾は、貯蔵穴近く、6の土鍾、8の土玉、10の滑石製管玉は、南隅近くから、9の土玉は、床下土坑2の上の位置の住居跡覆土中から出土している。重複関係、出土遺物から見て、奈良時代末から平安時代初頭にかけての遺構と考えられる。

第349号住居跡 (第840・841図、第375表、図版207・230)

調査地点の中央、やや北寄り、J3、K3グリッドに位置する住居跡である。第347・350号住居跡を切っており、第342・343・348号住居跡、第2号掘立柱建物跡、第451・466号土坑、第2号堀跡に切られ、遺構の南側、東側のかなりの範囲を壊されている。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

規模は、南北方向での現存長で3.55m、北壁の現存長が3.00mである。床面は、ほぼ平坦で、硬化している。東壁は確認できず、東側床面がどこまで続くのか確定できなかった。壁高は、北壁で13cmである。西寄り、北壁寄りの東側の2箇所、ピットあるいは土坑状の掘り込みを検出しているが、柱穴や貯蔵穴ではないようである。

覆土は、6層に分けられた。第1・2層のようにローム粒やロームブロックを多量に含む層が目立つようである。

重複関係から見て、奈良時代末から平安時代初頭にかけての時期前後の遺構である可能性が考えられる。



第841図 第349号住居跡出土遺物

第375表 第349号住居跡出土遺物観察表

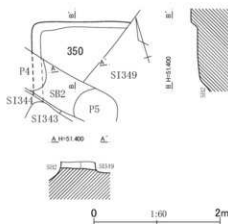
No.	器種	法量(cm)・特徴	備考
1	土鍾	長さ[6.0]、幅1.6、厚さ1.5、重さ10.72g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:褐色。	端部欠損

第350号住居跡 (第842・843図、第376表、図版207・230)

調査地点の中央、やや北寄り、J3グリッドに位置する住居跡である。第343・344・349号住居跡、第2号掘立建物跡に切られ、北隅とその周辺のわずかな範囲を残すのみである。確認面は、黄褐色～灰黄褐色のローム層上面である。

規模は、いずれも現存長になるが、南北方向で1.45m、東西方向で1.55mである。床面はほぼ平坦で硬化している。壁高は、北壁で11cm、西壁で12cmである。

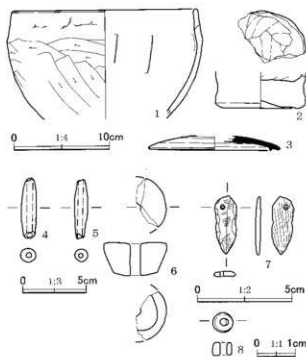
図示した遺物の多くは覆土中出土であるが、第843図7の剣型石製模造品は、床面近くから出土した。重複関係、出土遺物から見て、古墳時代終末期から奈良時代初頭にかけての遺構であろうか。



第350号住居跡土層説明

第1層: 黄褐色土、ロームブロック(5~10mm)を少量、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第842図 第350号住居跡平面・断面図



第843図 第350号住居跡出土遺物

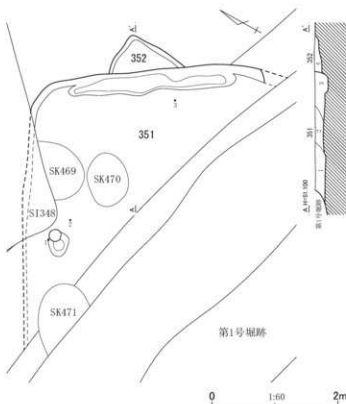
第376表 第350号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	大型鉢	口径(19.5) 底径 — 器高 [11.5]	体部は内嚙し、口縁部は内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部コ罗纳デ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—明赤褐色	口縁部～胴部 1/3残存
2	小型鉢	口径 — 底径 (9.6) 器高 [3.8]	底部は厚みをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—ナデ。内面—ナデ。	片岩・白色粒・黒色粒 外—黄褐色 内—明褐色	破片
3	須恵器蓋	口径(14.0) 底径 — 器高 [1.5]	天井部から内嚙気味に下がり、返りをもつ。ロク口成形。	外面—ロクロナデ。天井部回転ヘラケズリ。内面—ロクロナデ。	白色粒 外—暗灰色 内—灰色	1/8残存 還元焼成
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
4	土鉢	長さ4.7、幅1.2、厚さ1.1、重さ5.87g。	胎土: 白色粒・黒色粒。色調: 色。			完形
5	土鉢	長さ4.7、幅1.05、厚さ1.0、重さ4.14g。	胎土: 白色粒・黒色粒。色調: 色。			完形
6	土製紡錘車	上面径(5.0)、下面径(3.4)、孔径(0.8×0.8)、厚さ2.6、重さ20.60g。	胎土: 白色粒・黒色粒。色調: 色。			1/3残存
7	石製模造品	長さ3.1、幅1.2、厚さ0.3、孔径0.25×0.25、重さ1.67g。	石材: 滑石。調整: 剣形。表裏面研磨。			完形
8	石製品 白王	長さ0.55、幅0.55、厚さ0.35、孔径0.2×0.2、重さ0.17g。	石材: 滑石。調整: 表裏面研磨。中央に穿孔1箇所。			完形

第351号住居跡 (第844・845図、第377表、図版207・230)

調査地点の中央、やや南東寄り、J3・4、K3・4グリッドに位置する住居跡である。第352号住居跡を切っており、第348号住居跡、第469・470号土坑に切られ、遺構の一部が失われている。また、遺構の南側は、第1号堀跡に大きく壊されている。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

規模は、いずれも推定値になるが、北東-南西方向で4.30m、北西-南東方向で4.10mである。床



第351・352号住居跡土層説明

第1層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、焼土を微量含む。

第1~3層は、第351号住居跡の覆土で、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒・焼土を少量含む。

第3層: 黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第4層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を少量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。第4層は、第352号住居跡覆土。

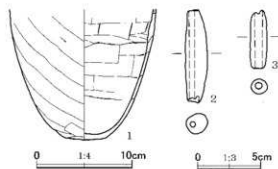
第844図 第351・352号住居跡平面・断面図

面は全体に硬化しているが、凹凸が目立つようである。壁高は、北東壁で26cmである。北東壁の一部には、幅32~38cm、深さ5、6cmの壁溝が設けられている。北西壁寄りでピットを1つ検出しているが、支柱穴などではないようである。

覆土は、3層に分けられた。第2・3層は、ロームブロックを多量に含む層であり、やはり自然流入土による緩慢な堆積過程とは異なる、埋め戻しなどを含む過程が考えられるようである。

第845図1の甕底部、2の土鍾は、住居跡西半の覆土上層から、3の土鍾は、北東側の壁溝脇の覆土下層から出土している。

重複関係、出土遺物から見て、奈良時代前半頃の遺構である可能性を考えておきたい。



第845図 第351号住居跡出土遺物

第377表 第351号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 — 底径 4.0 器高 [3.8]	胴部は膨らみをもたない。 丸底。粘土組織み上げによる成形。	外面-胴部~底部へラケズリ。 内面-胴部~底部へラナダ。	白色粒・黒色粒 外-明赤褐色 内-橙色	胴部下位~底部
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
2	土鍾	長さ7.4、幅1.3、厚さ1.6、重さ21.20g。	胎土: 白色粒・黒色粒。色調: 褐色。			ほぼ完形
3	土鍾	長さ4.6、幅1.3、厚さ1.2、重さ7.39g。	胎土: 白色粒・黒色粒。色調: 褐色。			完形

第352号住居跡 (第844図、図版207)

調査地点の中央、やや東寄り、K3・4グリッドに位置する住居跡である。第351号住居跡に切れ、北東隅の周辺のわずかな範囲が残るのみである。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

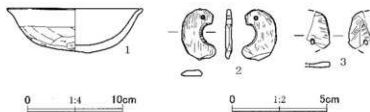
規模は、南北方向で1.02m、東西方向で0.71mである。床面は微妙な凹凸があるが、硬化している。壁高は、北・東壁ともに10cmである。土師器片を主とする遺物が少量出土しているのみである。重複関係から見て、奈良時代前半以前の遺構と考えられる。

第353号住居跡 (第846・847図、第378表、図版207・230)

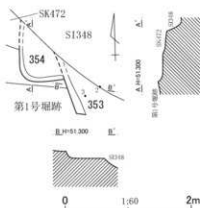
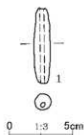
調査地点のほぼ中央、J3グリッドに位置する住居跡である。第354号住居跡を切っており、第348号住居跡、第1号堀跡に切れ、南西壁付近のほんのわずかな範囲しか残存しない。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

残存部分の規模は、北西-南東方向での推定長が1.10m、北東-南西方向での現存長は70cmである。床面は凸凹しているが、明瞭に硬化している。壁高は、南西壁で12cmである。

第847図1の坯は、南東側の本住居跡の範囲を確定し切れなかった部分から出土している。2・3の滑石製品は、床面からかなり浮いた位置から出土している。重複関係、出土遺物から見て、古墳時代終末期末から奈良時代初頭にかけての遺構である可能性を考えたい。



第847図 第353号住居跡出土遺物

第846図 第353・354号住居跡
平面・断面図第848図 第354号
住居跡出土遺物

第378表 第353号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	皿	口径 14.3 底径 — 器高 4.2	丸底。体部は内彎し、口縁部は外反する。粘土細積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部上位ヘラナデ。体部下位~底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒・褐色粒 内外-橙色	1/5残存
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
2	石製模造品	長さ2.7、幅1.8、厚さ0.3、孔径0.15×0.15、重さ2.50g。石材：滑石。調整：勾玉。表裏面に丁寧な研磨。				完形
3	石製模造品	長さ[2.0]、幅[1.2]、厚さ0.3、孔径0.15×0.15、重さ1.05g。石材：滑石。調整：表裏面に研磨。				破片

第379表 第354号住居跡出土遺物観察表

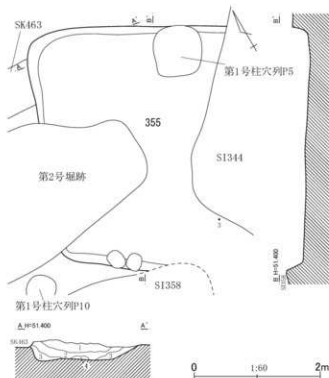
No.	器種	法量(cm)・特徴	備考
1	土師	長さ6.0、幅1.3、厚さ1.3、重さ11.30g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。	完形

第354号住居跡 (第846・848図、第379表、図版230)

調査地点のほぼ中央、J 3 グリッドに位置する住居跡である。第348・353号住居跡、第472号土坑に切られており、南西隅とその周辺の極わずかな範囲しか残存しない。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

規模は、どちらも現存値になるが、南北方向で96cm、東西方向で68cmである。

床面は若干凸凹しているが、明瞭に硬化している。壁高は、南壁で9cm、西壁で2cmである。重複関係から見て、古墳時代終末末から奈良時代初頭にかけての時期以前の遺構である可能性が考えられる。



第355号住居跡土層説明

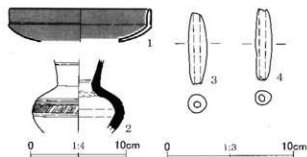
- 第1層: 黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・焼土を少量含む。第1~4層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第2層: 黒褐色土。ローム粒を多量に、ロームブロック(5~10mm)を少量、焼土を微量含む。
- 第3層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を多量に、ローム粒を微量含む。
- 第4層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を大量に含む。

第355号住居跡 (第849・850図、第380・381表、図版230)

調査地点の中央、やや北西寄り、J 3 グリッドに位置する住居跡である。第356号住居跡を切っており、第344号住居跡、第463号土坑、第1号柱穴列P 5、第2号堀跡に切れられ、遺構のかなりの範囲を壊されている。なお、第358号住居跡とも重複するが、重複部分の残存状態が悪く、新旧関係を確定することができなかった。確認面は、黄褐色~灰黄褐色のローム層上面である。

規模は、北東-南西方向で3.86m、北西-南東方向の残りのよい部分の現存長

第849図 第355号住居跡平面・断面図



第850図 第355号住居跡出土遺物

第380表 第355号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 (14.8) 底径 — 器高 [3.4]	体部は浅い。口縁部は体部との境に稜をもって直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部不明瞭。黒色処理。内面-口縁部ヨコナデ。体部不明瞭。黒色処理。	石英・白色粒 内外-黒褐色	口縁部~体部 1/5残存

第381表 第355号住居跡出土土物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
2	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 [7.9]	体部は中に膨らみをもつ。 口クロ成形。	外面—口ロナデ。頭部に横位沈線。体部は横位沈線による区画内に刺突文。内面—口ロナデ。頭部下位にナデ。	白色粒 内外—灰色	頭部～体部 1/4残存 還元焼成
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
3	土鐘	長さ5.7, 幅1.5, 厚さ1.5, 重さ12.33g。	胎土: 白色粒・黒色粒。色調: 褐色。			完形
4	土鐘	長さ5.7, 幅1.3, 厚さ1.2, 重さ8.73g。	胎土: 白色粒。色調: 明赤褐色。			完形

3.07mである。主軸は確定できないが、北東壁、南西壁に直交する軸の方位は、 $N-30^{\circ}-E$ 前後になる。床面は軽微ながら硬化している。壁高は、北東壁で25cm、南西壁37cm、北西壁で35cmである。

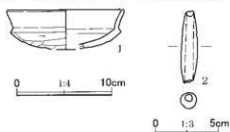
覆土は、黒褐色土、灰黄褐色土からなる4層に分けられた。第2～4層は、ローム粒あるいはロームブロックを多量に含む層である。

第850図2の須恵器甕は、北東壁沿いから、3の土鐘は、住居跡南半の第344号住居跡との重複部分の脇から、どちらも覆土中出土である。重複関係、出土土物から見て、古墳時代後期後葉後半の遺構であろうか。



第356号住居跡(第851・852図、第382表、図版230)

調査地点の中央、やや北西寄り、J3グリッドに位置する住居跡である。第344・355号住居跡、第2号掘立柱建物跡P3、P4に切られ、遺構の南側、東側を壊されている。確認面は、黄褐色～灰黄褐色のローム層上面である。



第851図 第356号住居跡出土土物

第356号住居跡土層説明

- 第1層: 黒褐色土。焼土を多量に、ローム粒を微量含む。
 第2層: 黒褐色土。ロームブロック(5～30mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。
 第3層: 暗褐色土。ローム粒を少量、ロームブロック(5～10mm)・焼土を微量含む。
 第4層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5～50mm)・ローム粒を大量に、焼土を微量含む。
 第5層: 黒褐色土。ロームブロック(5～50mm)を少量、ローム粒・焼土を微量含む。

第852図 第356号住居跡平面・断面図

第382表 第356号住居跡出土土物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 (12.2) 底径 — 器高 [4.1]	丸底。口縁部は体部との境に稜をもつて外反する。粘土紐積み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部—底部ヘラクスリ。内面—口縁部ヨコナデ。体部—底部ヘラナデ。	片岩・白色粒・黒色粒 外—にぶい赤褐色 内—黒色	口縁部～体部 1/5残存
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
2	土鐘	長さ5.7, 幅1.3, 厚さ1.3, 重さ8.30g。	胎土: 白色粒。色調: 褐灰色。			完形

規模は、どちらも現存長になるが、北東-南西方向で1.94m、北西-南東方向で3.03mである。主軸は確定できないが、北西壁はN-40°-Eを指している。床面には微妙な凹凸が見られ、全体的に硬化している。壁高は、北東壁で10cm、北西壁で17cmである。

覆土は、5層に分けられた。第1層は、焼土を多量に、第2・4層は、ローム粒、ロームブロックを多量に、あるいは大量に含む層である。重複関係、出土遺物から見て、古墳時代後期中葉の遺構である可能性が考えられる。

第357号住居跡 (第853図)

調査地点のほぼ中央、J3・4グリッドに位置する住居跡である。第359号住居跡を切っており、第473・474号土坑、第1号堀跡に切られ、わずかな範囲の壁と床面しか残存しない。南側、東側の床面に関しては、第1号堀跡のゆるやかに傾斜する壁に漸移してしまい、残存範囲を厳密に確定することができなかった。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

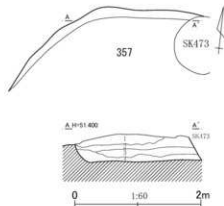
平面形は不明であるが、残存部分が北西隅付近にあるとすれば、かなり丸みのある形態になりそうである。規模は、北東-南西方向での現存長が3.30mである。床面には、凹凸が目立つが、北半の床面は、軽微ながらも硬化している。壁高は、北西壁で27cmである。

覆土は、灰黄褐色土からなる4層に分けられた。第1・3・4層は、ロームブロックを多量に、あるいは大量に含む、第2層は、ローム粒を多量に含む層であり、やはり緩慢に少しずつ流入した自然流入土とは異なるようである。重複関係から見て、平安時代中期以降の遺構と考えられる。

第358号住居跡 (第854～856図、第383表、図版207・208・230・231)

調査地点の中央、やや西寄り、I3、J3グリッドに位置する住居跡である。第360号住居跡を切っており、第1号堀跡に切られ、遺構の南半部分を壊されている。第359号住居跡と重複する。なお、第1号堀跡に壊されている南半部分の床面に関しては、第1号堀跡のゆるやかに傾斜する壁に漸次移行してしまい、残存範囲を確定し切れなかった。本住居跡に伴う可能性のあるピットの位置から見るなら、第480・481号土坑とも重複するようである。確認面は、灰黄褐色のローム層上面、あるいは第II a層に相当する褐灰色土層直下である。

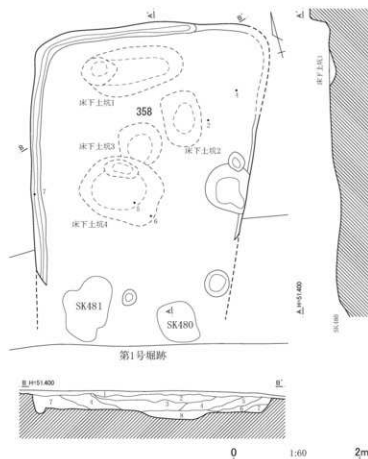
平面形は、かなり歪で台形気味ではあるが、長方形と見てよいであろう。規模は、南北方向での現存長が4.46m、東西方向の残りのよい部分で3.50mである。カマドが見られないため主軸を確定できないが、南北方向での中軸線方位はN-13°-Eである。床面は、明瞭に硬化している。壁高は、北壁で34cm、東壁で25cm、西壁で20cmである。



第357号住居跡土層説明

- 第1層: 灰黄褐色土、ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒を少量、白色軽石・焼土を微量含む。第1~4層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第2層: 灰黄褐色土、ローム粒を多量に、ロームブロック(5~50mm)を少量、焼土・白色軽石を微量含む。
- 第3層: 灰黄褐色土、ロームブロック(5~50mm)を多量に、ローム粒・白色軽石・焼土を微量含む。
- 第4層: 灰黄褐色土、ロームブロック(5~10mm)を大量に、焼土・炭化物を微量含む。

第853図 第357号住居跡平面・断面図



第358号住居跡土層説明

- 第1層：黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・焼土を微量含む。As-Bと思われるスコリア粒を少量含む。シャリシャリしている。ややしまっているが、粘性は、ほとんどない。標準土層第IIb層に相当する層。
- 第2層：暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)・焼土を少量、炭化物を微量含む。第2~7層は、いずれの層も、ややしまっており、また粘性がやや強い。
- 第3層：暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒・焼土・炭化物を微量含む。
- 第4層：黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、焼土を微量含む。
- 第5層：暗褐色土。焼土を少量、ロームブロック(5~30mm)・炭化物を微量含む。
- 第6層：黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、焼土・炭化物を微量含む。
- 第7層：黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒・焼土を微量含む。
- 第8層：暗褐色土。ローム粒を少量、ロームブロック(5~10mm)・焼土を微量含む。ややしまっており、粘性が強い。床下土坑1覆土。

第854図 第358号住居跡平面・断面図(1)

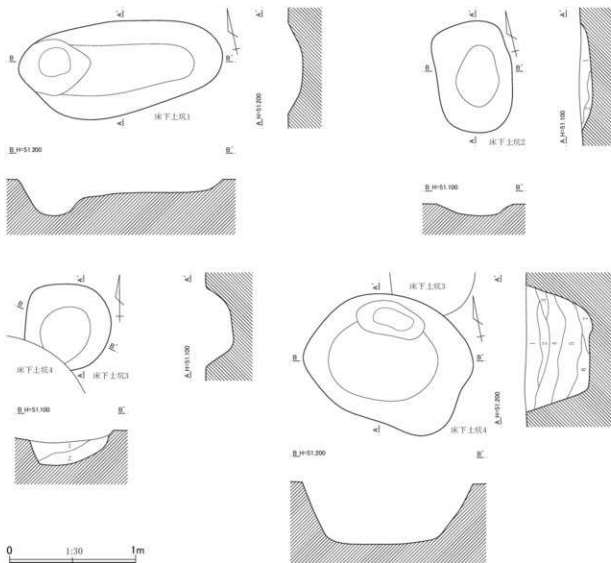
床面で、床下土坑と思われる土坑4基、浅い掘り込み1つ、ピットを3つ検出した。床下土坑に関しては、確実に床面下の土坑であることが土層断面で確認できたのは、床下土坑1とした土坑のみである。本住居跡に先行する土坑である可能性は残るとせざるをえない。

床下土坑1は、北壁近くで検出した。平面形は、長楕円形で、長径162cm、短径75cmである。縦の断面形は、西側に向かってゆるやかな傾斜をもつ船底形で、西側坑壁沿いにピット状の掘り込みが見られる。深さは、中央で11cm、ピット状の掘り込み部分で29cmである。

床下土坑2は、住居跡の中央北東寄りで見出した。平面形は、微妙に角張った楕円形で、長径89cm、短径59cmである。断面形は、ゆるやかな船底形で、深さは、10cmである。覆土の第1層には、ロームブロック・ローム粒が多量に含まれる。

床下土坑3は、住居跡のほぼ中央で見出した。床下土坑4との新旧関係は不明である。平面形は、やや不整な円形で、最大径は72cmである。断面形は、鍋底形で、最深部での深さは22cmである。覆土の第2層には、ロームブロックが多量に含まれる。

床下土坑4は、住居跡の中央やや南西寄りで見出した。平面形は、やや不整な長楕円形で、長径135cm、短径101cmである。断面形は、バケツ形で、北側坑壁沿いにピット状の掘り込みが見られる。最深部での深さは、53cmである。覆土の第2・4・5層には、ロームブロックが多量に、あるいは大量に含まれる。



第358号住居跡床下土坑2土層説明

第1層:暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層:暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第358号住居跡床下土坑3土層説明

第1層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を少量、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層:黒褐色土。ロームブロック(5~50mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第358号住居跡床下土坑4土層説明

第1層:黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。以下、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第3層:灰黄褐色土。ローム粒・焼土を微量含む。

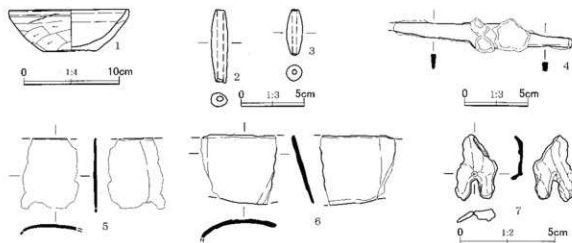
第4層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を大量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第5層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒・焼土を微量含む。

第6層:黒褐色土。ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第7層:暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)・焼土を微量含む。

第855図 第358号住居跡平面・断面図(2)



第856図 第358号住居跡出土遺物

第383表 第358号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	環	口径 (12.5) 底径 (5.4) 器高 4.4	平底。体部は深く、内縁気味に開く。口縁部は短く直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部へラケズリ。底部砂底。内面-口縁部ヨコナデ。体部～底部へラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 外-にぶい赤褐色 内-にぶい褐色	1/5残存 内面は磨耗
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
2	土錘	長さ6.8、幅1.3、厚さ1.1、重さ7.96g。	胎土：白色粒。色調：明黄褐色。			完形
3	土錘	長さ3.7、幅1.2、厚さ1.2、重さ4.96g。	胎土：白色粒。色調：にぶい褐色。			完形
4	鉄製品 刀子	長さ[14.3]、幅2.9、厚さ4.0、重さ35.37g。				刃部欠損
5	銅製品	長さ[3.7]、幅[3.1]、厚さ0.1、重さ4.03g。	薄い板状。			破片
6	銅製品	長さ3.7、幅[4.1]、厚さ0.2、重さ6.24g。	薄い板状。			破片
7	銅製品	長さ3.5、幅2.3、厚さ0.6、孔径0.1×0.1、重さ6.84g。				一部欠損

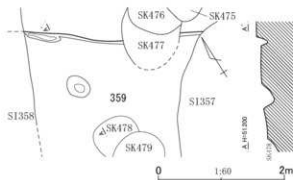
住居跡の覆土は、6層に分けられた。暗褐色土と黒褐色土が交互に流入した模様で、住居跡の最終的な埋没後に、第1層とした黒褐色土に被覆された過程が復元できる。

第856図2の土錘、4の鉄製刀子は、住居跡北東半の覆土中から出土している。5・6の銅製品は、床下土坑4の上面の床面とほぼ同じ高さから、7の銅製品は、第360号住居跡との重複部分の直ぐ脇から出土している。

重複関係、出土遺物から見て、平安時代前期末から中期初頭にかけての遺構であろうか。

第359号住居跡 (第857・858図、第384表、図版207・231)

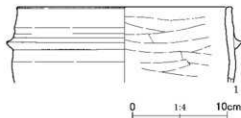
調査地点の中央、やや西寄り、J3グリッドに位置する住居跡である。第357号住居跡、第477～479号土坑、第1号堀跡に切られ、遺構の大半を壊されている。北東側の壁と比較的平坦な床面のわずかな範囲のみ検出した住居跡であり、残存状態が悪く、床面の正確な範囲を確定することができなかった。確認面は、灰黄



第857図 第359号住居跡平面・断面図

褐色のローム層上面である。

規模は、北西-南東方向での現存長で2.85mである。南西側の床面に関しては、第1号堀跡の側壁の傾斜のゆるい肩の部分と一緒に、正確な範囲をとらえることができなかった。床面はほぼ平坦であり、明瞭に硬化している。壁の立ち上がりは比較的急であり、壁高は、北西壁で10cmである。北東壁の北西端には、壁溝が設けられている。床面でピットを1つ検出したが、残存部分がわずかに過ぎ、用途を推定することができない。



第858図 第359号住居跡出土遺物

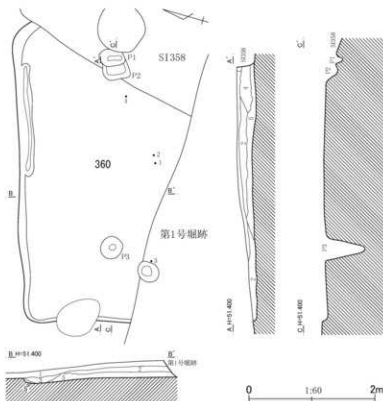
第858図1の羽釜は、覆土中出土の破片である。重複関係、出土遺物から見て、平安時代中期の遺構と考えられる。

第384表 第359号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須臾器 羽釜	口径 (22.5) 底径 — 器高 [8.0]	胴部は上位に丸みをもつ。口縁部は内傾する。罫は断面三角形を呈する。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。罫貼付。内面-ロクロナデの後ヘラナデ。	白色粒・小礫、 内外-褐色	口縁部へ胴部上位1/8残存 酸化焙焼成

第360号住居跡 (第859・860図、第385表、図版208・231)

調査地点の西半の中央、13グリッドに位置する住居跡である。第366・367号住居跡を切っており、第358号住居跡、第1号堀跡に切られ、遺構の南側、東側を大きく壊されている。確認面は、灰黄褐色



第859図 第360号住居跡平面・断面図

第360号住居跡土層説明

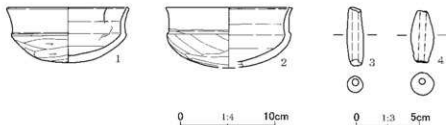
- 第1層：黒褐色土。ロームブロック(5～30mm)・焼土を微量。A-B?を少量含む。ややしまっている。標準土層第IIb層に相当する層。
- 第2層：灰黄褐色土。ローム粒を大量に、ロームブロック(5～30mm)を少量、焼土を微量含む。第2～5層は、いずれの層もややしまっており、粘性がやや強い。
- 第3層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)を多量に、ローム粒を少量含む。
- 第4層：黒褐色土。ロームブロック(5～10mm)を少量、焼土を微量含む。
- 第5層：灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)を大量に、ローム粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。

D地点

色のローム層上面、あるいは第II a層に相当する褐灰色土層直下である。

規模は、どちらも現存長になるが、東西方向で4.76m、南北方向の残りのよい部分で2.74mである。主軸方向を確定することができないが、北壁に平行する軸の方位は、 $N-71^{\circ}-E$ である。床面には微妙な凹凸が見られるが、全体としてはおおむね平坦であり、明瞭に硬化している。壁高は、西壁で6cm、北壁で18cmである。北壁の中央やや寄りに幅22~25cm、深さ4、5cmの壁溝が設けられている。土層断面図の第1層は、住居跡を覆う層であり、覆土そのものは、灰黄褐色土と黒褐色土からなる4層に分けられた。第2層は、ローム粒を大量に、第3・5層は、ロームブロックを多量に、あるいは大量に含む層であり、やはり埋め戻された土の可能性があるとよいであろう。

第860図1・2の坏、4の土鍾は、住居跡南東半の床面よりやや浮いた位置から出土している。3の土鍾は、第1号堀跡との境近くで出土しており、本遺構に伴わないのかもしれない。重複関係、出土遺物から見て、古墳時代後期中葉の遺構と考えられる。



第860図 第360号住居跡出土遺物

第385表 第360号住居跡出土遺物観察表

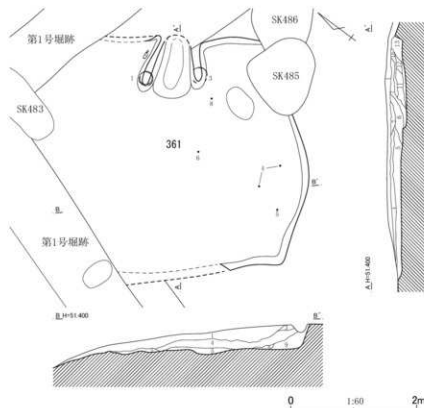
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 (12.6) 底径 — 器高 5.9	丸底。口縁部は体部との境に稜をもって外反する。口唇部に面をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部へラケズリ。内面一口縁部へ体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	雲母・白色粒・黒色粒 内外一明赤褐色	口縁部3/4欠損
2	坏	口径 (13.5) 底径 — 器高 [6.3]	口縁部は体部との境に稜をもって外反する。口唇部に面をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部へラケズリ。内面一口縁部へ体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外一褐色	1/5残存
No.	器種	法量(cm)・特徴			備考	
3	土鍾	長さ4.7、幅1.3、厚さ1.3、重さ7.33g。	胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい褐色。			完形
4	土鍾	長さ4.1、幅1.8、厚さ1.8、重さ12.40g。	胎土：白色粒・黒色粒。色調：褐色。			完形

第361号住居跡 (第861・862図、第386・387表、図版208・231)

調査地点の南西部の中央、やや西寄り、I 4グリッドに位置する住居跡である。第362・364号住居跡を切っており、第483・485・486号土坑、第1号堀跡に切られており、遺構の西側部分を大きく壊されている。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

平面形は、方形に近い形態になりそうであるが、南東壁は大きく膨らんでいる。規模は、主軸方向で3.85m、副軸方向の現存長は、4.40mである。主軸方位は、 $N-58^{\circ}-E$ である。南西壁に関しては、土層断面でのみ立ち上がりを確認した。床面には凹凸がかなり目立つ。床面は、顕著に硬化しているが、第1号堀跡に近づくにつれ、不明瞭になる。壁の立ち上がりは、比較的急であり、壁高は、北東壁で13cm、南東壁で38cm、南西壁で10cmである。

カマドは、北東壁に付設されている。楕円形の燃焼部の両脇に細長い袖を有する形態である。燃焼



標準土層第IIb層相当層か。

第2層: 黒褐色土。焼土・土器小片を多量に、ロームブロック(5~30mm)を少量、炭化物・ローム粒を微量含む。

第3層: 黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量に、焼土・ローム粒を微量含む。

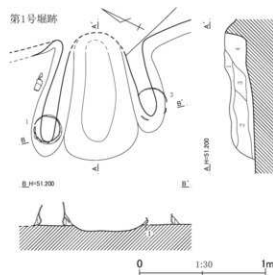
第4層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)・ローム粒を大量に、焼土を微量含む。

第5層: 灰黄褐色土。焼土を少量、ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を微量含む。

第6層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・焼土を少量、ローム粒を微量含む。

第7層: 黒褐色土。焼土を少量、ローム粒・炭化物を微量含む。

第8層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、焼土を微量含む。



第9層: 暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、焼土を少量、白色粘質土ブロック微量含む。

第10層: 灰黄褐色土。焼土を大量に、ロームブロック(5~30mm)を微量含む(天井崩壊土か?)。第10~13層は、カマド覆土。

第11層: 黒褐色土。焼土を大量に、ロームブロック(5~30mm)を微量、土器を大量に含む。

第12層: 黒褐色土。焼土を多量に、ロームブロック(5~10mm)を微量含む。

第13層: 黒褐色土。焼土を含み、ロームブロック(5~10mm)を微量含む。

第361号住居跡カマド土層説明

第1層: 灰黄褐色土。焼土を大量に、ロームブロック(5~30mm)を微量含む(天井崩壊土か?)。

第2層: 黒褐色土。焼土を大量に、ロームブロック(5~30mm)を微量、土器を大量に含む。

第3層: 黒褐色土。焼土を多量に、ロームブロック(5~10mm)を微量含む。

第4層: 黒褐色土。焼土含み、ロームブロック(5~10mm)微量含む。

第361号住居跡土層説明

第1層: 黒褐色土。焼土を少量、ローム粒を微量含む。第1~13層は、いずれの層も、やや湿っており、粘性がやや強い。

第861図 第361号住居跡平面・断面図

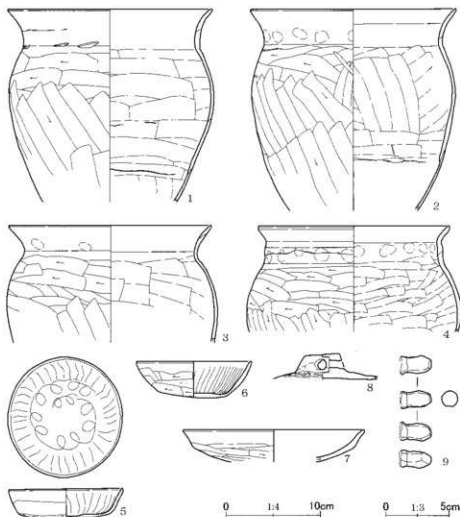
部の長さは101cm、中央での横幅は61cmである。側壁の一部が被熱赤化している以外は、全体に被熱した痕跡は軽微である。カマド覆土は、4層に分けられた。焼土を大量に、あるいは多量に含む第1・3層は、天井部や側壁の崩落土を含む層であろう。第862図1・3の甕の内、1は左袖甕、3は右袖甕である。

D地点

カマド覆土を除く住居跡の覆土は、第2～9層の8層に分けられた。焼土や土器小片を多量に含む第2層をはじめとして、ロームブロックあるいはローム粒を多量に、あるいは大量に含む第3・4・8・9層など、埋め戻された土らしき層が目立つことが特徴的である。

第862図4の甕、5・6の坏、8の蓋は、住居跡北東半の床面よりかなり浮いた位置から出土している。他には、土師器小片を主とする遺物が、カマド周りなどの覆土中より出土している。

重複関係、カマドの抽甕として用いられた甕から見て、奈良時代末から平安時代初頭にかけての遺構である可能性が考えられる。



第862図 第361号住居跡出土遺物

第386表 第361号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 21.6 底径 — 器高 [20.4]	口縁部は直立し、上半で外反する。胴部は上位に膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナダ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナダ。胴部ヘラナダ。	白色粒・黒色粒・褐色粒 内外—橙色	口縁部～胴部
2	甕	口径 (21.7) 底径 — 器高 [21.4]	口縁部は直立し、上半で外反する。胴部は上位に膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナダ、指頭圧痕。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナダ。胴部ヘラナダ。	白色粒・黒色粒・褐色粒 内外—にぶい橙色	口縁部～胴部 1/3残存
3	甕	口径 21.4 底径 — 器高 [12.4]	口縁部は強く外反する。胴部は上位に膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナダ、指頭圧痕。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナダ。胴部ヘラナダ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—橙色	口縁部～胴部 上位
4	甕	口径 (20.3) 底径 — 器高 [11.2]	口縁部はコの字状を呈する。口唇部は外側に面をもち、弱い凹線がめぐる。胴部は上位に膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナダ、指頭圧痕。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナダ、指頭圧痕。胴部ヘラナダ。	白色粒・黒色粒・褐色粒 内外—橙色 内—明赤褐色	口縁部～胴部 上位1/3残存
5	坏	口径 12.0 底径 9.5 器高 3.1	平底。底部から口縁部にかけて彎曲して開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナダ。体部ナダ。底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部放射状暗文。底部螺旋状暗文。	石英・角閃石・白色粒 内外—褐色	完形

第387表 第361号住居跡出土物観察表(2)

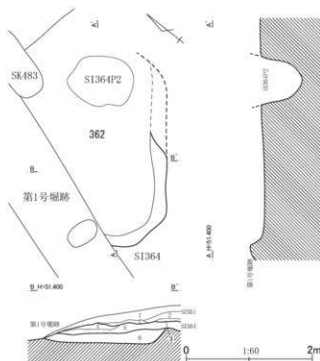
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
6	坏	口径(12.1) 底径(7.2) 器高 3.9	丸みを帯びた平底。体部から口縁部にかけて内彎気味に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ココナデ。体部へラケズリ。内面-口縁部へ体部放射状暗文。底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外一褐色	1/3残存
7	皿	口径(19.1) 底径 — 器高 [3.4]	浅い体部から口縁部外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ココナデ。体部へラケズリ。内面-口縁部へ体部ココナデ。	片岩・角閃石・白色粒 内外一明褐色	口縁部へ体部 1/4残存
8	蓋	口径 — 底径 — 器高 [2.8]	筒みは台形を呈する。中実で2孔が貫通する。孔径1.0×0.85cm。天井部は平坦。粘土組織み上げによる成形。	外面-掘み部ナゲ。天井部へラケズリ。内面-天井部へラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外一明赤褐色	掘み部へ天井部
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
9	把手	長さ2.5、幅1.3、厚さ1.2、重さ5.24g。	胎土：白色粒。色調：明赤褐色。調整：ナゲ。			把手部分

第362号住居跡(第863図、図版208)

調査地点の南西部の中央、やや西寄り、14グリッドに位置する住居跡である。第361・364号住居跡、第483号土坑に切られ、遺構の大半を壊されている。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

規模は、どちらも現存長になるが、北東-南西方向で2.20m、北西-南東方向で1.72mである。主軸方位は確定できないが、南東壁は、N-54°-E前後を指している。南東壁の残存部分の先にかすかな段差が見えたため破線で示したが、南東壁はさらに伸長する可能性があるようである。床面は凸凹しており、硬化はあまり顕著ではない。壁高は、南東壁で22cm、南西壁で23cmである。

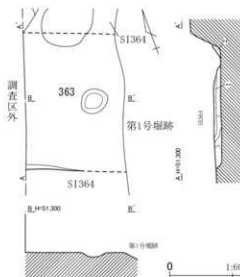
覆土は、土層断面図の第6層のみで、焼土やローム粒を大量に、ロームブロックを多量に含むにふい黄褐色土である。図化していないが、坏などの破片が、主に住居跡南半の床面よりやや浮いた位置



第863図 第362号住居跡平面・断面図

第362号住居跡土層説明

- 第1層: 黒褐色土。焼土・土器小片を多量に含み、ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。第1~3層は、第361号住居跡覆土。
- 第2層: 黒褐色土。焼土・土器小片を多量に、ロームブロック(5~30mm)を少量、炭化物・ローム粒を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第3層: にぶい黄褐色土。しまっており、粘性がやや強い。第361号住居跡貼床層の可能性もある。
- 第4層: 黒褐色土。焼土・ロームブロック(5~10mm)・炭化物を微量含む。第4・5層は、第364号住居跡覆土。
- 第5層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を多量に、焼土を少量、炭化物・ローム粒を微量含む。
- 第6層: にぶい黄褐色土。焼土・ローム粒を大量に、ロームブロックを多量に含む。しまっており、粘性が強い。本層は、第362号住居跡覆土。



第864図 第363号住居跡平面・断面図

第363号住居跡土層説明

第1層: 灰黄褐色土。ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を大量に、ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。しまっており、粘性が強い。

第3層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を大量に、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

から出土している。

重複関係から見て、奈良時代末から平安時代初頭にかけての時期以前の遺構と考えられる。

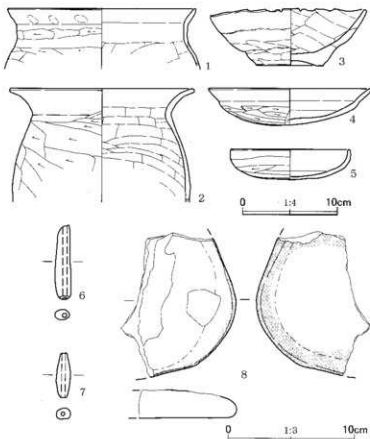
第363号住居跡 (第864・865図、第388表、図版231・232)

調査地点の南西部の西縁沿い、H3・4グリッドに位置する住居跡である。第364号住居跡が建てられる前にあった住居跡と思われるが、西側は調査範囲外であり、遺構の大半が失われている。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

壁が残存していたのは、南西壁のみであり、北東壁に相当する部分に関しては、土層断面でかろうじて確認しえたに過ぎない。規模は、どちらも現存長になるが、南

北方向で2.14m、東西方向で1.59mである。床面はほぼ平坦であり、硬化している。壁高は、南壁で10cmである。床面中央東寄り、ピットを一つ検出している。

覆土は3層に分けられた。第2・3層は、ロームブロックやローム粒を大量に含む土である。



第865図 第363号住居跡出土遺物

第388表 第363号住居跡出土土物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 19.9 底径 — 器高 [6.4]	口縁部は直立し、上位で外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ、上位に指頭瓦痕、中位にヘラケズリ。胴部上位ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内—橙色	口縁部～胴部上位1/2残存
2	甕	口径 (19.4) 底径 — 器高 [12.0]	口縁部は強く外反する。胴部はやや膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 外—ぶい橙色 内—橙色	口縁部～胴部上位1/3残存
3	鉢	口径 (16.4) 底径 7.1 器高 6.0	上げ底。体部から口縁部にかけて内彎して開く。口縁部は不整形。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部～体部ヘラナデ。底部ナデ。内面—口縁部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 外—橙色 内—ぶい橙色	1/3残存 外面磨耗
4	皿	口径 17.3 底径 — 器高 3.9	丸底。体部は大きく開く。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒・褐色粒 内外—橙色	1/3残存 外面磨耗
5	坏	口径 12.6 底径 — 器高 3.2	丸底。体部から口縁部にかけて内彎して立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外—ぶい橙色	口縁部一部欠損
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
6	土鍾	長さ5.9、幅1.25、厚さ0.8、重さ7.83g。	胎土：石英・白色粒・黒色粒。色調：ぶい褐色。			完形
7	土鍾	長さ3.5、幅1.15、厚さ0.85、重さ3.77g。	胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。			完形
8	砥石	長さ[11.45]、幅[9.2]、厚さ2.25、重さ318.31g。石材：安山岩。調整：表裏面ともに砥面として使用。側面は被熱により赤色化。				破片

第865図2の甕、4の皿、5の坏が本住居跡に伴う可能性のある遺物である。重複関係、出土遺物から見て、古墳時代終末期末から奈良時代初頭にかけての遺構と考えられる。

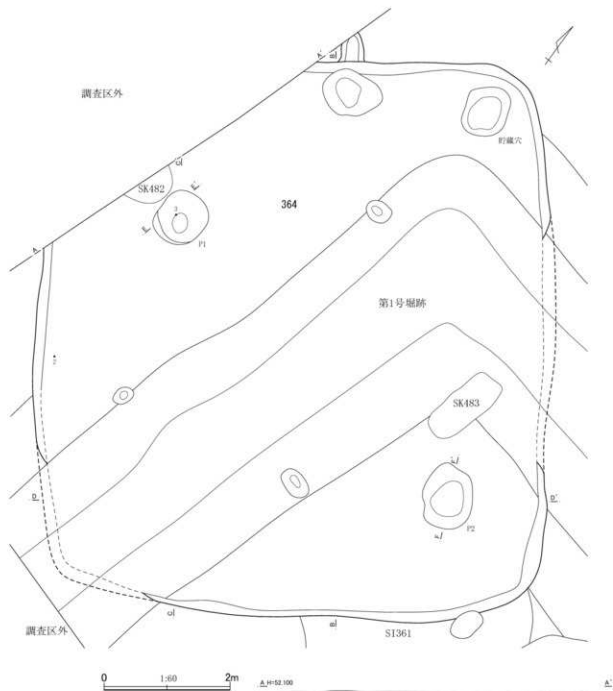
第364号住居跡（第866～869図、第389表、図版209・210・232）

調査地点の南西隅近くの西縁に沿い、H3・4、I3・4グリッドに位置する大型住居跡である。第362・363・365・368・370号住居跡を切っており、第361号住居跡、第482・483号土坑、第1号堀跡に切られている。とくに第1号堀跡は、本遺構の中央を抜けており、そのため本遺構の過半が壊されている。また、西隅周辺は調査範囲外である。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

平面形は、方形である。規模は、主軸方向で9.17m、副軸方向での推定長が8.23m、際立った大きさの大型住居跡である。主軸方位は、N-34°-Wである。床面には、細かな凹凸が見られるが、全体的に平坦であり、硬化も明瞭である。壁高は、北西壁で38cm、北東壁、南西壁で35cm、南東壁で20cmである。

P1、P2は、主柱穴であろう。平面形は、いずれもやや不整形な円形、あるいは楕円形で、深さはP1が83cm、P2が64cmである。P2の土層断面（第867図：右中央）では、柱根の痕跡かと思われる堆積土（同図：第1層）がみとめられる。北隅近くのピットは、貯蔵穴であろう。平面形は、歪んだ隅丸方形に近い形態で、南北方向での長さは88cm、東西方向での横幅は79cmである。底面は比較的平坦で、側壁はゆるやかに立ち上がる。深さは5cmである。

カマドは、北西壁の中央、やや北隅寄りの位置に設けられている。床面を掘りくぼめた不整形円形、あるいは歪な卵形の燃焼部と、煙道の痕跡と思われる壁に残された焼土が多量に詰まった浅い掘り込みが残存する。全長は133cm、燃焼部の掘り込み部分の長さは73cm、横幅は94cmである。煙道部分



第364号住居跡土層説明(1)

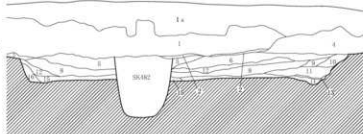
第1層:黒褐色土。焼土・土器小片を多量に、小礫を微量含む。粘性がやや強い。

第2層:にぶい黄褐色土。粘質土。粘性がやや強い。

第3層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、焼土を微量含む。粘性がやや強い。

第4層:灰黄褐色土。焼土・土器小片を多量に、礫(10~50mm)・炭化物を微量含む。粘性がやや強い。

第5層:黒褐色土。焼土を多量に、ロームブロック(5~30mm)を少量、ローム粒・炭化物を微量含む。第5~13層は、ややしまつて



おり、粘性がやや強い。第5層以下は、住居跡覆土。

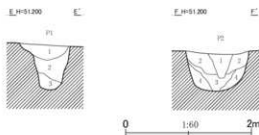
第6層:暗褐色土。焼土を多量に、ロームブロック(5~30mm)・白色軽石を少量、焼土・炭化物を微量含む。

第866図 第364号住居跡平面・断面図(1)



第364号住居跡土層説明(2)

- 第7層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を大量に、焼土・炭化物を微量含む。
- 第8層: 暗褐色土。焼土を多量に、白色軽石・ロームブロック(5~30mm)・炭化物を微量含む。
- 第9層: 暗褐色土。焼土・ローム粒・炭化物を微量含む。
- 第10層: 暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)・焼土を少量、炭化物・白色軽石を微量含む。
- 第11層: にぶい黄褐色土。焼土を多量に、ロームブロック(5~50mm)・白色軽石・炭化物を微量含む。
- 第12層: 黒褐色土。ローム粒・焼土・炭化物を微量含む。
- 第13層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量に、焼土・炭化物を微量含む。
- 第14層: 褐色土。焼土を大量に、ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量、炭化物を微量含む。しまっており、粘性が強い。
- 第15層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)・ローム粒を大量に、焼土・炭化物を微量含む。しまっており、粘性がやや強い。
- 第16層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、白色軽石・焼土・炭化物を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第17層: 暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、焼土を少量、白色粘質土ブロックを微量含む。
- 第18層: 黒褐色土。焼土・ロームブロック(5~10mm)・炭化物を微量含む。



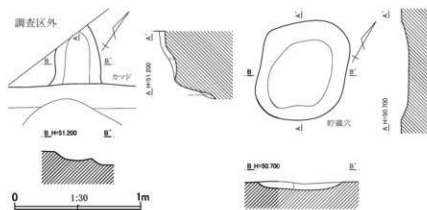
第364号住居跡P1土層説明

- 第1層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を大量に含む。第1~3層は、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第2層: 灰黄褐色土。ロームブロック・黒褐色土ブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。
- 第3層: 暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を大量に含む。

第364号住居跡P2土層説明

- 第1層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)・焼土を多量に、炭化物を微量含む。第1~4層は、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第2層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)・焼土を多量に、炭化物を微量含む。
- 第3層: 灰黄褐色土。ローム粒を大量に、ロームブロック(5~30mm)を多量に、焼土を微量含む。
- 第4層: 灰黄褐色土。ローム粒・ロームブロック(5~30mm)を多量に含む。

第867図 第364号住居跡平面・断面図(2)



第868図 第364号住居跡平面・断面図(3)

第364号住居跡カマド土層説明

第1層：黒褐色土。焼土・ロームブロック(5~10mm)を多量に含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層：黒褐色土。焼土を大量に含む。ややしまっており、粘性がやや強い。煙道覆土。

第364号住居跡貯蔵穴土層説明

第1層：灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第389表 第364号住居跡出土土物観察表

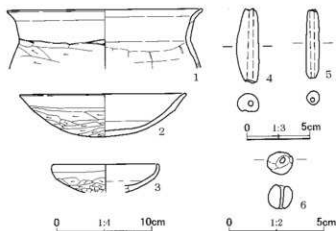
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径(20.5) 底径 — 器高[6.3]	口縁部は直立し、上位で強く外反する。胴部は膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部コナダ。胴部上位ヘラケズリ。内面-口縁部コナダ。胴部上位ヘラナダ。	白色粒・黒色粒 外-にぶい赤褐色	口縁部-胴部上位1/4残存
2	皿	口径 17.5 底径 — 器高 4.6	丸底。体部は大きく開く。口縁部は外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部コナダ。体部-底部ヘラケズリ。内面-口縁部~体部コナダ。底部ヘラナダ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内-橙色	完形
3	坏	口径(11.1) 底径 — 器高[3.0]	浅く彎曲する体部から、口縁部は内彎気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部コナダ。体部ヘラケズリ。内面-口縁部コナダ。体部ヘラナダ。	白色粒・黒色粒 内外-橙色	口縁部~体部1/4残存
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
4	土鉢	長さ5.9, 幅1.7, 厚さ1.4, 重さ15.62g.	胎土：石英・白色粒・黒色粒。色調：橙色。			完形
5	土鉢	長さ5.5, 幅1.0, 厚さ1.1, 重さ6.87g.	胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。			完形
6	土玉	長さ1.3, 幅1.3, 孔径0.3×0.2, 厚さ1.3, 重さ2.19g.	胎土：白色粒。色調：明赤褐色。調整：ナダ。			完形

の長さは46cm、横幅は36cmである。燃焼部の底面、側壁には、顕著な被熱の痕跡が見られないが、煙道の底面、側壁には、被熱赤化の痕跡が明瞭にみとめられる。カマド覆土は、燃焼部の覆土の第1層と煙道の覆土の第2層に分けられた。どちらの層も焼土を多量に含むことから見て、天井部や側壁の崩落土を主とする層であろう。

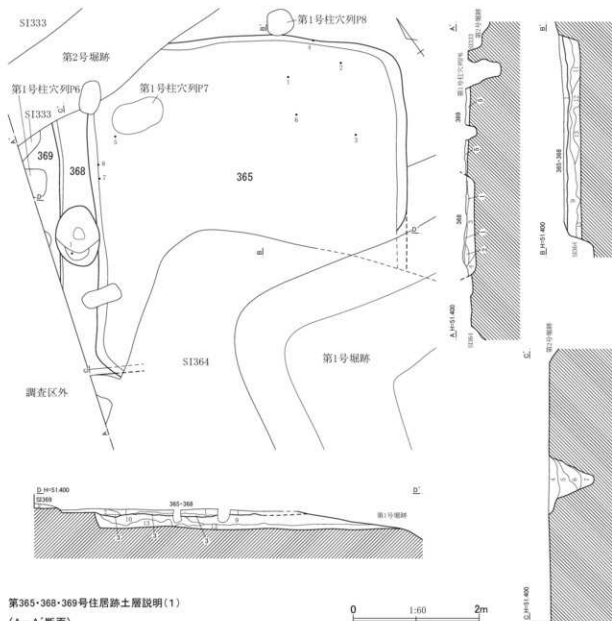
覆土は、第5~18層の14層で、焼土を多量に含む第5・6・8・11・14層、ロームブロックやローム粒を多量

に、あるいは大量に含む第7・13・15~17層と、いわば人為的に流入、投棄された層が目立ち、全体的に埋め戻された土であると見てよいかと思う。

第869図2の皿は、南西壁中央の覆土下層から出土している。3の坏の破片は、P1上の覆土中出



第869図 第364号住居跡出土土物



第365・368・369号住居跡土層説明(1)

〈A-A'断面〉

- 第1層:黒褐色土。砂質のロームをラミナ状に含む。第1~4層は、第368号住居跡覆土。なお、第1~5層は、いずれもやや湿っており、粘性がやや強い。
- 第2層:暗褐色土。焼土を大量に、ローム粒・炭化物を微量含む。
- 第3層:黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量、焼土を少量、炭化物を微量含む。
- 第4層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、焼土・炭化物を微量含む。
- 第5層:暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、焼土・炭化物を微量含む。第5層は、第369号住居跡覆土。

〈B-B'~D-D'断面〉

- 第1層:黒褐色土。焼土を多量に、ロームブロック(5~50mm)を少量含む。第1~7層は、第368号住居跡覆土。

- 第2層:暗褐色土。焼土を大量に、ロームブロック(5~10mm)を少量、ローム粒を多量に含む。
- 第3層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。湿っており、粘性がやや強い。第368号住居跡貼床層の可能性ある。
- 第4層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・焼土・ローム粒を多量に、炭化物を微量含む。第1~4層は、第368号住居跡P1覆土で、いずれの層も、やや湿っており、粘性がやや強い。
- 第5層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。
- 第6層:褐色土。ロームブロック(5~50mm)・ローム粒を大量に、焼土・炭化物を微量含む。

第870図 第365・368・369号住居跡平面・断面図(1)

D地点

第365・368・369号住居跡土層説明(2)

第7層:褐色土。ローム粒を大量に、ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を少量含む。

第8層:暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量、焼土・炭化物を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。第369号住居跡覆土。

第9層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を大量に、ローム粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。しまっており、粘性が強い。土器を埋めた土。第9~13層は、第365号住居跡覆土。

第10層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、焼土を少量、炭化物を微量含む。

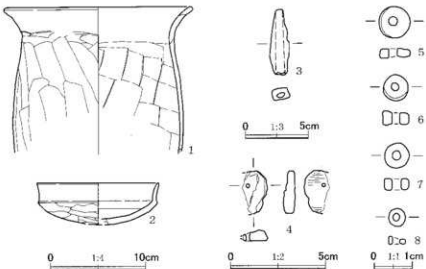
第11層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~100mm)を多量に、焼土・炭化物を微量含む。

第12層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。

第13層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~100mm)を大量に、ローム粒を多量に、焼土を少量含む。しまっており、粘性がやや強い。

第871図 第365・368・369号住居跡平面・断面図(2)

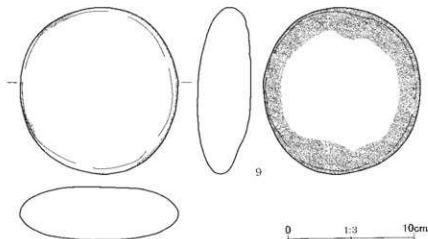
土である。1の號は、残存率の低い破片であり、混入と見てよいようである。重複関係、出土遺物から見て、古墳時代終末期末から奈良時代初頭にかけての遺構と考えられる。



第365号住居跡(第870~872図、第390・391表、図版210・232)

調査地点の西縁近くのほぼ中央、H3、I3グリッドに位置する住居跡である。第366・368号住居跡を切っており、第364号住居跡、第1号堀跡、第2号堀跡、第1号柱穴列P7、P8に切られている。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

平面形は、方形と見てよ



第872図 第365号住居跡出土遺物

第390表 第365号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径(19.7) 底径 — 器高 [15.6]	口縁部は外反する。胴部は膨らみをもたない。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部コナデ。胴部上位-ハラケズリ。内面-口縁部コナデ。胴部上位-ハラナデ。	片岩・石英・白色粒 内外-褐色	口縁部~胴部上位1/4

第391表 第365号住居跡出土土物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
2	坏	口径(12.8) 底径 — 器高 [4.4]	丸底。口縁部は体部との境に弱い稜をもち、外反気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部へ底部へラクスリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部へ底部へラナデ。	石英・白色粒 内外一色	1/3残存
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
3	土鉢	長さ5.2、幅1.6、厚さ1.0、重さ7.14g。	胎土：白色粒。色調：褐色。			完形
4	石製模造品	長さ2.25、幅1.35、厚さ0.55、孔径0.2×0.2、重さ2.33g。	石材：滑石。調整：裏面研磨。			完形
5	石製品 白 玉	長さ0.85、幅0.85、厚さ0.25、孔径0.2×0.2、重さ0.26g。	石材：滑石。調整：表裏面研磨。中央に穿孔1箇所。			完形
6	石製品 白 玉	長さ0.7、幅0.7、厚さ0.4、孔径0.2×0.2、重さ0.25g。	石材：滑石。調整：表裏面研磨。中央に穿孔1箇所。			完形
7	石製品 白 玉	長さ0.65、幅0.65、厚さ0.3、孔径0.2×0.2、重さ0.20g。	石材：滑石。調整：表裏面研磨。中央に穿孔1箇所。			完形
8	石製品 白 玉	長さ0.45、幅0.45、厚さ0.2、孔径0.2×0.2、重さ0.08g。	石材：滑石。調整：表裏面研磨。中央に穿孔1箇所。			完形
9	磨石	長さ13.3、幅12.5、厚さ4.1、重さ867.26g。	石材：角閃石安山岩。調整：上面を磨面として使用。側面を中心に煤が付着。			完形

いであろう。規模は、北東-南西方向での残りのよい部分での長さが4.47m、北西-南東方向の中軸線上での長さは5.07mである。カマドがあったとすれば、南西壁か、南東壁かと思われ、南西壁にあったとすれば、主軸方位は、S-34°-Wとなる。床面は微妙な凹凸が所々見られるが、全体的にはおおむね平坦で、明瞭に硬化している。壁の残存する部分は限られるが、残存する壁は比較的急峻で、壁高は、北東壁で29cm、南東壁で21cm、北西壁で25cmである。

覆土は、第870・871図B-B'、D-D'断面の第9～13層の5層で、いずれの層もロームブロックやローム粒を多量に、あるいは大量に含む層である。

第872図1の甕、2の坏、3の土鉢、4の滑石製模造品、6の滑石製白玉は、東隅周辺、5・7・8の滑石製白玉は、北西壁近くの、いずれも覆土上へ中層位の層準から出土している。出土土器には、時間幅が見られるが、古墳時代終末期前葉頃の遺構と考えておきたい。

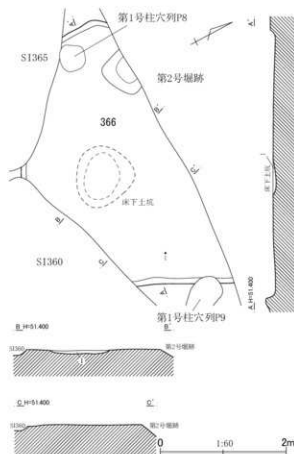
第366号住居跡(第873・874図、第392表、図版211・232)

調査地点の西縁寄りの中央、13グリッドに位置する住居跡である。第367号住居跡を切っており、第360・365号住居跡、第2号堀跡、第1号柱穴列P8・9に切られ、遺構の過半を壊されている。確認面は、黄褐色のローム層上面である。

平面形は不明であるが、残存する西隅らしき部分からすれば、かなり歪な形態になりそうである。規模は、北西-南東方向で3.82m、北東-南西方向での現存部分の長さは、2.65mである。床面には微妙な凹凸が見られるが、明瞭に硬化している。壁高は、東壁で29cm、西側の壁で10cmである。

カマドは、北西壁に設けられている。この部分は、壁全体が第2号堀跡により壊されており、やや角張った形の燃焼部のみ残ろうじて残存する。燃焼部の現存長は55cm、横幅は67cmである。燃焼面は、床面を浅く掘りくぼめ造作されている。燃焼面の被熱赤化は軽微である。カマド覆土は2層で、焼土を大量に、ロームブロックを多量に含む第1層は、天井部や側壁の崩落土を含む層であろう。

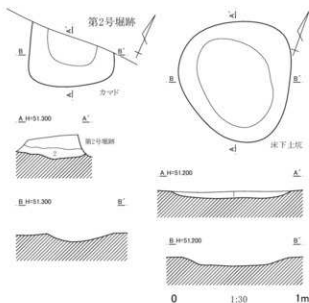
残存する床面のほぼ中央で検出した土坑を、床下土坑と考えた。平面形は、やや不整な円形で、深さは5cmである。



第366号住居跡土層説明

第1層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を大量に含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第873図 第366号住居跡平面・断面図



第366号住居跡カマド土層説明

第1層: 黒褐色土。焼土を大量に、ロームブロック(5~10mm)を多量に、ローム粒を少量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

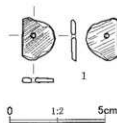
第366号住居跡床下土坑土層説明

住居跡土層断面の「第1層」と同じ。

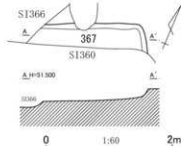
第392表 第366号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)・特徴	備考
1	石製模造品	長さ1.3、幅1.7、厚さ0.2、孔径0.2×0.2、重さ1.71g。石材: 滑石。調整: 全面に丁寧な研磨。	完形

第874図1の滑石製模造品は、東壁寄りの覆土中出土である。他には、土師器片を主とする遺物が、覆土中から少量出土している。重複関係から見て、古墳時代後期中葉以前の遺構と考えられる。



第874図 第366号住居跡出土遺物



第875図 第367号住居跡平面・断面図

第367号住居跡 (第875図)

調査地点の西縁寄りの中央、I 3グリッドに位置する住居跡である。第360・366号住居

跡、第1号柱穴列P9に切られ、残存するのは、北隅周辺の壁および床面のみである。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

規模は、いずれも現存長になるが、北東-南西方向での長さは1.90m、北西-南東方向での長さは45cmである。床面は凸凹しており、硬化も顕著ではない。壁高は、北西壁で12cm、北東壁で17cmである。土師器片を主とする遺物が、覆土中から少量出土している。重複関係から見て、古墳時代後期中葉以前の遺構と考えられる。

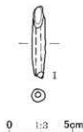
第368号住居跡 (第870・871・876図、第393表、図版211・232)

調査地点の西縁沿いのほぼ中央、H3、I3グリッドに位置する住居跡である。第365・369号住居跡を切っており、第364号住居跡、第2号堀跡に切られ、遺構の大半が失われている。なお、遺構の南西隅にあたる部分は、調査範囲外である。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

規模は、どちらも現存長になるが、北東-南西方向で4.20m、北西-南東方向で60cmである。床面はやや凸凹しているが、明瞭に硬化している。壁高は、北西壁で5cmである。

北西壁の南西に寄った位置でピットを一つ検出している。壁からはみでているようにも見えるが、一応本住居跡に伴うものとしておきたい。平面形は、やや不整な楕円形で、上部が広がり、下部がすぼまる形態である。最深部での深さは72cmである。

覆土は、第870・871図のA-A'断面の第1～4層、B-B'～D-D'断面の第1～7層で、焼土やロームブロック、ローム粒が多量に乱れ入る層が多く、埋め戻された可能性が高い。第876図1の土鏝は、ピット上の覆土中から出土している。重複関係から見て、古墳時代終末期前葉以降、奈良時代初頭以前の遺構と考えられる。



第876図 第368号住居跡出土遺物

第393表 第368号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)・特徴	備考
1	土鏝	長さ5.7、幅1.1、厚さ1.0、重さ5.78g。胎土：白色粒。色調：にぶい黄褐色。	完形

第369号住居跡 (第870・871図、図版211)

調査地点の西縁沿いのほぼ中央、H3グリッドに位置する住居跡である。第368号住居跡、第2号堀跡、第1号柱穴列P6に切られ、ほんのわずかな範囲の床面を残すのみである。また、遺構の西側部分は、調査範囲外である。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

規模は、どちらも現存長になるが、北東-南西方向で2.50m、北西-南東方向で55cmである。床面は明瞭に硬化している。覆土は、第870・871図のA-A'断面の第5層、D-D'断面の第8層で、ロームブロックを多量に含む土である。重複関係から見て、古墳時代終末期前葉以降、奈良時代初頭以前の遺構と考えられる。

第370号住居跡 (第877・878図、第394表、図版211・232)

調査地点の西縁沿いの南西隅近く、H4グリッドに位置する遺構である。第371号住居跡を切って

D地点

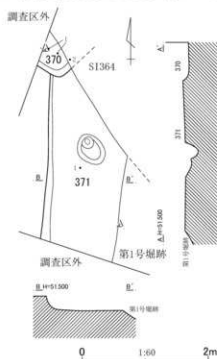
いる。第364号住居跡と重複するが、新旧関係を捉えることができなかった。後述するように、出土遺物から見るなら、第364号住居跡より新しい遺構であり、この場合本遺構は、住居跡ではなく、土坑などであった可能性も生じる。遺構の西側部分は調査範囲外であり、精査できたのは、南隅、あるいは南東隅と思われるほんのわずかな範囲である。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

残存部分の大きさは、北西-南東方向で52cmである。下面は凹凸が目立つが、硬化しているようである。壁高は13cmである。第878図1・2の甕は、破片化し混在した状態で、東側から西側に向かって、最上層から下面近くにかけて、流れ込んだような状態で出土している。重複関係、出土遺物から見て、平安時代前期前半の遺構と考えられる。

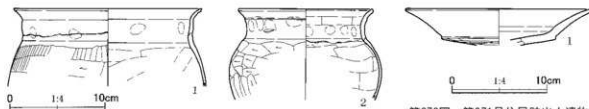
第371号住居跡 (第877・879図、第395表、図版211・232)

調査地点の西縁、南縁沿いの南西隅脇、H4グリッドに位置する住居跡である。第364・370号住居跡、第1号堀跡に切られている。確認面は、灰黄褐色のローム上面である。

規模は、どちらも現存長になるが、南北方向で2.80m、東西方向で1.25mである。床面はほぼ平坦で、硬化している。壁高は、西壁で19cmである。残存する床面のほぼ中央でピットをひとつ検出した。平面形は、若干歪な円形で、最深部での深さは20cmである。第879図1の高坏は、住居跡中央の覆土中から出土している。重複関係、出土遺物から見て、古墳時代中期中葉の遺構と考えられる。



第877図 第370・371号住居跡
平面・断面図



第878図 第370号住居跡出土遺物

第879図 第371号住居跡出土遺物

第394表 第370号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (14.1) 底径 — 器高 [9.6]	口縁部はコの字状を呈する。 胴部は上位に膨らみをもつ。 粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ、指頭圧痕。 胴部上半ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ、指頭圧痕。 胴部上半ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外-明褐色	口縁部-胴部上半1/4残存
2	甕	口径 (19.9) 底径 — 器高 [8.2]	口縁部はコの字状を呈する。 粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ、指頭圧痕。 胴部上位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ、指頭圧痕。 胴部上位ヘラナデ。	石英・白色粒 内外-橙色	口縁部-胴部上位1/3残存

第395表 第371号住居跡出土土物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	高坏	口径 (19.6) 底径 — 器高 [3.9]	丸底。口縁部は内彎する。口縁部は内彎気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。内面—口縁部ヨコナデ。坯底部ヘラナデ。	白色粒・褐色粒 内外—橙色	坯部1/4残存

第372号住居跡 (第880・881図、図版211・232)

調査地点の南西隅、H4グリッドに位置する住居跡である。遺構の西側、南側は調査範囲外であり、北東隅周辺のわずかな範囲の床面のみ残存する。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

規模は、どちらも現存長になるが、南北方向で1.50m、東西方向で66cmである。ちなみに東壁は、N-10°-Eあたりを指している。床面はほぼ平坦で、所々明瞭に硬化している。壁高は、北壁で5cm、東壁で10cmである。

覆土は2層で、一次堆積土である第2層は、ロームブロック・ローム粒を多量に含む土である。

第881図1は覆土中層位から出土した土錘である。

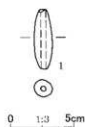
覆土などから見て、古墳時代以降の遺構である。



第880図 第372号住居跡平面・断面図

第372号住居跡土層説明

- 第1層: 黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒・焼土を微量含む。第1・2層ともに、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第2層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。



第881図 第372号住居跡出土土物

第396表 第372号住居跡出土土物観察表

No.	器種	法量(cm)・特徴	備考
1	土錘	長さ4.8、幅1.5、厚さ1.4、重さ9.13g。胎土: 白色粒。色調: にぶい橙色。	完形

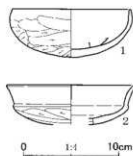
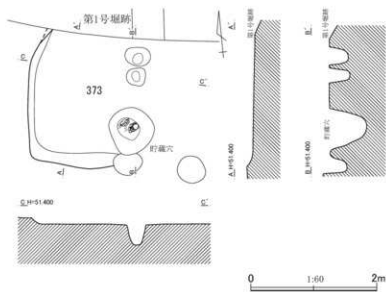
第373号住居跡 (第882・883図、第397表、図版211・232)

調査地点の南西部のほぼ中央、I4グリッドに位置する住居跡である。第1号堀跡に切られ、遺構の北側部分を壊されており、東側部分は、遺存状態が悪く、床面が立ち消えとなる。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

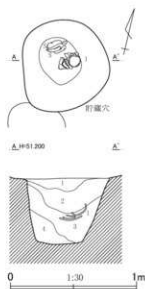
規模は、どちらも現存長になるが、南北方向で2.10m、東西方向で2.00mである。床面には細かな凹凸が目立ち、硬化は部分的である。壁高は、南壁で10cm、西壁で12cmである。

第397表 第373号住居跡出土土物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 12.4 底径 — 器高 5.1	丸底。体部は内彎する。口縁部は内彎気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部—底部ヘラケズリの後、体部上位をヘラナゲ。内面—口縁部ヨコナデ。体部—底部ヘラナゲ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外—橙色	口縁部~体部1/4欠損
2	坏	口径 (13.5) 底径 — 器高 [4.2]	口縁部は体部との境に稜をもって外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部~体部ヨコナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—橙色	口縁部~体部1/4残存



第883図 第373号
住居跡出土遺物



第882図 第373号住居跡平面・断面図

第373号住居跡貯蔵穴土層説明

- 第1層: 灰黄褐色土、ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。第1~4層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第2層: 灰黄褐色土、ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。
- 第3層: 黒褐色土、ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を微量含む。
- 第4層: 灰黄褐色土、ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を多量に含む。

位置的に問題がないではないが、南壁沿いで検出したビットを、貯蔵穴と考えた。平面形は、やや不整な円形で、最大径76cm、深さは52cmである。覆土の中層から、第883図1の坏や甕破片、編物石かと思われる長楕円礫が3点出土している。他に床面でビットを2つ検出している。

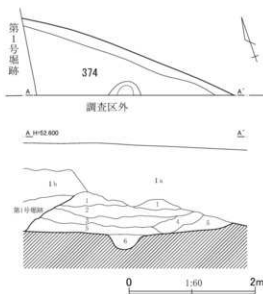
他には、2の坏破片などの遺物が覆土中より少量出土しているのみである。重複関係、出土遺物から見て、古墳時代終末期後葉頃の遺構と考えられる。

第374号住居跡 (第884図、図版211)

調査地点の南縁沿いの西寄り、I 4 グリッドに位置する住居跡である。第375・377号住居跡を切っており、第1号堀跡に切られている。遺構の南側部分は、調査範囲外である。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

規模は、どちらも現存長になるが、北西-南東方向で3.55m、北東-南西方向1.14mである。北東壁は、N-50°-Wを指している。床面はおおむね平坦で、硬化は軽微である。壁高は、北東壁で12cmである。調査区界の床面でビットを検出した。平面形は、円形ないしは楕円形で、深さは25cmである。

ビット覆土を除く住居跡の覆土は、5層に分けられた。壁際にロームブロック・ローム粒を多量に含む第5層が一次的に堆積し、その後漸次暗褐色土、黒褐色土が堆積した模様である。土師器片を主



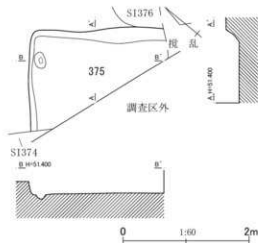
第884図 第374号住居跡平面・断面図

とする遺物が覆土中より少量出土しているのみである。重複関係から見て、古墳時代中期末葉以降の遺構と考えられる。

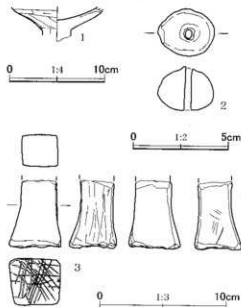
第375号住居跡（第885・886図、図版232）

調査地点の南縁沿いの西寄り、14・5グリッドに位置する住居跡である。第374号住居跡に切られ、第376・377号住居跡を切っている。遺構の南側部分は、調査範囲外であり、東側は攪乱により壊されており、残存するのは、北隅と北西壁、北東壁の一部に囲まれたわずかな範囲である。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

規模は、どちらも現存長になるが、北西-南東方向で2.15m、北東-南西方向で1.56mである。北東-南西方向での中軸線は、N-47°-Eを指す。床面には細かな凹凸が見られ、硬化も



第885図 第375号住居跡平面・断面図



第886図 第375号住居跡出土遺物

第374号住居跡土層説明

第1層：黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・焼土・炭化物を微量含む。第1~6層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層：暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)・小礫を少量、焼土を微量含む。

第3層：暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。

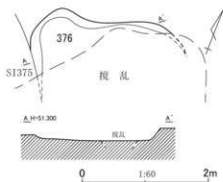
第4層：黒褐色土。ローム粒を多量に、焼土を少量含む。

第5層：暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。

第6層：灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を少量、ローム粒・焼土を微量含む。

第398表 第375号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	高坏	口径 — 底径 — 器高 [3.7]	坏部と口縁部との境に稜をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—坏部ヘラケズリ。脚部ヘラナゲ。内面—坏部ヘラナゲ。	白色粒・黒色粒 外—明赤褐色 内—赤色	坏部一部残存
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
2	土玉	長さ2.5、幅3.0、孔径0.5×0.35、厚さ2.3、重さ15.28g。胎土：白色粒。色調：明赤褐色。調整：ナゲ。				完形
3	砥石	長さ[5.4]、幅4.2、厚さ2.5、重さ98.99。石材：安山岩。調整：4面を使用。使用面は平滑。下端部欠損面に擦痕あり。				下



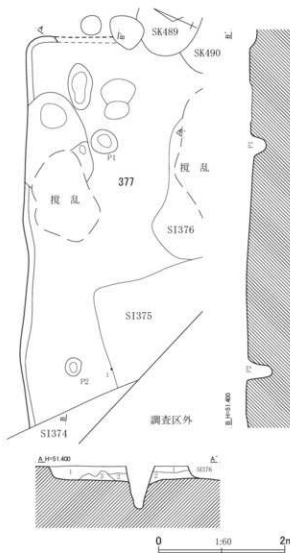
第887図 第376号住居跡平面・断面図

軽微である。壁高は、北東壁で20cm、北西壁で4cmである。北隅近く北西壁沿いの床面で小ピットをひとつ検出している。土師器片を主とする遺物が、覆土中から少量出土している。重複関係、出土遺物から見て、古墳時代中期末葉～後期初頭頃の遺構と考えられる。

第376号住居跡 (第886図)

調査地点の南縁近くの西寄り、I・4・5グリッドに位置する住居跡である。第375号住居跡に切れ、遺構の東側部分は、擾乱により大きく壊されている。確認面は、灰黄褐色層上面である。

規模は、東西方向で2.20m、南北方向で1.05mである。床面は微妙な凹凸があるが、全体としてはおおむね平坦であり、硬化している。壁高は、北・西壁で20cmである。重複関係から見て、古墳時代中期末葉～後期初頭頃の遺構と考えられる。



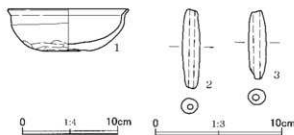
第377号住居跡土層説明

- 第1層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。
- 第2層: 褐色土。ローム粒を多量に含む。
- 第3層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒を少量含む。

第888図 第377号住居跡平面・断面図

第399表 第377号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考	
1	坏	口径(12.6) 底径 — 器高 4.5	丸底。体部は内彎し、口縁部は短く外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部コナデ。体部—底部ヘラナデ。内面—口縁部コナデ。体部—底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外—明赤褐色	1/2残存	
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考	
2	土鉢	長さ6.3, 幅1.4, 厚さ1.2, 重さ11.75g。	胎土: 石英・角閃石・白色粒。色調: 浅黄色。				完形
3	土鉢	長さ5.4, 幅1.4, 厚さ1.2, 重さ9.32g。	胎土: 石英・角閃石・白色粒。色調: にぶい褐色。				完形



第889図 第377号住居跡出土遺物

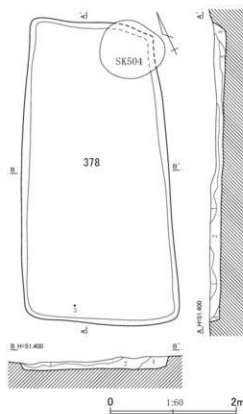
第377号住居跡 (第888・889図、第399表、図版211・233)

調査地点南縁近くの西寄り、I 4グリッドに位置する。第374～376号住居跡に切られている。また、第489・490号土坑にも切られている。確認面は、灰黄褐色のローム上面である。

規模は、北東—南西方向での推定長が6.15m、北西—南東方向での現存長は2.55mである。南東側は、ほとんど残存していないが、本来はかなり大型の住居跡であったであろう。北西壁は、N-66'—Eを指している。床面は全体に凸凹しているが、明瞭に硬化している。壁高は、北西壁で7cm前後である。

P 1、P 2は、主柱穴であろうか。平面形はともにやや不整な円形で、深さは、P 1が25cm、P 2が40cmである。他に、北西壁沿いに土坑状の浅い掘り込みが見られ、他にピットを1つ検出している。

第889図1の坏は、第375号住居跡との境目から出土した。重複関係、出土遺物から見て、古墳時代中期末葉頃の遺構と考えられる。



第378号住居跡土層説明

- 第1層: 黒褐色土。ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。第1～4層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第2層: 暗褐色土。ロームブロック(5～30mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。
- 第3層: 暗褐色土。ロームブロック(5～10mm)を少量、焼土を微量含む。
- 第4層: 黒褐色土。ロームブロック(5～30mm)を少量、ローム粒・焼土を微量含む。

第890図 第378号住居跡平面・断面図

第378号住居跡 (第890・891図、第400表、図版212・233)

調査地点の南縁近くの中央、やや東寄り、J 4・5グリッドに位置する住居跡である。第379・384・385号住居跡を切っている。重複する土坑との新旧関係は、不確定要素を多分に残すが、一応

第400表 第378号住居跡出土土物観察表

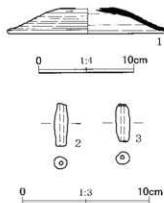
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 蓋	口径 (16.7) 底径 — 器高 [2.7]	平坦な天井部から、口縁部へ向かって外反気味に開く。口縁部の折れは短い。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。天井部回転ヘラケズリ。内面-ロクロナデ。	白色粒 外-灰白色 内-灰色	1/8残存 還元焼成
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
2	土鉢	長さ3.4、幅1.0、厚さ1.0、重さ3.87g。	胎土：白色粒。色調：灰色。			完形
3	土鉢	長さ3.0、幅1.1、厚さ1.0、重さ3.79g。	胎土：白色粒。色調：灰色。			完形

第494・495・500・504号土坑に切られていると判断した。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

平面形は、北東壁に比し、若干南西壁が長い長方形である。規模は、北東-南西方向で4.77m、北西-南東方向で2.46mである。北東-南西方向での中軸線方位は、N-25°-Eである。床面は、ほぼ平坦であり、壁際以外は、明瞭に硬化している。壁の立ち上がりは比較的急峻である。壁高は、北東壁で20cm、南東壁で19cm、南西壁で15cm、北西壁で10cmである。

覆土は、暗褐色土、黒褐色土からなる4層に分けられた。壁際に第3・4層が堆積した後、ロームブロックを多量に含む第2層が大量に流入し、あるいは投棄され、住居跡の大半が埋まった模様である。

第891図3の土鉢は、南壁寄りの覆土上層から出土している。土器器片を主とする遺物が、覆土中からかなりの量出土している。住居形態、出土遺物から見て、奈良時代前半以降の遺構と考えられる。



第891図 第378号
住居跡出土土物

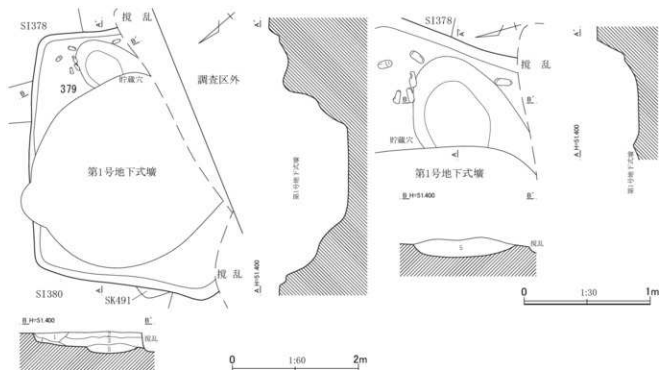
第379号住居跡 (第892・893図、第401表、図版212・233)

調査地点の南縁沿いのほぼ中央、J4・5グリッドに位置する住居跡である。第380号住居跡を切っており、第378号住居跡、第1号地下式竈、第491号土坑に切られ、過半を壊されている。また、遺構の南側部分は、攪乱により失われており、一部は調査範囲外である。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

平面形は、南西-北東方向に比し、南東-北西方向がやや長い長方形になろうか。カマドがあったとすれば、南東壁、あるいは南西壁と考えられる。規模は、南東-北西方向で4.02m、南西-北東方向での推定長が3.25mである。南東-北西方向で推定される中軸線方位は、S-41°-Eである。床面の硬化は顕著ではなく、床面には、かなり凹凸が目立つ。壁高は、南東・北東壁で15cm、北西壁で28cmである。

南東壁沿いのピットは、貯蔵穴であろう。平面形は楕円形に近く、最大径は123cm、短径は77cm、深さは12cmである。

貯蔵穴覆土を除く住居跡の覆土は、4層に分けられたが、第1層は、あるいは上部の土が混入した層になるのかもしれない。第2~4層は、いずれもローム粒やロームブロックを多量に含む土で、自然流入土と見るのはむづかしいようである。



第379号住居跡土層説明

第1層：褐灰色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量、焼土・白色軽石を微量含む。第1~5層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層：灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。

第3層：灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第4層：暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒・焼土を微量含む。

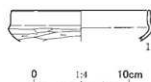
第5層：黒褐色土。ロームブロック(5~100mm)を少量、焼土・炭化物を微量含む。貯蔵穴覆土。

第892図 第379号住居跡平面・断面図

第401表 第379号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	環	口径 (14.5) 底径 — 器高 [3.3]	口縁部は体部との境に稜をもつて内傾する。粘土粗積み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部へラケズリ。内面-口縁部へ体部ヨコナデ。	白色粒 内外-にびい赤褐色	口縁部へ体部1/5残存

貯蔵穴周辺では、編物石と思われる楕円礫が6点出土している。第893図1に図示した環は、覆土中から出土した小破片である。重複関係から見て、古墳時代終末期前葉頃の遺構である可能性を考えた。

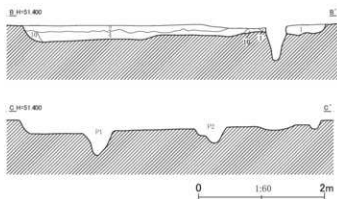
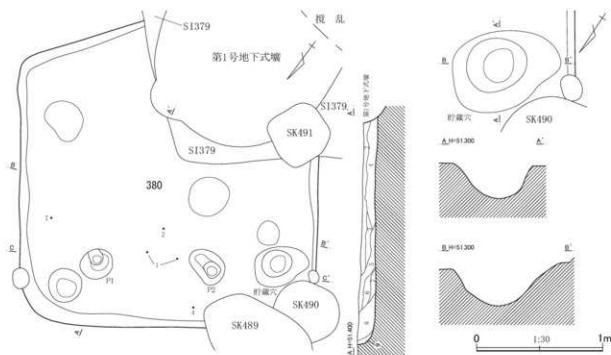


第893図 第379号住居跡出土遺物

第380号住居跡 (第894・895図、第402・403表、図版212・233)

調査地点の南縁近くの中央、I 4、J 4・5グリッドに位置する住居跡である。第382号住居跡を切っており、第379号住居跡、第1号地下式壙、第489~492・495号土坑に切られ、遺構の一部を壊されている。確認面は、灰黄褐色のローム上面である。

平面形は、東隅が大きく開いたためかなり歪になりそうであるが、方形に近い形態と見てよいであろう。



第380号住居跡土層説明

第1層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。第1~10層は、いずれの層も、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層: 黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒・焼土・炭化物を微量含む。

第3層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。

第4層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を大量に、ローム粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。

第5層: 黒褐色土。ローム粒・焼土・炭化物を微量含む。

第6層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、焼土を微量含む。

第7層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第8層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を多量に、ローム粒・焼土・炭化物を微量含む。

第9層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量に、ローム粒を少量、炭化物を微量含む。

第10層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量含む。

第894図 第380号住居跡平面・断面図

第402表 第380号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 22.2 底径 4.1 器高 38.8	口縁部は外反する。胴部は膨らみをもたない。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。底部木葉痕。内面-口縁部ヨコナデ。胴部~底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外-橙色	1/2残存
2	甕	口径 (22.3) 底径 — 器高 [12.7]	口縁部は外反する。胴部は膨らみをもたない。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外-にぶい橙色	口縁部~胴部上位1/4残存
3	坏	口径 (11.0) 底径 — 器高 3.6	平底気味。体部は浅い。口縁部は体部との境に稜をもつて外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナデ。	石英・角閃石・白色粒 内外-橙色	1/4残存

第403表 第380号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
4	高坏	口径 — 底径 (7.4) 器高 [5.0]	脚部はハの字状に開く。粘土紐横み上げによる成形。	外面—胴部下端ヘラケズリ。脚部ヨコナデ。内面—胴部下端ヘラナデ。脚部ヨコナデ。	雲母・白色粒 内外—橙色	脚部破片
5	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	タタキ成形。	外面—平行タタキの後、カキメ。内面—同心円の当て具痕。	石英・白色粒 内外—灰色	胴部破片 還元焙焼成
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
6	土錘	長さ8.7、幅1.6、厚さ1.6、重さ20.05g。	胎土：雲母・白色粒。色調：橙色。			一部欠損
7	土錘	長さ4.9、幅1.4、厚さ1.4、重さ8.91g。	胎土：石英・角閃石・白色粒。色調：にぶい黄褐色。			定形

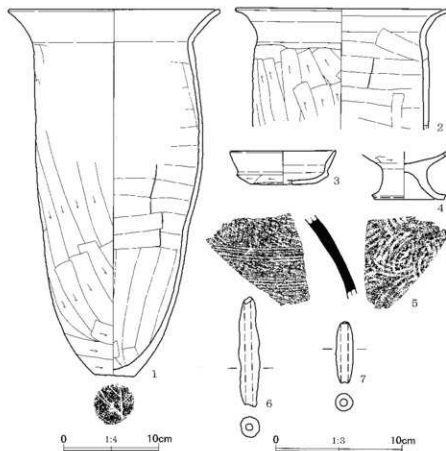
う。カマドがあったとすれば、南東壁、あるいは南西壁と考えられる。規模は、南東—北西方向で4.85m、南西—北東方向で4.72mである。南東—北西方向で推定される中軸線方位は、S-35°-Eである。床面には、かなり凹凸が目立ち、床面中央を中心に部分的に硬化している。壁高は、南東壁で7cm、南西壁で13cm、北西壁で25cm、北東壁で24cmである。

P1、P2は、支柱穴であろう。平面形は、P1が円形、P2がやや不整な楕円形である。

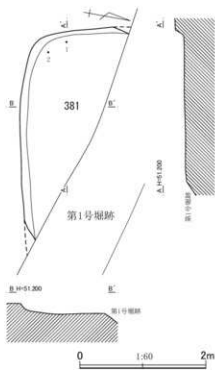
深さはP1が37cm、P2が21cmである。西隅にあたる位置近くのビットは、貯蔵穴と見られる。平面形は楕円形に近く、長径は86cm、短径は62cm、深さは29cmである。他に北隅近くで、ビットを1つ検出している。

住居跡の覆土は、10層に分けられたが、第1・4・7~9層は、ローム粒やロームブロックを多量に、あるいは大量に含む層である。つまり、住居跡が埋没する過程のかなり早い段階に、主に北西壁側や南西壁側からローム粒やロームブロックを著しく含む多量の土が流入したのであろう。

第895図1・2の甕、7の土錘は、住居跡中央の北、北西に寄った位置から、4の高坏脚部片は、北西壁脇から、いずれも覆土の真ん中くらいの層準から出土している。重複関係、出土遺物から見て、古墳時代終末期前葉頃の遺構と考えられる。



第895図 第380号住居跡出土遺物

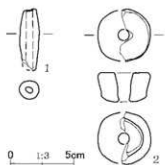


第896図 第381号住居跡
平面・断面図

第381号住居跡 (第896・897図、第404表、図版212・233)

調査地点の中央の南寄り、J 4グリッドに位置する住居跡である。第382号住居跡を切っているらしく、第1号堀跡に切られている。確認面は、灰黄褐色のローム上面である。

平面形は不明であるが、西壁、南壁はかすかな丸みをもっている。規模は、現存長で、東西方向3.45m、南北方向1.45mである。南壁は、S-81°-Wを指している。床面は、硬化している。壁高は、西壁



第897図 第381号
住居跡出土遺物

で13cm、南壁は10cmである。

第897図1の土錘、2の土製紡錘車は、南西隅から出土している。重複関係、覆土、出土遺物から見て、古墳時代以降の遺構と考えられる。

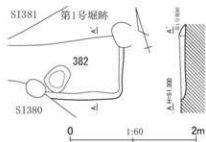
第404表 第381号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)・特徴	備考
1	土錘	長さ4.9、幅1.5、厚さ1.4、重さ9.55g。胎土：石英・角閃石・白色粒。色調：明赤褐色。	端部欠損
2	土製紡錘車	上面径(4.2)、下面径(3.5)、孔径(0.75×0.75)、厚さ2.3、重さ18.43g。胎土：石英・角閃石。色調：1/2残存 橙色。調整：ナダ。	

第382号住居跡 (第898図、図版213)

調査地点の北西部の中央の南寄り、J 4グリッドに位置する住居跡である。第381号住居跡に切られているらしく、第380号住居跡の一部を壊されている。北側は、第1号堀跡により大きく壊されている。遺存状態が悪く西側の床面の残存範囲を確定し切れなかった。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

規模は、どちらも現存長になるが、南北方向で98cm、東西方向で124cmである。東壁はN-15°-Eを指している。細かな凹凸が見られるが、床面は、ほぼ平坦で、硬化している。壁はわずかに残るのみで、壁高は、南壁、東壁ともに7cmである。南壁沿いでピットを1つ検出している。重複関係から見て、古墳時代終末期中葉以前の遺構と考えられる。



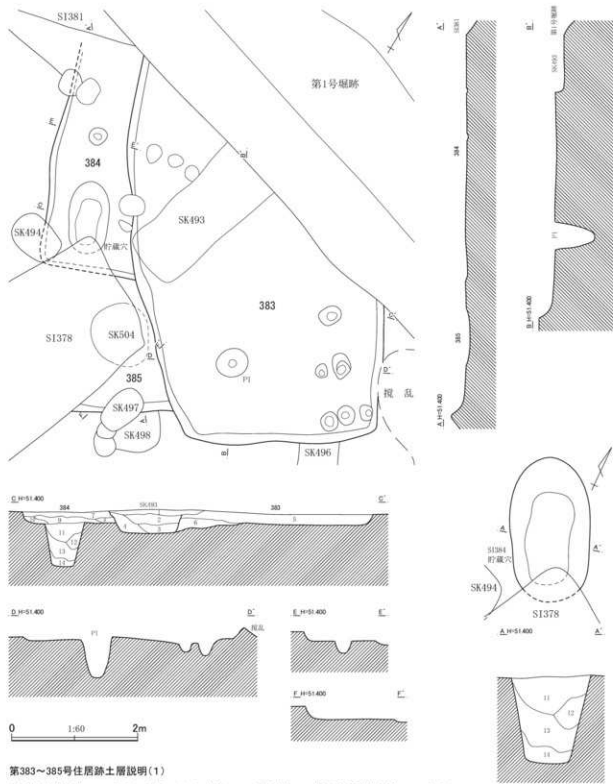
第382号住居跡土層説明

第1層：黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒・白色軽石を多量に、焼土を微量含む。しまっており、粘性が強い。

第898図 第382号住居跡平面・断面図

第383号住居跡 (第899~903図、第405・406表、図版213・233)

調査地点の南東部の中央、J 4、K 4グリッドに位置する住居跡である。第384・385号住居跡、第



第383～385号住居跡土層説明(1)

第1層:黒褐色土。ロームブロック(5～10mm)・焼土・ローム粒を微量含む。第1～4層は、第493号土坑の覆土。また、第1～14層は、いずれの層の土質も、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層:暗褐色土。ロームブロック(5～50mm)を少量、ローム粒・焼土を微量含む。

第3層:灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)を少量、ローム粒・焼土・炭化物を微量含む。

第4層:灰黄褐色土。ロームブロック(5～50mm)を大量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第899図 第383～385号住居跡平面・断面図(1)

D地点

第383～385号住居跡土層説明(2)

第5層:黒褐色土。ローム粒・焼土・炭化物・白色軽石を微量含む。

第5・6層は、第383号住居跡覆土。

第6層:灰黄褐色土。ロームブロック(5～50mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第7層:黒褐色土。ロームブロック(5～30mm)を多量に、焼土・炭化物を微量含む。第7～14層は、第384号住居跡覆土。

第8層:灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)を大量に含む。

第9層:灰黄褐色土。ロームブロック(5～10mm)・ローム粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。

第10層:灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)を少量含む。

第11層:暗褐色土。ロームブロック(5～30mm)・ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。第11～14層は、第384号住居跡の貯蔵穴覆土(個別図も同じ)。

第12層:灰黄褐色土。ロームブロック(5～50mm)を多量に含む。

第13層:灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)を少量、焼土・炭化物を微量含む。

第14層:灰黄褐色土。焼土を多量に、ローム粒を少量含む。

第900図 第383～385号住居跡平面・断面図(2)

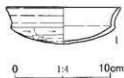
496号土坑を切っており、第1号堀跡、第493号土坑に切られ、遺構の北側部分を大きく壊されている。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

平面形は、南西壁が大きく膨らむが、長方形の一種と見てよいであろう。最も残りのよい部分で計測した規模は、北西-南東方向で6.15m、北東-南西方向で3.50mである。際立った縦長、あるいは横長の住居跡である。カマドがあったとすれば、北西壁ないしは北東壁であろうが、実際本地点ではカマドのない住居跡もあり、カマドがなかった可能性もあると考えられる。北西-南東方向での中軸線方位は、N-35°-Wである。床面はほぼ平坦で、硬化している。壁高は、北東壁で16cm、南東壁で20cm、南西壁で21cmである。

P1を、主柱穴の可能性のあるビットと考えた。上端での平面形は、ほぼ円形で、深さは65cmである。他に床面で、ビットを6個検出している。P1の北東側の2個のビットは、位置的には主柱穴の可能性はあるが、かなり浅いため主柱穴と認定しなかった。

覆土中から土師器片を主とする遺物が出土している。住居形態と整合しないようにも見えるが、一応出土遺物から見て、古墳時代終末期前葉頃の遺構としたい。

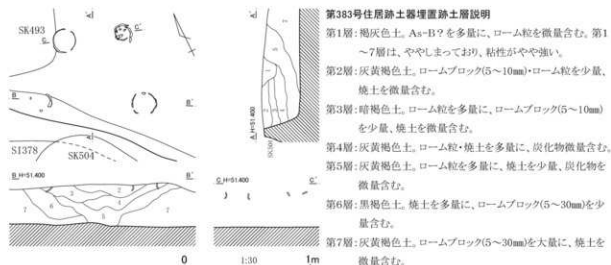
なお、表土剥ぎの際、本住居跡の範囲内の確認面で、蹠脚部かと思われる土器4個体が、台形状に配されているかのような状態で検出された。また、4個体の土器を結ぶ範囲よりやや広い範囲にわたって、白みの強いロームブロックや焼土が多量に分布していた。本住居跡の覆土内であり、本住居跡を切るより新しい時期のカマドの残骸かとも考えたが、断面観察では、カマド跡に通有の諸施設の痕跡は一切見られなかった。よって本住居跡の覆土内を掘り込んで、ロームブロックや焼土などで埋め戻し、4個体の土器を意図的に配した、何らかの行為の跡である可能性があると判断し、第383号住居跡土器埋置跡と呼称した。ただし、位置はともあれ、後述する出土遺物から見て、本住居跡そのものと直接関連する遺構では全くないが、



第901図 第383号住居跡出土遺物

第405表 第383号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口径 12.0 底径 — 器高 3.9	丸底。口縁部は体部との境に棱をもって外反する。粘土紐積み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナデ。体部へ棱をもつて外反する。底面ハラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ。体部へ底面ハラナデ。	雲母・石英 内外一褐色	1/4残存

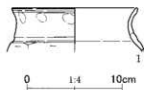


第902図 第383号住居跡土器埋置跡平面・断面図

便宜的に本段で記載する。

第383号住居跡土器埋置跡は(第902・903図、第406表、図版233)、同住居跡の南西壁沿いのほぼ中央で検出した。第383号住居跡の埋没過程のある段階に、覆土が掘り込まれ、そこがロームブロックや焼土などで埋め戻され、その過程の中で、4個体分の甕が同じようなレベルに、しかも台形をなすように配された模様である。

掘り込みの規模は、図の下辺をなす土器を結ぶ位置で125cm、中央の南北方向で81cmである。掘り込み全体の平面形はよく分らないが、断面形は、かなり不規則である。下面および南西側は、第383号住居跡の床面、壁で止まっている。中央での掘り込みの深さは、33cmである。覆土は6層で、第3～6層には、ローム、焼土のいずれかが多量に含まれる。第7層は、第383号住居跡の覆土である。配置された4個体の甕は、胴部のみであり、図化できなかった。第903図1の甕は、南西側覆土中から出土した。出土遺物から見て、本土器埋置跡は、平安時代前期前半頃の遺構と考えられる。



第903図 第383号住居跡土器埋置跡出土遺物

第406表 第383号住居跡土器埋置跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 12.2 底径 — 器高 [4.6]	口縁部は直立上位で外反する。口唇部は外側に面をもち、弱い明線がめぐる。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ、指頭圧痕。胴部上位ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—にぶい橙色	口縁部～胴部上位

第384号住居跡 (第899・900図、図版213)

調査地点の南東部の中央、南寄り、J4グリッドに位置する住居跡である。第385号住居跡を切っており、第378・383号住居跡、第1号堀跡に切られ、遺構の大半を壊されている。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

規模は、南北方向での推定長が3.62m、東西方向での現存長が1.37mである。西壁から推定される

D地点

南北方向での中軸線方位は、 $N-19^{\circ}-W$ である。床面には、微妙な凹凸が見られるが、明瞭に硬化している。壁の立ち上がりは比較的しっかりしており、壁高は、西壁で15cm、南壁で20cm、南東壁で16cmである。

推定される南西隅の近くで検出したピット、あるいは土坑を、貯蔵穴と考えた。平面形は、楕円形で、推定長径は114cm、短径は63cm、深さは68cmである。貯蔵穴の覆土は4層で、第12層には、ロームブロックが多量に含まれ、第14層には、焼土が多量に含まれる。他に西壁寄りの中央で、ピットを1つ検出している。

住居跡の覆土は、第7～10層の4層に分けられた。壁際に堆積する第10層以外の層は、いずれもローム粒やロームブロックを多量に、あるいは大量に含む層であった。覆土中から土師器片を主とする遺物が少量出土している。重複関係から見て、古墳時代終末期前葉以前の遺構と考えられる。

第385号住居跡 (第899・900図)

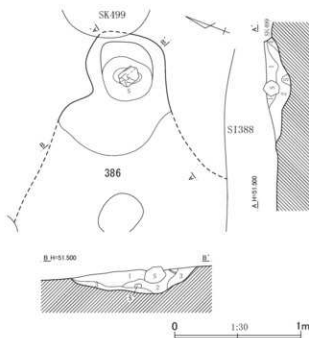
調査地点の南東部の中央、南東寄り、J4グリッドに位置する住居跡である。第498号土坑を切っっているらしく、第378・383・384号住居跡、第497・504号土坑に切られている。南東壁とわずかな範圍の床面のみ残存する住居跡である。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

規模は、いずれも現存長になるが、北西—南東方向で2.05m、北東—南西方向で1.60mである。床面は硬化している。壁高は、南東壁で30cmである。重複関係から見て、古墳時代終末期前葉以前の遺構と考えられる。

第386号住居跡 (第904・905図、第407表、図版213・233)

調査地点の南東部の南縁近くの中央、J5、K5グリッドに位置する住居跡である。カマドとカマド前のわずかな範圍が残存するのみである。床面と思しき平坦面の確認できた範圍を破線で示したが、床面の西側の範圍は確定できなかった。第499号土坑に切られている。位置的には、第378・385・388号住居跡、第498・500号土坑と重なるように見え、本来3軒の住居跡の確認面より上に床面を設けた、時期の新しい住居跡である可能性がある。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

カマドは、不整形の掘り込みを有する燃焼部のみ残存する。燃焼面は焚口側からゆるい傾斜をもって掘り込まれており、煙道側は



第386号住居跡カマド土層説明

第1層: 黒褐色土。焼土を大量に、ローム粒を少量、炭化物を微量含む。第1～5層は、いずれも、しまっており、粘性が強い。

第2層: 灰黄褐色土。焼土を多量に、ローム粒を微量含む。

第3層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5～30mm)を多量に、焼土を微量含む。

第4層: 灰黄褐色土。ローム粒を少量、焼土を微量含む。

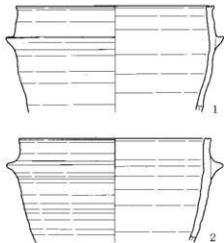
第5層: 黒褐色土。ローム粒・焼土を微量含む。

第904図 第386号住居跡平面・断面図

第407表 第386号住居跡出土土物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 羽 釜	口径 (20.9) 底径 — 器高 [11.2]	胴部は丸みをもたない。口縁部は内傾する。口唇部は肥厚し、弱い凹線がめぐる。跨は断面三角形を呈する。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。跨貼付。内面-ロクロナデ。	白色粒 内外-ふい黄褐色	口縁部~胴部 上位1/4残存 酸化塩焼成気味
2	須恵器 羽 釜	口径 (20.2) 底径 — 器高 [11.0]	胴部は丸みをもたない。口縁部は直立する。口唇部は肥厚し、弱い凹線がめぐる。跨は断面三角形を呈する。ロクロ成形。	外面-ロクロナデ。跨貼付。内面-ロクロナデ。	白色粒・黒色粒 内外-黄褐色	口縁部~胴部 上位1/8残存 酸化塩焼成

より強い傾斜をもって立ち上がる。燃焼部の推定長は99cm、手前のやや広がった部分での横幅は89cm、燃焼部の最も深い部分での横幅は63cmである。側壁の上端付近の一部が被熱赤化している他は、被熱の痕跡は軽微である。カマドの覆土は、5層に分けられた。焼土を多量に含む第2層やロームブロックを多量に含む第3層は、側壁や天井部の崩落土を含む層であろう。カマド中央の覆土上層から比較的大きな角礫が出土している。第905図1・2の羽釜は、カマド燃焼部から出土している。重複関係、覆土、出土遺物から見て、平安時代中期前半の遺構と考えられる。

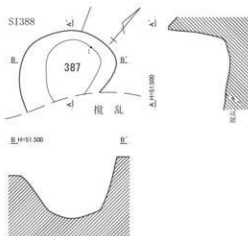


0 1:4 10cm

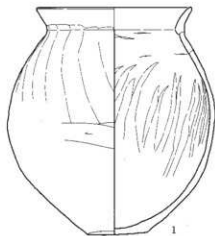
第905図 第386号住居跡出土遺物

第387号住居跡 (第906・907図、図版213・233)

調査地点の南東部の南縁近くの中央、K5グリッドに位置し、カマドのみ残存する住居跡である。第388号住居跡を切っており、南東側は、攪乱により壊されている。本来第388号住居跡の確認面より上位に床面があったと考えられる。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。



第906図 第387号住居跡平面・断面図



第907図 第387号住居跡出土遺物

燃焼部の平面形

は、やや不整な楕円形である。第388号住居跡側から攪乱で壊されている南東側に焚口があったのであろう。床面が失われており、西側は、第388号住居跡の床面まで下げた状態で図化している。煙道

第408表 第387号住居跡出土遺物観察表

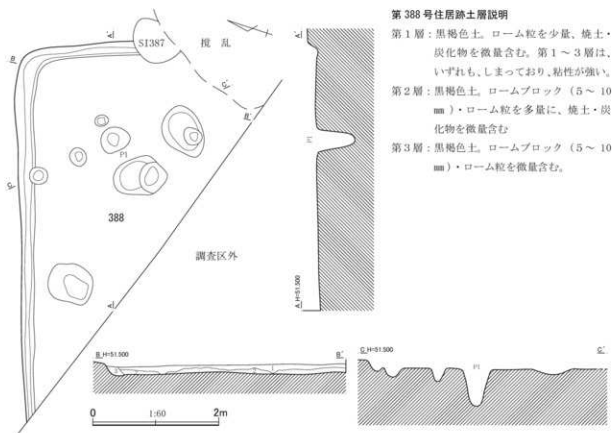
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 16.3 底径 6.4 器高 24.0	口縁部は外反する。胴部は中に膨らみをもつ。平底。粘土細積み上げによる成形。	外面-口縁部コ罗纳デ。胴部上半ヘラナデ。胴部下半~底部ヘラケズリ。内面-口縁部コ罗纳デ。胴部~底部ヘラナデ。	片岩・石英・白色粒・黒色粒 内外一にぶい橙褐色	4/5残存 胴部下半は内外面ともに磨耗

に連なる北側から北東側にかけての壁はかなり急峻に立ち上がる。燃烧部の長さは76cm、横幅の現存長は52cmである。被熱赤化の痕跡は軽微である。カマドの北西側壁際で、つぶれたような状態の甕(第907図1)が1個体出土している。他には、土師器片を主とする土器片が少数出土しているのみである。出土遺物から見て、古墳時代中期中葉から後葉にかけての遺構である可能性が考えられる。

第388号住居跡 (第908図、図版213)

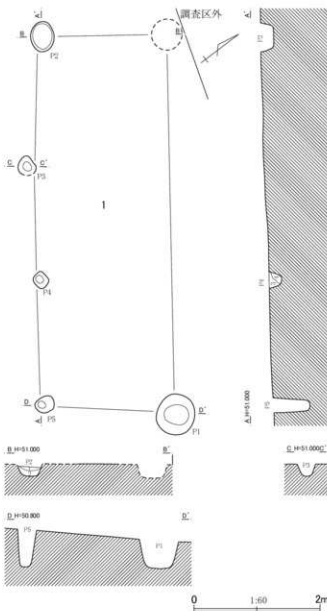
調査地点の南縁沿いの中央、やや東寄り、J 5、K 5 グリッドに位置する住居跡である。第387号住居跡に切られており、南側部分は調査範囲外であり、東側は掘乱により壊されている。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。

規模は、どちらも現存長になるが、東西方向で5.90m、南北方向で3.90mである。北壁に並行する形で中軸線を推定するなら、中軸線方位はN-71°-Eである。床面はほぼ平坦で、硬化している。壁高は、東壁で13cm、北壁で14cmである。残存する壁沿いには、幅15~33cm、深さ3~6cmの壁溝が巡らされている。



第908図 第388号住居跡平面・断面図

位置的に見て、P1は、主柱穴であろう。上端での平面形は、やや不整な楕円形で、深さは60cmである。床面で、他に6個のピット、あるいは土坑を検出している。



第1号掘立柱建物跡土層説明

第1層:暗褐色土 ローム粒を少量、炭化物を微量含む。第1・2層は、P2覆土で、しまっており、粘性が強い。

第2層:暗褐色土 ロームブロック(5~10mm)を中量、焼土を少量、炭化物を微量含む。

第3層:黒褐色土、ロームブロック(5~10mm)・焼土を微量含む。第3・4層は、P4覆土で、ややしまっており、粘性がやや強い。

第4層:灰黄褐色土、ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第909図 第1号掘立柱建物跡平面・断面図

重複関係から見て、古墳時代中期後葉以前の遺構と考えられる。

2 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡を2棟検出した。2棟は、柱穴の並びがほぼ並行しており、同じような時期の建物跡と考えられる。また、掘立柱建物跡の柱穴の並びに類似した方向性をもつ住居跡があることから、厳密にどの住居跡と時期を同じくするかは確定できないにせよ、一部の住居跡と同時期に建てられた建物跡と見てよいであろう。

第1号掘立柱建物跡 (第909・910図、第409表、図版214・233)

調査地点北縁近くの中央、J2、K2グリッドに位置する掘立柱建物跡である。本遺構の柱穴は、第328号住居跡、第437・438・442号土坑と直接切り合うが、それらの遺構の床面や坑壁、坑底面を精査した段階で、はじめて本遺構の柱穴を検出したため、新旧関係を確定することができなかった。推定復元される遺構の範囲からは、第327号住居跡や調査範囲の北東部分に集

中する多数の土坑と空間的に重なるようである。確認面は、灰黄褐色のローム層上面である。



第910図 第1号掘立柱建物跡出土遺物

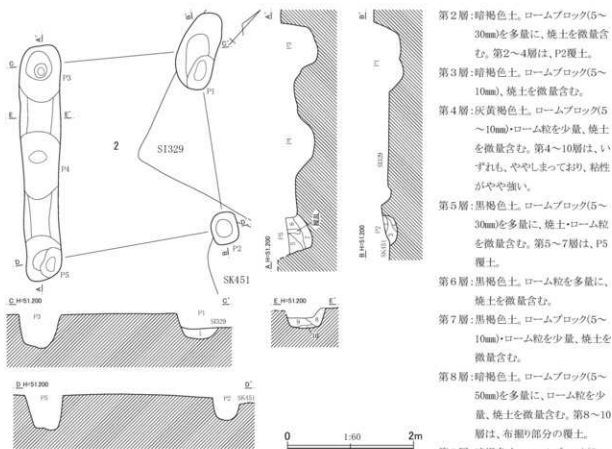
検出できたのは、P1~P5の柱穴5個であり、南東辺と南西辺のL字

第409表 第1号掘立柱建物跡出土土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	異形土器	上面径 3.1 下面径 (7.0) 器高 6.0	平坦な上面から内彎気味に下方へ開く。上面には孔径1.9×1.6の円孔。下方には3ヵ所の切り込み、粘土組織み上げによる成形。	外面へラケズリ。内面へラナデ。	石英・白色粒・ 黒色粒 外・明黄褐色 内・橙色	1/2残存

の柱穴の並びのみである。確認しえたL字の柱穴の並びから、南西辺の長い建物跡と推定したが、北側に関しては、土坑群により柱穴が壊された可能性があり、南西辺の柱穴が小さいことからすれば、底部分のみが残存した可能性もあるように思われる。一応検出しえた柱穴から、以下の記載を行う。

現存する柱穴から見ると、南東辺に比し、南西辺が長い、1間×3間の建物跡と復元できる。柱心間での規模は、北西-南東方向で5.85m、副軸方向で2.15m、南西辺の柱穴は、おおそN-52°-Wを指している。柱心間での柱間の長さは、P2-P3が2.10m、P3-P4が1.80m、P4-P5が2.01m、P1-P5が2.16mである。柱穴の上端での平面形は、方形に近いP4以外は、やや不



第2号掘立柱建物跡土層説明

第1層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を大量に含む。P1覆土。第1~3層は、いずれも、しまっており、粘性が強い。

第10層: 暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、ローム粒を微量含む。

第911図 第2号掘立柱建物跡平面・断面図

整な円形、楕円形で、深さは、P1が44cm、P2、P4が21cm、P3が18cm、P5が58cmである。

覆土が確認できたのは、P2、P4の2個であるが、柱根などの痕跡は見られなかった。覆土中より土師器片を主とする遺物が少量出土している。

上述したように、土坑群により壊されたため北東辺の柱穴が確認できなかったとすれば、古墳時代終末期前葉以前の遺構である可能性が考えられる。

第2号掘立柱建物跡（第911・912図、第410表、図版214・215・233）

調査地点の中央、やや北寄り、J2・3グリッドに位置する建物跡である。第329・349・350・356号住居跡、第451号土坑と重複し、土層断面などから見た新旧関係についての所見からは、第329号住居跡、第451号土坑に先行し、第349・356号住居跡に後出する遺構である可能性を考慮することができる。確認面は、黄褐色～灰黄褐色のローム層上面である。

南西辺が柱穴3個、北東辺が柱穴2個の並びからなる、やや歪な方形の建物跡である。南西辺の3個のピット、P3～P5は、布掘りにより連結しており、全体が溝状の掘り込みをなしている。

柱心間での規模は、P1-P2間で2.52m、P3-P5間で3.07m、P1-P3間で2.53m、P2-P5間で2.81mである。P3～P5の布掘りの全長は、3.73mである。布掘りの長軸方位は、およそN-45°-Wを指している。柱心間での柱間の長さは、P3-P4が1.38m、P4-P5が1.72mである。

柱穴の上端での平面形は、P1がやや不整な楕円形で、P2が微妙に角張った、隅丸長方形に近い形態である。深さは、P1が42cm、P2が36cmである。布掘り部分の深さは20～33cm、布掘り底面からの深さは、P3が37cm、P4が30cm、P5が25cmである。P1、P5には、底面が2つずつあり、掘り直されている可能性がある。

覆土が確認できたのは、P1、P2、P5の3個であるが、柱根などの痕跡は見られなかった。布掘り部分の覆土には、白色軽石が含まれる。覆土中より土師器片を主とする遺物が少量出土している。重複関係、出土遺物から見て、古墳時代終末期前葉～中葉頃の遺構と考えられる。



第912図 第2号
掘立柱建物跡
出土遺物

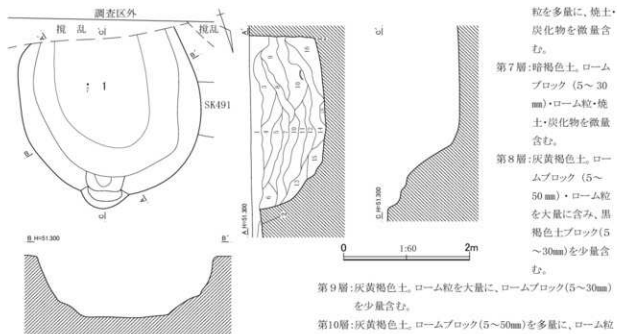
第410表 第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	埴	口径 (11.4) 底径 — 器高 [3.4]	口縁部は体部との境に弱い稜をもって外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部不明瞭。	石英・白色粒・ 黒色粒・褐色粒 内外-橙色	1/3残存 内面は磨耗

3 地下式墳

第1号地下式墳（第913～916図、第411・412表、図版215・216・234・235）

調査地点の南縁沿いのほぼ中央、J4・5グリッドに位置する遺構である。第379・380号住居跡を切っており、第491号土坑に切られている。南側部分は、攪乱により壊されている。確認面は、灰黄



第1号地下式墳土層説明

- 第1層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、ローム粒・焼土・炭化物を微量含む。第1~12層は、いずれも、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第2層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に含む。
- 第3層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)・ローム粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。第3~16層は、第1号地下式墳覆土。
- 第4層:暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量、焼土を微量含む。
- 第5層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。
- 第6層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を大量に、ローム

粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。

第7層:暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒・焼土・炭化物を微量含む。

第8層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)・ローム粒を大量に含み、黒褐色土ブロック(5~30mm)を少量含む。

第9層:灰黄褐色土。ローム粒を大量に、ロームブロック(5~30mm)を少量含む。

第10層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第11層:暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒・焼土を微量含む。

第12層:暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。

第13層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)を大量に、ローム粒を多量に含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第14層:にぶい黄褐色土。天井崩落土のローム・黒褐色土ブロック(5~50mm)を少量含む。しまっており、粘性が強い。

第15層:にぶい黄褐色土。天井崩落土のローム。しまっており、粘性が強い。

第16層:にぶい黄褐色土。第15層と地山下部の砂層の混合土層(天井および側壁の崩落土か?)。粘性がやや強い(砂層部分は、しまり、粘性ともに弱い)。

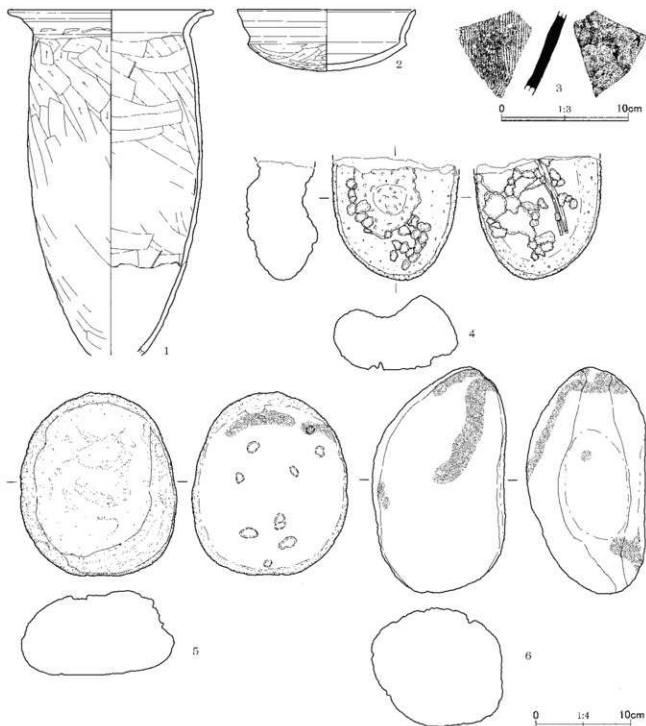
第 図 第1号地下式墳平面・断面図

第913図 第1号地下式墳平面・断面図

褐色のローム層上面である。

上端での平面形は、おおむね円形と見てよいであろうが、細かく見ると上端と中間端などにも微妙に直線的な部分が見られるようである。また、北壁の上端には、段をなす短い舌状の張り出しが見られ、墳壁にも1段足掛けの段が設けられている。この部分は、堅坑が痕跡化した入口施設と見られる。底面の平面形は、楕円形であるが、やはり部分的に直線的である。規模は、南北方向での現存長が2.78m、東西方向で2.87mである。底面は、ほぼ平坦である。墳壁は、底面からゆるやかに立ち上がり、中位から傾斜が変わり、垂直に近く立ち上がる。深さは、中央で1.02mである。

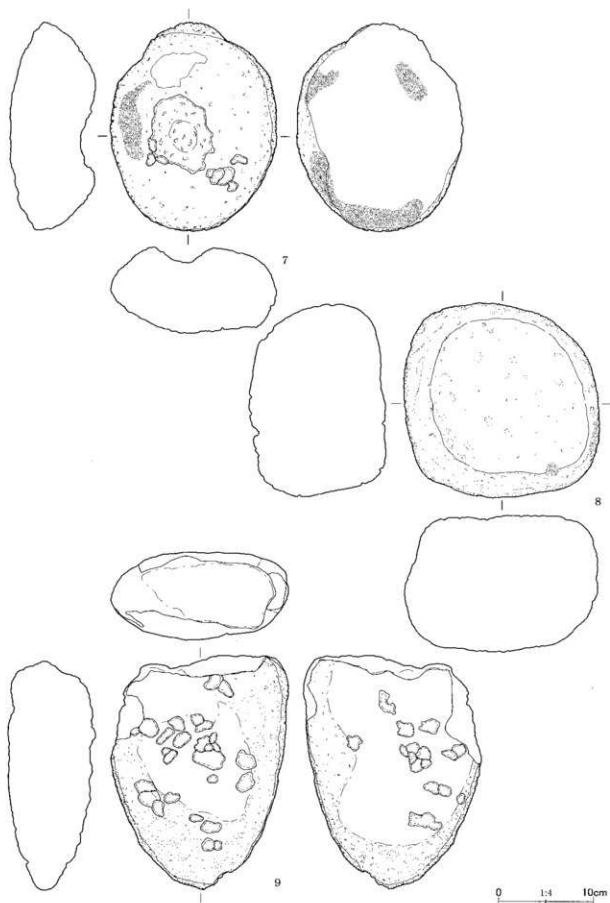
覆土は、第3~16層の14層に分けられた。地山の崩落土と見られるロームを多量に含む層が半ばを占め、墳底が純層に近い地山のロームや砂質土で埋まっていることから見て、ある程度の厚みのある天井部を有する空洞が地中にあり、その天井部や墳壁が崩落することを端緒として埋没が始まった



第914図 第1号地下式壺出土遺物(1)

第411表 第1号地下式壺出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺	口径 21.7 底径 — 器高 [36.7]	口縁部は外反し、中位に段を有する。胴部は膨らみをもたない。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色 内外一橙色	胴部1/4・底部欠損 外面胴部に赤色化した粘土が付着
2	坏	口径 (18.8) 底径 — 器高 6.6	丸底。口縁部は体部との境に稜をもって外反し、中位に段を有する。口唇部は内側に凹線がめぐる。粘土組織み上げによる成形	外面-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。黒色処理。内面-口縁部~体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。黒色処理。	石英・白色粒・黒色粒。 内外一橙色	2/3残存

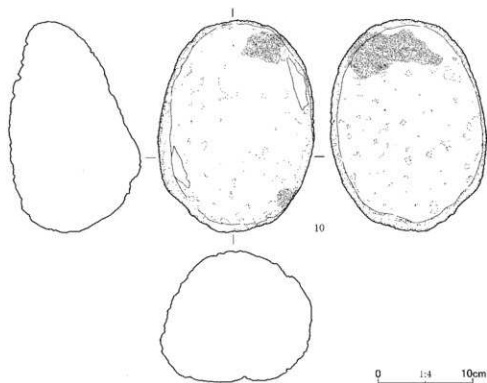


第915图 第1号地下式横出土遗物(2)

過程が推定できる。ロームブロックやローム粒を多量に、あるいは大量に含む灰黄褐色土の第3・5・6・8～10・13層は、天井部や壁の崩落土を顕著に含む層、にぶい黄褐色土の第14～16層は、天井部や壁の崩落土そのものと見られる。

遺物の大半は、第14～16層より上位の層準から出土している。第914図1の甕、2の大型の環は、本遺構が壊している第379・380号住居跡などの遺物が、天井部の崩落に際し混入したものであろう。

時期を明確に示す遺物は見られないが、調査範囲内では、近世以降の遺物がほとんど見られないことなどを加味するなら、中世の遺構である可能性が高いと考えられる。



第916図 第1号地下式墳出土遺物(3)

第412表 第1号地下式墳出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
3	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	タタキ成形。	外面—平行タタキ。内面—無文の当て具痕。	雲母・白色粒 外—灰黄褐色 内—にぶい黄色	刷部破片 酸化塩焼成気味
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
4	回石/ 砥石	残長13.1、残幅13.5、厚さ8.9、重さ9.109g。石材：安山岩。調整：表面は敲打集中により楕円状となる。深い凹穴あり。裏面は磨耗痕、線刻あり。磨→線刻→敲打。				2/3残存
5	角閃石 安山岩	長さ20.7、幅20.8、厚さ14.6、重さ4.660g。石材：角閃石安山岩。調整：全体にやや磨滅しているのみで、整形痕や使用痕などは認められない。				完形
6	石製品 台石/ 砥石	長さ24.9、幅18.85、厚さ9.35、重さ2.990g。石材：角閃石安山岩。調整：表・裏面は敲打により凹穴多数あり。裏面は全体にやや磨滅している。表面の割れ面には顕著な磨耗痕が認められる。砥石面として利用か。磨→敲打。				完形
7	角閃石 安山岩	長さ19.5、幅16.5、厚さ8.9、重さ2.450g。石材：角閃石安山岩。調整：円形状の自然礫の裏面に顕著な磨耗痕が認められる。部分的に敲打あり。敲打→磨。				完形
8	石製品 凹石	長さ22.2、幅17.7、厚さ9.15、重さ2.950g。石材：角閃石安山岩。調整：表面中央は敲打集中により楕円状の深い凹穴あり。裏面は広範囲に剥脱している。部分的に煤が付着。				完形
9	角閃石 安山岩	長さ23.95、幅14.3、厚さ12.7、重さ3.150g。石材：角閃石安山岩。調整：一部に煤とみられる黄色あり。全体に磨滅しており、右側面・裏面は平滑である。				完形
10	角閃石 安山岩	長さ22.55、幅16.65、厚さ13.95、重さ2.890g。石材：角閃石安山岩。調整：全体にやや磨滅している。部分的に煤が付着。				完形

4 土坑

D地点の調査では、第429号土坑から第504号土坑にいたる76基の土坑を精査した（第917～933図、第413～420表、図版217～220・235～238）。土坑の多くは、調査範囲の東半、北東半に集中している。重複関係から見て、土坑の大半は、住居跡より後出するかに見えるが、すべての土坑が住居跡に後出するわけではないようである。

総じて出土遺物は乏しいが、時期の分かる遺物、土器がある程度の量出土している土坑に関しては、古墳時代後期初頭から平安時代前期前半に及び、とくに時期的な強い偏りは見られないようである。また、後述する人骨の出土した土坑を除けば、出土遺物から中世の遺構と推定できる土坑は見られない。近世以降の陶磁器片などが出土した土坑はないが、第446・463・493号土坑などは、形態的に見て、近世以降盛行するとされ、多く植物貯蔵用の施設と目される長方形の土坑に類似しており、その種の土坑である可能性もあるかと思われる。

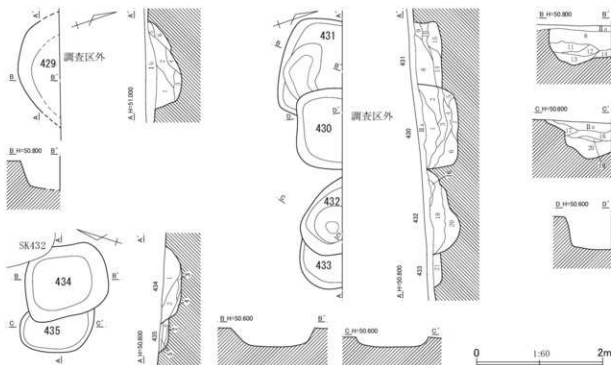
住居跡の項で折に触れ記したように、住居跡覆土と土坑覆土の峻別が困難であったため、住居跡の床下土坑としたものの中には、一部住居跡とは別の土坑が含まれている可能性があり、また、逆に住居跡を切る単独の土坑としたものの中に、住居跡に関連する土坑が多少含まれる可能性もあることを付言しておきたい。

土坑計測および観察表の「規模」欄の（ ）内の数字は、現存長であり、「深さ」欄の数値は、土坑中央での深さ、あるいは最深部での深さである。また、「備考」欄の重複関係に関しては、主な重複関係に限って目安として記したものである。

なお、人骨が出土した3基の土坑、第457～459号土坑（第923図）に関しては、第335・337号住居跡の覆土を開掘中に、人骨がまとまって出土したため、人骨を残し精査した遺構である。掘り込みは確認することができなかったが、人骨の分布、出土状態から見て、人骨を収めた土坑状の掘り込みが、住居跡を切って設けられたと推定される。

いずれの土坑から出土した人骨も、頭蓋骨は完全に腐朽せず鉢がある程度形をとどめた状態で残っていた。残存状態のややよい第457・459号土坑の人骨の場合、上腕骨や下肢骨と思われる骨が頭蓋骨とさほど離れていない位置から出土しており、骨片を含めれば、おおよそ縦100～120cmくらい、横60～70cmに収まる範囲から出土している。人骨の分布から推定される土坑の推定範囲を破線で示した。頭蓋骨以外の骨は、土坑底面と思われる平坦面（ほぼ頭蓋骨の下端が接している面）すれすれのほぼ同じような高さから出土している。

遺体は、おそらく横臥屈葬かと思われる状態で埋葬され、遺体が腐朽し、土圧により平たくなり、硬質な頭蓋骨のみ厚みを保ったまま埋もれたと推定される。重複関係、埋葬姿勢などから、中世の土坑墓の一種である可能性が考えられる。



第429号土坑層説明

- 第1層:暗褐色土。ローム粒・ローム小ブロックを含む。
 第2層:暗褐色土。第1層に近いが、黒みが増す。
 第3層:暗褐色土。第2層に近いが、黒みが強い。第2・3・6層はかなり粘性が強い。
 第4層:暗褐色土。第3層に近いが、ロームブロック(10mm)加わる。
 第5層:暗褐色土。第2層に近いがロームが多い。
 第6層:暗褐色土。第2層に近いが、輪郭のはっきりしないロームブロック(5~40mm)を含む。

第430~433号土坑層説明

- 第1層:暗褐色土。暗褐色土を主に、ローム粒・ローム小ブロックを含む。土器粒が点在する。第1~7層は、第430号土坑覆土。
 第2層:暗褐色土。暗褐色土とローム粒・ロームブロック(5~40、50mm)の混合土。
 第3層:暗褐色土。第2層に近いが、若干暗褐色土が多い。粘性増す。
 第4層:暗褐色土。第IIa層に近いが、ローム粒がやや少なく黒み増す。
 第5層:暗褐色土。第4層に近いが、ローム粒・ロームブロック(5~15mm)が加わる。
 第6層:暗褐色土。第5層に近いが、ローム粒が全体に多く、モヤモヤ混入。ロームブロック(40~60mm)も加わる。
 第7層:暗褐色土。第4層に近いが、ロームブロックがさらに大きく(50~80mm)、量が多い。
 第8層:暗褐色土。ローム粒・ロームブロック(5~10mm)を含む。第IIa層よりややロームが多い。土器粒が点在する。第8~

15層は、第431号土坑覆土。

- 第9層:暗褐色土。暗褐色土を主に、ローム粒・ロームブロック(5~30mm)を斑状に含む。土器粒が点在する。
 第10層:暗褐色土。第8・9層に近いが、ロームが少ない。
 第11層:暗褐色土。ローム粒・ロームブロック(5~20mm)を含み、ロームブロック(40mm)も微量、斑状に含む。ロームブロック(30~50mm)もある。土器粒をかきり含む。
 第12層:暗褐色土。第8層に近いが、ロームが若干多い。ロームブロック(5~10mm)が局在する。
 第13層:暗褐色土。第11層に近いが、大きいロームブロック(5~60mm)がより多い。やや色が濃い。
 第14層:暗褐色土。ローム粒・ロームブロック(5~40mm、輪郭不明瞭)をモヤモヤ含む。
 第15層:暗褐色土。第9層に近いが、ロームブロックが若干小さい。
 第16層:暗褐色土。ローム粒・黄白色ロームブロック(5~20mm)を斑状に含む。土器粒含む。第16~20層は、第432号土坑覆土。
 第17層:暗褐色土。ローム粒・ロームブロック(5~30mm)を含む。土器粒をかきり含む。
 第18層:暗褐色土。ローム粒・ロームブロック(5~10mm)を含む。第IIa層よりややロームが多く、第16層に近いが、ロームが少ない。土器粒が点在する。
 第19層:暗褐色土。黄白色ロームの大ブロック。
 第20層:暗褐色土。第16層に近いが、ロームがはるかに多い。ロームブロック(5~40mm)を含む。
 第21層:暗褐色土。ローム粒・ロームブロック(5~10mm)を含む。第433号土坑覆土。

第917図 第429~435号土坑平面・断面図(1)

D地点

第434・435号土坑土層説明

第1層:暗褐色土。ローム粒・ロームブロック(5~25mm)、土器粒をかぶり含み、炭化物を微量含む。ロームブロック(40mm)も含む。ローム粒・ロームブロックを不規則に雲状をなす。第1~4層は、第434号土坑覆土。第1~7層は、いずれも硬くしまっている。

第2層:暗褐色土。第1層に近いが、ロームが多い。

第3層:暗褐色土。第1層に近いが、ロームが少ない。

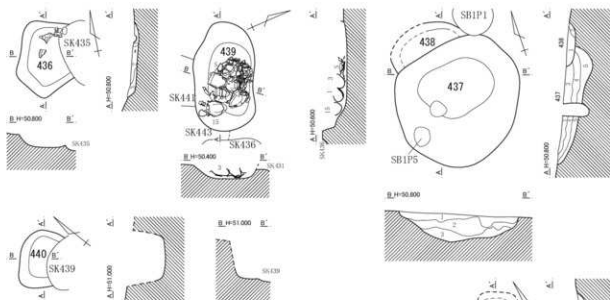
第4層:暗褐色土。第1層に近いが、ロームブロック(40~50mm)を下部に含む。

第5層:暗褐色土。ローム粒・ロームブロック(5~40mm)をモヤモヤと不規則に含む。第5~7層は、第435号土坑覆土。

第6層:暗褐色土。第5層に近いが、ロームが多い。左半(北半)にローム粒・ロームブロックが集中。

第7層:暗褐色土。第6層に近いが、さらにロームブロックが多い。特に底面近くに集中する。

第918図 第429~435号土坑平面・断面図(2)



第436号土坑土層説明

第1層:暗褐色土。ローム粒・ローム小ブロックを含む。

第2層:暗褐色土。ローム粒・ローム小ブロック(5~10mm)を含む。

第3層:暗褐色土。暗褐色土とローム粒の斑状の混合土。第2層よりロームが多い。

第437・438号土坑土層説明

第1層:黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、ローム粒・焼土を微量含む。第1・2層は、第438号土坑覆土。第1~5層は、いずれも、しまっており、粘性が強い。

第2層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒を少量含む。

第3層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を少量、小礫(10~30mm)を微量含む。第3~5層は、第437号土坑覆土。

第4層:黒褐色土。ロームブロック(5~50mm)・ローム粒を少量、小礫(10~30mm)を微量含む。

第5層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を大量に含む。

第441・442号土坑土層説明

第1層:暗褐色土。ローム粒・

黄白色ロームブロック(5~20mm)を斑状に、土器粒を含む。

第2層:暗褐色土。ローム粒・

ロームブロック(5~20mm)を含み、ロームブロック(40mm)も

微量、斑状に含む。

第3層:暗褐色土。第2層に近いが、ロームブロッ

ク(20~30mm)が多い。

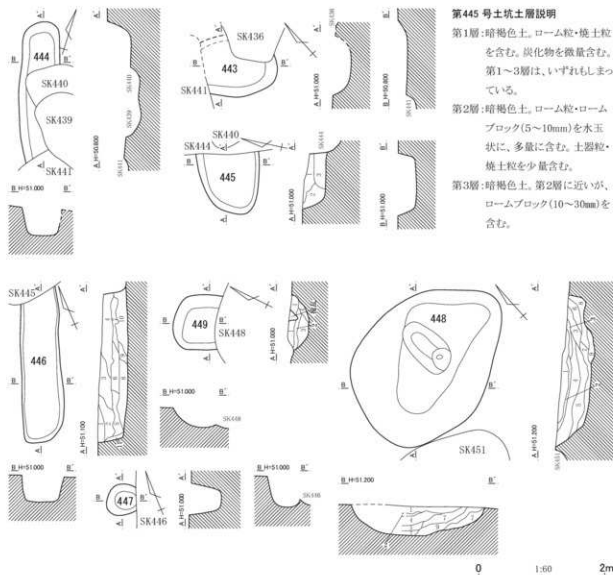
第4層:暗褐色土。第3層に近いが、ロームブロック少なく局在する。

第5層:黄白色土。黄白色ロームの大ブロック。

第6層:暗褐色土。第4層に近いが、ロームブロックが少ない。

第7層:暗褐色土。ローム粒・ロームブロック(5~30mm)を含む。土器粒をかぶり含む。

第919図 第436~442号土坑平面・断面図



第445号土坑土層説明

第1層:暗褐色土。ローム粒・焼土粒を含む。炭化物を微量含む。
第1～3層は、いずれもしまっている。

第2層:暗褐色土。ローム粒・ロームブロック(5～10mm)を水玉状に、多量に含む。土器粒・焼土粒を少量含む。

第3層:暗褐色土。第2層に近いが、ロームブロック(10～30mm)を含む。

第446号土坑土層説明

第1層:暗褐色土。ローム粒・ロームブロック(5～20mm)をかき取り含む。土器粒と焼土粒を微量含む。以下、全体にしまっており、下部はやや粘性が増す。

第2層:暗褐色土。ローム粒・ロームブロック(5～30mm)を水玉状に多量に含む。土器粒と焼土粒を微量含む。上部のロームは、灰緑色を帯びる。

第3層:暗褐色土。ローム粒・ロームブロック(5～50mm)を水玉状に多量に含む。土器粒をかき取り含む。

第4層:暗褐色土。第3層に近いが、ロームブロック(30～50mm)が少ない。ローム粒・ローム小ブロックは3層より多い。水玉状、斑状。

第5層:暗褐色土。第2層に近いが、ロームが明瞭に少ない。

第6層:暗褐色土。第4層に近いが、やや暗褐色土が多い。

第7層:暗褐色土。第5層に近いが、ロームがやや多い。

第8層:暗褐色土。第4層に近いが、ロームがかなり多く、よりしまっている。

第9層:暗褐色土。第8層に近いが、ロームが少ない。7層よりロームが多い。

第10層:暗褐色土。第8層に近いが、ロームが少ない。

第11層:暗褐色土。第5層に近いが、ロームがかなり多い(ロームは不規則に壁際、底面近くに雲状にまとまる)。

第448号土坑土層説明(1)

第1層:黒褐色土。ロームブロック(5～10mm)・白色軽石を微量含む。第1～3層は、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層:灰黄褐色土。ロームブロック(5～10mm)・ローム粒を少量含む。

第3層:灰黄褐色土。ロームブロック(5～10mm)・ローム粒を多量に含む。

第920図 第443～449号土坑平面・断面図(1)

D地点

第448号土坑土層説明(2)

第4層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒・焼土・白色軽石を微量含む。しまっており、粘性が強い。

第5層:暗褐色土。白色軽石を少量、焼土・ローム粒を微量含む。

第5~7層は、ややしまっており、粘性が強い。

第6層:褐灰色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、焼土粒を微量含む。

第7層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を大量に含む。

第8層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、ローム粒・焼土を微量含む。しまっており、粘性が強い。

第9層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)・ローム粒を多量

に含む。しまっており、粘性が強い。

第449号土坑土層説明

第1層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、ローム粒・焼土を微量含む。

第2層:褐灰色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒・焼土を微量含む。

第3層:褐灰色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。

第4層:褐灰色土。ロームブロック(5~50mm)を多量に、ローム粒・焼土を微量含む。

第921図 第443~449号土坑平面・断面図(2)

第450号土坑土層説明

第1層:黒褐色土。ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。第1~5層は、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)・ローム粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。

第3層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。

第4層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)

を多量に、ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。

第5層:灰黄褐色土。ローム粒を多量に含む。

第451号土坑土層説明

第1層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、焼土・ローム粒を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層:暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量、白色軽石を多量に、焼土を微量含む。しまっており、やや粘性が強い。

第3層:にぶい黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を多量に含む。

第4層:暗褐色土。白色軽石を多量に、ロームブロック(5~30mm)を少量、焼土を微量含む。第4~7層は、しまっており、粘性が強い。

第5層:褐色土。白色軽石を多量に、ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒を少量含む。

第6層:黒褐色土。白色軽石を多量に、ロームブロック(5~50mm)を大量に、ローム粒を多量に含む。焼土を微量含む。

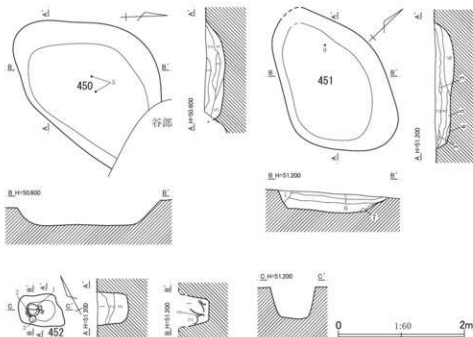
第7層:灰黄褐色土。ローム粒を多量に含む。

第452号土坑土層説明

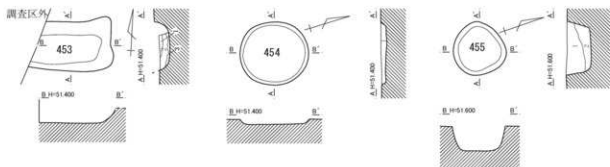
第1層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。第1~3層は、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層:黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、ローム粒・焼土を微量含む。

第3層:黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量、焼土を微量含む。



第922図 第450~452号土坑平面・断面図



第453号土坑土層説明

第1層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を少量含む。第1~3層は、ややしまっており、粘性が強い。

第2層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、ローム粒を多量に含む。

第3層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に含む。

第454号土坑土層説明

第1層: 暗褐色土。ロームブロック(5~20mm)・ローム粒を含む。土器粒・焼土粒を少量含む。

第455号土坑土層説明

第1層: 暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量含む。

第2層: 暗褐色土。ロームブロック(5~50mm)・ローム粒を多量に斑点状に含む。

第456号土坑土層説明

第1層: 暗褐色土。ロームブロック(5mm)を中量、焼土・炭化物を微量含む。第1~7層は、しまっており、粘性が強い。

第2層: 暗褐色土。ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含む。

第3層: 暗褐色土。ロームブロック(5mm)を少量、焼土を微量含む。

第4層: 暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)を中量含む。

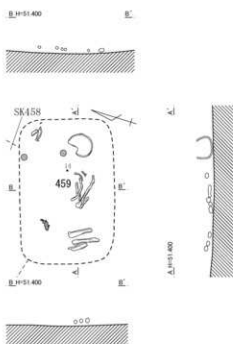
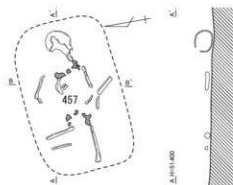
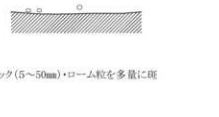
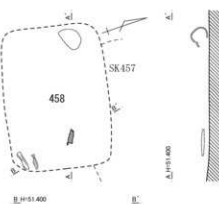
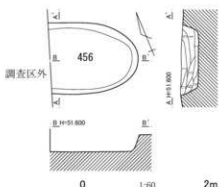
第5層: 暗褐色土。ロームブロック(5mm)を中量含む。

第6層: 暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、焼土・炭化物

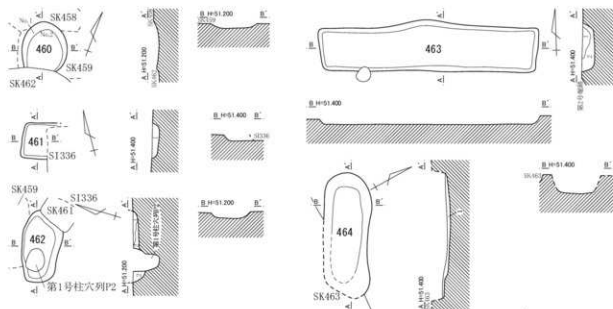
物を微量含む。

第7層: 暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量に含む。

第8層: 暗褐色土。ローム粒を中量含む。ややしまっており、粘性が強い。



第923図 第453~459号土坑平面・断面図



第461号土坑土層説明

第1層: 黒褐色土。焼土・白色軽石を微量含む。粘性が強い。

第462号土坑土層説明

第1層: 黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を多量に含む。
第2層: にぶい黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を大量に含む。

第463号土坑土層説明

第1層: 褐灰色土。As-Bらしき白色軽石を多量に、ロームブロック(5~10mm)を少量、焼土を微量含む。粘性がやや強い。
第2層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量に、As-B・焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第464号土坑土層説明

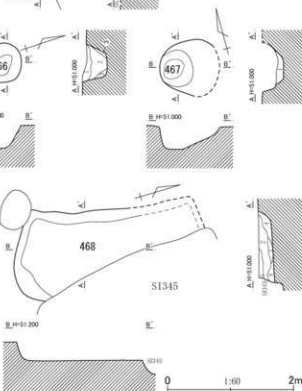
第1層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒・焼土・炭化物を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第465号土坑土層説明

第1層: 黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)を微量含む。
第2層: 黒褐色土。ローム粒を微量含む。

第466号土坑土層説明

第1層: 黒褐色土。ローム粒を少量、焼土を微量含む。第1~3層



は、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。
第3層: 灰黄褐色土。ローム粒を多量に含む。

第467号土坑土層説明

第1層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)・ローム粒を多量に含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第924図 第460~468号土坑平面・断面図(1)

第468号土坑土層説明

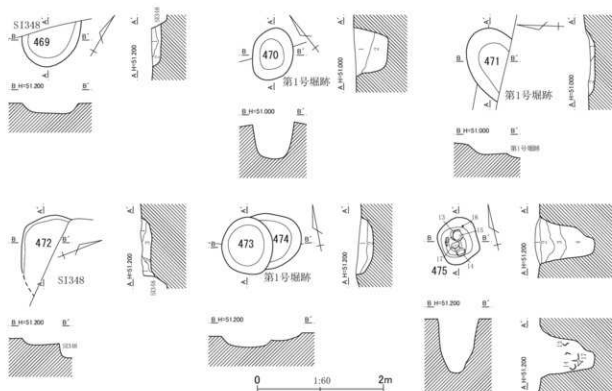
第1層:暗褐色土。白色軽石を多量に、ロームブロック(5~30mm)を少量、ローム粒・焼土を微量含む。第1~3層は、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層:暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量に、焼土・炭化物を微量含む。

第3層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第4層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を大量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第925図 第460~468号土坑平面・断面図(2)



第469号土坑土層説明

第1層:黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、焼土・ローム粒を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第470号土坑土層説明

第1層:にぶい黄褐色土。ローム粒・黒褐色土ブロック(5~10mm)を多量に含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層:にぶい黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・黒褐色土ブロック(5~50mm)を多量に含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第472号土坑土層説明

第1層:暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)・炭化物を微量含む。第1~4層は、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層:暗褐色土。ローム粒を少量含む。

第3層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。

第4層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、焼土を微量含む。

第471号土坑土層説明

第1層:灰褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層:灰褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、焼土を微

第473号土坑土層説明

第1層:暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)・焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒を少量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第926図 第469~475号土坑平面・断面図(1)

D地点

第475号土坑層説明

- 第1層:黒褐色土。白色軽石・ローム粒・焼土を微量含む。第1~4層は、ややしまっており、粘性がやや強い。
第2層:暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)を多量に、焼土・炭化

物を微量含む。

- 第3層:暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を少量、焼土を微量含む。
第4層:灰黄褐色土。ローム粒・焼土を微量含む。

第927図 第469~475号土坑平面・断面図(2)

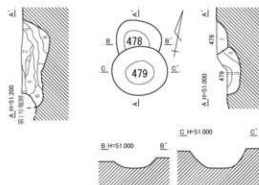
第476・477号土坑層説明

- 第1層:灰黄褐色土。ローム粒を少量、焼土・炭化物を少量含む。第1・2層は、ややしまっており、粘性がやや強い。
第2層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、焼土を微量含む。

- 第3層:にぶい橙色土。焼土層。しまっている。
第4層:明黄褐色土。ロームを主とし、黒褐色土ブロック(5~30mm)を微量含む。ややしまっており、粘性が強い。

- 第5層:明赤褐色土。焼土層。ややしまっている。
第6層:明黄褐色土。ロームを主とする黒褐色土ブロック(5~50mm)・焼土を微量含む。ややしまっており、粘性が強い。

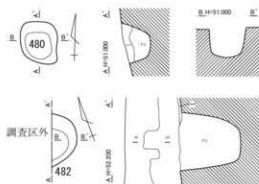
- 第7層:黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量、焼土を微量含む。粘性が強い。
第8層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、ローム粒・焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。



第478・479号土坑層説明

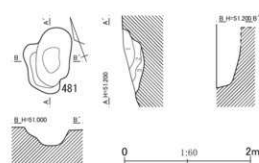
- 第1層:灰褐色土。ロームブロック(5~30mm)を大量に、ローム粒を多量に含む。第1~4層は、いずれもややしまっており、粘性がやや強い。
第2層:黒褐色土。ローム粒を少量、焼土を微量含む。

- 第3層:灰黄褐色土。ローム粒を大量に、ロームブロック(5~30mm)を多量に含む。
第4層:灰黄褐色土。黒褐色土ブロック(5~30mm)を少量、焼土を微量含む。



第480号土坑層説明

- 第1層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。
第2層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を大量に、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。



第481号土坑層説明

- 第1層:黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)を微量含む。第1~3層は、いずれもややしまっており、粘性がやや強い。
第2層:黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量、焼

土を微量含む。

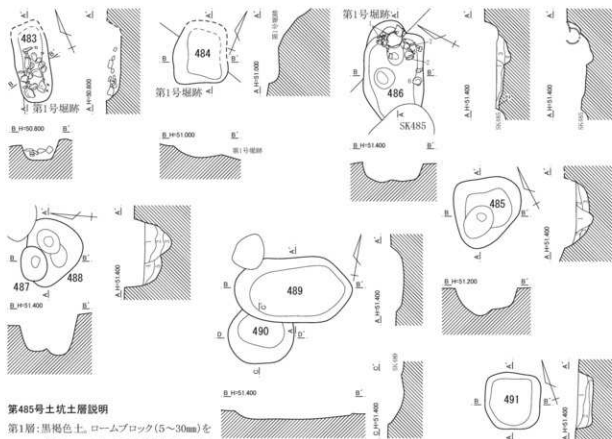
- 第3層:黒褐色土。ロームブロック(5~50mm)を多量に含む。

- 第2層:黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量、焼

第482号土坑層説明

- 第1層:にぶい黄褐色土。粘性の強いシルト質土。
第2層:暗褐色土。やや灰色みの強い暗褐色土を主に、ロームブロック(5~40mm)・ローム粒を含む。第482号土坑覆土。

第928図 第476~482号土坑平面・断面図



第485号土坑土層説明

第1層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、ローム粒・焼土を微量含む。第1~3層は、いずれもややしまっており、粘性がやや強い。

第2層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第3層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に含む。

第486号土坑土層説明

第1層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層: 灰黄褐色土。ローム粒を大量に含む。

第3層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。

第4層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を多量に含む。

第487・488号土坑土層説明

第1層: 暗褐色土。ロームブロック(5~10mm)・焼土・炭化物を微量含む。第1~5層は、いずれもややしまっており、粘性がやや強い。

第2層: 暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒・焼土を微量含む。

第3層: 暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、ローム粒・焼

土・炭化物を微量含む。

第4層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量焼土を微量含む。

第5層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・焼土を微量含む。

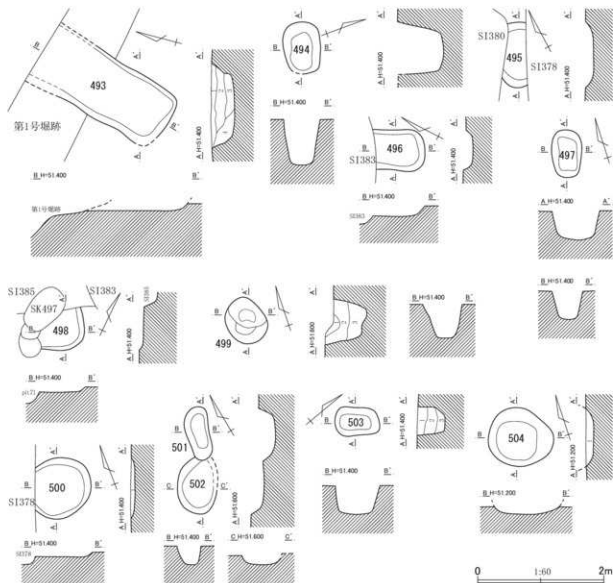
第491号土坑土層説明

第1層: 黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、ローム粒・焼土を微量含む。第1~3層は、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層: 黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・焼土を微量含む。

第3層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に含む。

第929図 第483~492号土坑平面・断面図



第493号土坑土層説明

- 第1層: 黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒・焼土を微量含む。第1~4層は、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第2層: 暗褐色土。ロームブロック(5~50mm)・ローム粒・焼土を微量含む。
- 第3層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、ローム粒・焼土・炭化物を微量含む。
- 第4層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。

第499号土坑土層説明

- 第1層: 黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)を少量、ローム粒を微量含む。第1~3層は、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第2層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土・炭化物を微量含む。
- 第3層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒大量に含む。

第500号土坑土層説明

- 第1層: 黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第503号土坑土層説明

- 第1層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、ローム粒・焼土を微量含む。第1~3層は、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第2層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒を少量、焼土を微量含む。
- 第3層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~10mm)を大量に、ローム粒・焼土・炭化物を微量含む。

第504号土坑土層説明

- 第1層: 灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。

第930図 第493~504号土坑平面・断面図

第413表 D地点・土坑計測および観察表(1)

番号	グリッド	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
429	J2, K2	円形?	(145)	39	土師器甕1点。土師器片、須恵器片。	奈良時代。
430	K2	隅丸方形	129×(71)	56	土鐘1点、鉄製刀子片1点。	SK431を切る。
431	K2	隅丸方形	158×(97)	56	土師器片。	SK430に切られる。
432	K2	楕円形	(115)×(93)	43	土師器片。	SK433を切る。
433	K2	円形	(100)	13	土師器片、須恵器片。	SK432に切られる。
434	K2	隅丸方形	133×112	28	土師器甕3点、坏1点。土師器片、須恵器片	SK434がSK435を切る。古墳時代終末期前葉。
435	K2	不整形	(126)	15		SK435に切られる。古墳時代終末期前葉。
436	K2	不整形	120	21	土師器甕1点、坏1点。土師器片。	SK438に切られる。古墳時代終末期前葉。
437	K2	不整形	212	45	土鐘1点、滑石製白玉1点。土師器片。	SK438に切られる。
438	K2	楕円形?	(130)×(44)	13	緑色凝灰岩製管玉1点、滑石製白玉。土師器片。	SK437を切る。
439	K2	不整形楕円形	173×94	38	土師器甕8点以上、台付甕脚部片1点、坏1点、土鐘2点、磨石1点。	SK440・441を切る。奈良時代後半。
440	K2	不整形	92×(66)	57		SK439に切られる。
441	K2	長方形	164×74	39	土師器片。	SK442を切る。
442	K2	隅丸方形?	78×(37)	29	土師器片。	SK441に切られる。
443	K2	楕円形	(117)×(65)	27		SK436・441に切られる。
444	K2	長楕円形	(226)×60	45		SK439～441に切られる。
445	J2, K2	楕円形	(100)×100	37		SK440・444に切られる。
446	J2, K2	長楕円形	(248)×62	43	土師器片、須恵器片。	SK445に切られる。
447	J2	不整形	49	50		SK446に切られる。
448	K2・3	不整形楕円形	284×211	52	土師器片、磨石片。	SI329、SK449を切る。
449	K2	不整形楕円形	87×(76)	33		SK448に切られる。
450	K2	不整形楕円形	(238)×193	29	土師器坏2点、高坏脚部片1点、須恵器甕片1点。土師器片。	SI346を切る。古墳時代後期初頭。
451	J3, K3	不整形楕円形	258×173	30	須恵器甕片1点、土鐘1点。土師器片。	SI349を切る。古墳時代。
452	J2	不整形	74×50	49	土師器甕1点、大型甕1点、坏1点。土師器片。	SI339と重複する。古墳時代後期初頭～前葉。
453	I2	不整形長方形	(130)×78	26	土師器片。	SI332を切る。
454	I2	円形	109	10		SI332を切る。
455	I2	不整形	83	38	土師器片。	SI331・332を切る。
456	I2・3	楕円形	(144)×114	28	土師器片。	SI333・334を切る。
457	I3	————	————	————	人骨1体分。土師器片。	SI337を切る。
458	I3	————	————	————	人骨。土師器片。	SI335・337を切る。
459	I3	————	————	————	人骨1体分。滑石製白玉1点。	SI335・337を切る。
460	I3	楕円形	(76)×72	10	土師器片。	SK458・459に切られる。
461	I3	長方形?	(56)×57	11	土師器片。	SI336に切られる?
462	I3	不整形楕円形	114×62	19	土師器片。	第1号柱穴列P2に切られる。
463	I3, J3	長方形	352×80	20	土師器片、須恵器片。	第1号柱穴列P4を切る。
464	I3, J3	長楕円形	203×73	6	土師器片。	SI338を切る。
465	J3	————	(67)	12	土師器片。	SK463・464に切られる。
466	J3	不整形	68	38	土鐘1点。土師器片。	SI349を切る。
467	J3	不整形	96	35	土師器片。	SI342・343を切る。
468	K3	不整形長方形?	(255)×147	24	土師器片。	SI345に切られる。
469	J4, K3・4	楕円形	(79)×87	16	土師器片。	SI348に切られる。
470	K4	楕円形	84×65	53	土鐘1点、土鐘片1点。土師器片。	第1号塚跡に切られる。
471	J4	楕円形	(109)×83	13	土師器片。	第1号塚跡に切られる。
472	J3	楕円形?	(90)×(82)	18	土師器片。	SI348・354に切られる。
473	J3	不整形	90	24	土師器片。	SI357、SK474を切る。
474	J3	不整形	87	10		SI357を切る。

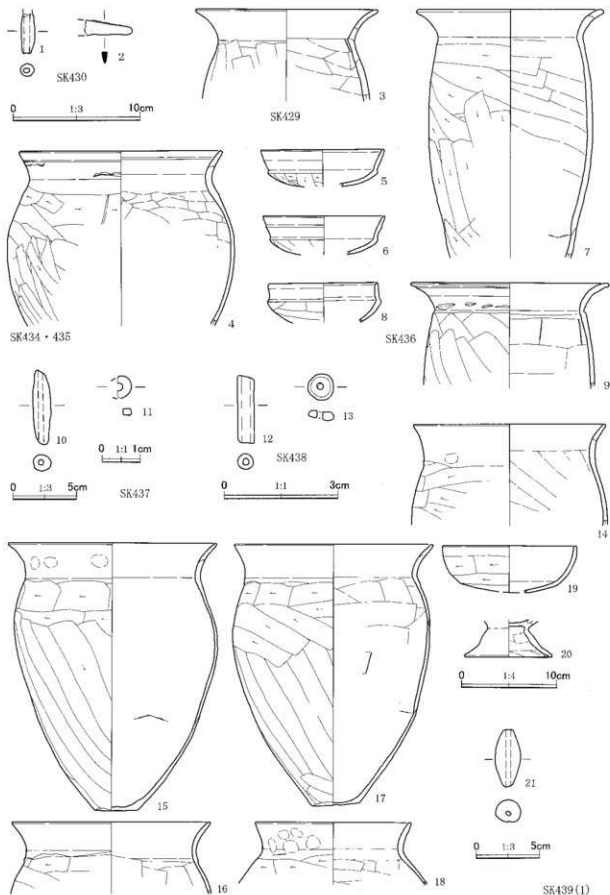
D地点

第414表 D地点・土坑計測および観察表(2)

番号	グリッド	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
475	J3	不整形?	62×69	86	土師器甕1点、坏3点、高坏1点。 土師器片。	SK476を切る。古墳時代後期中葉。
476	J3	不整形	(89)×84	43	土師器坏1点、土鐘1点。土師器片。	SK475に切られる。古墳時代後期後葉。
477	J3	楕円形	(86)×94	34		SK476と重複する。
478	J3・4	不整形円形	72×53	17		
479	J3・4	楕円形	88×78	38	土師器片、須恵器片。	SK478がSK479を切る。
480	J3・4	不整形	79	44	土師器甕1点。土師器片。	第1号堀跡に切られる。古墳時代後期初期?
481	I3	不整形円形	104×68	33	土師器片。	2基の土坑の重複例か。
482	H4	円形	75	98	土師器片。	SI364を切る。
483	I4	長楕円形	(103)×54	23	土師器片、須恵器片。大小の礫中位より出土。	第1号堀跡に切られる。
484	I4	不整形	(56)×86	15		第1号堀跡に切られる。
485	I4	不整形円形	123×105	46	土師器片。	SK486を切る。
486	I4	不整形円形	(157)×96	42	土師器甕2点、台付甕1点、坏1点、 須恵器坏2点、土鐘1点。土師器片。	SK485に切られる。平安時代前期前半。
487	I4	楕円形	55×42	54	土師器台付甕1点、坏1点、土鐘1 点、滑石製白玉1点。土師器片。	SK488がSK487を切る。平安時代 前期前半。
488	I4	不整形円形	108×89	65		
489	I4, J4	楕円形	188×103	15		SI380、SK490を切る。
490	I4	不整形	105	24	土師器片。	SI380を切り、SK489と重複する。
491	J5	隅丸方形	90×88	24		第1号地下式竈を切る。
492	J4	円形	101	19	土師器片。	SI380に切られる。
493	J4	長方形	(164)×98	37	土師器片。	SI383を切る。
494	J4	不整形円形	82×59	74		SI384を切る。
495	J4・5	円形?	103	13	土師器片。	SI378・380を切る。
496	K4	楕円形	(80)×63	14	土師器甕1点。土師器片。	SI383に切られる。奈良時代末～ 平安時代初期。
497	J4・5	楕円形	75×48	46	土師器片。	SI385、SK498を切る。
498	J4・5	不整形?	(75)	7		SI385、SK497に切られる。
499	J5, K5	不整形	73	57		2基の土坑の重複例か。SI386を 切る。
500	J5	円形	97	7	土師器片。	SI378に切られる。
501	K5	不整形円形	85×36	30	土師器甕1点。土師器片。	SK502を切る。
502	K5	楕円形	91×63	18	土鐘片1点。土師器片、須恵器片。	SK501に切られる。
503	J2	不整形円形	71×44	44		SI339を切る。
504	J4	不整形	104	13		SI378を切る。

第415表 第429・430・434～439号土坑出土遺物観察表(1)

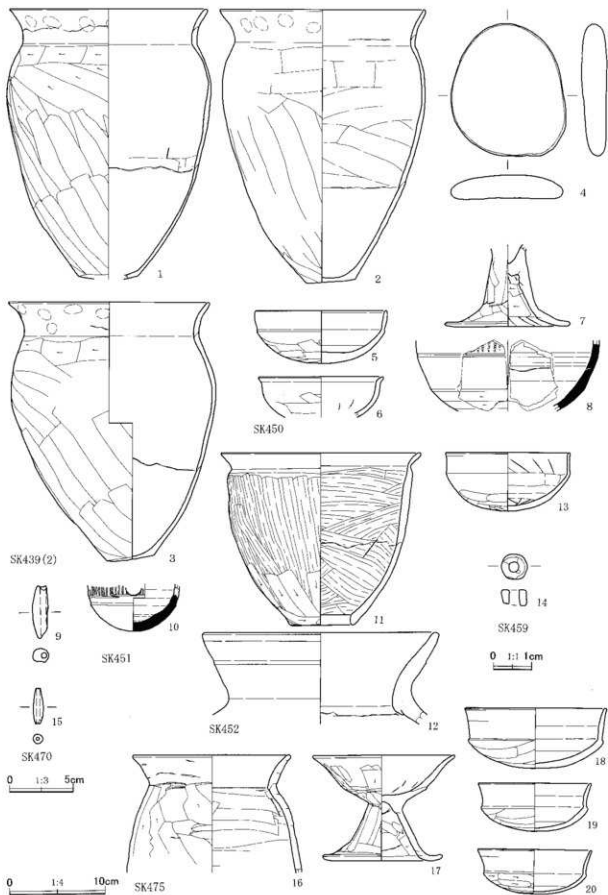
No.	器種	法量(cm)・特徴			備考	
1	土鐘	長さ[3.2]、幅1.1、厚さ1.0、重さ3.43g。胎土：白色粒。色調：にぶい黄橙色。			SK430 端部欠損	
2	鉄製品 刀子	長さ[3.9]、幅1.2、厚さ0.4、重さ3.19g。			SK430 破片	
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
3	甕	口径(19.2) — 底径 器高 [9.7]	口縁部は外反する。粘土組織み 上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部上 位ヘラケズリ。内面—口縁部ヨ コナデ。胴部上位ヘラナデ。	片岩・石英・白色 粒・黒色粒 内外—橙色	SK429 口縁部～胴部 上位1/4残存
4	甕	口径(21.2) — 底径 器高 [18.5]	口縁部は外反する。胴部は中位 が張る。粘土組織み上げによる 成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘ ラケズリ。内面—口縁部ヨコナ デ。胴部ヘラナデ。	石英・白色粒・ 黒色粒・褐色粒 内外—橙色	SK434・435 口縁部～胴部 1/4残存 内面胴部下半 は磨耗



第931图 第429·430·434~439号土坑出土遗物

第416表 第429・430・434～439号土坑出土遺物観察表(2)

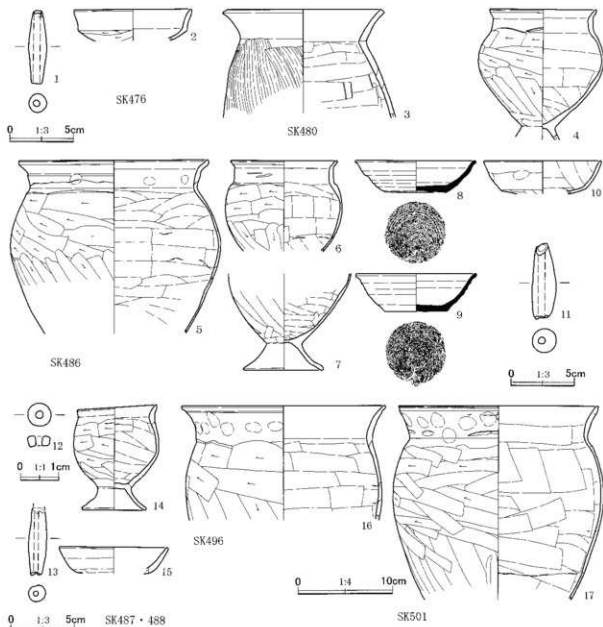
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
5	坏	口径(13.0) 底径 — 器高 [3.9]	口縁部は体部との境に稜をもって外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部不明瞭。	石英・白色粒・黒色粒 外-明黄褐色 内-明赤褐色	SK434・435 口縁部～体部 1/3残存 内面体部は磨耗
6	坏	口径(12.8) 底径 — 器高 [4.1]	口縁部は体部との境に稜をもって外傾し、中位に段を有する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部不明瞭。	石英・白色粒・黒色粒 内外-明赤褐色	SK434・435 口縁部～体部 1/3残存 内面体部は磨耗
7	甕	口径(19.5) 底径 — 器高 [26.4]	口縁部は外反する。胴部は膨らみをもたない、粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	片岩・石英・白色粒・黒色粒 内外-にぶい橙色	SK434・435 口縁部～胴部 1/3残存 内面胴部下半は磨耗
8	坏	口径 11.4 底径 — 器高 [4.2]	口縁部は体部との境に稜をもって内傾する。口唇部は内側に面をもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部不明瞭。	白色粒・黒色粒 外-明黄褐色 内-橙色	SK436 口縁部～体部 1/2残存 内面体部は磨耗
9	甕	口径(21.1) 底径 — 器高 [11.2]	口縁部は外反し、上半で強く外屈する。胴部は膨らみをもたない、粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	石英・角閃石・白色粒 内外-にぶい黄褐色	SK436 口縁部～胴部 上位1/2残存
No.	器種	法量(cm)・特徴			備考	
10	土埴	長さ5.9、幅1.4、厚さ1.3、重さ10.54g。胎土：白色粒。色調：橙色。			SK437 完形	
11	石製品 白玉	長さ0.6、幅(0.6)、厚さ0.2、孔径(0.2×0.2)、重さ0.07g。石材：滑石。調整：表裏面研磨。中央に穿孔1箇所。			SK437 1/2残存	
12	石製品 管玉	長さ1.8、幅0.5、厚さ0.4、重さ0.41g。石材：緑色凝灰岩。調整：全面研磨。中央に穿孔1箇所。			SK438 完形	
13	石製品 白玉	長さ0.7、幅0.7、厚さ0.25、孔径0.15×0.1、重さ0.16g。石材：滑石。調整：表裏面研磨。中央に穿孔1箇所。			SK438 完形	
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
14	甕	口径(20.0) 底径 — 器高 [10.5]	口縁部は外反する。胴部は上位にやや膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。頸部指頭圧痕。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	チャート・角閃石・白色粒 内外-橙色	SK439 口縁部～胴部 上位1/2残存
15	甕	口径 22.0 底径 4.6 器高 28.3	口縁部は外反する。胴部は上位に膨らみをもつ。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ、指頭圧痕。胴部～底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外-橙色	SK439 口縁部・胴部 一部欠損 内面は磨耗
16	甕	口径(20.9) 底径 — 器高 [7.6]	口縁部は外反する。胴部は上位に膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外-橙色	SK439 口縁部～胴部 上位1/2残存
17	甕	口径(20.9) 底径 5.0 器高 27.9	口縁部は外反する。胴部は上位に膨らみをもつ。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 外-にぶい橙色 内-明赤褐色	SK439 口縁部1/4・胴部1/4欠損 内面は磨耗
18	甕	口径 16.3 底径 — 器高 [6.6]	口縁部は外反する。胴部は上位に膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ、指頭圧痕。胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	チャート・角閃石・白色粒 内外-橙色	SK439 口縁部～胴部 上位3/4残存
19	坏	口径(14.1) 底径 — 器高 [4.8]	丸底。体部は深く、口縁部は短く直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面-口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。	チャート・角閃石・白色粒 内外-橙色	SK439 1/4残存
20	小型 付台甕	口径 — 底径 9.2 器高 [4.1]	台部はハの字状に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面-台部ヨコナデ。内面-台部ヘラナデ。	石英・角閃石・チャート 内外-明赤褐色	SK439 台部
No.	器種	法量(cm)・特徴			備考	
21	土埴	長さ4.6、幅2.1、厚さ1.7、重さ13.60g。胎土：白色粒・角閃石。色調：橙色。			SK439 完形	



第932图 第439·450~452·459·470·475号土坑出土遗物

第417表 第439・450～452・459・470・475・476・480号土坑出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径(20.8)	口縁部は外反する。胴部は上位に膨らみをもつ。丸みを帯びた平底。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナゲ。指頭圧痕。胴部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナゲ。胴部～底部ヘラナゲ。	石英・白色粒・黒色粒 内外一褐色 内外一明赤褐色	SK439 口縁部2/3・底部1/2欠損 内面は磨耗
		底径(6.2)				
2	甕	口径(21.6)	口縁部は外反する。胴部は上位に膨らみをもつ。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナゲ。指頭圧痕。胴部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナゲ。胴部～底部ヘラナゲ。	石英・白色粒・黒色粒 内外一褐色	SK439 口縁部～胴部1/3欠損
		底径 5.2				
3	甕	口径(21.0)	口縁部は外反する。胴部は上位に膨らみをもつ。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナゲ。指頭圧痕。胴部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナゲ。胴部～底部ヘラナゲ。	石英・白色粒・黒色粒 内外一褐色	SK439 口縁部～胴部1/2欠損 内面は磨耗
		底径 5.0				
4	磨石	法量(cm)・特徴				備考
		長さ15.1、幅12.2、厚さ2.5、重さ739.83g。石材：安山岩。調整：磨面は1面のみ。	SK439 完形			
5	坏	口径 13.9	丸底。口縁部は体部との境に稜をもつて内彎気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナゲ。体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナゲ。底部ヘラナゲ。	雲母・白色粒 内外一赤褐色	SK450 2/3残存
		底径 5.6				
6	坏	口径(13.1)	体部は内彎し、口縁部は短く外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナゲ。体部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナゲ。底部ヘラナゲ。	白色粒・褐色粒 内外一明赤褐色	SK450 口縁部～体部1/5残存
		底径 15.4				
7	高坏	口径 15.4	脚部は筒状を呈する。裾部は広がる。粘土組織み上げによる成形。	外面一脚部ヘラナゲ。裾部ヨコナゲ。内面一脚部絞り目の後ヘラケズリ。裾部ヘラナゲ。	雲母・石英・白色粒 内外一明赤褐色	SK450 脚部のみ
		底径 15.4				
8	須恵器 甌	口径 一	口ロコ成形。	外面一口ロコナゲ。体部中に刺突文および横位沈線。体部下位は回転ヘラケズリ。内面一口ロコナゲ。	白色粒・黒色粒 内一黄灰色 内一灰白色	SK450 体部破片 還元焼成
		底径 一				
9	土鐘	法量(cm)・特徴				備考
		長さ4.2、幅1.2、厚さ1.1、重さ4.91g。胎土：白色粒。色調：明赤褐色。	SK451 完形			
10	須恵器 甌	口径 一	丸底。体部に孔径(1.6cm)の円孔。口ロコ成形。	外面一口ロコナゲ。体部に刺突文および横位沈線。内面一口ロコナゲ。底面に自然軸付着。	白色粒 内外一灰色	SK451 体部～底部1/5 還元焼成
		底径 一				
11	甌	口径 21.1	口縁部は強く外反する。胴部は膨らみをもたない。底部は筒抜け。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナゲ。胴部木口状工具によるナゲの痕、下位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナゲ。胴部木口状工具によるナゲ。	片岩・石英・白色粒・黒色粒 内外一褐色	SK452 口縁部一部欠損
		底径 6.5				
12	大型甌	口径 25.2	口縁部は外反し、中に弱い稜を有する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナゲ。内面一口縁部ヨコナゲ。	片岩・石英・白色粒・褐色粒 内外一褐色	SK452 口縁部のみに 内面は磨耗
		底径 一				
13	坏	口径 13.1	丸底。体部は内彎する。口縁部はわずかに内傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナゲ。体部上半ナゲ。体部下半～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナゲ。体部～底部ヘラナゲ。	石英・白色粒・褐色粒 内外一褐色	SK452 口縁部1/4欠損
		底径 一				
14	石製品 白玉	法量(cm)・特徴				備考
		長さ0.7、幅0.7、厚さ0.4、孔径0.3×0.3、重さ0.26g。石材：滑石。調整：表裏面研磨。中央に穿孔1箇所。	SK459 ほぼ完形			
15	土鐘	長さ7.9、幅0.8、厚さ0.8、重さ1.50g。胎土：白色粒。色調：暗黄灰色。				SK470 ほぼ完形
		法量(cm)				備考
16	甕	口径 16.6	口縁部は外反する。胴部は膨らみをもたない。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナゲ。胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナゲ。胴部ヘラナゲ。	片岩・石英・白色粒・黒色粒 内外一褐色	SK475 口縁部～胴部上位
		底径 一				
17	高坏	口径 15.1	口縁部は坏部との境に弱い稜をもつて開く。脚部は下方へ開き、裾部は短い。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナゲの後、ヘラケズリ。坏部ヘラケズリ。脚部ヘラナゲ。裾部ヨコナゲ。内面一口縁部ヨコナゲ。脚部ヘラケズリ。裾部ヨコナゲ。	雲母・石英・白色粒・黒色粒 内外一褐色	SK475 脚部1/3欠損
		底径 12.8				
18	坏	口径 14.8	丸底。口縁部は体部との境に稜をもつて直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナゲ。体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナゲ。底部ヘラナゲ。	雲母・白色粒・黒色粒 内外一明赤褐色	SK475 ほぼ完形
		底径 一				
18	坏	口径 14.8	丸底。口縁部は体部との境に稜をもつて直立する。粘土組織み上げによる成形。	外面一口縁部ヨコナゲ。体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナゲ。底部ヘラナゲ。	雲母・白色粒・黒色粒 内外一明赤褐色	SK475 ほぼ完形
		底径 一				



第933図 第476・480・486～488・496・501号土坑出土遺物

第418表 第439・450～452・459・470・475・476・480号土坑出土遺物観察表（2）

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
19	坏	口径 11.8 底径 — 器高 5.1	丸底。口縁部は体部との境に稜をもって外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナゲ。体部へ底部へラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナゲ。底部へラナゲ。	雲母・白色粒・黒色粒 内外—橙色	SK475 ほぼ完形
20	坏	口径 11.9 底径 — 器高 3.7	丸底。口縁部は体部との境に稜をもって外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナゲ。体部へ底部へラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナゲ。底部へラナゲ。	雲母・白色粒・黒色粒 内外—橙色	SK475 底部1/4欠損

第419表 第476・480・486～488・496・501号土坑出土遺物観察表（1）

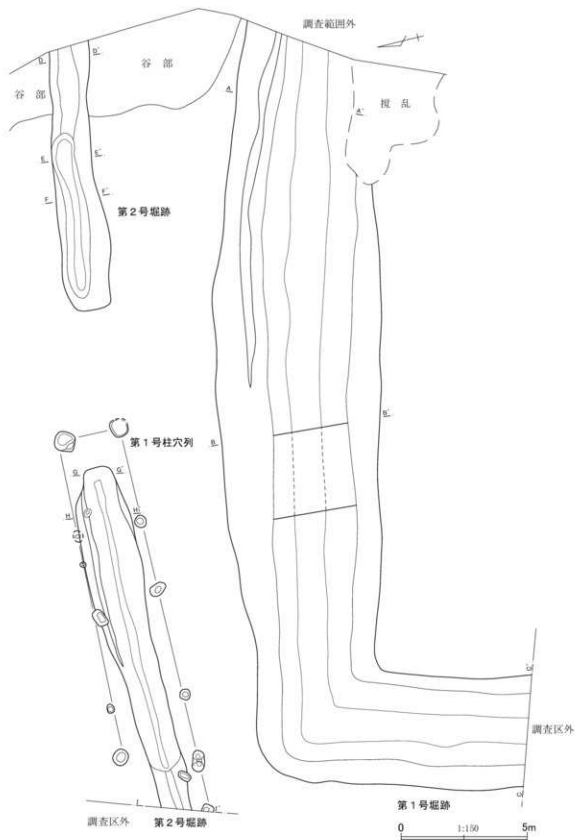
No.	器種	法量 (cm)	特徴	備考
1	土鏝	長さ5.9, 幅1.5, 厚さ1.5, 重さ9.78g.	胎土: 白色粒・黒色粒。色調: にぶい黄橙色。	SK476 ほぼ完形

第420表 第476・480・486～488・496・501号土坑出土土物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
2	坏	口径(12.3) 底径— 器高[3.4]	口縁部は体部の境に弱い稜をもつて外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内面—口縁部へ体部ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 外—灰黄色 内—褐色	SK476 口縁部へ体部 1/7残存
3	甕	口径16.5 底径— 器高[11.5]	口縁部は外反する。口唇部は面をもつ。胴部は中にやや膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部木口工具によるナデ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	片岩・石英・白色粒・黒色粒 内外—褐色	SK480 口縁部へ胴部 上位1/3残存
4	小型 台付甕	口径11.2 底径— 器高[13.8]	口縁部はコの字状を呈する。胴部は上位に膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部へ底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—褐色	SK486 台部欠損
5	甕	口径20.0 底径— 器高[18.3]	口縁部はコの字状を呈する。胴部は中に膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。指頭圧瓶。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。指頭圧瓶。胴部ヘラナデ。	石英・白色粒・褐色粒 内外—褐色	SK486 口縁部へ胴部
6	小型 台付甕	口径(11.2) 底径— 器高[9.6]	口縁部はコの字状を呈する。胴部は中に膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 外—褐色 内—明赤褐色	SK486 口縁部へ胴部 1/2残存
7	小型 台付甕	口径— 底径8.4 器高[10.2]	胴部は中に膨らみをもつ。台部はハの字状を呈する。粘土組織み上げによる成形。	外面—胴部ヘラケズリ。下端ヘラナデ。台部ヨコナデ。内面—胴部へ底部ヘラナデ。台部ヨコナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—褐色	SK486 胴部下位へ台部
8	須恵器 坏	口径12.8 底径6.5 器高3.4	平底。体部は彎曲して開き、口縁部は短く外反する。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。底部右回転糸切り。内面—ロクロナデ。	石英・白色粒・褐色粒 内外—灰色	SK486 3/4残存 還元焼成
9	須恵器 坏	口径(12.7) 底径(8.9) 器高4.0	平底。体部は彎曲して開き、口縁部は短く外反する。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。底部右回転糸切り。内面—ロクロナデ。	白色粒 内外—灰色	SK486 口縁部へ体部 4/5欠損 還元焼成
10	坏	口径(12.3) 底径(8.9) 器高[3.5]	丸みを帯びた平底。体部から口縁部にかけて内彎気味に開く。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。指頭圧瓶。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内面—口縁部へ体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	雲母・石英・白色粒内外—褐色	SK486 1/3残存
No. 器種 法量(cm)・特徴						備考
11	土鐘	長さ6.0、幅1.9、厚さ1.9、重さ20.56g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：褐色。				SK486 完形
12	石製品 白玉	長さ0.6、幅0.6、厚さ0.3、孔径0.2×0.2、重さ0.19g。石材：滑石。調整：表裏面研磨。中央に穿孔1箇所。				SK487・488 完形
13	土鐘	長さ[5.4]、幅1.5、厚さ1.3、重さ9.82g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい黄褐色。				SK487・488 端部欠損
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
14	小型 台付甕	口径8.3 底径6.6 器高11.2	口縁部は外反する。胴部は中にやや膨らみをもつ。台部はハの字状を呈する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。台部ヨコナデ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部へ底部ヘラナデ。台部ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内外—明赤褐色	SK487・488 口縁部1/5・台部1/5欠損
15	坏	口径(11.4) 底径— 器高[2.8]	体部から口縁部にかけて外傾する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部ナデ。内面—口縁部へ体部ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内外—にぶい褐色	SK487・488 口縁部へ体部 1/3残存
16	甕	口径21.5 底径— 器高[12.6]	口縁部は外反し、上位に凹線がめぐる。胴部は中にやや膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。指頭圧瓶。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—褐色	SK496 口縁部へ胴部 上位3/4残存
17	甕	口径(21.1) 底径— 器高[20.6]	口縁部は外反する。胴部は上位に膨らみをもつ。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。指頭圧瓶。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—にぶい褐色	SK501 口縁部へ胴部 1/3残存

5 堀跡および柱穴、溝跡

調査範囲をL字に抜ける堀跡1条、陸橋部と思われる断続箇所を有する堀跡1条、後者に伴うと思われる柱穴1基、浅い溝状遺構1条を検出した。堀跡に関しては、掘り込み面が奈良・平安時代の住居跡よりも上位にあり、それらの遺構を壊して造られていること、また形状や規模から見て、中世の城館跡に伴う堀跡であることが検出時点で明らかであったため、通常の溝跡と区別して、第1号堀



第934圖 第1・2号堀跡、第1号柱穴列平面圖

跡、第2号堀跡と呼称した。表土剥ぎの時点で、住居跡や土坑の検出面のローム層より上位の層準で、第1・2号堀跡を確認することができることが判ったため、一旦堀跡検出面で堀跡を掘り上げ、図化等の作業を行った。つまり、堀跡を含む一帯に関しては、中世面と思われる層準（標準土層第Ⅱb層上面）で堀跡を精査した後、奈良・平安時代以前の遺構が確認できるローム面まで下げ、それら下位の遺構を精査した。遺構検出面が2面あることになるが、上位の遺構検出面で検出できたのは、堀跡のみであった。なお、第2号堀跡と第1号柱穴列とは、別種の遺構であるが、空間的に重なり合うとともに、機能的に密接不可分な関係にある施設と考えられるため、まとめて記載することにした。

第1号堀跡（第934～938図、第421表、図版221・222・238）

調査地点の南半、H3・4、I3・4、J3・4、K4グリッドに位置する堀跡である。多数の住居跡、土坑と重複するが、いずれの遺構をも切っている。東端から先は、堀底以下に達する深さで埋設されていた浄化槽および旧校舎により壊されており、南端は、調査範囲外である。また、東西方向の堀跡の一部、調査時に通路とした土橋部分の下部は、未調査である。確認面の大半は、標準土層第Ⅱb層上面である。

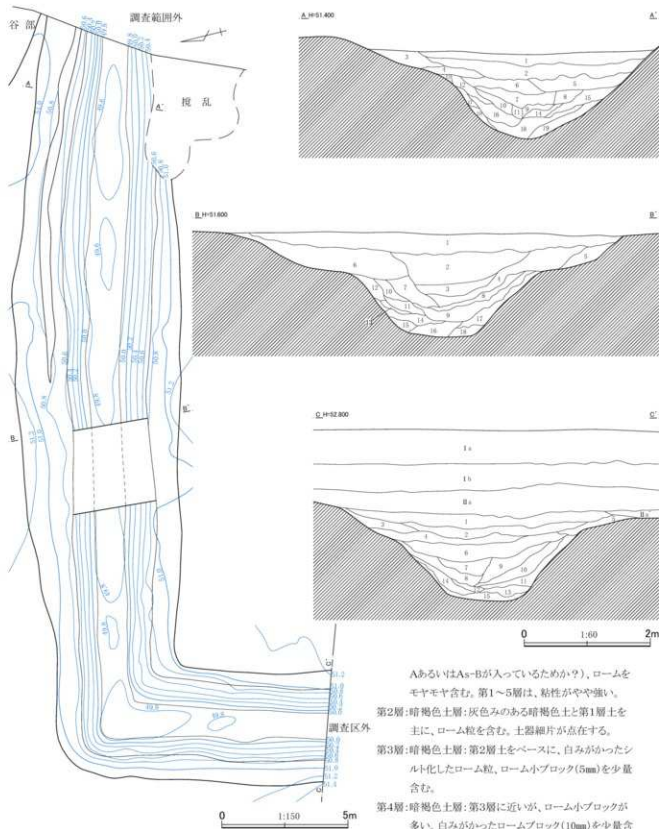
調査範囲の南半をほぼ東西に直線的に走り、南西半の西縁近くで直角に折れ、南縁に抜けてゆく。今回の調査範囲外である南側に建物群を擁し、それらを方形、長方形に取り巻く堀跡の一部であるとすれば、調査した部分は、北西隅周辺から北辺にかけての一角に相当しよう。規模は、東西方向で30.10m、南北方向で10.81m、東西方向の走向は、N-77°-Eである。

断面形は、中位に稜を有し、それより上位がゆるやかに広がる逆台形に近い形態である。また、東西方向の堀跡東半の北側側壁上部には、犬走り状の平場が見られる。上端での堀幅は、東端寄りの残りのよい部分で5.80m、東西方向の堀跡中央で6.31m、南端で4.77mである。堀底の幅は、1.00～1.60mである。深さは、東西方向の堀跡で1.63m、南端で1.39mである。堀底は、おおむね平坦であるが、西側から東側に向かって、いくらか傾斜し、深くなる。

断面図を作成した箇所により覆土がかなり異なるため、各土層断面について、簡単な所見を加えたい。

A-A' 断面では、覆土は、20層に分けられた。全体に奈良・平安時代以前の遺構覆土に比べ、黒みが弱く、あるいは灰色みの強い暗褐色土が主となり、とくに上層（第935～937図：A-A' 断面第1～6層）には、灰白色、灰色の軽石（As-AあるいはAs-B）が含まれ、鎌で切るとシャリシャリした感触があった。また、中層（第7～16層）以下の層に比べ、細かな層に分けることが困難であった。これは、堀跡がかなり埋まった段階以降の緩慢な埋没過程をある程度示すものと考えられる。中層は、細かな層に分けられ、また、そうした小さな単位をなす層が乱れ入るような堆積状態を示す点も上層とは異なる。ローム粒やロームブロックを多量に含む層（第10・15層）が見られることも一つの特徴である。下層（第17～20層）は、主にロームや砂質土からなり、側壁の崩落土などが一次的に流入したものと考えられる。

B-B' 断面では、覆土は、18層に分けられた。A-A' 断面と大きな違いは見られないが、上層（第935～937図：B-B' 断面第1～6層）にやや乱れが見られること、下層（第14～18層）にも、ローム粒やロームブロックを多量に含む層（第17層）があることなど違いがある。



第1号堀跡土層説明(1)

(A-A'断面)(1)

第1層: 灰黄褐色土層: 灰黄褐色土層, シヤリシヤリしており(As-

AあるいはAs-Bが入っているためか?), ロームをモヤモヤ含む。第1~5層は、粘性がやや強い。

第2層: 暗褐色土層: 灰色みのある暗褐色土と第1層土を主に、ローム粒を含む。土器細片が点在する。

第3層: 暗褐色土層: 第2層土をベースに、白みがかったシルト化したローム粒、ローム小ブロック(5mm)を少量含む。

第4層: 暗褐色土層: 第3層に近いが、ローム小ブロックが多い、白みがかったロームブロック(10mm)を少量含む。

第5層: 暗褐色土層: 第3層に近いが、ロームブロック(5~30mm)がかなり多くなる。輪郭の不明瞭なブロックが主。

第935図 第1号堀跡等高線・断面図(1)

D地点

第1号堀跡土層説明(2)

(A-A'断面)(2)

- 第6層:暗褐色土層:第3層に近いが、第5層以上にロームブロックが多い(黄褐色ロームブロックも加わる)。粘性がやや強い。
- 第7層:暗褐色土層:ローム粒・ローム小ブロック(5mm)・土器粒が点在する。
- 第8層:灰褐色土層:第7層土を主に、灰黄褐色シルト化ローム(あるいは茶色がかった灰色ローム)を、モヤモヤと多量に含む。灰色みがさらに増し、シルト化が著しくなる。シャリシャリ感は乏しくなる。
- 第9層:暗褐色土層:第8層土を主に、灰黄褐色シルト化ローム(5~8mm)を多く含む。
- 第10層:暗褐色土層:暗褐色土とやや白みがかったローム粒・ロームブロック(5~100mm)の混合土。ロームの方が多。
- 第11層:暗褐色土層:第7層土に近いが、ロームが若干少ない。
- 第12層:暗褐色土層:第10層に近いが、ロームが少ない。
- 第13層:黄褐色土層:白みがかったロームの崩落土。暗褐色土を少量含む。
- 第14層:灰黄褐色土層:白みがかったローム粒・ロームブロック(5~40mm)と暗褐色土の斑状の混合土。
- 第15層:灰黄褐色土層:白みがかったローム粒・ロームブロック(5~40mm)を主に、暗褐色土を含む。
- 第16層:灰褐色土層:灰色がかった暗褐色土を主に、ローム粒を少量含む。
- 第17層:灰褐色土層:第16層に近いが、白みがかったローム粒・ロームブロックを多量に含む。砂が混合しており、シャリシャリ感がある。
- 第18層:灰褐色土層:第16層に近いが、粘性が増し、砂を含み、小礫が点在する。
- 第19層:灰褐色土層:灰褐色土シルト化ロームの崩落土。小礫(10~30mm)が点在する。
- 第20層:灰褐色土層:第19層土の灰褐色シルト化ロームと砂を主とする。

(B-B'断面)

- 第1層:暗褐色土層:灰色みの強い暗褐色土(シャリシャリしており、乾くとカチンコチンにしまる)を主に、ローム粒・ロームブロック(5~30mm)をかき混ぜ、土器粒を少量含む。
- 第2層:暗褐色土層:第1層に近いが、ロームブロックがはるかに少ない。灰色みの強い純一な暗褐色土・礫土を含み、炭化物を微量含む。しまっており、粘性がやや強い。
- 第3層:暗褐色土層:第2層土とくすんだ色調のロームブロック(5~20mm)の混合土。
- 第4層:暗褐色土層:第2層に近いが、ややローム小ブロックが多い。炭化物を微量含む。

- 第5層:暗褐色土層:第4層に近いが、さらにローム小ブロックおよびロームブロック(5~30mm)が多い。炭化物を微量含む。
- 第6層:暗褐色土層:第2層に近いが、やや黒み強く、摩耗した土器粒(5~20mm)をかき混ぜ、所々ローム小ブロック(5mm)を含む。炭化物を微量含む。
- 第7層:暗褐色土層:第4層土とベース同じ。くすんだ色調のロームブロック(5~40mm)を斑点状にかなり含む。
- 第8層:暗褐色土層:暗褐色土とローム粒、ロームブロック(5~50mm、主は5~15mm)の混合土。部分的にロームと暗褐色土は同量。
- 第9層:暗褐色土層:ローム粒、ローム小ブロック(5mm)を少量、土器粒(5mm)を微量、炭化物を極微量含む。
- 第10層:暗褐色土層:第7層に近いが、ローム小ブロックのみ(2~4mm大のローム粒と5mm大のローム小ブロック)。しまり増し、粘性も強くなる。土器粒の混入は少なくなり、小さな欠片のみとなる。
- 第11層:暗褐色土層:第9層土の暗褐色土とローム粒、ロームブロック(5~20mm)の混合土。ローム(白っぽいくすんだ色)は、モヤモヤ雲状をなす。
- 第12層:暗褐色土層:第11層に近いが、さらにロームが多い。ロームは、モヤモヤ全体に混入する。
- 第13層:暗褐色土層:第11層に近いが、ロームが少ない。モヤモヤとローム粒を含み、第9層よりロームが多い。
- 第14層:暗褐色土層:第11層に近いが、全体にロームが多く、色が明るくなる。ロームブロック(30mm)を極微量含む。暗褐色土とローム(シルト化し、白っぽく、くすんだ色調)は、よく混ざっている。
- 第15層:暗褐色土層:第14層に近いが、さらにロームが多く、色調が明るくなる。暗褐色土とローム(シルト化し、白っぽく、くすんだ色調)は、よく混ざっている。
- 第16層:暗褐色土層:第8層に近いが、ロームがやや多い。第14・15層より色調が暗い(暗褐色土が多い)。
- 第17層:暗褐色土層:第8層に近いが、ロームが少ない。(第8・17層は、堀壁の崩れたロームの多い層)。第8層よりロームの入り方が不規則。ロームが多い部分と少ない部分がある。
- 第18層:暗褐色土層:第17層に近いが、ロームが少なく、くさね礫を1点含む。

(C-C'断面)(1)

- 第1a層:灰黄褐色~暗褐色土層。表土層。現代の表土。ガラ等を多量に含む。
- 第1b層:灰黄褐色~暗褐色土層。現代以前~近世頃までの表土。As-Aと思われる白色軽石をかき混ぜ、シャリシャリしている。

第936図 第1号堀跡等高線・断面図(2)

第1号堀跡土層説明(3)

(C-C'断面)(2)

第IIa層:暗褐色～黒褐色土層。通常の台地上の古代遺構を覆う暗褐色土の上部、とくに黒みが強く、粘性がある。この層の上部までAs-A、白色軽石をバラバラ混入する。

第IIa層:暗褐色～黒褐色土層。IIa層に近いが、黒みが弱い。

第1層:暗褐色土層。やや灰色み、黄色みのある暗褐色土を主に、ローム粒を少量、炭化物・焼土を微量含み、土器細片をかきり含む。第1～5層は、ややしまっており、粘性がやや強い。

第2層:暗褐色土層。第1層に近いが、やや黒みが強い。ローム粒が少し少ない。

第3層:暗褐色土層。第2層に近いが土器粒が多く、黒みが少し弱い。

第4層:暗褐色土層。第2層土とベースは同じ。ローム粒、ロームブロック(5～10mm)をかきり含む。部分的にロームが層状をなし集中する。

第5層:暗褐色土層。第4層に近いが、ロームブロックが大きく(5～30mm)。局在、集塊する。

第6層:にぶい黄褐色～暗褐色土層。第2層に近いが、ベースの土は若干灰色みがある。土器細片が上位の層よりかなり減るとともに、粘性が増す。

第7層:にぶい黄褐色～褐色土層。第6層に近いが、黒み、灰色みがみかみ増す。やや大きな土器片を含む。第7～11層は、上位の層に比し、しまっており、粘性も強い。

第8層:にぶい黄褐色～暗褐色土層。第6層に近いが、ローム粒・土器粒(あるいは1～2mm大の焼土)が多い。

第9層:にぶい黄褐色～暗褐色土層。第7層とベース同じ。ロームブロック(5～30mm)がはるかに多く、モヤモヤ雲状、星雲状に局在する。土器細片をかきり含む。

第10層:にぶい黄褐色～暗褐色土層。第7層とベース同じ。やや黒みが増す。ローム粒が塊状、雲状にまとまる箇所がある。

第11層:にぶい黄褐色～暗褐色土層。第10層とベース同じ。灰黄色のシルト化ロームの大ブロック(80mm、200mm)あり、ローム粒・ロームブロック(5～50mm)も点在する。

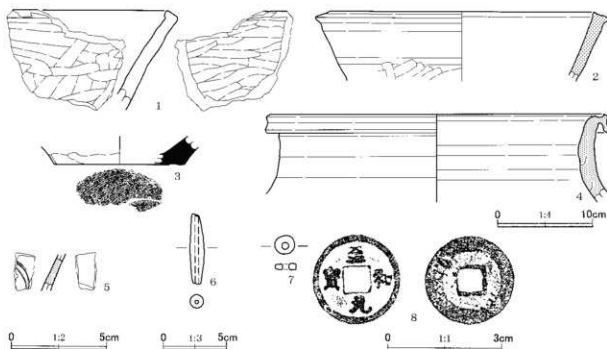
第12層:にぶい黄褐色～暗褐色土層。第10層とベース同じ。下部に沿っての化ロームブロック(5～20mm)が並ぶ。

第13層:にぶい黄褐色～暗褐色土層。第10層とベース同じ。全体に第7層より黒みがあり、ローム粒・ローム小ブロック(5mm)を斑点状に含む。しまっており、粘性が強い。

第14層:にぶい黄褐色～暗褐色土層。第10層とベース同じ。黒みが第7層よりあり、白みの強いローム小ブロックが点在する。しまっており、粘性が強い。

第15層:にぶい黄褐色～暗褐色土層。第10層とベース同じ。白みの強いシルト化ロームブロック(5～100mm)、モヤモヤ不規則に乱れ入る。局所的に暗褐色土(あるいはにぶい黄褐色土)よりロームの方が多い。しまっており、粘性が強い。

第937図 第1号堀跡等高線・断面図(3)



第938図 第1号堀跡出土遺物

第421表 第1号堀跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形製・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	口径 — 底径 — 器高 —	口唇部は内側に縮み出される。体部は直線的に開く。ロクロ成形。	外面—ロクロナデの後、ヘラナデ。内面—ロクロナデの後、ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外—灰色	口縁部～体部破片
2	陶器鉢	口径 (28.2) 底径 — 器高 [7.3]	口唇部は内・外側に縮み出される。体部は直線的に開く。ロクロ成形。	外面—ロクロナデの後、体部ヘラナデ。内面—ロクロナデ。平滑。	石英・白色粒・ 褐色粒 内外—明赤褐色	口縁部～体部 上位1/8残存 酸化塩焼成
3	須恵器甕	口径 — 底径 (13.9) 器高 [3.0]	平底。体部は直線的に開く。ロクロ成形。	外面—ロクロナデの後、下端部ヘラナデ。底部回転糸切り。内面—ロクロナデ。非常に平滑。	白色粒・黒色粒 内外—灰色	体部下位～底 部1/4残存 還元塩焼成
4	陶器甕	口径 (35.4) 底径 — 器高 [9.3]	口縁部は折り返される。口唇部は上方に縮み上げられる。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。自然釉。内面—ロクロナデ。	白色粒・小礫 外—暗オリーブ色 内—ふい褐色	口縁部破片 常滑焼
5	青磁甕	口径 — 底径 — 器高 —	ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。内面—ロクロナデ。陰刻文。	聖徳 輪葉—明科— 灰色胎土—灰白色	体部破片
No.	器種	法量 (cm)・特徴				備考
6	土鏝	長さ5.6、幅1.1、厚さ1.1、重さ6.53g。	胎土：白色粒・黒色粒。色調：明赤褐色。			完形
7	石製品 白玉	長さ0.5、幅0.5、厚さ0.2、孔径0.2×0.1、重さ0.09g。	石材：滑石。調整：表裏面研磨。中央に穿孔1箇所。			完形
8	渡来銭	長さ2.4、幅2.4、厚さ0.15、孔径0.7×0.7、重さ3.31g。	銅銭。北宋銭「至和元宝」、真書。至和元年(1054)初鋳。			完形

C-C' 断面では、覆土は、15層に分けられた。上層(第935～937図：C-C' 断面第1～6層)は細かな分層が困難であること、その意味で緩慢な堆積過程が推定される点、以下の層が細かな層に分かれ、また、ローム粒やロームブロックを多量に含む層(第9・11・15層)が見られることなど、A-A' 断面、B-B' 断面と共通する特徴が見られるが、下層にロームや砂質土のかなり均質な一次流入土が見られない(中・下層が截然と分けられない)など違いもあるようである。

堀跡が壊している住居跡などの遺構に由来する土師器片などの遺物は、覆土の上下を問わず万遍なく出土しているが、中世の陶器片、土器片(第938図1・2・4)は、上述した中層から出土している。また、中層からは、大小の河原石がややまとまって複数箇所から出土している。重複関係、出土遺物から見て、中世の遺構と考えられる。

第2号堀跡および第1号柱穴列(第934・939～943図、第422～424表、図版223・224・238)

第2号堀跡は、調査地点の中央、やや北寄りを東西に走る堀跡であり、第1号柱穴列は、第2号堀跡の西側の堀跡を取り巻くように並ぶ柱穴の並びである。第2号堀跡は、3H、3I、3J、3Kグリッド、第1号柱穴列は、3H、3I、3Jに位置する。多数の住居跡、土坑と重複するが、いずれの遺構をも切っている。西側は、調査範囲外であり、第2号堀跡の東側は、堀底以下に達する深さで埋設されていた浄化槽により壊されている。この部分谷部が北側から侵入しており、そのまま谷部に合流していた可能性も考えられる。両遺構ともに確認面は、標準土層第IIb層上面、あるいは灰黄褐色のローム層上面である。以下、第2号堀跡、第1号柱穴列の順に記載する。

第2号堀跡は、調査範囲のほぼ中央で、一旦堀跡が途切れ、出入のための陸橋部が設けられている。この陸橋部を境に、東側の堀跡を「東堀跡」、西側の堀跡を「西堀跡」と呼称する。陸橋部を含めた堀跡の全長は30.75m、東堀跡の現存長は10.58m、西堀跡の現存長は14.10m、陸橋部の幅は6.20mである。個々に測った長さの総和が全長と一致しないのは、堀跡全体がかすかに弧を描くかにも見え、東堀跡、西堀跡の中心軸の方向が、わずかではあるが、ずれているためである。ちなみに底面の中央

を通る中心軸の方位は、東堀跡が $N-100^{\circ}-E$ 、西堀跡が $N-89^{\circ}-E$ である。なお、第1号堀跡と本遺構との堀跡中央での間隔は、東堀跡で5.43m、西堀跡で3.96mであり、東側から西側向かって狭くなる。

断面形は、東堀跡ではV字形というよりU字形に近い部分もあるが、西堀跡ではV字形に近い。西堀跡の東半の北側側壁には、犬走り状の平場が見られる。位置は異なるが、第1号堀跡と共通する形態上の特徴である。上端での堀幅は、東堀跡で1.59～1.98m、西堀跡で1.14～2.22m、堀底の幅は、東堀跡で28～87cm、西堀跡で18～35cmである。深さは、東堀跡で53～70cm、西堀跡で30～88cmである。堀底には、かなり凹凸が見られる。また、西から東に向かってゆるやかに傾斜するとともに、西堀跡に比べ東堀跡の方が、堀底の絶対高が40cm以上低い。

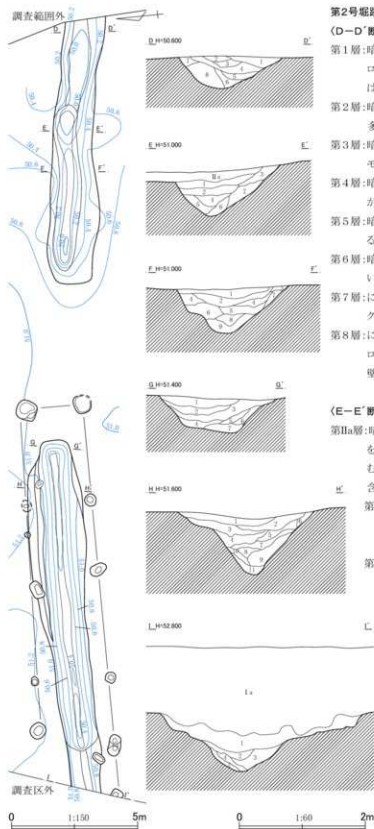
覆土に関しては、総じて細かな層に分けられ、単純な水平堆積がほとんど見られないこと、ロームが卓越する層が多く断面で見られること（第939・940図：D-D'断面第7・8層、E-E'断面第7層、F-F'断面第6・7・9層、H-H'断面第3・9～11層）などが指摘できる。なお、第939・940図のD-D'断面に関しては、何らかの形で堀跡上部が壊されているらしく、第1層とした土層は、本遺構の覆土に含まれないとしたい。

規模や走向に違いはあるが、西堀跡の一部に犬走り状の平場が見られるなど、第1号堀跡と掘り方がよく似ており、やはり第1号堀跡と関連する遺構と見てよいかと思う。堀跡が壊れている住居跡などの多数の遺構に由来する土師器片などの遺物は、覆土の上下を問わず万遍なく出土しているが、第1号堀跡と関連する遺構であることが間違いないければ、覆土中より出土した常滑焼の破片（第942図9）が本遺構の時期を示す手掛かりと考えられる。第1号堀跡と同様に、中世の遺構と見てよいであろう。

第1号柱穴列は、第2号堀跡の西堀跡に密接あるいは近接して2列に並ぶ柱穴列であり、形態、規模から見て建物跡とは考えにくい。堀の機能を補強し、補填するための施設の跡と考えた遺構である。単に2列の櫛列跡である可能性もあるが、おおよそ対面する位置に柱穴が配されており、調査範囲内での西堀跡全体を圍繞する何らかの上部構造をもつ施設である可能性が考えられる。以下、そうした見方に沿って記載を進める。

検出できたのはP1～P5の北側の並びとP6～P11の南側の並びの2列である。全体は西側の辺を欠いた細長い長方形を形作っている。柱心間での規模は、北側のP1～P5間で12.86m、P5の西にも柱穴が続くとすれば、現存長は、14.75mということになる。南側のP6～P11間では、15.60m、東側のP5～P11間で2.29mである。P1、P5の柱心を結ぶ直線は、 $N-87^{\circ}-W$ を指している。柱心間での柱間の長さは、北側の並びで1.94～3.90m、南側の並びで1.84～4.32mとかなり長短がある。P1～P7、P3～P9以外は、ほぼ対面する位置にあり、南北の対になる柱を横木などで連結するような構造であったとも考えられる。

柱穴の上端での平面形は、P1、P2、P7～P10がやや歪な円形、楕円形、P3、P5、P11が微妙に角張った形態と、かなり区々であり、大きさにも大小がある。最深部での深さは、P1が20cm、P2が47cm、P3が84cm、P4が12cm、P5、P8が38cm、P6が56cm、P7が66cm、P9が44cm、P10が35cm、P11が50cmである。東側の短辺をなす柱穴として、径が大きく、比較的深い柱穴を配し、あとは任意に大小、深浅のある柱穴を穿った模様である。P2のように細い柱穴に関しては、あるいは丸太杭のようなものが打ち込まれた跡なのかもしれない。なお、P3、P4間には、さらに径の小



第2号堀跡土層説明(1)

(D-D'断面)

第1層:暗褐色土層:にぶい色調の暗褐色土を主に、ローム粒・ローム小ブロックを含む。土器粒を微量含む。第1~8層は、いずれもしまっている。

第2層:暗褐色土層:第1層に近いが、ローム小ブロックが若干多い。

第3層:暗褐色土層:第1層に近いが、ロームが多い。ロームは、モヤモヤ全体に入る。

第4層:暗褐色土層:第1層に近いが、若干ロームが多く、黒みが強い。

第5層:暗褐色土層:第3層に近いが、ロームがよく混合している。

第6層:暗褐色土層:第4層に近いが、暗褐色土がよく混合している。

第7層:にぶい黄褐色土層:暗褐色土とローム粒・ロームブロック(5~50mm)の斑状の混合土。土器粒を微量含む。

第8層:にぶい黄褐色土層:第7層に近いが、ロームが多い。ロームの方多く、ロームブロック(5~100mm)を含む。堀壁などの崩落土か。

(E-E'断面)

第IIa層:暗褐色土層:ややくすんだ(灰黄褐色に近い)暗褐色土を主に、ローム粒をかなり含み、ローム小ブロックを含む。土器粒(5~8mm)をかなり含み、炭化物を微量含む。

第1層:暗褐色土層:第IIa層に近いが、ロームが多い。ロームブロックは、10mm大。炭化物を微量含む。第1~6層は、いずれもしまっている。

第2層:暗褐色土層:第IIa層に近いが、ロームが多い。ロームブロックは、5~30mm大で、不規則な水玉状を呈する。

第3層:暗褐色土層:第IIa層に近いが、ロームが多い。ロームは、霜降り状を呈する。

第4層:暗褐色土層:第IIa層に近いが、ロームが多い。第1~2層よりはるかにロームが少なく、第IIa層により近い。

第5層:暗褐色土層:第IIa層に近いが、ロームが多い。局部的(とくに下部)にロームブロック(5~50mm)を含む。

第6層:暗褐色土層:第2層に近いが、ロームが全体に混ざっており、量も多い。

第7層:褐色土層:ロームと暗褐色土の斑状の混合土。焼土粒を含む。

第939図 第2号堀跡、第1号柱穴列等高線・断面図(1)

第2号掘跡土層説明(2)

(F-F'断面)

- 第1層:暗褐色土層:暗褐色土を主に、ローム粒・ローム小ブロックを少量含む。土器粒が微量点在する。第1~6層は、しまっている。
- 第2層:暗褐色土層:第1層に近いが、ロームが多い。ロームブロック(径5~20mm大)をモヤモヤ斑状に含む。
- 第3層:暗褐色土層:第1層に近いが、ロームが多い。ロームの含有量は、第2層より少なく、第4層より多い。
- 第4層:暗褐色土層:第1層に近いが、ロームがやや多い。第2層よりロームが少ない。
- 第5層:暗褐色土層:第1層に近いが(第1層に土質などが最も類似する層)、ロームが多い。第3~4層よりロームが少ない。
- 第6層:褐色土層:暗褐色土とローム粒・ロームブロック(5~50mm)がほぼ同量混ざる混合土。部分的にロームの方が多い。
- 第7層:褐色土層:第6層に近いが、さらに、ロームが多い。しまっている。
- 第8層:暗褐色土層:第6層に近いが、ロームが少なく、暗褐色土の方が多い。ロームブロックは、5~30mm大が主となる。粘性が強い。
- 第9層:褐色土層:第6層に近いが、ロームが少ない。第8層よりロームが多く、暗褐色土は、若干灰色みを帯びる。粘性が強い。

(G-G'断面)

- 第1層:暗褐色土層:ローム粒・ローム小ブロックを含む。焼土粒・土器粒を微量含む。第1~3層は、しまっているが、粘性はあまりない。
- 第2層:暗褐色土層:第1層に近いが、ロームが多い。ロームは、輪郭がはっきりしないが、所々にブロック(5~8mm)をなす。
- 第3層:暗褐色土層:第1層に近いが、黒みややや強く、ロームが少ない。土器粒は第1層より目立つ。
- 第4層:暗褐色土層:第2層に近いが、ロームが多い。ロームブロック(5~10mm)を含む。暗褐色土とロームは同量。第4~7層は、上位の層に比し、粘性が増す。
- 第5層:暗褐色土層:第3層に近いが、ロームが多い。ロームブロック(5~20mm)が少量点在する。
- 第6層:暗褐色土層:第3層に近いが、若干ロームが多い。
- 第7層:暗褐色土層:第4層に近いが、ロームが少ない。ロームと暗褐色土はよく混している。

(H-H'断面)

- 第1層:暗褐色土層:ローム粒・ロームブロック(5~15mm)をかなり含む。ロームブロックは、不規則に局在する。焼土粒・土器粒が点在する。炭化物を極微量含む。ややしまっており、粘

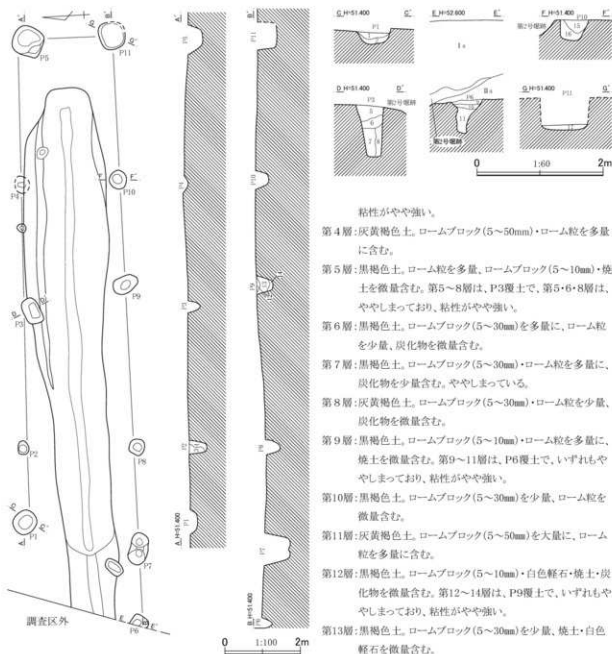
性がやや強い。

- 第2層:暗褐色土層:ローム粒・ローム小ブロック(5mm前後)を少量、焼土粒・土器細片を微量、炭化物を極微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第3層:暗褐色土層:第1層に近いが、ロームブロックは局在に多く、大きい。ロームブロック(5~30mm)はやはり不規則に局在する(中世土壇などによく見られる覆土。「暗褐色土+水玉ロームブロック」)。炭化物を極微量含む。
- 第4層:暗褐色土層:第2層に近いが、ローム粒・ローム小ブロックが少ない。炭化物を極微量含む。
- 第5層:暗褐色土層:第2層に近いが、ローム粒・ローム小ブロックが少ない。ローム粒、ローム小ブロックの量は、第2層>第5層>第4層。炭化物を極微量含む。
- 第6層:暗褐色土層:第2層に近いが、ローム粒・ローム小ブロックがやや多い。ロームは、モヤモヤとして壁際に多い。炭化物を極微量含む。
- 第7層:暗褐色土層:第4層に近いが、ロームブロック(5~30mm)がモヤモヤ斑状に局在する。炭化物を極微量含む。
- 第8層:暗褐色土層:第4層に近いが、若干ローム小ブロックが少なく、黒みが増す。かたまりし、粘性が強まる。
- 第9層:灰黄褐色土層:暗褐色土とやや白みのあるロームの同量の斑状の混合土。よく混ざっているが、ロームブロック(5~20mm)が見える。土器粒を微量含む。かたまりし、粘性が強まる。
- 第10層:灰黄褐色土層:第9層に近いが、ロームが少なく、ロームブロックは、はっきり見えない(モヤモヤしている)。
- 第11層:灰黄褐色土層:第9層に近いが、ロームがやや多い。ロームブロックは、はっきり見えない(この点では、第10層に似る)。

(I-I'断面)

- 第1a層:灰黄褐色~暗褐色土。雑瓦などを含む。攪乱層。表土。
- 第1層:暗褐色土層:ローム粒・ローム小ブロックを含む。第IIa層に近いが、通常の第IIa層よりローム小ブロックが多いが、土器小片をかなり含む。
- 第2層:暗褐色土層:第1層に近いが、ローム小ブロックが多い。第2~3層は、上位の層に比し、しまっており、粘性が強い。
- 第3層:暗褐色土層:第2層に近いが、全体にロームが多い。ローム粒、ロームブロック(20~50mm)が不規則に集中する集塊を含む。しまっており、粘性が強い。
- 第4層:暗褐色土層:第2層に近いが、雲状のローム粒の集塊が点在する。
- 第5層:暗褐色土層:第2層に近いが、若干ロームが多い。

第940図 第2号掘跡、第1号柱穴列等高線・断面図(2)



第1号柱穴列土層説明

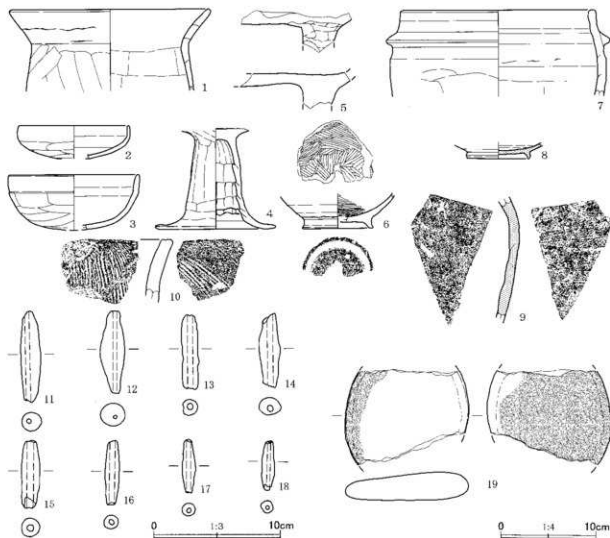
- 第1層:黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を少量、焼土を微量含む。第1・2層は、P1覆土で、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第2層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量含む。
- 第3層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。第3・4層は、P2覆土で、しまっており、

- 粘性がやや強い。
- 第4層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)・ローム粒を多量に含む。
- 第5層:黒褐色土。ローム粒を多量、ロームブロック(5~10mm)・焼土を微量含む。第5~8層は、P3覆土で、第5・6・8層は、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第6層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量に、ローム粒を少量、炭化物を微量含む。
- 第7層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を多量に、炭化物を少量含む。ややしまっている。
- 第8層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~30mm)・ローム粒を少量、炭化物を微量含む。
- 第9層:黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・ローム粒を多量に、焼土を微量含む。第9~11層は、P6覆土で、いずれもややしまっており、粘性がやや強い。
- 第10層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、ローム粒を微量含む。
- 第11層:灰黄褐色土。ロームブロック(5~50mm)を大量に、ローム粒を多量に含む。
- 第12層:黒褐色土。ロームブロック(5~10mm)・白色軽石・焼土・炭化物を微量含む。第12~14層は、P9覆土で、いずれもややしまっており、粘性がやや強い。
- 第13層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)を少量、焼土・白色軽石を微量含む。
- 第14層:暗褐色土。ロームブロック(5~30mm)を多量、ローム粒を少量含む。
- 第15層:黒褐色土。焼土を多量に、ローム粒・炭化物微量含む。
- 第15・16層は、P10覆土で、ややしまっており、粘性がやや強い。
- 第16層:黒褐色土。ローム粒・焼土・炭化物を微量含む。
- 第17層:黒褐色土。ロームブロック(5~30mm)・焼土を微量含む。ややしまっており、粘性がやや強い。P11覆土。

第941図 第2号堀跡、第1号柱穴列平面・断面図

さいビットが見られ、またP7には、底面が2つあり、掘り直されたと思われる。覆土もやはり区々であり、柱根の痕跡は見られなかった。

各柱穴覆土から、土師器片を主とする遺物がごく少量出土している。第2号堀跡と密接に関係する



第942図 第2号堀跡出土遺物

第422表 第2号堀跡土物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・裝飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (21.0) 底径 — 器高 [8.6]	口縁部は外反する。胴部は膨らみをもたない。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒・褐色粒、内外—橙色	口縁部～胴部土位1/3残存
2	杯	口径 11.6 底径 — 器高 [3.5]	丸底。体部は浅く、口縁部はやや内傾して立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外—橙色	1/3残存
3	杯	口径 (13.6) 底径 — 器高 [5.8]	丸底。口縁部は体部との境に弱い稜をもち、内彎気味に立ち上がる。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	雲母・石英・白色粒 内外—赤褐色	1/3残存
4	高坪	口径 — 底径 (12.7) 器高 [10.5]	脚部は筒状を呈する。瓶部は短い。粘土組織み上げによる成形。	外面—脚部ヘラナデ。瓶部ヨコナデ。内面—脚部ヘラナデ。瓶部ヨコナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外—橙色	脚部～瓶部
5	土師質三足土器?	口径 — 底径 — 器高 [4.4]	平底の底部に中実の脚部に付着する。粘土組織み上げによる成形。	外面—底部～脚部ヘラナデ。内面—底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外—灰色	底部～脚部破片 内面は磨耗
6	須恵器高台付埴	口径 — 底径 (7.6) 器高 [3.7]	体部は内彎する。高台部はハの字状に開く。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。底部回転系切り。高台貼付時回転ナデ。内面—ロクロナデ後ミガキ。黒色処理が。	石英・白色粒・黒色粒 内外—ぶい・黄褐色	体部下位～底部 酸化焼成

第423表 第2号堀跡土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手の特徴	調整・裝飾手の特徴	胎土・色調	備考
7	須恵器 羽釜	口径(20.4) 底径— 器高[9.1]	口縁部は内傾する。踵は断面三角形を呈する。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ後、胴部ヘラナデ。踵貼付。内面—ロクロナデ後、胴部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—にぶい黄褐色	口縁部～胴部上位1/8残存 酸化塩焼成
8	灰軸陶器 埴	口径— 底径(6.4) 器高[1.7]	高台部は三日月状を呈する。ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。高台貼付時回転ナデ。内面—ロクロナデ。	白色粒 内—灰白色	体部下位～底部1/4残存 還元塩焼成
9	陶器 甕	口径— 底径— 器高—	ロクロ成形。	外面—ロクロナデ。肩部に自然軸が付着。内面—ロクロナデ。	白色粒 外—にぶい赤褐色 内—灰オリーブ色	肩部破片 常滑焼
10	円筒埴輪	口径— 底径— 器高[5.0]	口縁部は緩やかに外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—タテハケ(10本/2cm)。内面—ナナメハケ(10本/2cm)。	石英・白色粒・黒色粒 内外—橙色	口縁部破片
No.	器種	法量(cm)・特徴			備考	
11	土鍾	長さ7.2, 幅1.6, 厚さ1.5, 重さ16.74g。	胎土: 白色粒。色調: 橙色。			完形
12	土鍾	長さ6.5, 幅1.9, 厚さ1.8, 重さ19.06g。	胎土: 白色粒・黒色粒。色調: にぶい橙色。			完形
13	土鍾	長さ5.9, 幅1.4, 厚さ1.3, 重さ9.4g。	胎土: 白色粒。色調: 明赤褐色。			完形
14	土鍾	長さ5.9, 幅1.7, 厚さ1.3, 重さ10.93g。	胎土: 石英・白色粒。色調: 浅黄褐色。			完形
15	土鍾	長さ5.5, 幅1.5, 厚さ1.5, 重さ11.85g。	胎土: 白色粒。色調: 明赤褐色。			完形
16	土鍾	長さ5.1, 幅1.2, 厚さ1.1, 重さ5.84g。	胎土: 白色粒・黒色粒。色調: 橙褐色。			完形
17	土鍾	長さ4.3, 幅1.1, 厚さ1.0, 重さ4.07g。	胎土: 白色粒。色調: 灰黄褐色。			完形
18	土鍾	長さ3.9, 幅1.0, 厚さ1.0, 重さ3.99g。	胎土: 白色粒。色調: 黒色。			完形
19	磨石	長さ[10.1], 幅13.1, 厚さ2.9, 重さ642.35g。	石材: 安山岩。調整: 上下面ともに平滑。スス付着。			端部欠損

第424表 第1号柱穴列出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)・特徴	備考
1	土鍾	長さ4.5, 幅1.3, 厚さ1.2, 重さ6.56g。胎土: 白色粒・黒色粒。色調: 橙褐色。	完形

施設跡であるとするれば、中世の遺構と考えられる。

「矢倉」のような施設跡と見るのが一法であろうが、堀の機能を減殺することなく補強するだけの施設であるなら、あるいは堀の外側に板を立て並べ横木を渡し柱で支えるような簡便な施設の可能性もあるのかもしれない。また、柱穴列により陸橋部がかなり狭められており、出入口である陸橋部の防禦性にも関連する施設でもあったと考えられる。

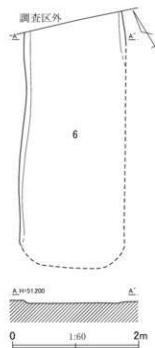


第943図 第1号柱穴列出土遺物

第6号溝跡(第944図)

調査地点北縁沿いの中央やや西寄り、J2グリッドに位置する溝跡である。第339号住居跡、第503号土坑を切って造られている。確認面は、黄褐色のローム層上面である。

住居跡や土坑の可能性もないではないが、浅く細長い形状と底面が硬化していないことなどから溝跡と考えた。北側の調査範囲外から南に向かって伸び、第339号住居跡の覆土上層をかすめ、浅くなりそのまま消える。北東—南西方向での現存長は、3.38m、溝幅は1.64m、



第944図 第6号溝跡平面・断面図

深さは、最深部で5 cmである。遺物としては、ごく少量の土師器片が覆土中から出土しているのみである。重複関係から見て、古墳時代終末期後葉以降の遺構であろう。

6 ビット

ここで取り上げるのは、遺構間に散在する単独のビットや住居跡の壁などを切り込むビット、住居跡内で住居跡の覆土と区別される覆土をもつビットなどである(第792図)。ただし、今回の調査範囲が谷部に連なる微傾斜地のゆえか、北西部の一角を除き、通常の台地の平坦面に見られる堆積土とは異なる、全体に粘性の強い灰色みを帯びた堆積土が地山、覆土をなしており、たとえば奈良・平安時代の遺構とそれ以降の遺構を覆土のみで識別するのは、かなり困難であった。住居跡を掘り込んで造られたビットの場合、覆土中に収まるビットは検出すること自体至難であり、床面を抜いて掘り込まれたビットは検出可能ではあったが、住居跡に伴うビットとの峻別は、容易ではなかった。とは言え、ここでビットとして析出した遺構は、住居跡よりも後出する遺構が大半であることは、調査時の所見からも確かである。

まず、ビットの分布であるが、調査範囲全域に散漫に分布しているようにも見えるが、第1号堀跡を境に、北側に比し、南側にビットが集中することが見て取れる。L字に囲まれた南側部分は、第1号堀跡の内側にあたる空間であり、堀に付随した施設や建物があってもおかしくない空間ではあるが、そうした施設の痕跡と認められるビットの並びを見出すことはできなかった。ただし、第1号堀跡に堀の掘削土を用いた土塁、とくに内土塁などの施設があったとすれば、堀跡の規模から見て、高さや幅の点で相当大規模な施設であったと思われ、堀跡の内側の空間の大半は、そうした施設の下であった可能性が考えられる。

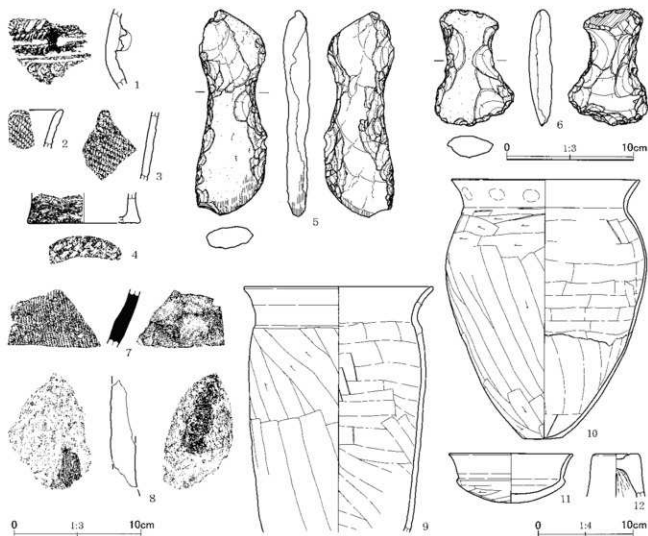
ビットの一部からは、土師器片を主とする遺物が少量出土している。

7 遺構外出土遺物

D地点の遺構外より出土した遺物の内主要なものを第945図、第425・426表に示した。

第425表 D地点・遺構外出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
1	縄文土器 深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	粘土細積み上げによる成形。	外面—刻み目の入った隆線と沈線。沈線下にループ文。内面—ナデ。	織維・白色粒 外—オリーブ黒色 内—にぶい黄褐色	刷部破片 前期中葉
2	縄文土器 深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	粘土細積み上げによる成形。	外面—LRの単節縄文。内面—ナデ。	白色粒 外—にぶい赤褐色 内—灰褐色	口縁部破片 諸磯a式
3	縄文土器 深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	粘土細積み上げによる成形。	外面—LRの単節縄文。内面—ナデ。	白色粒・褐色粒 外—褐色 内—明褐色	刷部破片 諸磯a式
4	縄文土器 深鉢	口径 — 底径 (8.8) 器高 [2.4]	粘土細積み上げによる成形。	外面—ナデ。内面—ミガキ。	白色粒・褐色粒、 内外—明黄褐色	底部1/4残存 堀之内2式
No.	器種	法量(cm)・特徴				備考
5	打製 石斧	長さ16.5、幅5.7、厚さ2.1、重さ203.89g。石材：頁岩。調整：分銅形。割線を素材とし、両側縁を直接打撃による両面加工を施す。刃部に顕著な摩耗痕あり。				完形



第945図 遺構外出土遺物

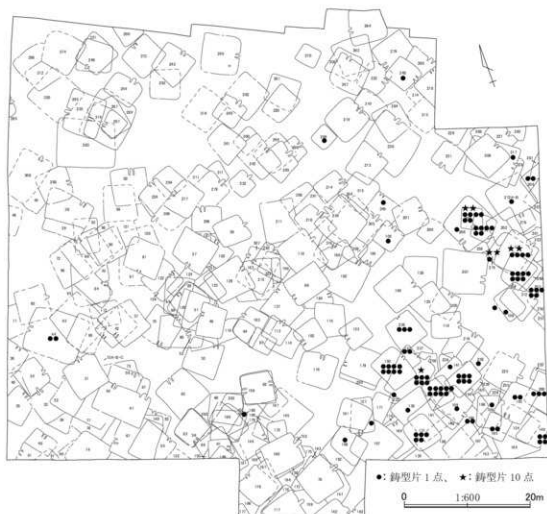
第426表 D地点・遺構外出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)・特徴			備考	
6	打製石弁	長さ9.25、幅6.35、厚さ1.9、重さ104.28g。石材：頁岩。調整：分銅形。割線を素材とし、周縁に直接打撃による画面加工を施す。			完形	
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整・装飾手法の特徴	胎土・色調	備考
7	須恵器甕	口径 — 底径 — 器高 —	タタキ成形。	外面—平行タタキ。内面—無文の当て具痕。	雲母・白色粒・褐色粒 内外—にぶい黄褐色	胴部破片 酸化燻焼成
8	形象埴輪	口径 — 底径 — 器高 —	粘土組織み上げによる成形。	外面—タテハケ(7本/1cm)、内面—ナデ。	石英・チャート・白色粒・黒色粒 内外—にぶい赤褐色	破片
9	甕	口径(20.2) 底径 — 器高[26.0]	口縁部は外反する。胴部は膨らみをもたない。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外—にぶい赤褐色	口縁部〜胴部 3/4残存
10	甕	口径 19.8 底径 4.2 器高 27.5	口縁部は外反する。胴部は上位に膨らみをもつ。平底。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ、指頭圧痕。胴部〜底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部〜底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒・褐色粒 内外—にぶい褐色	ほぼ完形
11	坏	口径(13.0) 底径 — 器高 5.2	丸底。口縁部は体部との境に稜をもつて外反する。粘土組織み上げによる成形。	外面—口縁部ヨコナデ。体部〜底部ヘラケズリ。内面—口縁部〜体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 外—褐色 内—明赤褐色	1/5残存
12	土製品支脚?	口径(4.8) 底径 — 器高 [4.6]	上面は平坦で、中央がやや窪む。脚部は筒状を呈する。粘土組織み上げによる成形。	外面—ナデ。全体に白色の付着物あり。内面—絞り目。	石英・白色粒・黒色粒 外—にぶい黄褐色 内—褐色	口縁部〜脚部 中位1/4残存

第V章 薬師堂東遺跡C地点出土ガラス小玉鋳型、 棒状土製品集成

薬師堂東遺跡C地点では各遺構からガラス小玉鋳型が多数出土し、第III章で出土状況の説明と遺構ごとの共伴遺物を掲載した。出土個体数は188点であり、一つの遺跡からの出土数としては現時点で国内最多である。本章では、ガラス小玉鋳型相互の比較等の利便性のために、改めて鋳型を集成し掲載した（第948～967図、第427～436表）。また、ガラス小玉鋳型の自然科学的な分析に関しては、第VI章に掲載した。

古墳時代におけるガラス小玉は、古墳に副葬するなどの目的で大量に作成された。生産技法については複数あるが、鋳型を使った技法は、加熱温度の点等で比較的簡易な方法であり、一度に大量に生産できる特徴がある。また、原料として再生品を利用できる点でも、入手コストを抑えられるメリットがある技法である。しかしながら、これまで全国で出土した鋳型の点数は100点にも満たないことから、薬師堂東遺跡での大量出土は大きな意義のあるものと言えよう。

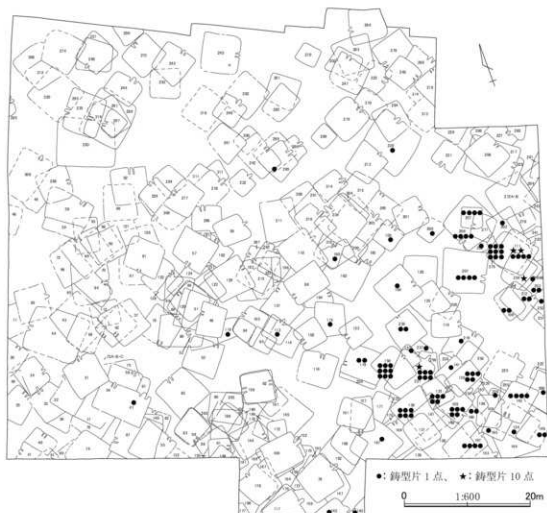


第946図 ガラス小玉鋳型分布図

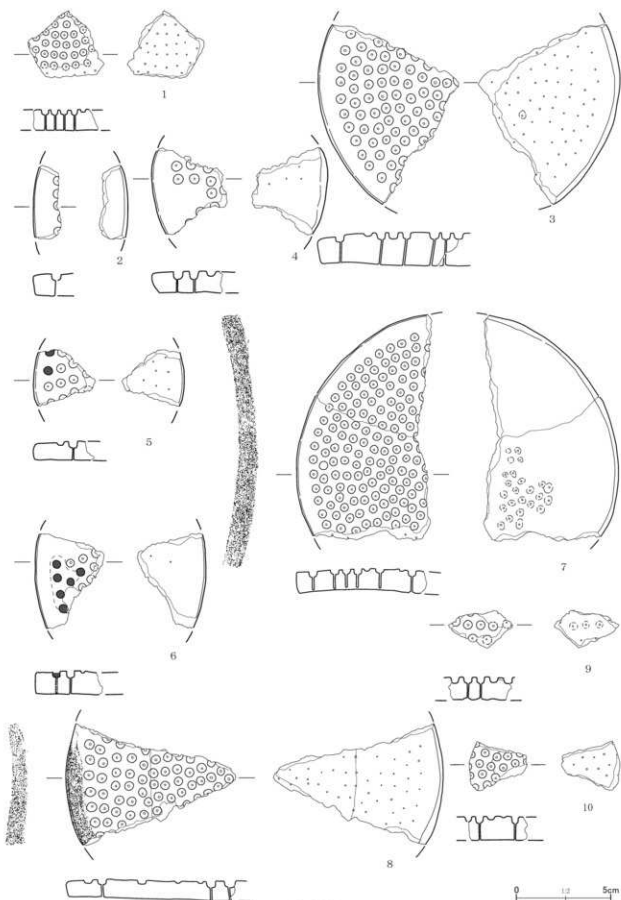
また本遺跡では、棒状土製品と名付けた特徴的な遺物も鋳型と同程度の163点が出土した（第968～974図、第437～441表）。遺物の特徴自体は以下の観察表で示したが、その用途については明らかではない。他遺跡での出土数の少なさと本遺跡での大量出土の様子から、ガラス小玉鋳型との関連性が指摘できるが、出土状況については第Ⅲ章で述べた様に両者は明確な共存関係を示すには至らない。そこで以下に示す様に、出土遺構ごとに点数を計数し図化したところ、傍証ではあるがかなり確度の高い共存性が明らかになった（第946・947図）。すなわち、C地点南東隅の直径30m程度の範囲から両遺物とも9割以上が出土している。また、どちらかの遺物が6点以上出土している遺構からは、必ずもう一方の遺物も出土している。住居跡の分布に時期的な偏り等が無いことから、両遺物に何らかの関連性が高いと考えられる。

またこれらの出土状況を観るに、ガラス小玉の生産施設そのものがこの範囲内もしくは近傍に存在した可能性が考えられるが、明確な加熱施設等は検出されなかった。仮に掘り込みの浅い地上式施設での作業であったとすれば、この範囲内の第106号住居跡南側の数m規模の住居跡空閑地が注目される。

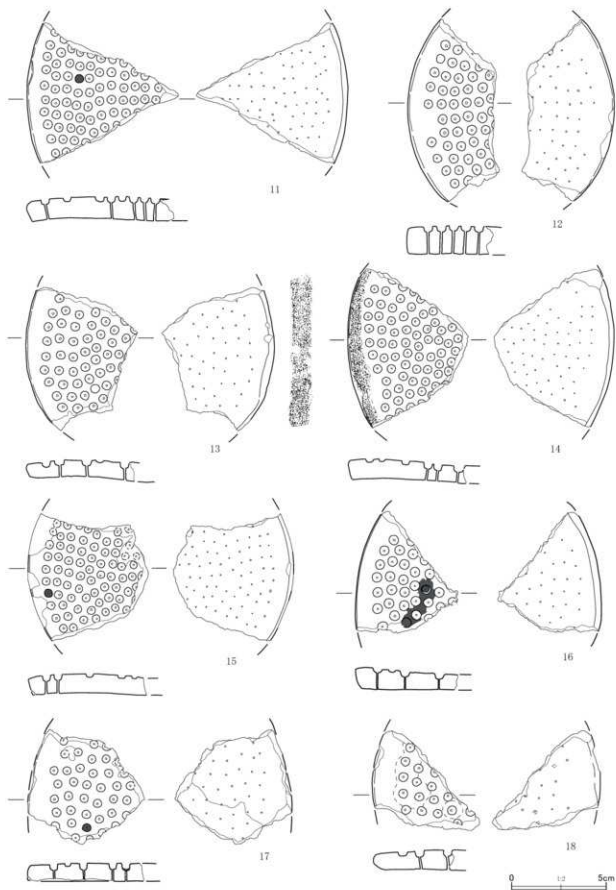
棒状土製品の位置づけをはじめとし、具体的な生産手順の復元、製品であるガラス小玉が1点（第547図37）しか出土していないこと等、今後解決すべき課題は多い。



第947図 棒状土製品分布図



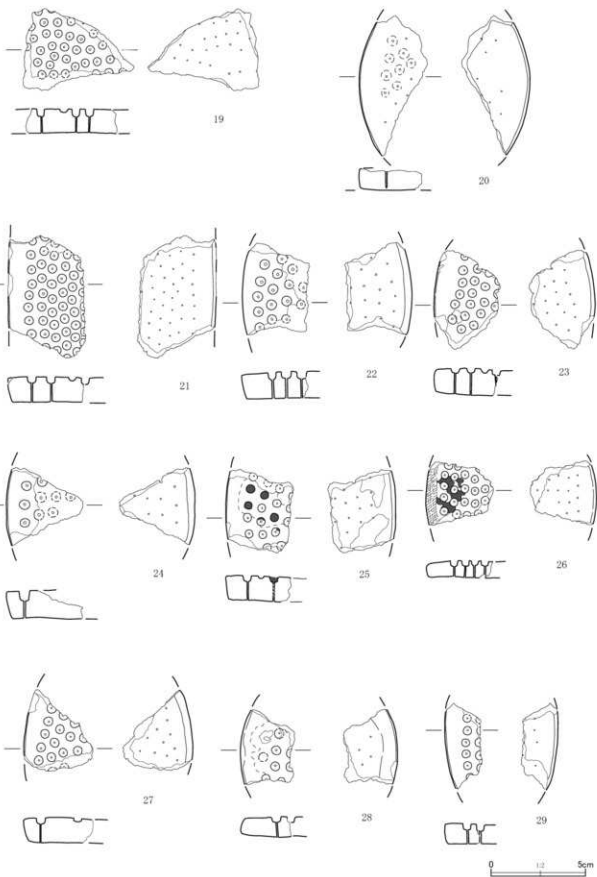
第948図 ガラス小玉鑄型集成図(1)(No. 1~10)



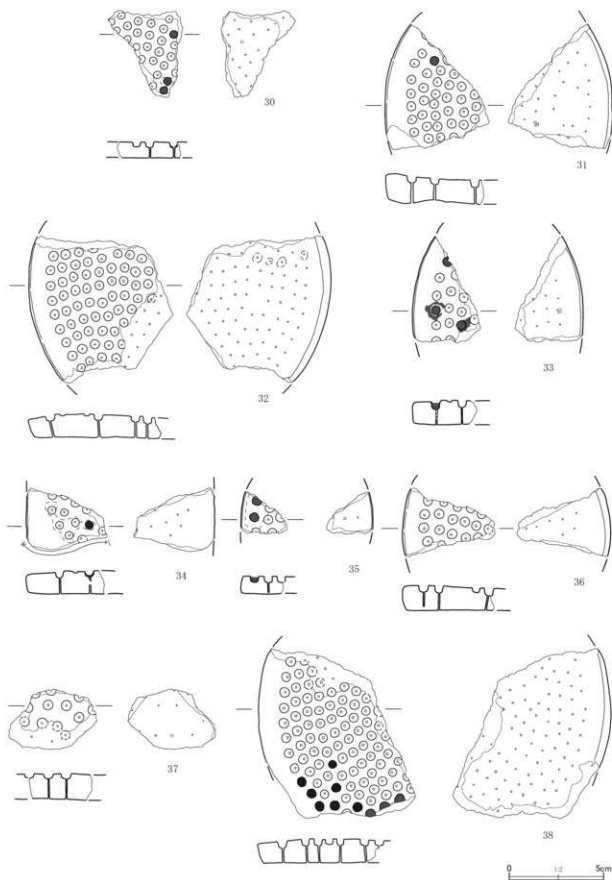
第949図 ガラス小玉鑄型集成図(2)(No.11~18)

第427表 ガラス小玉鈒型観察表(1) (No. 1~20)

No.	形状	計測値 (cm・g)					色 調		軸 孔	胎 土	特 徴	備 考
		径	厚さ	孔径	孔深	重さ	表面	裏面				
1	—	—	1.1	0.40	0.25	14.4	橙	明赤褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材付着。裏面、丁寧なナデ。	SI44南東(第49図41)
2	円板	16.0	1.2	—	0.30	7.9	橙	にぶい黄橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔・軸孔に溶材微量付着。裏面、ナデ。	SI44南東(第49図42)
3	円板	16.0	1.7	0.40	0.35	112.7	褐	にぶい褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ナデ、周縁部は平滑。	SI105(第204図2)
4	円板	12.6	1.1	0.50	0.40	18.7	橙	橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI106カマド内(第206図6)
5	円板	14.0	1.0	0.45	0.35	9.6	明赤褐	明赤褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI108北西(第212図15)
6	円板	18.0	1.2	0.45	0.35	23.5	灰黄褐	にぶい褐	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	ガラス玉不完成品残存。表面に溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI109北東(第215図4)
7	円板	17.0	1.2	0.40	0.30	123.6	にぶい褐・灰黄	にぶい赤褐	不貫通・部分的に貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。側面、布目状ナデ。裏面、ケズリ後ナデ。	SI11南西、SI254床下の2点接合。SI111(第221図12)
8	円板	16.0	1.0	0.45	0.30	50.9	にぶい橙	にぶい橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。表面周縁へ側面、布目圧痕。裏面、ナデ。	SI111S西、SI111床下の2点接合。(第221図13)
9	—	—	1.2	0.40	0.30	6.5	橙	橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI111北西(第221図14)
10	—	—	1.2	0.40	0.35	9.2	橙	橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔と表面に溶材(灰黄色物)付着。裏面、砂底状。	SI111床下(第221図15)
11	円板	20.0	1.2	0.40	0.30	56.7	にぶい橙	明褐色	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材付着。裏面、砂底状。	SI111(第221図16)
12	円板	14.0	1.5	0.45	0.30	74.8	明赤褐	明褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材付着。裏面、ナデ。	SI111床下(第221図17)
13	円板	15.2	0.9	0.45	0.30	42.4	明赤褐	にぶい黄橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI111床下(第221図18)
14	円板	17.0	1.1	0.40	0.35	59.1	にぶい橙	にぶい橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。表面周縁部に布目圧痕。裏面、ケズリ後ナデ。	SI111南西(第221図19)
15	円板	13.0	1.0	0.40	0.30	47.4	にぶい橙	橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI111床下(第221図20)
16	円板	18.0	1.1	0.50	0.30	38.3	灰黄褐	橙	不貫通、一部貫通	細砂粒・黒色粒	ガラス玉不完成品残存。型孔に溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI111床下(第221図21)
17	円板	16.0	0.9	0.40	0.35	34.3	にぶい赤褐	明赤褐	貫通、一部不貫通	チャート・黒色粒	ガラス玉不完成品残存。型孔に溶材付着。裏面、砂底状、大半が剝離。	SI111南西(第221図22)
18	円板	14.0	1.1	0.40	0.30	26.4	明赤褐	明赤褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔と表面に溶材(灰黄色物)付着。裏面、砂底状。	SI111床下(第221図23)
19	—	—	1.3	0.40	0.40	28.5	橙	にぶい橙	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	型孔・軸孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI111南西(第221図24)
20	円板	14.0	—	—	—	26.5	—	にぶい褐	不貫通、一部貫通	チャート・黒色粒	表面、剝離。裏面、ケズリ後ナデ。	SI111床下(第221図25)



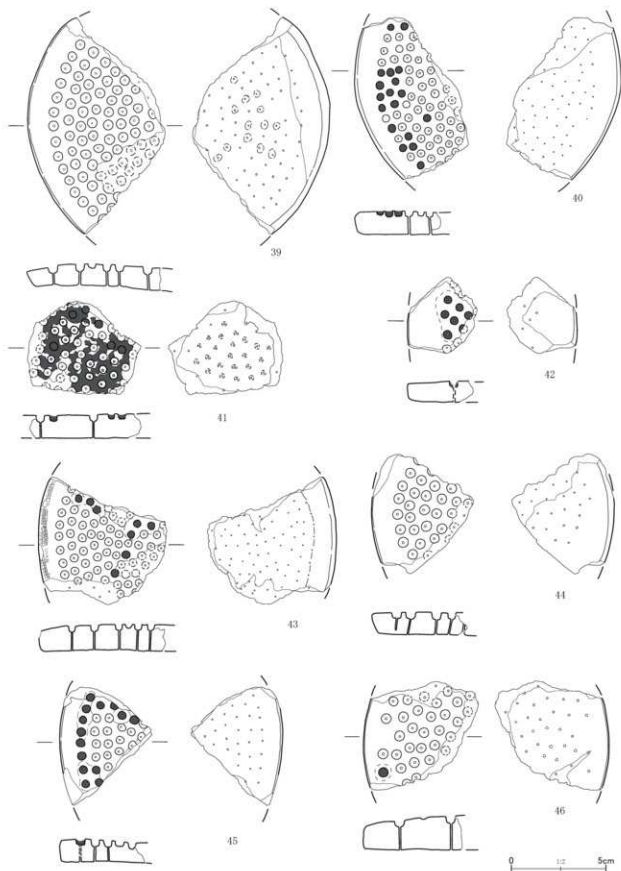
第950図 ガラス小玉鑄型集成図(3)(No.19~29)



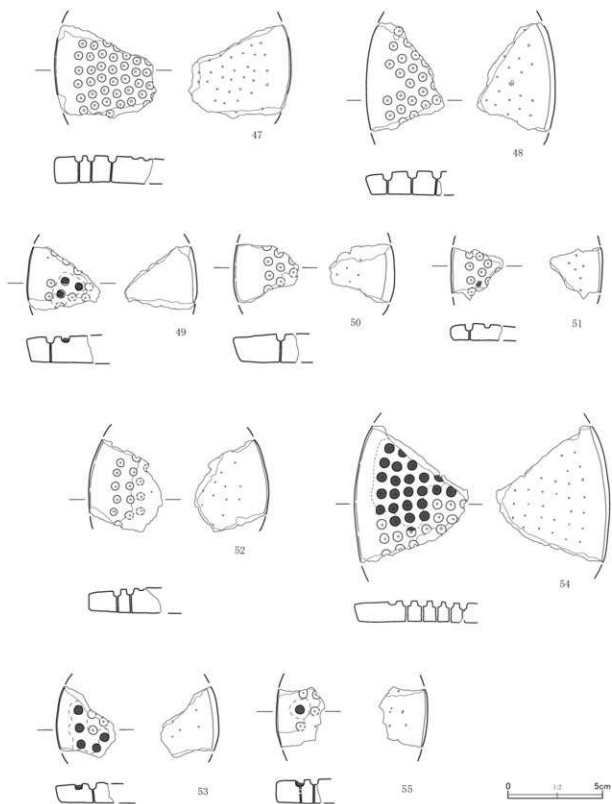
第951図 ガラス小玉鑄型集成図(4)(No.30~38)

第428表 ガラス小玉錐型観察表(2) (No. 21 ~ 38)

No.	形状	計測値 (c m · g)					色 調		軸 孔	胎 土	特 徴	備 考
		径	厚さ	孔径	孔深	重さ	表面	裏面				
21	直	—	1.4	0.45	0.30	42.3	橙	にぶい黄橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔と表面にガラス質・溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI111床下(第222図26)
22	円板	18.0	1.4	0.50	0.35	26.4	明赤褐	にぶい褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、丁寧なナデ。	SI111北東(第222図27)
23	円板	13.0	1.4	0.45	0.25	26.9	明赤褐	橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI111南東(第222図28)
24	円板	16.0	1.5	0.50	0.55	18.1	橙	にぶい黄橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、丁寧なナデ。	SI111北西(第222図29)
25	円板	14.0	1.3	0.45	0.30	26.8	灰褐	明褐	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	ガラス玉不完成品残存。型孔と表面に溶材(灰黄色物)付着。裏面、砂底状、周縁部ナデ。	SI111床下(第222図30)
26	円板	16.0	0.8	0.40	0.30	10.8	橙	にぶい黄橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔と表面に溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI111南西(第222図31)
27	円板	13.0	1.3	0.45	0.30	18.6	橙	にぶい橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI111床下(第222図32)
28	円板	12.6	1.0	0.50	0.25	14.8	明赤褐	明赤褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔と表面にガラス質・溶材付着。裏面、砂底状、周縁部丁寧なナデ。	SI111床下(第222図33)
29	円板	14.0	1.1	0.40	0.30	10.1	灰黄褐	にぶい褐	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI111北東(第222図34)
30	—	—	0.8	0.40	0.30	13.0	黒	黒褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、ナデ。	SI111南西(第222図35)
31	円板	14.0	1.5	0.45	0.35	53.5	明赤褐	明赤褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI127(第261図5)
32	円板	17.6	1.2	0.45	0.30	80.1	橙	にぶい橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI130北東(第269図25)
33	円板	16.0	1.2	0.45	0.35	26.0	明褐	にぶい褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI130北西(第269図26)
34	直	—	1.2	0.40	0.30	17.8	にぶい橙	橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔と表面に溶材(灰黄色物)付着。欠損部を研削。裏面、ケズリ後ナデ。	SI130北西(第269図27)
35	円板	10.4	1.0	0.45	0.30	5.3	明赤褐	橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質、表面に溶材(灰黄色物)付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI130北西(第269図28)
36	円板	14.0	1.3	0.45	0.35	20.6	にぶい橙	にぶい橙	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI130(第269図29)
37	—	—	1.4	0.50	0.25	19.1	にぶい褐	にぶい褐	貫通、一部不貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後、丁寧なナデ。	SI130南西(第269図30)
38	円板	19.2	1.3	0.45	0.35	97.8	橙	にぶい橙	貫通	チャート・黒色粒	ガラス玉不完成品残存。ガラス質・溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI131(第272図9)



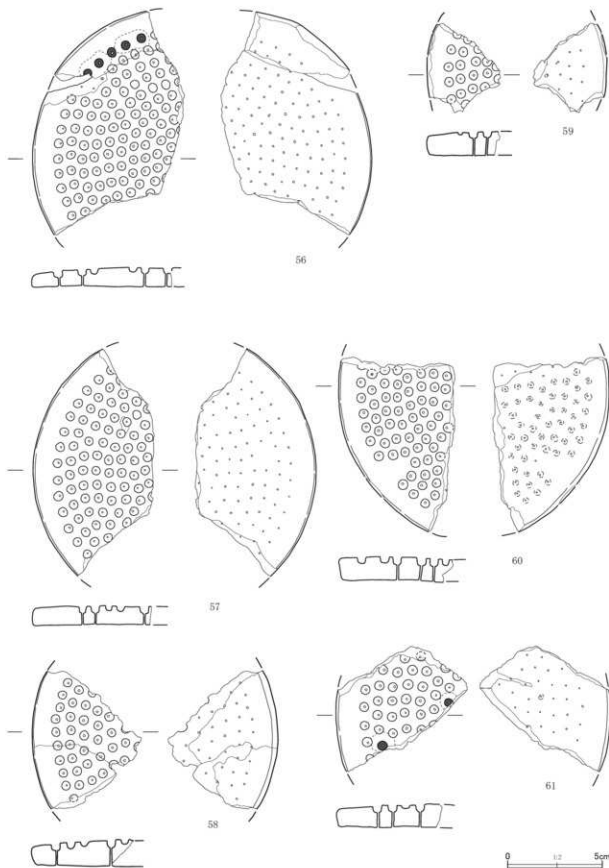
第952図 ガラス小玉鑄型集成図(5)(No. 39~46)



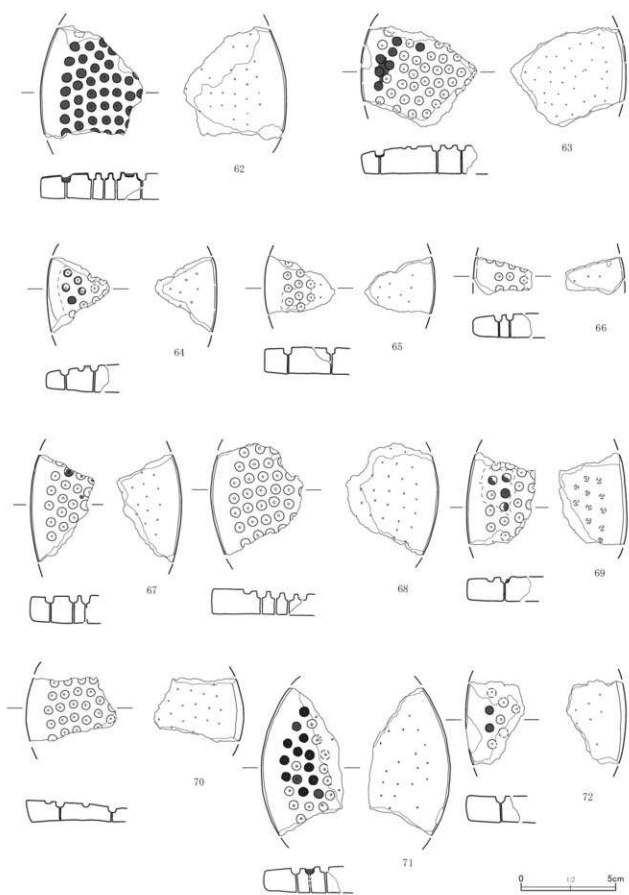
第953図 ガラス小玉鑄型集成図(6)(No. 47~55)

第429表 ガラス小玉鋳型観察表(3) (No. 39 ~ 55)

No.	形状	計測値 (c m · g)					色 調		軸 孔	胎 土	特 徴	備 考
		径	厚さ	孔径	孔深	重さ	表面	裏面				
39	円板	16.0	1.2	0.50	0.40	96.0	明赤褐色	にぶい褐色	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量附着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI131(第272図10)
40	円板	15.6	1.3	0.40	0.30	63.5	にぶい橙	にぶい橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔にガラス質・溶材附着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI131(第272図11)
41	—	—	1.2	0.40	0.35	39.0	橙	灰黄褐色	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材、表面全体に溶材(灰白色物)附着。裏面、丁寧なナデ。	SI131北東(第272図12)
42	円板	—	1.1	0.40	0.35	15.9	にぶい褐色	にぶい褐色	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	型孔と表面に溶材(灰黄色物)附着。裏面、丁寧なナデ。	SI131北東(第272図13)
43	円板	17.6	1.3	0.40	0.30	67.5	褐色	にぶい橙	貫通	細砂粒・黒色粒	ガラス玉不完成品残存。型孔と表面一部に灰黄色物附着。表面、周縁部に布目圧痕。裏面、ケズリ後ナデで周縁部は丁寧なナデ。	SI135(第281図7)
44	円板	14.0	1.3	0.50	0.35	37.6	にぶい橙	にぶい黄褐色	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量附着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI135南西(第281図8)
45	円板	17.4	1.2	0.40	0.35	37.9	にぶい橙	にぶい橙	貫通	細砂粒・黒色粒	ガラス玉不完成品残存。ガラス質・溶材附着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI135南西(第281図9)
46	円板	16.0	1.7	0.50	0.35	60.7	にぶい橙	灰黄褐色	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔と表面一部に溶材附着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI135南西(第281図10)
47	円板	15.0	1.4	0.40	0.30	42.8	橙	にぶい黄褐色	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔・軸孔に溶材微量附着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI135(第281図11)
48	円板	18.0	1.2	0.45	0.35	29.2	にぶい黄褐色	橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔・軸孔に溶材微量附着。裏面、丁寧なナデ。	SI135北西(第281図12)
49	円板	11.0	1.4	0.40	0.30	18.5	橙	にぶい褐色	不貫通、一部貫通	細砂粒・黒色粒	ガラス玉不完成品残存。表面に溶材(灰黄色物)附着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI135北東(第281図13)
50	円板	13.0	1.5	0.45	0.35	15.1	橙	にぶい褐色	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材附着。裏面、ナデ。	SI135北西(第281図14)
51	円板	—	0.9	0.40	0.35	6.6	橙	灰黄	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量附着。裏面、ケズリ後、丁寧なナデ。	SI135北東(第281図15)
52	円板	13.0	1.2	0.40	0.30	24.5	にぶい褐色	にぶい橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔と表面に溶材微量附着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI138カマド内(第291図15)
53	円板	13.2	1.1	0.45	0.30	11.7	にぶい橙	にぶい橙	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	ガラス玉不完成品残存。表面に溶材(灰黄褐色物)附着。裏面、平滑。	SI141床下(第297図2)
54	円板	18.0	1.1	0.50	0.30	48.8	橙	にぶい橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材附着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI143南西(第302図23)
55	円板	14.0	1.3	0.45	0.25	11.2	橙	にぶい橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材附着。裏面、丁寧なナデ。	SI143南西(第302図24)



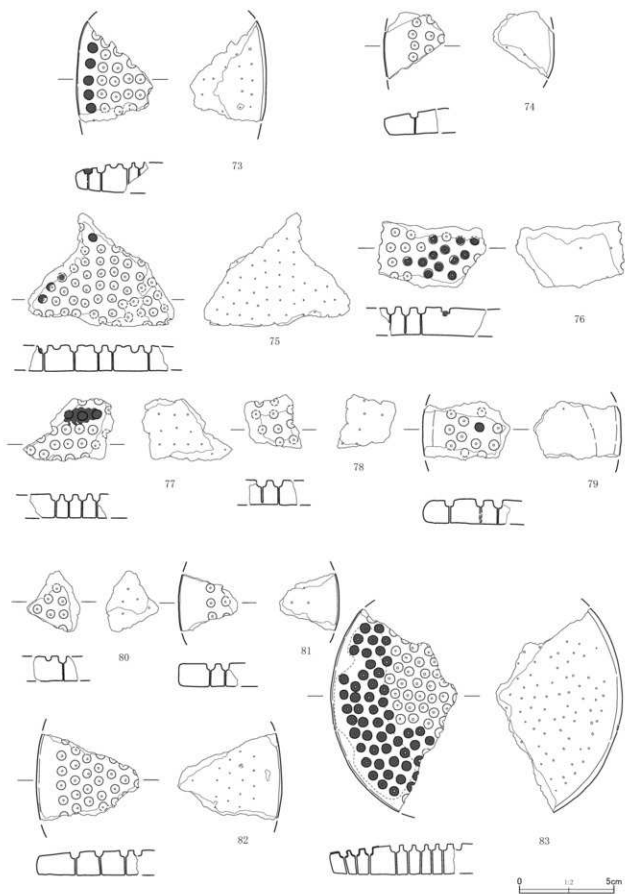
第954図 ガラス小玉鑄型集成図(7)(No.56~61)



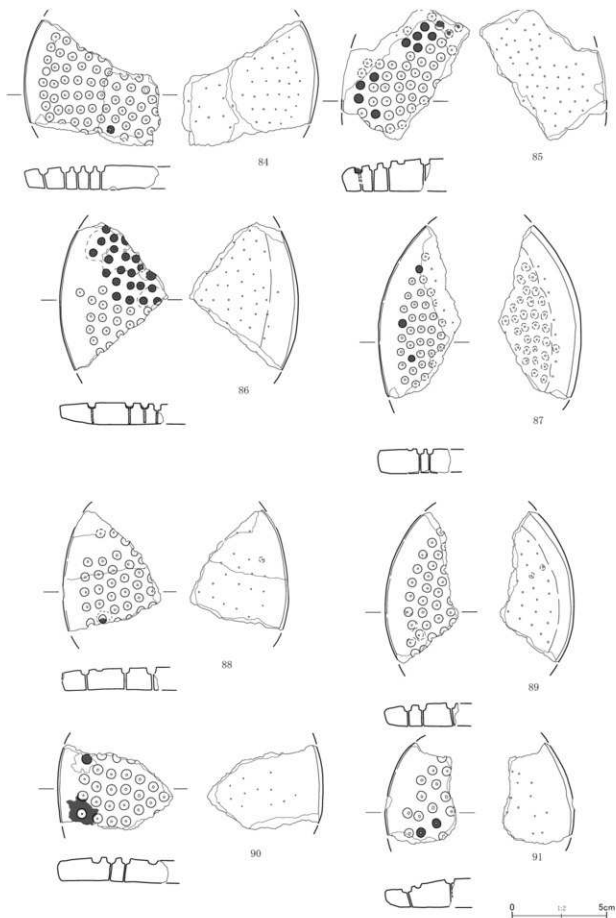
第955図 ガラス小玉鑄型集成図(8)(No. 62~72)

第430表 ガラス小玉罇型観察表(4) (No. 56 ~ 74)

No.	形状	計測値 (c m · g)					色 調		軸 孔	胎 土	特 徴	備 考
		径	厚さ	孔径	孔深	重さ	表面	裏面				
56	円板	15.4	1.0	0.50	0.35	88.7	明赤褐	明赤褐	貫通	細砂粒・黒色粒	2点接合。一部に溶材付着。裏面、丁寧なナデ。	SI148、SI148南東の2点接合。SI148(第313図7)
57	円板	15.6	1.0	0.50	0.35	91.0	明赤褐	にぶい赤褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、丁寧なナデ。	SI148(第313図8)
58	円板	14.0	1.4	0.45	0.35	52.0	にぶい褐	黒	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、平滑。	SI148(第313図9)
59	円板	13.0	1.2	0.50	0.30	22.3	明赤褐	明赤褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後、丁寧なナデ。	SI148南西(第313図10)
60	円板	17.0	1.2	0.45	0.40	83.7	橙	にぶい橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔と表面全体に溶材(灰白色物)付着。裏面、ナデ。	SI150北東(第318図17)
61	円板	16.0	1.3	0.45	0.35	51.8	橙	明褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。一部に灰白色物付着。裏面、丁寧なナデ。	SI150南西(第318図18)
62	円板	18.0	1.4	0.40	0.35	49.7	明赤褐	明赤褐	貫通	細砂粒・黒色粒	表面全体にガラス質・溶材付着。裏面、丁寧なナデ。	SI150(第318図19)
63	円板	16.0	1.5	0.45	0.30	47.6	灰黄褐	黒褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI150北東(第318図20)
64	円板	16.0	1.5	0.40	0.30	14.7	にぶい赤褐	明赤褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔と表面にガラス質・溶材付着。側面、布目肌。裏面、砂底状。	SI150(第318図21)
65	円板	13.0	1.4	0.40	0.35	16.5	橙	橙	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	型孔と表面に溶材付着。裏面、ケズリ後、丁寧なナデ。	SI150南東(第318図22)
66	円板	—	1.2	0.40	0.30	7.3	橙	にぶい黄橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔にガラス質・溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI150(第318図23)
67	円板	18.0	1.5	0.50	0.35	26.0	明赤褐	灰黄褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI150(第318図24)
68	円板	16.0	1.4	0.50	0.35	42.1	明赤褐	明褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、丁寧なナデ。	SI157(第332図8)
69	円板	15.0	1.3	0.45	0.30	28.1	にぶい橙	にぶい橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、丁寧なナデ。	SI157(第332図9)
70	円板	13.0	1.1	0.40	0.25	19.9	明赤褐	にぶい褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、平滑。	SI160北東(第339図4)
71	円板	13.0	1.4	0.45	0.30	51.8	明赤褐	明赤褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI165(第350図5)
72	円板	15.0	1.4	0.55	0.35	21.5	明赤褐	橙	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	型孔と表面に溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI165南西(第350図6)
73 (楕円)	—	1.5	0.50	0.35	24.2	明赤褐	明赤褐	不貫通	チャート・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、ナデ。	SI166(第351図3)	
74	円板	10.0	1.2	0.45	0.25	12.6	にぶい赤褐	明赤褐	不貫通、一部貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI166(第351図4)



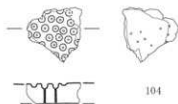
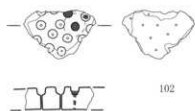
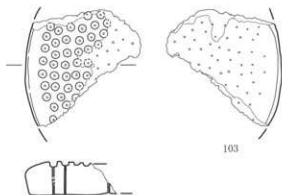
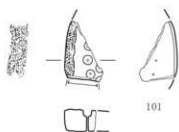
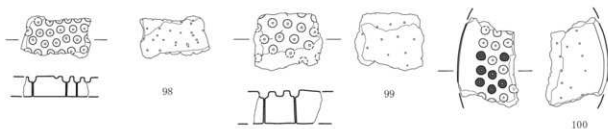
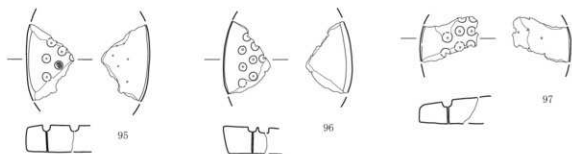
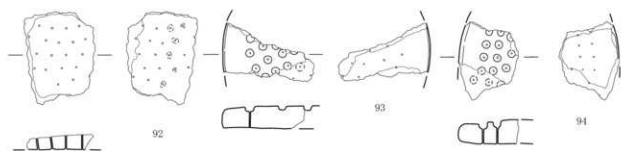
第956図 ガラス小玉鑄型集成図(9)(No.73~83)



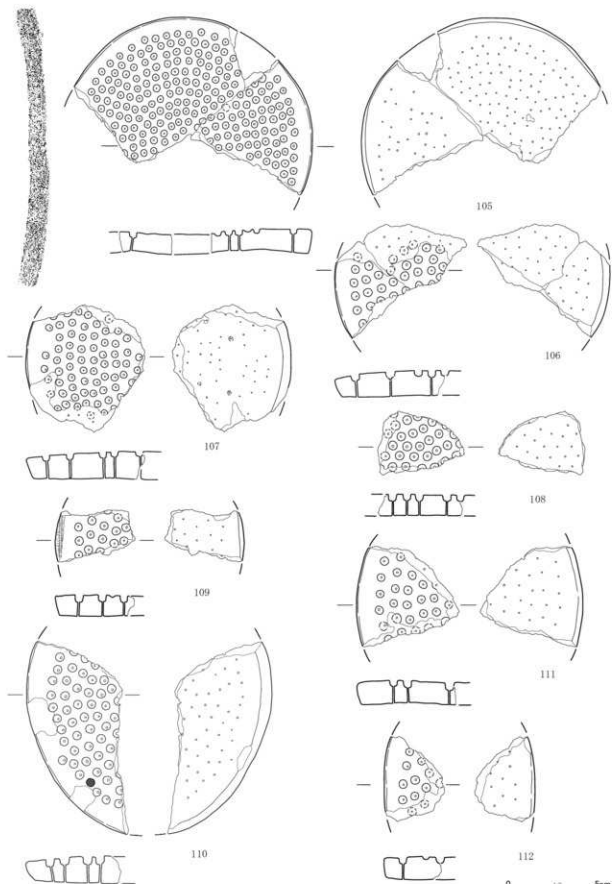
第957図 ガラス小玉鑄型集成図(10)(No.84~91)

第431表 ガラス小玉鈔型観察表(5)(No. 75 ~ 93)

No.	形状	計測値 (c m · g)					色 調		軸 孔	胎 土	特 徴	備 考
		径	厚さ	孔径	孔深	重さ	表面	裏面				
75	—	—	1.4	0.40	0.40	47.2	橙	にぶい橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI168(第357図4)
76	—	—	1.5	0.45	0.40	31.9	明赤褐	明赤褐	不貫通、一部貫通	片岩・チャート	ガラス玉不完成品12点残存。裏面、ケズリ後、丁寧なナデ。	SI200北西(第413図16)
77	—	—	1.2	0.45	0.35	18.4	明赤褐	橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、丁寧なナデ。	SI200南西(第413図17)
78	—	—	1.3	0.50	0.35	10.8	橙	橙	貫通、一部不貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI200南西(第413図18)
79	円板	13.0	1.3	0.50	0.35	20.9	明赤褐	橙	不貫通、一部貫通	チャート・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI204北西(第422図1)
80	—	—	1.3	0.45	0.35	7.4	橙	にぶい橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔と表面に溶材微量付着。裏面、ナデ。	SI204北西(第422図2)
81	円板	13.0	1.2	0.40	0.35	11.5	橙	橙	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI206南西(第428図16)
82	円板	18.0	1.2	0.45	0.30	29.5	明赤褐	にぶい褐	貫通、一部不貫通	雲母・細砂粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、丁寧なナデ。	SI217(第453図13)
83	円板	14.4	1.6	0.50	0.35	99.2	橙	橙	貫通	チャート・黒色粒	大半の型孔にガラス質・溶材、周縁部に溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI221(第463図24)
84	円板	12.6	1.2	0.40	0.30	55.7	にぶい橙	橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材付着。裏面、ナデ。	SI221(第463図25)
85	円板	20.0	1.7	0.45	0.30	59.5	褐	にぶい黄褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、丁寧なナデ。	SI221カマド内(第463図26)
86	円板	15.2	1.1	0.40	0.30	45.6	黄褐	明褐	不貫通、一部貫通	細砂粒・黒色粒	型孔及び表面に溶材付着。裏面、砂底状、周縁部ケズリ後ナデ。	SI221(第463図27)
87	円板	17.4	1.3	0.40	0.25	50.1	にぶい褐	にぶい褐	貫通	細砂粒・黒色粒	ガラス質・溶材付着。裏面、砂底状、周縁部ナデ。	SI221(第463図28)
88	円板	16.0	1.2	0.40	0.35	40.2	にぶい赤褐	にぶい褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔にガラス質・溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI221(第463図29)
89	円板	14.0	1.2	0.45	0.30	36.9	橙	にぶい褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後、周縁部除き丁寧なナデ。	SI221南西(第463図30)
90	円板	18.0	1.2	0.50	0.30	36.8	明赤褐	にぶい赤褐	貫通、一部不貫通	雲母・黒色粒	型孔と表面一部にガラス質・溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI221カマド内(第463図31)
91	円板	12.0	1.4	0.50	0.25	27.5	明赤褐	明赤褐	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、ケズリ後、丁寧なナデ。	SI221(第463図32)
92	—	—	—	—	—	15.7	—	明赤褐	貫通	チャート・黒色粒	表面、剝離。裏面、ケズリ後、丁寧なナデ。	SI221カマド内(第463図33)
93	円板	10.0	1.2	0.40	0.25	13.8	橙	にぶい橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI221(第463図34)



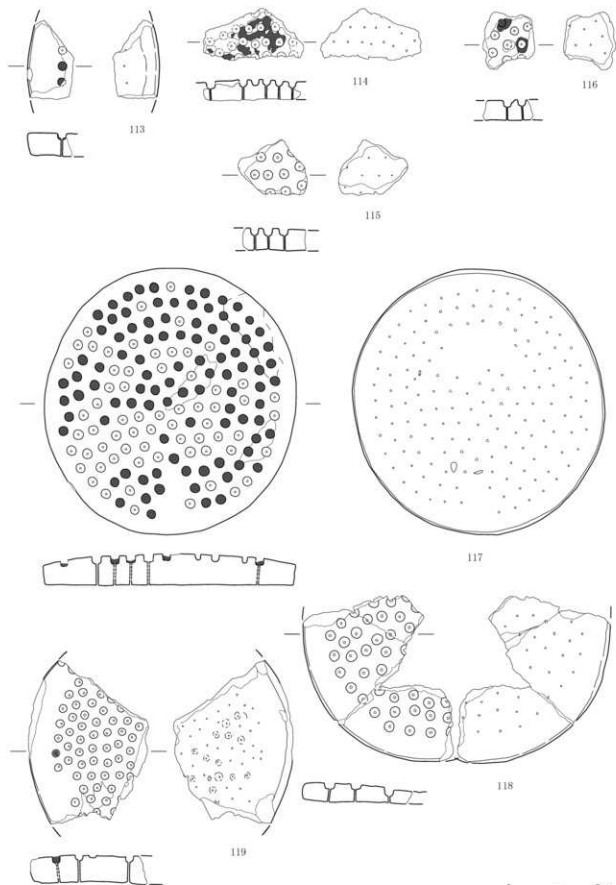
第958図 ガラス小玉鑄型集成図 (11) (No. 92~104)



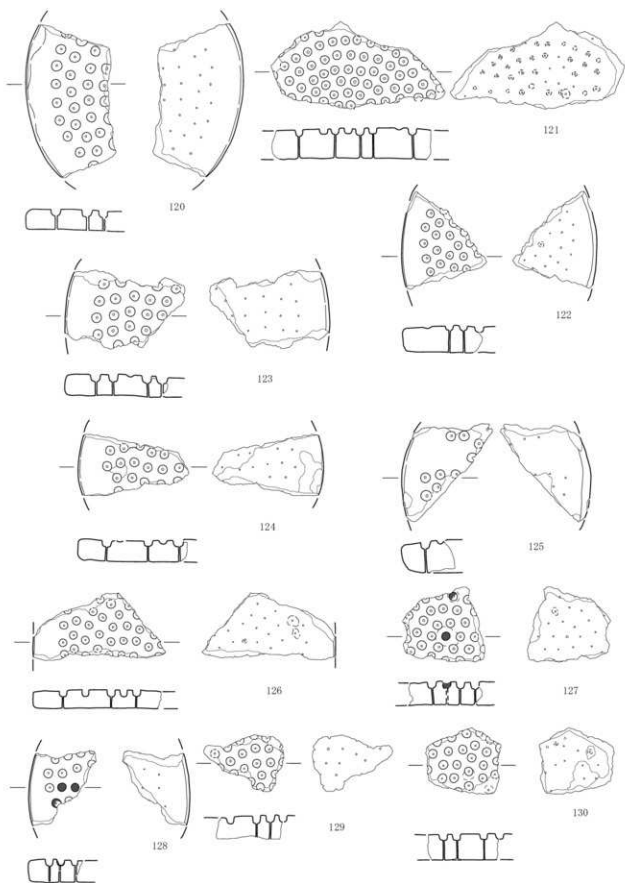
第959図 ガラス小玉銚型集成図 (12) (No. 105~112)

第432表 ガラス小玉罇型観察表(6) (No. 94 ~ 112)

No.	形状	計測値 (c m · g)					色 調		軸 孔	胎 土	特 徴	備 考
		径	厚さ	孔径	孔深	重さ	表面	裏面				
94	円板	13.0	1.3	0.40	0.35	15.7	にぶい橙	にぶい橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI221南西(第464図35)
95	円板	11.0	1.4	0.45	0.30	14.8	にぶい黄橙	にぶい橙	貫通	細砂粒・黒色粒	ガラス玉不完成品残存。型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI221(第464図36)
96	円板	13.6	1.5	0.40	0.25	13.3	橙	明赤褐	不貫通、一部貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI221(第464図37)
97	円板	13.2	1.3	0.50	0.35	8.7	明赤褐	にぶい赤褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔と表面に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI221(第464図38)
98	—	—	1.1	0.40	0.30	9.3	橙	にぶい橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔・軸孔に溶材微量付着。裏面、平滑。	SI221北西(第464図39)
99	—	—	1.8	0.45	0.30	21.3	橙	にぶい橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔と表面一部に溶材(灰黄色物)付着。裏面、ナデ。	SI233北(第489図1)
100	円板	11.0	1.2	0.45	0.30	21.9	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貫通、一部不貫通	チャート・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI238(第502図5)
101	円板	14.0	1.1	0.45	0.35	6.9	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材微量付着。軸孔に被熱痕、欠損部を研磨。表面周縁～側面、布目圧痕。裏面、ナデ。	SI238南西(第502図6)
102	—	—	1.2	0.45	0.35	11.0	にぶい橙	にぶい橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔にガラス質・溶材、表面一部に溶材(灰黄色物)付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI238南西(第502図7)
103	円板	15.0	1.8	0.40	0.25	59.9	灰黄褐	にぶい黄橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI248北東(第527図2)
104	—	—	1.1	0.35	0.25	9.0	明赤褐	明赤褐	貫通、一部不貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI249北東(第530図4)
105	円板	13.6	1.3	0.35	0.30	135.9	にぶい橙・にぶい黄褐	明赤褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材付着。側面、布目圧痕。裏面、ケズリ後ナデ。	SI111南西、SI253の2点接合。SI253(第538図16)
106	円板	12.0	1.4	0.40	0.35	43.8	明赤褐	明赤褐	貫通	チャート・黒色粒	2点接合。型孔に溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI212、SI253南西の2点接合。SI253(第538図17)
107	円板	13.0	1.5	0.35	0.30	68.3	橙	明赤褐	貫通、一部不貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI253北西(第538図18)
108	—	—	1.1	0.45	0.35	17.9	橙	にぶい黄橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、平滑。	SI253南東(第538図19)
109	円板	12.0	1.1	0.40	0.35	15.8	灰黄褐	オリーブ黒	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。表面周縁部に布目圧痕。裏面、丁寧なナデ。	SI253北西(第538図20)
110	円板	16.0	1.4	0.45	0.40	71.6	にぶい橙	にぶい橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材付着。裏面、ナデ。	SI254南(第541図16)
111	円板	16.0	1.2	0.40	0.40	36.5	明赤褐	明赤褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材付着。裏面、砂底状。	SI254床下(第541図17)
112	円板	14.0	1.2	0.40	0.35	16.9	明赤褐	灰黄褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ナデ。	SI254(第541図18)



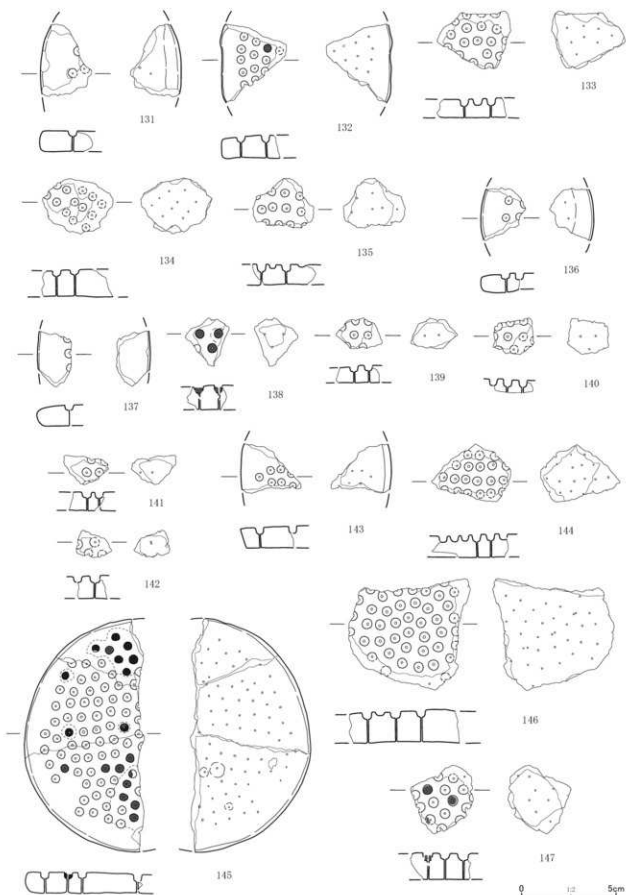
第960図 ガラス小玉銚型集成図 (13) (No. 113~119)



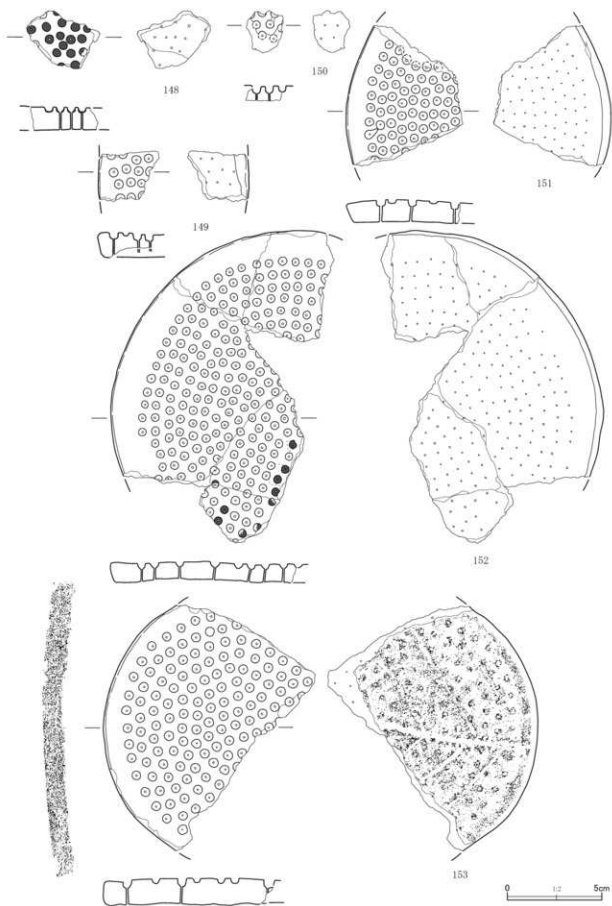
第961図 ガラス小玉銚型集成図 (14) (No. 120~130)

第433表 ガラス小玉鈎型観察表(7) (No. 113 ~ 132)

No.	形状	計測値 (cm・g)					色 調		軸 孔	胎 土	特 徴	備 考
		径	厚さ	孔径	孔深	重さ	表面	裏面				
113	円板	12.0	1.1	0.45	0.30	13.5	橙	にぶい黄橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、砂底状、周縁部ナデ。	SI254床下(第541図19)
114	—	—	—	0.45	0.30	11.5	橙	—	(貫通)	チャート・黒色粒	型孔と表面全体に溶材(灰白色物)付着。裏面大半が剥離。	SI254床下(第541図20)
115	—	—	1.1	0.45	0.40	11.2	橙	橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ナデ。	SI254北東(第541図21)
116	—	—	1.1	0.40	0.30	9.2	橙	にぶい橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材、表面一部に溶材(灰黄色物)付着。裏面、砂底状。	SI254床下(第541図22)
117	円板	13.3	1.6	0.50	0.40	361.4	にぶい橙	にぶい黄橙	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	完形品。型孔と表面一部に溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI257(第546図7)
118	円板	12.4	1.0	0.50	0.30	67.0	明赤褐	明赤褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI257、SI257覆土周辺の3点接合。 SI257(第546図8)
119	円板	15.6	1.4	0.40	0.30	85.7	にぶい赤褐	にぶい橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材、表面全体に薄く灰白色物付着。裏面、ナデ。	SI257(第546図9)
120	円板	15.0	1.1	0.50	0.35	55.8	明赤褐	明赤褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔にガラス質・溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI257(第546図10)
121	—	—	1.6	0.45	0.35	69.6	橙	明赤褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔・軸孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後、丁寧なナデ。	SI257(第546図11)
122	円板	16.6	1.3	0.40	0.25	29.9	橙	明褐	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI257(第546図12)
123	円板	14.0	1.1	0.50	0.35	31.7	明赤褐	明赤褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI257(第546図13)
124	円板	12.0	1.1	0.45	0.35	23.6	明赤褐	にぶい赤褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI257(第546図14)
125	円板	13.0	1.6	0.50	0.35	31.8	橙	にぶい橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI257(第546図15)
126	直	—	1.0	0.40	0.35	22.3	浅黄橙	にぶい黄橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI257(第546図16)
127	—	—	1.2	0.45	0.35	24.2	明赤褐	明褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材、表面一部に溶材(灰黄色物)付着。裏面、砂底状。	SI257南東(第546図17)
128	円板	13.0	1.2	0.40	0.35	16.9	にぶい黄橙	灰黄褐	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、砂底状。	SI257(第546図18)
129	—	—	—	0.40	0.40	12.5	明赤褐	—	不明	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面大半が剥離。	SI257(第546図19)
130	—	—	1.4	0.40	0.30	20.3	明赤褐	にぶい褐	貫通、一部不貫通	雲母・チャート	型孔に溶材微量付着。裏面、ナデ。	SI257(第546図20)
131	円板	17.0	1.1	0.45	0.30	12.7	灰褐	にぶい橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、砂底状、周縁部ナデ。	SI257(第546図21)
132	円板	24.2	1.2	0.40	0.35	16.0	橙	にぶい黄橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材付着。裏面、ナデ。	SI257カマド周辺(第546図22)



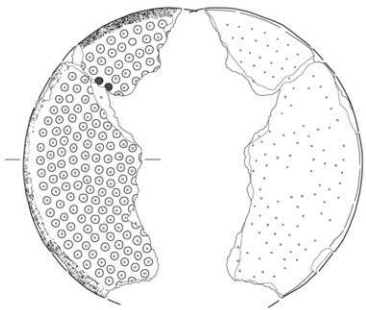
第962図 ガラス小玉銚型集成図 (15) (No. 131~147)



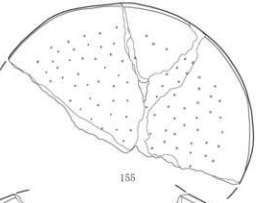
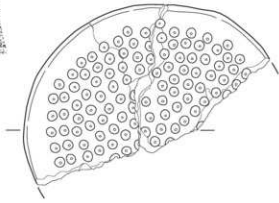
第963図 ガラス小玉鑄型集成図 (16) (No. 148~153)

第434表 ガラス小玉罇型観察表(8)(No.133~153)

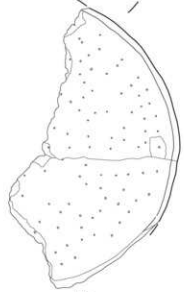
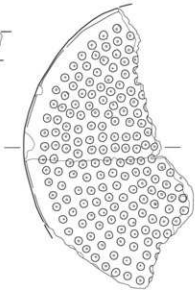
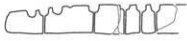
No.	形状	計測値 (c m・g)					色 調		軸 孔	胎 土	特 徴	備 考
		径	厚さ	孔径	孔深	重さ	表面	裏面				
133	—	—	1.0	0.45	0.35	12.3	にぶい赤褐	橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI257(第546図23)
134	—	—	1.4	0.40	0.30	15.1	にぶい褐	にぶい黄橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ナデ。	SI257北西(第546図24)
135	—	—	1.1	0.45	0.35	8.8	明赤褐	明赤褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI257南東床直(第547図25)
136	円板	11.0	1.0	0.40	0.25	7.2	明赤褐	橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ナデ。	SI257(第547図26)
137	円板	10.0	1.1	0.45	0.30	6.8	にぶい橙	灰黄褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI257(第547図27)
138	—	—	1.3	0.45	—	5.0	にぶい橙	にぶい黄橙	貫通	細砂粒・黒色粒	ガラス玉不完成品残存。表面一部に溶材(灰黄色物)付着。裏面、ナデ。	SI257(第547図28)
139	—	—	—	0.40	0.40	2.9	橙	—	不明	チャート・黒色粒	型孔に溶材付着。裏面、剝離。	SI257(第547図29)
140	—	—	0.9	0.40	0.30	3.6	灰黄	灰黄	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ナデ。	SI257北西(第547図30)
141	—	—	1.0	0.50	0.30	3.2	にぶい赤褐	橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI257南東(第547図31)
142	—	—	1.2	—	0.35	3.0	橙	橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ナデ。	SI257(第547図32)
143	円板	13.2	1.1	0.40	0.35	8.7	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貫通	片岩・黒色粒	型孔にガラス質・溶材微量付着。裏面、ケズリ後、丁寧なナデ。	SI258北西(第549図2)
144	—	—	1.2	0.45	0.35	12.7	にぶい橙	橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI269(第573図1)
145	円板	12.4	1.1	0.40	0.30	101.6	明赤褐	明赤褐	貫通	細砂粒・黒色粒	ガラス質・溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI111付近、SI271北西、表採の3点接合。SI271(第577図5)
146	—	—	1.7	0.50	0.35	70.3	橙	にぶい橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔・軸孔に溶材微量付着。裏面、ナデ。	SI271(第577図6)
147	—	—	1.4	0.50	0.30	15.6	橙	橙	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	ガラス玉不完成品残存。型孔と表面にガラス質・溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI271(第577図7)
148	—	—	1.2	0.40	0.30	12.8	橙	にぶい黄橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔にガラス質・溶材、表面に溶材(灰黄色物)付着。裏面、丁寧なナデ。	SI271北東(第577図8)
149	直	—	1.4	0.45	0.35	9.4	橙	橙	不明	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。	SI271南東(第577図9)
150	—	—	—	0.40	0.35	2.8	橙	—	不明	チャート・黒色粒	型孔にガラス質・溶材微量付着。裏面、剝離。	SI271(第577図10)
151	円板	16.0	1.2	0.40	0.35	54.4	明赤褐	橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、平滑。	SI272(第580図7)
152	円板	20.0	1.1	0.40	0.30	191.1	明赤褐	明赤褐	貫通	チャート・黒色粒	ガラス質・溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI111床下、SI254床下、SI275、SI275南の5点接合。SI275(第587図4)
153	円板	14.6	1.3	0.45	0.40	182.6	橙	にぶい赤褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。側面、布目痕。裏面、木葉痕。	SI275(第587図5)



154



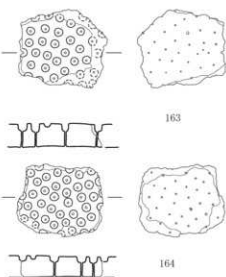
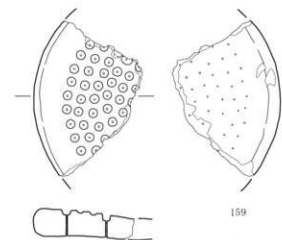
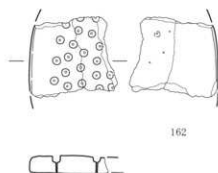
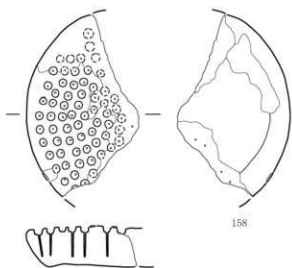
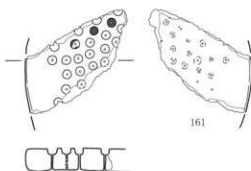
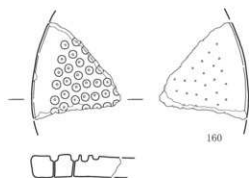
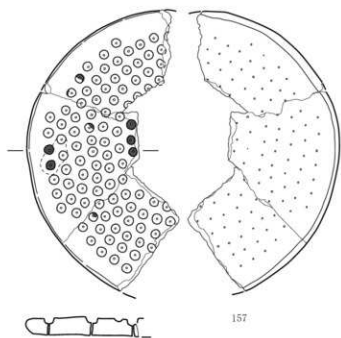
155



156

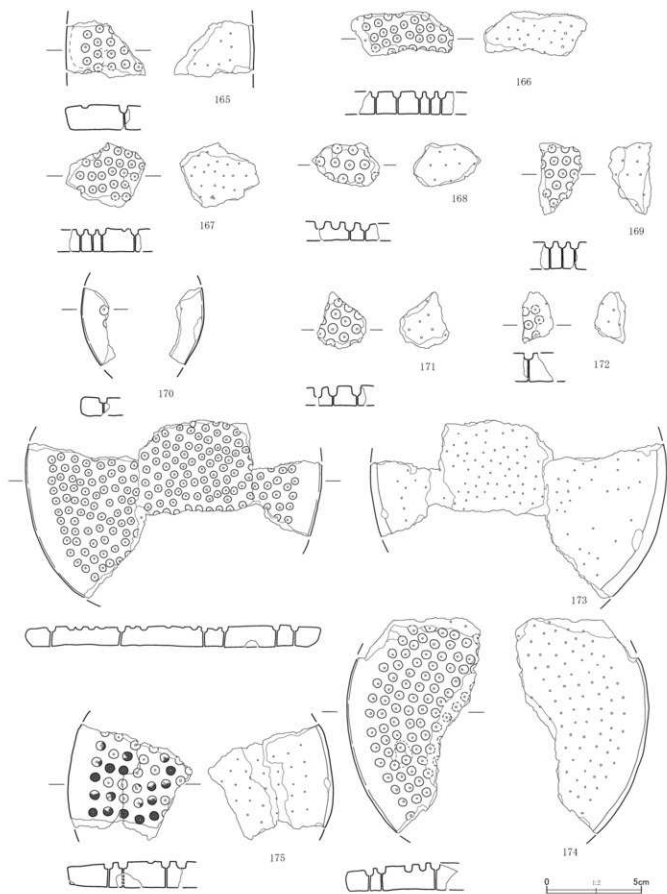


第964図 ガラス小玉鉢型集成図 (17) (No. 154~156)



0 1.2 5cm

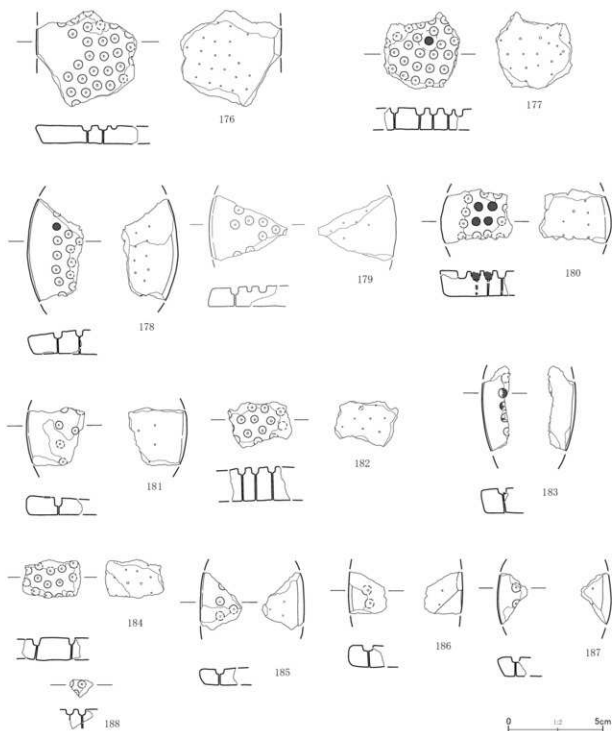
第965図 ガラス小玉銚型集成図 (18) (No. 157~164)



第966図 ガラス小玉銚型集成図 (19) (No. 165~175)

第435表 ガラス小玉罇型観察表(9) (No. 154 ~ 172)

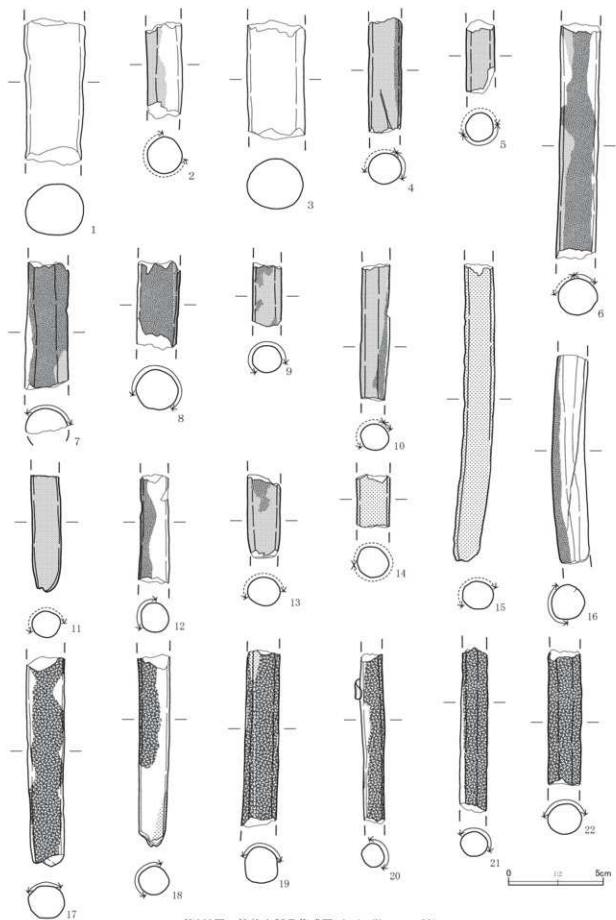
No.	形状	計測値 (c m · g)					色 調		軸 孔	胎 土	特 徴	備 考
		径	厚さ	孔径	孔深	重さ	表面	裏面				
154	円板	16.0	1.2	0.40	0.35	144.3	明赤褐	明赤褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材付着。表面固縁～側面、布目圧痕。裏面、ケズリ後ナデ。	SI202南西、I275南の2点接合。 SI275(第587図6)
155	円板	14.0	1.5	0.50	0.40	182.9	にぶい橙	にぶい橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI275南、SI275北、SI275の3点接合。 SI275(第587図7)
156	円板	19.2	1.2	0.40	0.40	149.3	橙	にぶい橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材付着。裏面、砂底状。	SI275(第587図8)
157	円板	16.0	1.0	0.45	0.30	111.8	明赤褐	明赤褐	貫通	チャート・黒色粒	ガラス質・溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI111床下、 SI275の3点接合。 SI275(第587図9)
158	円板	12.2	2.2	0.40	0.30	104.6	にぶい橙	にぶい橙	不貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、丁寧なナデ。	SI275(第587図10)
159	円板	13.6	1.4	0.45	0.35	66.7	暗褐	にぶい黄橙	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、砂底状。	SI275北(第588図11)
160	円板	19.8	1.2	0.40	0.30	27.3	橙	にぶい黄橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔と表面に溶材(灰白色物)付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI275床下(第588図12)
161	円板	20.0	1.1	0.45	0.30	28.2	橙	橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI275南(第588図13)
162	円板	14.0	0.9	0.40	0.30	23.9	浅黄	灰白	不貫通、一部貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI275南(第588図14)
163	—	—	1.2	0.40	0.40	26.9	橙	にぶい橙	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI275北(第588図15)
164	—	—	1.1	0.45	0.30	23.2	橙	橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI275南(第588図16)
165	(円板)	—	1.3	0.40	0.40	16.6	橙	橙	貫通、一部不貫通	細砂粒・黒色粒	型孔と表面に溶材(灰黄色物)付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI275北(第588図17)
166	—	—	1.2	0.40	0.35	15.3	橙	にぶい黄橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ナデ。	SI275北(第588図18)
167	—	—	1.2	0.45	0.30	16.3	にぶい橙	橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI275(第588図19)
168	—	—	0.9	0.50	0.45	7.3	橙	橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔と表面に溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI275床下(第588図20)
169	—	—	1.4	0.50	0.35	10.7	灰褐	にぶい褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ナデ。	SI275床下(第588図21)
170	円板	11.0	1.0	0.50	0.30	6.5	にぶい赤褐	橙	不明	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、丁寧なナデ。	SI275床下(第588図22)
171	—	—	1.0	0.50	0.50	6.5	にぶい黄橙	橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔にガラス質・溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI275床下(第588図23)
172	—	—	1.5	0.50	0.35	4.7	灰黄褐	にぶい褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ナデ。	SI275床下(第588図24)



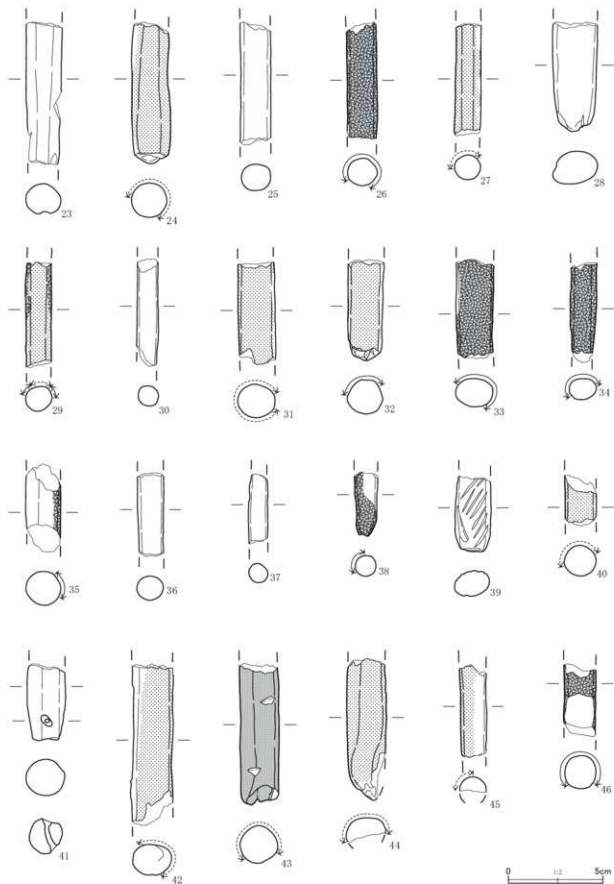
第967図 ガラス小玉銜型集成図 (20) (No. 176~188)

第436表 ガラス小玉罇型観察表 (10) (No. 173 ~ 188)

No.	形状	計測値 (cm・g)					色 調		軸 孔	胎 土	特 徴	備 考
		径	厚さ	孔径	孔深	重さ	表面	裏面				
173	円板	15.7	1.1	0.40	0.30	130.2	明赤褐	にぶい赤褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、砂底状。	SK311、SI253南西、SI254南東出土の3点接合。SK311 (第784図27)
174	円板	17.0	1.4	0.45	0.30	104.2	明赤褐	にぶい赤褐	貫通	細砂粒・黒色粒	一部に溶材付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI148周辺。遺構外(第791図1)
175	円板	14.0	1.4	0.45	0.35	53.3	灰褐	黒	貫通	細砂粒・黒色粒	2点接合。型孔にガラス質・溶材付着。裏面、平滑。	SI120、北壁トレンチ中央(第791図2)
176	直	—	0.9	0.45	0.25	26.8	灰褐	黒褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	ピット出土(第791図3)
177	—	—	1.1	0.45	0.35	20.1	明赤褐	明赤褐	貫通、一部不貫通	チャート・黒色粒	ガラス玉不完成品残存。型孔と表面一部に溶材(灰黄色物)付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI108付近(第791図4)
178	円板	14.0	1.1	0.40	0.35	19.2	橙	にぶい黄橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質・溶材付着。裏面、丁寧なナデ。	SI108付近(第791図5)
179	円板	12.1	1.1	0.50	0.40	13.4	明赤褐	橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	(第791図6)
180	円板	—	1.3	0.45	0.35	16.2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貫通	細砂粒・黒色粒	ガラス玉不完成品残存。裏面、ナデ。	SI108付近(第791図7)
181	円板	13.0	1.0	0.45	0.50	11.2	橙	橙	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI106付近(第791図8)
182	—	—	1.7	0.40	0.35	14.5	橙	にぶい橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI306 ? (第791図9)
183	円板	14.0	1.3	—	0.30	9.9	灰黄褐	灰黄褐	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔にガラス質付着。裏面、平滑。	SI111付近(第791図10)
184	—	—	1.2	0.40	0.35	8.2	橙	にぶい黄橙	貫通、一部不貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、砂底状。	SI110付近(第791図11)
185	円板	13.0	0.9	0.45	0.25	5.3	明赤褐	明赤褐	貫通	チャート・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、丁寧なナデ。	SI106付近(第791図12)
186	円板	—	1.1	0.50	0.30	4.2	にぶい褐	にぶい褐	貫通	細砂粒・白色物	型孔と表面に溶材(灰白色物)付着。裏面、ナデ。	SI110付近(第791図13)
187	円板	11.0	1.0	0.50	0.25	3.6	橙	橙	貫通	細砂粒・黒色粒	型孔に溶材微量付着。裏面、ケズリ後ナデ。	SI110付近(第791図14)
188	—	—	—	0.40	0.30	0.7	橙	—	不明	チャート・黒色粒	型孔にガラス質・溶材微量付着。裏面、剥離。	SI110付近(第791図15)



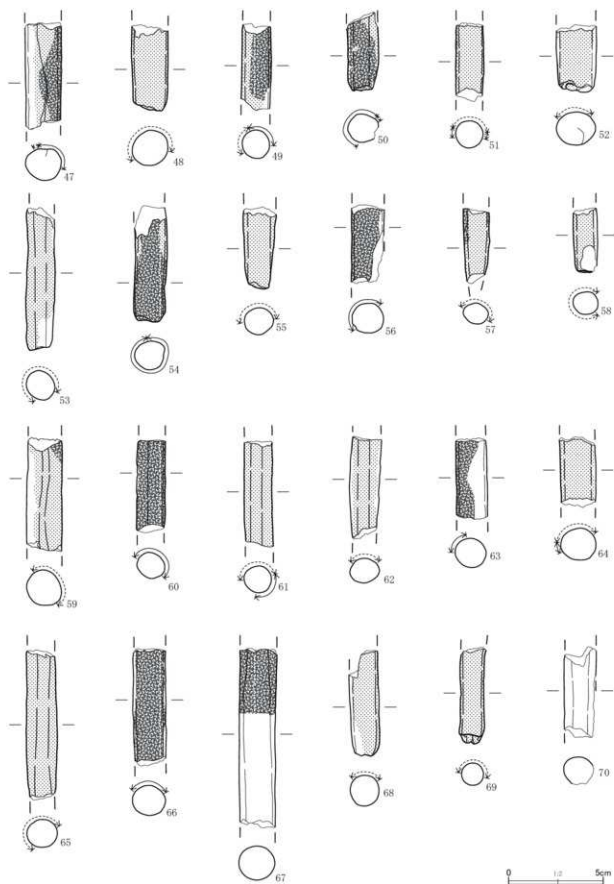
第968图 棒状土製品集成图(1)(No. 1~22)



第969图 棒状土製品集成图(2)(No. 23~46)

第437表 棒状土製品観察表(1)(No. 1~34)

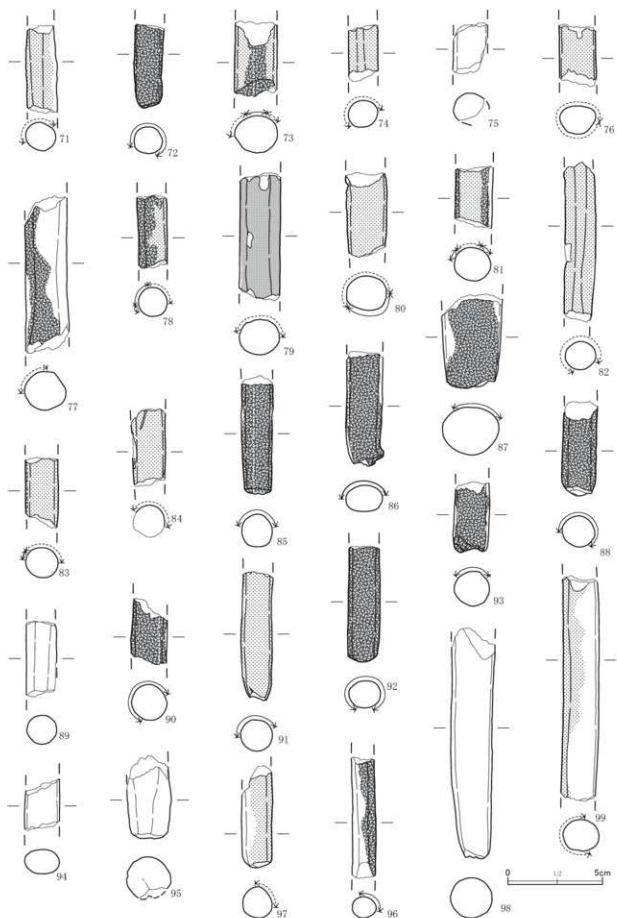
No.	器種	法量(cm)・特徴/出土位置(本文挿図・遺物番号)	備考
1	棒状土製品	長さ[7.8]、幅3.0、厚2.7、重さ[89.75]g。胎土：白色粒・黒色粒・褐色粒。色調：橙色。/SI147北東(第55図27)。	破片
2	棒状土製品	長さ[5.1]、幅1.8、厚2.0、重さ[20.47]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり。下は灰色に変色。/SI104南西(第201図9)。	破片
3	棒状土製品	長さ[6.3]、幅3.0、厚2.6、重さ[62.66]g。胎土：白色粒・黒色粒・角閃石。色調：橙色。/SI105(第204図3)。	破片
4	棒状土製品	長さ[6.1]、幅1.8、厚1.6、重さ[22.17]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI106西(第206図7)。	破片
5	棒状土製品	長さ[3.9]、幅1.5、厚1.5、重さ[10.40]g。胎土：白色粒・褐色粒。色調：にぶい赤褐色。淡黄色の付着物あり。下は灰色に変色。/SI106東(第206図8)。	破片
6	棒状土製品	長さ[2.5]、幅2.0、厚1.9、重さ[66.77]g。胎土：白色粒・角閃石・褐色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり。下は灰色に変色。/SI107南側・SI130南西(第209図80)。	破片
7	棒状土製品	長さ[7.8]、幅2.2、厚1.4]、重さ[22.75]g。胎土：白色粒・黒色粒・褐色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり。一部に淡黄色の付着物。/SI107北東(第209図81)。	破片
8	棒状土製品	長さ[4.7]、幅2.2、厚2.1、重さ[25.66]g。胎土：白色粒。色調：灰色。灰色の変色部あり。/SI107(第209図82)。	破片
9	棒状土製品	長さ[3.4]、幅1.5、厚1.5、重さ[9.66]g。胎土：白色粒。色調：にぶい橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI107床下(第209図83)。	破片
10	棒状土製品	長さ[7.3]、幅1.5、厚1.4、重さ[18.78]g。胎土：白色粒。色調：にぶい褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI109南西・SI130北西(第215図5)。	破片
11	棒状土製品	長さ[6.2]、幅1.5、厚1.4、重さ[16.41]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり。/SI109南西(第215図6)。	破片
12	棒状土製品	長さ[5.8]、幅1.5、厚1.5、重さ[17.58]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい黄褐色。灰色の変色部あり、所々に淡黄色の付着物あり。/SI109(第215図7)。	破片
13	棒状土製品	長さ[4.4]、幅1.7、厚1.5、重さ[15.02]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい黄褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI109南西(第215図8)。	破片
14	棒状土製品	長さ[2.8]、幅1.7、厚1.6、重さ[10.52]g。胎土：白色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI109南西(第215図9)。	破片
15	棒状土製品	長さ[15.7]、幅1.5、厚1.5、重さ[51.99]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI111北東(第222図36)。	破片
16	棒状土製品	長さ[11.0]、幅1.8、厚1.8、重さ[49.32]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい黄褐色。灰色の変色部あり。/SI111床下(第222図37)。	破片
17	棒状土製品	長さ[11.1]、幅1.9、厚1.7、重さ[48.53]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり。/SI111(第222図38)。	破片
18	棒状土製品	長さ[10.1]、幅1.6、厚1.5、重さ[28.97]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。灰色の変色部、淡黄色の付着物あり。/SI111床下(第222図39)。	破片
19	棒状土製品	長さ[9.3]、幅1.8、厚1.9、重さ[44.39]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり。/SI111南西(第222図40)。	破片
20	棒状土製品	長さ[9.0]、幅1.2、厚1.3、重さ[18.15]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり。粘土層付着。/SI111床下(第222図41)。	破片
21	棒状土製品	長さ[8.7]、幅1.4、厚1.4、重さ[20.18]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。赤色の変色部あり。/SI111北西(第222図42)。	破片
22	棒状土製品	長さ[7.1]、幅1.8、厚1.6、重さ[27.11]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：灰黄褐色。灰色の変色部あり、所々に淡黄色の付着物あり。/SI111南西・SI275(第222図43)。	破片
23	棒状土製品	長さ[7.5]、幅1.85、厚1.5、重さ[29.82]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：黒褐色。/SI111床下(第222図44)。	破片
24	棒状土製品	長さ[7.5]、幅1.9、厚1.8、重さ[34.75]g。胎土：白色粒。色調：にぶい橙色。淡黄色の付着物あり。/SI111南西(第222図45)。	破片
25	棒状土製品	長さ[6.5]、幅1.6、厚1.3、重さ[21.55]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい橙色。/SI111床下(第222図46)。	破片
26	棒状土製品	長さ[6.2]、幅1.6、厚1.5、重さ[19.29]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい橙色。灰色の変色部あり。/SI111床下(第222図47)。	破片
27	棒状土製品	長さ[5.9]、幅1.4、厚1.3、重さ[14.19]g。胎土：白色粒。色調：にぶい黄褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI111南西(第222図48)。	破片
28	棒状土製品	長さ[5.8]、幅2.4、厚1.7、重さ[29.11]g。胎土：白色粒・角閃石。色調：橙色。/SI111床下(第222図49)。	破片
29	棒状土製品	長さ[5.55]、幅1.4、厚1.3、重さ[12.84]g。胎土：白色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI111(第222図50)。	破片
30	棒状土製品	長さ[5.2]、幅1.1、厚1.1、重さ[10.06]g。胎土：白色粒。色調：橙色。/SI111北西(第222図51)。	破片
31	棒状土製品	長さ[5.4]、幅1.9、厚1.7、重さ[25.10]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI111南西(第222図52)。	破片
32	棒状土製品	長さ[5.3]、幅1.8、厚1.8、重さ[22.11]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI111南西出土(第222図53)。	破片
33	棒状土製品	長さ[5.3]、幅1.9、厚1.5、重さ[20.27]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり、一部に淡黄色の付着物あり。/SI111床下(第222図54)。	破片
34	棒状土製品	長さ[5.2]、幅1.4、厚1.1、重さ[9.58]g。胎土：白色粒。色調：橙色。灰色・赤色の変色部あり。/SI111(第222図55)。	破片



第970图 棒状土製品集成图(3)(No. 47~70)

第438表 棒状土製品観察表(2)(No.35~68)

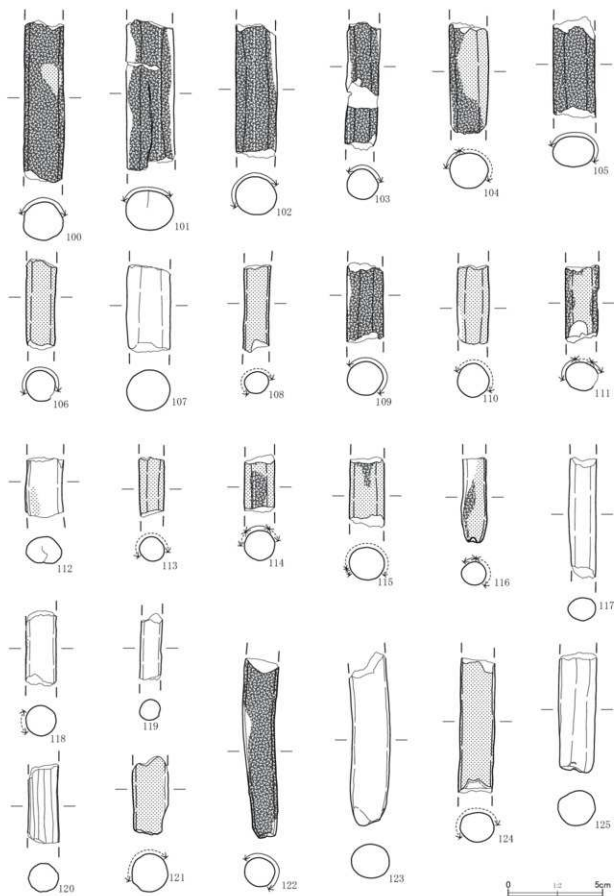
No.	器種	法量(cm)・特徴/出土位置(本文挿図・遺物番号)	備考
35	棒状土製品	長さ[4.6]、幅1.9、厚1.8、重さ[15.67]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり。/ SI111北東(第222図56)	破片
36	棒状土製品	長さ[4.5]、幅1.4、厚1.3、重さ[11.31]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい橙色。/ SI111床下(第222図57)	破片
37	棒状土製品	長さ[3.7]、幅1.0、厚1.0、重さ[4.93]g。胎土：白色粒。色調：にぶい橙色。/ SI111南東(第222図58)	破片
38	棒状土製品	長さ[3.4]、幅1.1、厚1.1、重さ[5.09]g。胎土：白色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり、所々に淡黄色の付着物あり。/ SI111北西(第222図59)	破片
39	棒状土製品	長さ[4.0]、幅1.8、厚1.3、重さ[11.84]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい赤褐色。斜位の線刻あり。/ SI113北西(第226図7)	破片
40	棒状土製品	長さ[2.7]、幅1.7、厚1.6、重さ[7.11]g。胎土：白色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり。/ SI115南東(第232図7)	破片
41	棒状土製品	長さ[4.05]、幅2.05、厚1.9、重さ[17.26]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。小孔が穿たれる。孔径0.2cm。/ SI119(第245図3)	破片
42	棒状土製品	長さ[8.5]、幅2.1、厚1.7、重さ[40.34]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり。/ SI130(第269図31)	破片
43	棒状土製品	長さ[7.5]、幅2.1、厚2.0、重さ[37.27]g。胎土：白色粒・石英。色調：灰黄色。淡黄色の付着物あり。/ SI130床下(第269図32)	破片
44	棒状土製品	長さ[7.4]、幅2.1、厚1.7、重さ[24.79]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：灰黄褐色。淡黄色の付着物あり。/ SI130南西(第269図33)	破片
45	棒状土製品	長さ[5.9]、幅1.4、厚[0.8]、重さ[6.66]g。胎土：白色粒。色調：橙色。所々に淡黄色の付着物あり。/ SI130北東出土(第269図34)	破片
46	棒状土製品	長さ[3.8]、幅1.7、厚1.8、重さ[12.16]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい黄褐色。灰色の変色部あり、所々に淡黄色の付着物あり。/ SI130南西(第269図35)	破片
47	棒状土製品	長さ[5.6]、幅1.8、厚1.7、重さ[23.40]g。胎土：白色粒。色調：橙色。灰色・赤色の変色部あり、所々に淡黄色の付着物あり。/ SI134北東(第279図2)	破片
48	棒状土製品	長さ[4.5]、幅1.9、厚1.8、重さ[20.91]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ SI134北西(第281図16)	破片
49	棒状土製品	長さ[4.6]、幅1.6、厚1.5、重さ[13.16]g。胎土：白色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり、所々に淡黄色の付着物あり。/ SI135北東(第281図17)	破片
50	棒状土製品	長さ[4.15]、幅1.6、厚1.5、重さ[11.64]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：淡褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ SI135(第281図18)	破片
51	棒状土製品	長さ[4.1]、幅1.5、厚1.5、重さ[10.45]g。胎土：白色粒。色調：にぶい橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ SI135北西(第281図19)	破片
52	棒状土製品	長さ[3.6]、幅2.1、厚1.8、重さ[16.50]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ SI135北西(第281図20)	破片
53	棒状土製品	長さ[7.5]、幅1.5、厚1.6、重さ[20.18]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ SI138カマド内(第291図16)	破片
54	棒状土製品	長さ[6.2]、幅1.6、厚1.5、重さ[19.71]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：灰黄色。灰色の変色部あり、上に淡黄色の付着物あり。/ SI138南(第291図17)	破片
55	棒状土製品	長さ[4.3]、幅1.6、厚1.4、重さ[10.64]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ SI138西(第291図18)	破片
56	棒状土製品	長さ[4.2]、幅1.7、厚1.6、重さ[13.35]g。胎土：白色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり。/ SI138南(第291図19)	破片
57	棒状土製品	長さ[4.0]、幅1.3、厚1.1、重さ[7.21]g。胎土：白色粒。色調：にぶい黄褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ SI138北(第291図20)	破片
58	棒状土製品	長さ[3.4]、幅1.3、厚1.2、重さ[5.91]g。胎土：白色粒。色調：にぶい黄褐色。淡黄色の付着物あり。/ SI138南(第291図21)	破片
59	棒状土製品	長さ[6.0]、幅1.9、厚1.9、重さ[27.59]g。胎土：白色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ SI141(第297図3)	破片
60	棒状土製品	長さ[4.9]、幅1.45、厚1.4、重さ[13.30]g。胎土：白色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり、所々に淡黄色の付着物あり。/ SI142(第299図4)	破片
61	棒状土製品	長さ[5.6]、幅1.45、厚1.4、重さ[15.93]g。胎土：白色粒。色調：にぶい橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ SI143南西(第302図25)	破片
62	棒状土製品	長さ[5.4]、幅1.6、厚1.3、重さ[13.39]g。胎土：白色粒。色調：橙色。部分的に淡黄色の付着物あり。/ SI143南西(第302図26)	破片
63	棒状土製品	長さ[4.3]、幅1.7、厚1.5、重さ[14.80]g。胎土：白色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり。/ SI143床下(第302図27)	破片
64	棒状土製品	長さ[3.7]、幅1.9、厚1.7、重さ[14.68]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ SI143北西(第302図28)	破片
65	棒状土製品	長さ[7.9]、幅1.65、厚1.55、重さ[23.82]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ SI148(第313図11)	破片
66	棒状土製品	長さ[6.2]、幅1.7、厚1.6、重さ[23.23]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり、所々に淡黄色の付着物あり。/ SI148南東(第313図12)	破片
67	棒状土製品	長さ[9.4]、幅1.9、厚1.8、重さ[46.36]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。灰色・赤色の変色部あり。/ SI150(第318図25)	破片
68	棒状土製品	長さ[5.6]、幅1.5、厚1.6、重さ[16.44]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり。/ SI150南東(第318図26)	破片



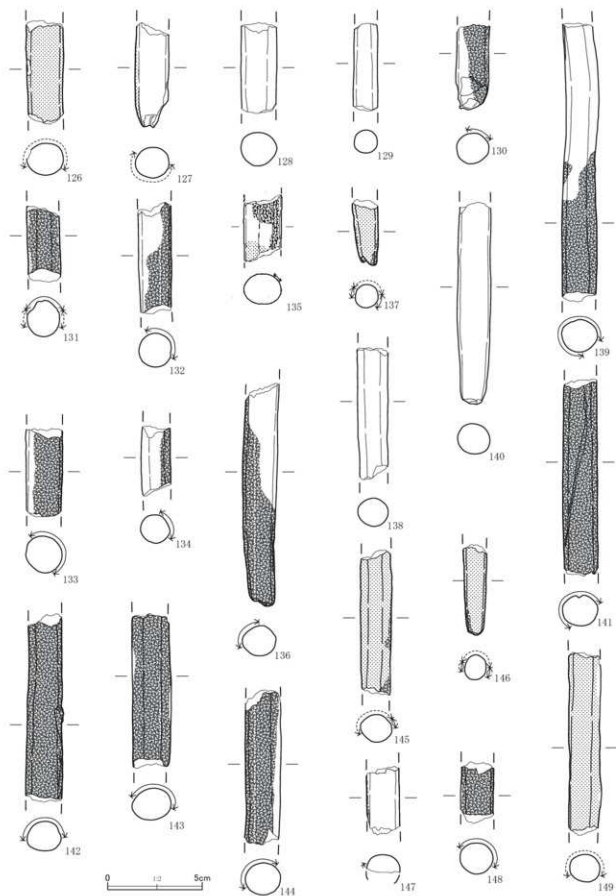
第971图 棒状土製品集成图(4) (No. 71~99)

第439表 棒状土製品観察表(3)(No.69~102)

No.	器種	法量(cm)・特徴/出土位置(本文挿図・遺物番号)	備考
69	棒状土製品	長さ[5.1],幅1.2,厚1.2,重さ[10.33]g。胎土:白色粒。色調:褐色。淡黄色の付着物あり。/SI150北東(第318図27)。	破片
70	棒状土製品	長さ[4.8],幅1.7,厚[1.5],重さ[12.94]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:にぶい褐色。/SI150北西(第318図28)。	破片
71	棒状土製品	長さ[4.6],幅1.6,厚1.5,重さ[13.78]g。胎土:白色粒。色調:にぶい褐色。淡黄色の付着物あり。/SI150(第318図29)。	破片
72	棒状土製品	長さ[4.4],幅1.5,厚1.4,重さ[11.57]g。胎土:片岩・白色粒・黒色粒。色調:褐色。灰色の変色部あり、所々に淡黄色の付着物あり。/SI150(第318図30)。	破片
73	棒状土製品	長さ[4.0],幅2.2,厚2.0,重さ[20.49]g。胎土:白色粒・褐色粒。色調:にぶい黄褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。下の割れ口も灰色に変色。/SI150南東(第318図31)。	破片
74	棒状土製品	長さ[3.0],幅1.5,厚1.4,重さ[7.71]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:にぶい褐色。淡黄色の付着物あり。/SI150北東(第318図32)。	破片
75	棒状土製品	長さ[2.7],幅1.8,厚[1.2],重さ[7.22]g。胎土:白色粒。色調:浅黄褐色。/SI150南西出土(第318図33)。	破片
76	棒状土製品	長さ[3.2],幅1.9,厚1.5,重さ[11.32]g。胎土:白色粒。色調:淡黄色。淡黄色の付着物あり。/SI157北東(第332図10)。	破片
77	棒状土製品	長さ[8.3],幅2.2,厚2.1,重さ[44.70]g。胎土:白色粒・角閃石・褐色粒。色調:褐色。灰色の変色部あり。/SI163(第346図1)。	破片
78	棒状土製品	長さ[3.9],幅1.5,厚1.5,重さ[12.46]g。胎土:白色粒。色調:褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI165南西(第350図7)。	破片
79	棒状土製品	長さ[6.7],幅2.1,厚1.9,重さ[35.26]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI166(第351図5)。	破片
80	棒状土製品	長さ[4.5],幅2.1,厚1.8,重さ[20.94]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:灰黄色。淡黄色の付着物あり、灰色の変色部あり。/SI166(第351図6)。	破片
81	棒状土製品	長さ[3.3],幅2.0,厚1.8,重さ[13.29]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI167北東(第355図3)。	破片
82	棒状土製品	長さ[8.45],幅1.6,厚1.5,重さ[24.58]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI171南西・SI179南西(第377図13)。	破片
83	棒状土製品	長さ[3.7],幅1.7,厚1.6,重さ[12.97]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:にぶい褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI179南西(第377図14)。	破片
84	棒状土製品	長さ[4.1],幅1.8,厚1.7,重さ[14.61]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:にぶい褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI180(第379図2)。	破片
85	棒状土製品	長さ[6.3],幅1.6,厚1.7,重さ[20.58]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:褐色。灰色の変色部あり、所々に淡黄色の付着物あり。/SI200南西(第413図19)。	破片
86	棒状土製品	長さ[6.1],幅1.9,厚1.4,重さ[21.05]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:褐色。灰色・赤色の変色部あり。/SI202南西(第418図3)。	破片
87	棒状土製品	長さ[5.0],幅3.0,厚2.5,重さ[43.85]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:褐色。灰色の変色部あり。/SI206南東(第428図17)。	破片
88	棒状土製品	長さ[5.0],幅1.7,厚1.6,重さ[18.48]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:褐色。灰色・赤色に変色。/SI206北東(第428図18)。	破片
89	棒状土製品	長さ[4.0],幅1.6,厚1.5,重さ[12.33]g。胎土:白色粒。色調:黒色。/SI206南東(第428図19)。	破片
90	棒状土製品	長さ[3.5],幅1.9,厚1.9,重さ[12.33]g。胎土:白色粒。色調:褐色。灰色の変色部あり、部分的に淡黄色の付着物あり。/SI206南西(第428図20)。	破片
91	棒状土製品	長さ[6.8],幅1.7,厚1.6,重さ[22.23]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:褐色。灰色の変色部あり、一部に淡黄色の付着物あり。/SI207南西(第431図15)。	破片
92	棒状土製品	長さ[6.1],幅1.7,厚1.4,重さ[19.16]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:褐色。灰色の変色部あり、所々に淡黄色の付着物あり。/SI207(第431図16)。	破片
93	棒状土製品	長さ[3.7],幅1.9,厚1.8,重さ[14.83]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:褐色。灰色の変色部あり。/SI207(第431図17)。	破片
94	棒状土製品	長さ[2.7],幅1.8,厚1.3,重さ[7.22]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:にぶい褐色。/SI207(第431図18)。	破片
95	棒状土製品	長さ[4.4],幅2.3,厚(2.2),重さ[22.18]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:にぶい褐色。/SI212北西(第442図6)。	破片
96	棒状土製品	長さ[6.4],幅1.3,厚1.1,重さ[11.42]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:褐色。灰色の変色部あり。/SI212北東(第442図7)。	破片
97	棒状土製品	長さ[5.4],幅1.6,厚1.6,重さ[15.57]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:褐色。所々に淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI216北東(第450図8)。	破片
98	棒状土製品	長さ[12.2],幅2.1,厚2.1,重さ[73.86]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:にぶい褐色。/SI221カマド内(第464図40)。	破片
99	棒状土製品	長さ[11.8],幅1.9,厚1.7,重さ[49.77]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI221(第464図41)。	破片
100	棒状土製品	長さ[7.6],幅2.0,厚2.0,重さ[46.51]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:褐色。灰色の変色部あり、一部に淡黄色の付着物あり。/SI221(第464図42)。	破片
101	棒状土製品	長さ[8.0],幅2.5,厚2.1,重さ[54.17]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:褐色。灰色の変色部あり。/SI221(第464図43)。	破片
102	棒状土製品	長さ[7.1],幅2.2,厚1.0,重さ[39.56]g。胎土:白色粒・黒色粒。色調:褐色。灰色の変色部あり。/SI221(第464図44)。	破片



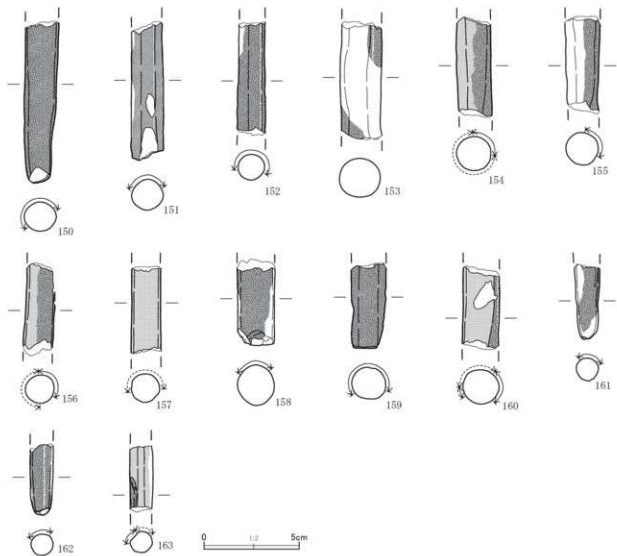
第972图 棒状土製品集成图(5)(No. 100~125)



第973图 棒状土製品集成图(6)(No.126~149)

第440表 棒状土製品観察表(4)(No.103~136)

No.	器種	法量(cm)・特徴/出土位置(本文挿図・遺物番号)	備考
103	棒状土製品	長さ(6.75)、幅1.65、厚1.6、重さ[21.43]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり、一部に淡黄色の付着物あり。/ S1221(第464図45)。	破片
104	棒状土製品	長さ[5.9]、幅2.1、厚1.9、重さ[28.85]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ S1221(第464図46)。	破片
105	棒状土製品	長さ[5.3]、幅2.2、厚1.6、重さ[24.99]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり、所々に淡黄色の付着物あり。/ S1221南東(第464図47)。	破片
106	棒状土製品	長さ[5.8]、幅1.65、厚1.6、重さ[14.39]g。胎土：白色粒。色調：灰白色。淡黄色の付着物あり。/ S1221(第464図48)。	破片
107	棒状土製品	長さ[4.6]、幅2.3、厚2.1、重さ[31.55]g。胎土：白色粒。色調：にぶい褐色。/ S1221(第464図49)。	破片
108	棒状土製品	長さ[4.6]、幅1.3、厚1.2、重さ[9.61]g。胎土：白色粒。色調：にぶい橙色。淡黄色の付着物あり。/ S1221カマド内(第464図50)。	破片
109	棒状土製品	長さ[4.2]、幅1.9、厚1.8、重さ[17.58]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい褐色。灰色の変色部あり。/ S1221出土(第464図51)。	破片
110	棒状土製品	長さ[4.2]、幅1.7、厚1.8、重さ[15.95]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ S1221北西(第464図52)。	破片
111	棒状土製品	長さ[4.1]、幅1.8、厚1.5、重さ[12.77]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ S1221北西(第464図53)。	破片
112	棒状土製品	長さ[3.2]、幅1.9、厚1.4、重さ[9.65]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：灰黄褐色。部分的に淡黄色の付着物あり。/ S1221(第464図54)。	破片
113	棒状土製品	長さ[3.2]、幅1.3、厚1.3、重さ[6.73]g。胎土：白色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ S1221北西(第464図55)。	破片
114	棒状土製品	長さ[3.0]、幅1.6、厚1.6、重さ[9.96]g。胎土：白色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ S1236(第475図8)。	破片
115	棒状土製品	長さ[3.7]、幅1.9、厚1.8、重さ[14.24]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ S1230北東(第483図7)。	破片
116	棒状土製品	長さ[4.5]、幅1.3、厚1.2、重さ[8.21]g。胎土：白色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ S1237(第499図3)。	破片
117	棒状土製品	長さ[6.4]、幅1.4、厚1.2、重さ[14.55]g。胎土：白色粒。色調：にぶい褐色。/ S1238南西(第502図8)。	破片
118	棒状土製品	長さ[4.0]、幅1.6、厚1.6、重さ[12.63]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり。/ S1238南西(第502図9)。	破片
119	棒状土製品	長さ[3.5]、幅1.1、厚1.1、重さ[5.78]g。胎土：白色粒。色調：褐色。/ S1252(第536図3)。	破片
120	棒状土製品	長さ[4.2]、幅1.7、厚1.5、重さ[13.62]g。胎土：白色粒。色調：にぶい褐色。/ S1253(第538図21)。	破片
121	棒状土製品	長さ[4.2]、幅1.9、厚2.0、重さ[15.58]g。胎土：白色粒。色調：褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ S1253(第538図22)。	破片
122	棒状土製品	長さ[9.5]、幅1.6、厚1.5、重さ[29.50]g。胎土：白色粒。色調：褐色。灰色の変色部あり、一部に淡黄色の付着物あり。/ S1254床下(第541図23)。	破片
123	棒状土製品	長さ[9.1]、幅2.0、厚1.8、重さ[37.27]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい黄色。/ S1254床下(第541図24)。	破片
124	棒状土製品	長さ[7.1]、幅1.8、厚1.6、重さ[26.86]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：褐色。所々に淡黄色の付着物あり。/ S1254床下(第541図25)。	破片
125	棒状土製品	長さ[6.3]、幅2.0、厚1.8、重さ[27.34]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい黄褐色。/ S1254(第541図26)。	破片
126	棒状土製品	長さ[5.5]、幅1.9、厚1.9、重さ[21.96]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい黄褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ S1254南(第541図27)。	破片
127	棒状土製品	長さ[5.6]、幅1.8、厚1.6、重さ[18.59]g。胎土：白色粒・黒色粒・褐色粒。色調：褐色。淡黄色の付着物あり。/ S1254床下(第541図28)。	破片
128	棒状土製品	長さ[4.8]、幅1.9、厚1.8、重さ[21.72]g。胎土：白色粒・黒色粒・褐色粒。色調：にぶい褐色。/ S1254南(第541図29)。	破片
129	棒状土製品	長さ[4.6]、幅1.2、厚1.2、重さ[10.06]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい褐色。/ S1254床下(第541図30)。	破片
130	棒状土製品	長さ[4.5]、幅1.7、厚1.6、重さ[14.22]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：褐色。灰色の変色部あり。/ S1254床下(第541図31)。	破片
131	棒状土製品	長さ[4.0]、幅1.7、厚1.9、重さ[14.43]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：淡黄褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/ S1254南(第541図32)。	破片
132	棒状土製品	長さ[5.9]、幅1.7、厚1.8、重さ[22.09]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：褐色。灰色の変色部あり。/ S1257(第547図33)。	破片
133	棒状土製品	長さ[4.7]、幅1.9、厚1.9、重さ[22.72]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：褐色。灰色の変色部あり。/ S1257(第547図34)。	破片
134	棒状土製品	長さ[3.7]、幅1.6、厚1.5、重さ[10.04]g。胎土：白色粒・褐色粒。色調：褐色。灰色の変色部あり。/ S1257(第547図35)。	破片
135	棒状土製品	長さ[5.6]、幅3.2、厚2.2、重さ[50.56]g。胎土：白色粒・角閃石・石英。色調：褐色。淡黄色の付着物および灰色の変色部あり。/ S1257(第547図36)。	破片
136	棒状土製品	長さ[11.8]、幅1.8、厚1.6、重さ[43.38]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：褐色。灰色の変色部あり。/ S1259(第551図1)。	破片



第974图 棒状土製品集成图(7)(No. 150~163)

第441表 棒状土製品観察表(5)(No.137~163)

No.	器種	法量(cm)・特徴/出土位置(本文挿図・遺物番号)	備考
137	棒状土製品	長さ[3.5]、幅1.2、厚1.2、重さ[6.31]g。胎土：白色粒。色調：明黄褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI260南西(第553図4)。	破片
138	棒状土製品	長さ[6.9]、幅1.6、厚1.5、重さ[20.65]g。胎土：白色粒・角四石。色調：橙色。/SI266(第567図2)。	破片
139	棒状土製品	長さ[14.7]、幅1.9、厚1.7、重さ[58.00]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい橙色。灰色の変色部あり。/SI275北(第588図26)。	破片
140	棒状土製品	長さ[10.7]、幅1.8、厚1.6、重さ[39.14]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。/SI275南(第588図26)。	破片
141	棒状土製品	長さ[10.4]、幅1.9、厚1.6、重さ[43.52]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい橙色。灰色・赤色の変色部あり。/SI275南(第588図27)。	破片
142	棒状土製品	長さ[9.9]、幅1.8、厚1.6、重さ[37.61]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：にぶい黄褐色。灰色の変色部あり、所々に淡黄色の付着物あり。/SI111床下・SI275北(第588図28)。	破片
143	棒状土製品	長さ[8.15]、幅2.0、厚1.7、重さ[35.48]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり、一部に淡黄色の付着物あり。/SI275北(第588図29)。	破片
144	棒状土製品	長さ[8.2]、幅1.9、厚1.7、重さ[33.26]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。灰色・赤色の変色部あり。/SI275床下(第588図30)。	破片
145	棒状土製品	長さ[7.7]、幅1.7、厚1.45、重さ[23.49]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI275床下(第588図31)。	破片
146	棒状土製品	長さ[4.8]、幅1.2、厚1.3、重さ[9.55]g。胎土：白色粒。色調：にぶい褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI275北(第588図32)。	破片
147	棒状土製品	長さ[3.7]、幅1.8、厚[0.9]、重さ[6.87]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり。/SI275床下(第588図33)。	破片
148	棒状土製品	長さ[3.3]、幅1.7、厚1.7、重さ[11.08]g。胎土：白色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり。/SK404(第784図28)。	破片
149	棒状土製品	長さ[9.6]、幅1.6、厚1.5、重さ[31.53]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：浅黄褐色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI111付近(第791図16)。	破片
150	棒状土製品	長さ[8.5]、幅1.6、厚1.5、重さ[27.22]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり、一部に淡黄色の付着物。/SI111付近(第791図17)。	破片
151	棒状土製品	長さ[7.3]、幅1.7、厚1.6、重さ[25.00]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり、所々に淡黄色の付着物あり。/表採(第791図18)。	破片
152	棒状土製品	長さ[5.9]、幅1.4、厚1.3、重さ[16.61]g。胎土：白色粒。色調：褐色。灰色の変色部あり。/SI104付近表採(第791図19)。	破片
153	棒状土製品	長さ[6.2]、幅2.2、厚2.0、重さ[35.26]g。胎土：白色粒。色調：にぶい橙色。灰色の変色部あり。/SI111付近表採(第791図20)。	破片
154	棒状土製品	長さ[5.3]、幅1.8、厚1.8、重さ[21.12]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：黄灰色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/表採(第791図21)。	破片
155	棒状土製品	長さ[5.1]、幅1.8、厚1.7、重さ[18.62]g。胎土：白色粒・黒色粒・褐色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり。/SI106付近(第791図22)。	破片
156	棒状土製品	長さ[4.9]、幅1.6、厚1.5、重さ[13.65]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：褐灰色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI111付近(第791図23)。	破片
157	棒状土製品	長さ[4.6]、幅1.6、厚1.5、重さ[13.98]g。胎土：白色粒。色調：にぶい橙色。淡黄色の付着物あり。/SI109付近(第791図24)。	破片
158	棒状土製品	長さ[4.6]、幅1.9、厚2.1、重さ[22.89]g。胎土：片岩・白色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり。/表採(第791図25)。	破片
159	棒状土製品	長さ[4.5]、幅1.8、厚1.6、重さ[17.20]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：赤灰色。灰色の変色部あり、所々に淡黄色の付着物あり。/SI178付近(第791図26)。	破片
160	棒状土製品	長さ[4.4]、幅1.9、厚1.8、重さ[18.40]g。胎土：白色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SS1110付近出土(第791図27)。	破片
161	棒状土製品	長さ[3.9]、幅1.2、厚1.2、重さ[7.54]g。胎土：白色粒・黒色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり、所々に淡黄色の付着物あり。/SI110付近(第791図28)。	破片
162	棒状土製品	長さ[3.8]、幅1.2、厚1.2、重さ[6.05]g。胎土：白色粒。色調：橙色。灰色の変色部あり。/表採(第791図29)。	破片
163	棒状土製品	長さ[3.5]、幅1.3、厚1.1、重さ[6.18]g。胎土：白色粒。色調：橙色。淡黄色の付着物あり、下は灰色に変色。/SI110付近(第791図30)。	破片

第VI章 自然科学分析

第1節 薬師堂東遺跡C地点出土のガラス小玉の鋳型および鋳型付着ガラスの自然科学的調査

奈良文化財研究所 田村朋美

1 はじめに

薬師堂東遺跡C地点では、200点を超える大量のガラス小玉の鋳型が発見され、日本で初めての完形品も1点出土している。これほど大量の鋳型が出土した例は他に類がなく、さらに、これらの鋳型の多くは型穴にガラスが残存しており、鋳型によるガラス生産の実態を解明する極めて重要な資料である。

鋳型を用いたガラス小玉の生産は、芯棒を立てた鋳型の型穴に微細なガラス破砕片を充填し、鋳型ごと加熱してガラス破砕片どうしを熔着する方法である。これまでの調査で、鋳型によるガラス小玉製作の原料となるガラス素材は、舶載されたガラス製品、とくに大量に流通したガラス小玉（またはその破損品）が使用されたと推定されている（大賀 2010）。材質分析も進み、鋳型で製作されたガラス小玉の材質変化が、同時期に製品として輸入され大量に流通していたガラス小玉、すなわち「引き伸ばし法」や「巻き付け法」によるガラス小玉の材質変化と連動していることが明らかとなっている（肥塚ほか 2010、大賀 2010、田村 2017）。

本調査では、薬師堂東遺跡C地点で出土したガラス小玉の鋳型に付着したガラスの材質の特徴について明らかにし、ガラス小玉生産の原料として利用された素材ガラスの種類を推定することを主な目的として、各種の自然科学的調査を行った。以下、その結果について報告する。

2 資料と方法

2-1 資料の概要

本調査の対象は、薬師堂東遺跡C地点から出土したガラス小玉の鋳型24個体25点である（第442表）(1)。これらの鋳型は、同質なものではなく、胎土の色調や周縁の調整手法などに差異が認められる。また、本調査では、ガラス小玉の鋳型と強い相関をもって出土している棒状土製品についても、鋳型によるガラス小玉生産との関連を明らかにするため調査対象に加えた。

2-2 調査方法

顕微鏡観察 ガラス小玉の鋳型の型穴の形状や、型穴に付着したガラスの色調の観察を目的として顕微鏡観察を実施した。必要に応じて顕微鏡写真撮影を実施している。観察に用いた機材は、実体顕微鏡（LEICA社製MZ16）および付属のデジタルカメラ（Nikon社製 DXM1200F）である。

X線CT撮影 一部の鋳型について、内部構造を明らかにするため、X線CT撮影を実施した。撮影には、高エネルギーX線CT装置（日立製作所製HiXCT-1M950keV）を使用した。スライスピッチは1mmである。

第442表 資料および調査結果一覧

記号	番号	出土遺構	ガラス容器状況	ガラス色調	ガラス材質	元素X線分析		同位体定分析	
						分析箇所	検出元素		
	1	S1275	ガラス片着なし	-	-	型六内ガラスの瓶の内側面	Pb, Si, P, Ca, Fe		
	2	S1131	型六内ガラス残存	不明(白色濁化)	瓶 (Group 111) 壺 (Group 111) 壺 (Group 111)	型六内ガラス (白化)	Pb, Si, P, Fe, Cu	○	
	3	S1130 北東	型六内ガラス残存	緑色透明	瓶 (Group 111)	型六内ガラス (緑色)	Pb, Si, P, Fe, Al, Ca, K, Ti, V, Mn, Cu	○	
	4	S1271 北西	型六内ガラス残存	緑色透明	瓶 (Group 111)	型六内ガラス (緑色)	Pb, Si, P, Fe, Cu	○	
	5	S1270a.2	型六内ガラス残存	緑色透明	瓶 (Group 111) 壺 (Group 111)	型六内ガラス (緑色)	Pb, Si, P, Fe, Cu	○	
	6	S1131	型六内ガラス残存	緑色透明	瓶 (Group 111)	型六内ガラス (緑色)	Pb, Si, P, Fe, Al, Ca, Ti, V, Mn, Cu	○	
	7	S1221	型六内ガラス残存	緑色透明	瓶 (Group 111)	型六内ガラス (緑色)	Pb, Si, P, Fe, Cu	○	
	8	S1270a.4	ガラス片着なし	-	-	表面付着白色物質	Si, Mg, Al, P, K, Ca, Ti, Mn, Fe, Cu, Pb	○	
	9	S1130 北東	ガラス管片着	緑色透明 (表面付着)	植物灰ソーダ (Group S111) + 瓶 (Group 111)	表面付着白色物質	Si, Al, Fe, K, Ca, P, Ti, Mn, Cu, Pb	○	
	10	S1131	型六内ガラス残存	緑色透明	瓶 (Group 111)	瓶土	Si, Al, K, Fe, Ti, Mg, P, Ca, Mn	○	
	11	S1150	型六内ガラス残存	不明(白色濁化)	瓶 (Group 111)	型六内ガラス (白化)	Pb, Si, P, Al, Ca, Fe, Mn, Ti, V, Mn, Cu	○	
	12	S1155 南西	型六内ガラス残存	緑色透明	瓶 (Group 111)	型六内ガラス (白化)	表面付着白色物質	Si, P, Pb, Fe, Mn, Al, K, Ca, Ti, V, Cu	○
	13	S1155 南西	型六内ガラス残存	緑色透明	瓶 (Group 111)	瓶土	Si, K, Fe, Ti, Mg, P, Ca, V, Mn, Pb	○	
	14	S1275 南下	ガラス片着なし	-	-	型六内ガラス (緑色)	Si, Pb, Mn, Al, P, Ca, Fe, Cu	○	
溝	15	S1150	型六内ガラス残存	緑色透明 (型六内付着), 緑色透明 (表面付着)	植物灰ソーダ (Group S111) + 瓶 (Group 111)	表面付着ガラス (緑色)	Si, Mg, Al, P, K, Ca, Ti, Mn, Fe, Cu, Pb	○	
	16	S1135	型六内ガラス残存	不明(白色濁化)	瓶 (Group 111)	瓶土	Si, Al, K, Ca, Ti, Fe, Mn, Mg, P, Mn	○	
	17	S1221	型六内ガラス残存	緑色透明	瓶 (Group 111)	型六内ガラス (白化)	Pb, Si, P, Al, Ca, Fe, Cu	○	
	18	S1157	型六内ガラス残存	緑色透明	瓶 (Group 111)	型六内ガラス (緑色)	Si, Pb, Mg, Al, P, K, Ca, Ti, Fe, Cu	○	
	19	S1254 南下	ガラス管片着	全体として褐色 (表面付着)	植物灰ソーダ (Group S111) + 瓶 (Group 111)	表面付着ガラス (白化)	Si, Mg, Al, P, K, Ca, Ti, Mn, Fe, Cu, Pb	○	
	20	S1150	型六内ガラス残存	不明(白色濁化)	瓶 (Group 111)	型六内ガラス (白化)	Si, Pb, Si, Mg, Al, Ca, V, Fe, Cu	○	
	21	S1271 北西	型六内ガラス残存	全体として褐色 (白色, 赤褐色, 黄色など混色)	植物灰ソーダ (Group S111) + 瓶 (Group 111)	型六内ガラス (緑色)	Si, Mg, Al, K, Ca, Ti, Mn, Fe, Cu, Pb	○	
	22	S1168	型六内ガラス残存	不明(白色濁化)	瓶 (Group 111)	型六内ガラス (赤色濁化)	Si, Mg, Al, K, Ca, Ti, Mn, Fe, Cu, Pb	○	
	23	S1254 南下	ガラス管片着	緑色透明 (表面付着)	植物灰ソーダ (Group S111) + 瓶 (Group 111)	型六内ガラス (白化)	Pb, Si, P, Ca, V, Fe, Cu	○	
	24	S1271 北東	型六内ガラス残存	不明(白色濁化)	瓶 (Group 111) 壺 (Group 111) 壺 (Group 111)	表面付着白色物質	Si, Al, Fe, K, Ca, Mn, Mg, P, Ti, Mn, Cu, Pb	○	
						瓶土	Si, Al, K, Ca, Ti, Fe, Mn, P, Mn		

神代土器類
赤土器類からの検出

コンピュータドラジオグラフィ法 (CR) 鋳型の内部構造の調査および型穴内に付着したガラスの材質を識別することを目的として、X線透過撮影法の一種であるコンピュータドラジオグラフィ (Computed Radiography: CR) 法を適用した。CR法は、従来のフィルムのかわりにイメージングプレート (Imaging Plate: IP) を検出系に用いる方法である。アルカリ珪酸塩ガラスと鉛珪酸塩ガラスの密度を比較すると、後者の密度のほうがはるかに高い。したがって、アルカリ珪酸塩ガラスと鉛珪酸塩ガラスを同じ条件下でX線透過撮影すると、ポジ画像では鉛珪酸塩ガラスがより濃い画像として得られることになる。撮影に用いた装置は、マイクロフォーカスX線拡大撮像システム (富士フィルム社製 μ FX-1000) とイメージングアナライザー (富士フィルム社製 BAS-5000) である。IPにはBAS-SR2025を使用した。撮影条件は、管電圧50kV、管電流50 μ A、露光時間60秒である。

蛍光X線分析法 (XRF) 主にガラス部分の材質調査として、蛍光X線分析法による非破壊測定を実施した。用いた装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置 (EDAX社製EAGLE III) である。一部の測定結果については、測定資料と近似する濃度既知のガラス標準試料を用いて補正した理論補正法 (Fundamental Parameter method、以下ではFP法) により、検出した元素の酸化物の合計が100%になるように規格化した。励起用X線源はMo管球、管電圧は20kV、管電流は100 μ A、X線照射径は112 μ m、計数時間は300秒とした。測定は真空中で実施した。

X線回折法 (XRD) 今回の調査では、棒状土製品の表面に付着している白色物質についてX線回折法による同定を行った。測定に用いた装置はリガク社製 SmartLabである。励起用対陰極は銅 (Cu)、管電圧は40kV、管電流は30 μ A、スキャンスピードは1.0008 (deg./min.)、スキャン範囲は50.000-89.9400 (deg.)である。

3 調査結果 (第442～444表、図版240～249)

No. 1 顕微鏡観察の結果、ガラスの付着は認められなかった。X線透過画像でもガラスが残存する痕跡は認められない (図版240)。ただし、他の鋳型で見られるように、一部の型穴に鉛ガラスが残存する鋳型であっても、ガラスが残存していない型穴ではX線の大きな吸収は認められない場合もある (例えば、No. 3)。したがって、型穴にガラスが残存せず、X線の大きな吸収が認められない鋳型についても、未使用とは言えない。

No. 2 7箇所の型穴に風化で白化したガラスが残存している。わずかに本来の色調と考えられる緑色透明を呈する部分が認められる。表面一面に白色粘土^{付着}様物質が薄く付着している。ガラスが残存している型穴部分はX線透過画像で胎土部分と比べてX線の吸収が非常に大きいことから、型穴に残るガラスは鉛系のガラスであることを示す。型穴にガラスが完全に詰まった状態で残存しているが、芯棒の痕跡は確認できなかった。芯棒の材質は不明であるが、少なくとも金属ではない。ウニの棘 (主成分: CaCO_3) の可能性も指摘されているが (酒巻 1998・2002)、鋳型に残存したガラスの軸孔内に詰まっていた物質について蛍光X線分析を実施した結果、主に検出されたのはガラスに由来する鉛 (Pb) とケイ素 (Si) であった。カルシウム (Ca) もわずかに検出されているが、他の部分と比較して特に多い傾向は認められなかった。イネ科植物 (酒巻 1998・2002) など有機物の可能性が高い。

本資料では、一見ガラスが残存していない型穴についても、周縁部でX線の吸収が大きく、鉛系のガラスを素材とした小玉が製作された痕跡と考えられる。なお、ガラス小玉が型穴内に残存している

部分は、型穴の周辺にやや広くX線の吸収の大きい部分が広がっていることが分かる。型穴の外側で鋳型と融着したため、小玉として鋳型から分離できなかつた可能性も考えられる。ガラスが残存する型穴はX線の吸収が非常に大きい。

No. 3 4箇所の型穴に白化したガラスが残存している。わずかに緑色透明を呈する部分が認められる。ガラスが残存している型穴部分はX線の吸収が非常に大きく、鉛系のガラスであることを示す。No.2と同様にガラスが残存している型穴の周辺にはX線の吸収の大きい部分が広がっている。一方、No.2とは異なり、ガラスが確認できない型穴の多くでは、X線の吸収が際立って大きい部分は認められない。一部の型穴のみを利用したとは考えられないため、小玉がうまく離型した場合には、鉛ガラスを利用した生産を行っていても鋳型に痕跡が残らないと考えられる。

No. 4 接合する2片について調査した。合計で9箇所の型穴に白化したガラスが残存している。わずかに緑色透明部分が認められる。ガラス残存部分はX線の吸収が大きく、鉛系のガラスであることを示す。ガラスが残存している型穴の周辺にはX線の吸収の大きい部分が広がる。本資料については、緑色ガラス部分の蛍光X線分析を実施した(第442表、図版246)。鉛(Pb)が極めて強く検出されており、鉛ガラスであることが確認された。Pb以外に、アルミニウム(Al)、リン(P)、カルシウム(Ca)、鉄(Fe)、銅(Cu)が検出されている。Al、P、Ca、Feについては、風化が進んでいる箇所においてより強く検出されており、主に土壌に由来すると考えられる。なお、リン(P)については、鉛系のガラスでは風化によりリン酸鉛($Pb_3(PO_4)_2OH$ など)が生成することが知られている(肥塚 1995)。さらに、本資料はFP法による定量計算でPb0を54.1%含有することが示された(第443表)。風化の影響が強く、本来の化学組成とはいえないが、古墳時代後期末から奈良時代にかけて流通する二成分系の高鉛ガラス(Group LIIIB)(Oga and Tamura 2013)と推定される。また、Cuが検出されていることから、銅イオンによって緑色に着色されていることが分かる。銅イオンは、多量のPbと共存することで濃緑色を呈する $Cu^{2+}-O-Cu^{2+}$ 結合子を形成するといわれている(伊藤 1996)。

No. 5 10箇所以上の型穴が塞がっているが、顕微鏡観察およびX線透過画像で確認した結果、ガラスが残存していると考えられる型穴は3箇所である。それ以外の型穴に詰まっているのは主に土壌成分と考えられる。ガラスはいずれも白化しているが、緑色を呈する部分がわずかに残る。X線の吸収が大きく鉛系のガラスであると推察される。

第443表 蛍光X線分析定量結果 (FP法)

番号	分析箇所	重量濃度 (%)														
		Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	Fe ₂ O ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	V ₂ O ₅	MnO	PbO	CuO	PbO	SnO ₂	
4	型穴内ガラス (緑色部)	-	0.5	2.8	33.1	5.7	0.1	2.5	0.08	-	0.13	0.83	-	0.21	54.1	-
6	型穴内ガラス (緑色部)	-	-	1.1	62.1	9.4	-	0.5	0.92	-	-	0.32	-	0.30	35.3	-
7	型穴内ガラス (緑色部)	-	0.2	3.4	47.4	5.0	0.1	0.9	0.08	0.08	-	1.21	-	0.17	41.5	-
9	表面付着ガラス (紺色)	3.5	2.6	6.4	73.5	1.2	4.5	4.7	0.24	-	0.30	1.85	0.07	0.26	0.92	-
10	型穴内ガラス (緑色部)	-	-	0.5	9.0	-	-	-	-	-	-	0.34	-	0.18	90.0	-
13	型穴内ガラス (緑色部)	-	0.2	1.2	68.3	1.5	-	0.4	-	-	-	0.30	-	0.28	27.9	-
15	表面付着ガラス (紺色)	7.7	2.7	3.2	73.7	0.2	4.6	4.8	0.17	-	0.37	1.44	0.07	0.12	0.92	-
17	型穴内ガラス (緑色部)	-	-	0.8	64.5	1.2	-	0.2	-	-	-	0.51	-	0.14	32.5	-
18	型穴内ガラス (緑色部)	-	0.5	2.1	73.5	0.9	0.1	0.5	0.94	-	-	0.21	-	0.12	22.1	-
19	緑部付着ガラス (紺色)	0.9	1.6	4.5	80.4	0.4	3.0	0.3	0.14	-	0.11	1.72	0.15	0.22	0.43	-
	緑部付着ガラス (白色)	0.9	1.6	2.9	80.2	0.4	1.7	2.3	0.14	-	0.24	1.21	0.05	0.08	8.97	-
21	型穴内ガラス (紺色)	5.3	1.8	3.3	78.7	0.2	1.5	4.0	0.16	-	0.14	1.10	0.06	0.20	3.3	-
	型穴内ガラス (白色)	3.0	2.0	2.7	72.6	0.2	1.7	3.0	0.26	-	0.17	1.62	0.09	0.45	12.3	-
	型穴内ガラス (赤色)	3.1	0.9	9.0	73.3	0.2	4.2	1.9	0.28	-	0.13	3.59	-	1.21	1.96	-
22	型穴内ガラス (黄色)	6.4	0.8	9.6	72.2	0.3	2.7	2.6	0.42	-	0.08	1.60	0.03	0.39	2.64	0.31
23	表面付着ガラス (紺色)	2.4	2.5	6.3	77.2	0.5	3.6	5.3	0.21	-	0.07	1.40	0.09	0.14	0.45	-

- 検出・定量限界以下

No. 6 10箇所 の型穴にガラスが残存している。ガラスは白化しているが、わずかに緑色を呈する部分が残る。いずれもX線の吸収が大きく鉛系のガラスであることを示す。他の型穴については、周縁部でX線の吸収の大きいものもあるが、すべてではない。型穴内に残存した緑色ガラス部分の蛍光X線分析を実施した結果、Pbが極めて強く検出される (PbO: 35.3%) とともに、着色剤と考えられるCuを検出した。

No. 7 ガラスがある程度の塊として残存しているのは4箇所 の型穴内である。ガラスは白化しているが、緑色を呈する部分がわずかに残っている。ただし、他の型穴でも軸孔や型穴の壁面に白化したガラスがわずかに付着していることが確認された。肉眼および顕微鏡下ではガラスの有無が判別できない場所についても、X線透過画像でX線の吸収が大きい型穴周縁部分などは、ガラス成分が残存していることを示す。緑色が残るガラス部分の蛍光X線分析を実施した結果、Pbが極めて強く検出される (PbO: 41.5%) とともに、着色剤と考えられるCuを検出した。

No. 8 顕微鏡観察およびX線透過画像の結果、ガラスの付着は認められなかった。ただし、本資料は他の鋳型に比べて厚みがあり、また唯一孔が裏面に貫通していない特殊な個体である。さらに、X線透過画像において、軸孔が一つの型穴に対して複数存在するように見える。そこで、鋳型の内部構造をより詳細に観察するため、X線CT撮影を行った(図版245: 下)。X線CTの結果、軸孔の深さ(型穴底面から計測した芯棒の長さ)は、ほぼ一定で12mm前後であることが明らかとなった。また、いくつかの型穴では、上面から見たときの軸孔は一つだが、実際には傾きの異なる二つの軸孔があげられていることが確認された。軸孔の傾きを修正した可能性がある。また、軸孔の傾きも一定でないことが判明した。軸孔の深さが同じであることから、型穴をあける工具と軸孔をあける工具は一体で、型穴と軸孔は同時にあげられたと考えられる。また、型穴ごとに軸孔の傾きが一定でないことから、一つずつ二段の孔をあけたと推定される。

No. 9 型穴内にガラスが詰まった状態で残存している箇所はないが、X線透過画像で見ると、複数の型穴部分でX線の吸収が大きいことが分かる。顕微鏡下で仔細に観察すると、型穴壁面に緑色透明のガラスが付着していることが分かった。鉛系のガラスであると推察される。さらに、本資料は表面一面に白色粘土様物質が薄く付着しているが、その表面にわずかに紺色透明のガラスが付着していることも確認された。紺色透明ガラス部分について蛍光X線分析を実施した結果、ナトリウム (Na)、マグネシウム (Mg)、アルミニウム (Al)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、コバルト (Co)、銅 (Cu)、鉛 (Pb) などが検出された。

風化や胎土の影響でガラス部分の正確な化学組成は不明であるが、FP法による定量値で、Na₂OおよびCaO含有量が比較的多いことからソーダガラスであると推察される(第443表)。さらに、Al₂O₃が少なくMgOおよびK₂O含有量が多いことや、コバルト着色で (CoO: 0.07%)、MnOが比較的小さい (MnO: 0.30%) という着色剤の特徴から、植物灰ガラス (Group SIIIC) の可能性が高い。紺色透明の植物灰ガラスには引き伸ばし法で製作されたGroup SIIIBと変則的な引き伸ばし法で製作されたGroup SIIICが存在し、PbOの含有量などに違いがあることが分かっているが、風化や胎土の影響の大きい本測定結果からはどちらか判断することは困難である。型穴内に残存するガラスとは材質、着色剤ともに異なる。両者を混合していた可能性もあるが、それぞれ異なる場所に偏在する状況はやや不自然である。鋳型を複数回利用した可能性も考えられる。

また、型穴の周辺表面に付着した白色粘土様物質について蛍光X線分析法による元素マッピングを実施した(図版248:左上)。なお、この白色物質上には紺色透明ガラスがわずかに付着している。元素マッピングの結果から、白色粘土様物質は胎土と比較してAl、K、Feが少なく、Caが多いことが分かる。Pbもわずかに検出されており、小玉製作に使用された鉛ガラスに由来する可能性が高いが、型穴壁面と比較すると検出強度は小さく、白色物質自体は鉛ガラスの風化生成物ではない。この白色物質は、離型剤の可能性もある。同様の物質はNo. 23にも認められる。

No. 10 顕微鏡観察でガラスの残存または付着が確認された型穴は19箇所であるが、X線透過画像では、それ以外の型穴部分もX線の吸収がやや大きいことが分かる。ガラスは白化しているが、緑色を呈する部分がわずかに認められる。緑色が残るガラス部分の蛍光X線分析を実施した結果、他と同様にPbが極めて強く検出された。着色剤と考えられるCuについても極めてわずかながら検出された。

No. 11 顕微鏡観察でガラスの残存または付着が確認された型穴は17箇所であるが、X線透過画像では、それ以外の型穴部分もX線の吸収がやや大きいことが分かる。X線の吸収が大きく、いずれも鉛系のガラスであることを示す。ガラスはすべて白化しており、本来の色調は失われている。型穴内に残存したガラスについて蛍光X線分析を実施した結果、Pbが極めて強く検出された。極めてわずかではあるがCuが検出されており、本来の色調は緑色であった可能性が高い。表面に白色物質が付着しているが、その表面は一部ガラス質である。白色物質部分ではAl、Si、P、K、Ca、Ti、Fe、Pbなどの成分が検出された。Pbの強度は型穴のガラス部分よりもかなり小さく、鉛ガラスの風化生成物ではない。白色物質はAl、Si、K、Ca、Ti、Feなどの粘土成分が主体で、PbやPは小玉素材のガラスとその風化生成物の影響と考えられる。一方、同じ表面でも暗褐色を呈する部分は、よりガラス質でPbが強く検出され、Al、K、Ca、Ti、Feの検出強度は小さい。X線透過画像でも周辺に比べてややX線の吸収が大きい。Cuも検出されることから、型穴内のガラスに近い組成である。

No. 12 顕微鏡観察の結果、ガラスの付着は認められなかった。X線透過画像でも特にX線の吸収の大きい物質の付着は認められない。

No. 13 顕微鏡観察でガラスの残存または付着が確認された型穴は14箇所である。X線透過画像ではX線の吸収が極めて大きいことから、これらのガラスは鉛系のガラスであることを示す。これらの型穴では周辺にX線の吸収の大きい部分が広がっている。顕微鏡下でガラスが確認できない型穴部分については、X線の吸収が特に大きい箇所は認められない。ガラスはほとんどが白化しているが、緑色を呈する部分がわずかに認められる。緑色を呈するガラス部分の蛍光X線分析を実施した結果、Pbが極めて強く検出され、着色剤と考えられるCuも検出されている。

No. 14 顕微鏡観察の結果、ガラスの付着は認められなかった。X線透過画像でも特にX線の吸収の大きい物質の付着は認められない。表面には一部白色物質が付着している。

No. 15 本資料では、最低でも2箇所以上の型穴内にガラスの付着が確認された。加えて型穴でない鋳型の表面部分にもガラスが付着している。本資料に付着しているガラスは、これまでの鋳型に残存していた白化したガラスとは異なり、やや灰色味があった紺色透明を呈するガラスである。X線透過画像でも、ガラスが付着している部分のX線の吸収が特に大きい様子は認められない。鋳型表面に付着した紺色透明ガラスの蛍光X線分析の結果、Na、Mg、Al、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Co、Cu、Pbなどが検出された。

FP法による定量計算を行った結果、基礎ガラス成分として Na_2O を7.7%、 CaO を4.8%、 MgO を2.7%、 K_2O を4.6%含有することに加えて、コバルト着色で(CoO : 0.07%)、 MnO が比較的少ない(MnO : 0.37%)という着色剤の特徴が得られた。定量値そのものは風化や胎土の影響で本来の値とは言えないが、上記の特徴から植物灰ガラス (Group SIII) が素材として利用されている可能性が高いと考えられる。 PbO を0.92%とやや多く含むが、鉛ガラス (Group LIIB) との混合の可能性がある、 Pb の由来には注意が必要である。以上の特徴はNo.9の鋳型表面に付着していた紺色ガラスと共通する。

No. 16 本資料は、周縁に独特な調整痕がみられる。表面が一面暗褐色を呈する点でも、他の鋳型とは外観上の特徴が異なる。本資料は30箇所以上の型穴が塞がっているが、顕微鏡観察およびX線透過画像で確認した結果、ガラスによって塞がれている型穴は6箇所である。それ以外にも3箇所の型穴内部でX線の吸収が大きい物質がわずかに存在するようである。これら以外の型穴に詰まっているのは土壌成分と考えられる。ガラスはいずれも風化により白化し、本来の色調は失われているが、X線の吸収が大きく鉛系のガラスであることが示唆される。一部の型穴に残存したガラスについて蛍光X線分析を実施した結果、 Pb が極めて強く検出された。また、わずかに Cu も検出されることから、本来は緑色の高鉛ガラスであった可能性が高い。

No. 17 3箇所の型穴にガラスが残存している。ガラスはほとんどが白化しているが、緑色を呈する部分がわずかに認められる。X線透過画像ではガラスが残存している型穴部分のX線の吸収が極めて大きく、鉛系のガラスであることを示す。型穴の周辺にやや広くX線の吸収の大きい領域が広がっている。ガラスが残存しない型穴部分ではX線の吸収の大きい場所は認められない。型穴に残るわずかに緑色を呈するガラス部分の蛍光X線分析では、 Pb が極めて強く検出されるとともに、着色剤とみられる Cu が検出されている。

No. 18 4箇所の型穴にガラスが残存している。ガラスはほとんどが白化しているが、緑色を呈する部分がわずかに認められる。X線透過画像ではガラスが残存している型穴部分のX線の吸収が極めて大きく、鉛系のガラスであることを示す。ガラスが残存する型穴では周辺にやや広くX線の吸収の大きい領域が広がっている。本資料では、ガラスが残存しない型穴部分でも周縁部でX線の吸収が大きい。型穴に残るわずかに緑色を呈するガラス部分の蛍光X線分析を実施した結果、 Pb が極めて強く検出され、着色剤とみられる Cu も検出された。

No. 19 鋳型の表面および破断面にガラスが付着している。ガラスの色調はところどころ風化で白色化しているが、紺色透明を呈する。X線透過画像ではガラス付着部分のX線の吸収が大きいことがわかる。ただし、本資料に付着したガラスは比較的風化の程度が低く、遺存状態が良好であるにもかかわらず、X線の吸収が大きいのは一部分であり、X線の吸収の大きい部分と小さい部分が混在している。紺色を呈するガラス部分の蛍光X線分析を実施したところ、 Na 、 Mg 、 Al 、 K 、 Ca 、 Ti 、 Mn 、 Fe 、 Co 、 Cu 、 Pb などが検出された。ただし、 Pb の検出強度は小さく鉛系のガラスではない。

FP法による定量計算を行った結果、 Na_2O は0.9%と少ない値を示したが、 CaO を6.5%、 MgO を1.6%、 K_2O を3.0%含有するという基礎ガラスの材質的特徴や、コバルト着色で MnO が少ない(CoO : 0.15%、 MnO : 0.11%)という着色剤の特徴から、植物灰ガラス (Group SIII) が素材として利用されている可能性が高いと考えられる。一方、風化で白色化した部分については、紺色部分に比べて Pb が強く検出されるという結果が得られた。すなわち、本資料に付着したガラスは植物灰ガラス (Group SIII)

と鉛ガラス (Group LIIB) が混合されていると考えられる。

No. 20 1 箇所の型穴にガラスが詰まっている。ガラスは白化しており本来の色調は失われている。X線透過画像ではガラスが残存している型穴部分のX線の吸収が大きく、鉛系のガラスがあることを示す。型穴の周辺にやや広くX線の吸収の大きい領域が広がっている。ガラスが明確には残存しない型穴部分でも内壁や周縁部でX線の吸収が大きくなっている。型穴に詰まっている白化したガラスの蛍光X線分析では、Pbが極めて強く検出されている。検出強度は極めて小さいものの、着色成分と考えられるCuが検出されている。

No. 21 顕微鏡観察では3箇所の型穴にガラスが残存している。本資料に残存するガラスは風化の程度が比較的低い遺存状態が良好である。全体としては透明感のある紺色を呈するが、色むらが顕著で、白色不透明、赤褐色不透明、黄色不透明などの色調が混在する。型穴以外の鋳型表面にも白色不透明、紺色透明または赤色半透明～不透明ガラスが付着している。X線透過画像では、型穴に残存しているガラスはX線の吸収の大きい部分と小さい部分がモザイク状に存在する。なお、顕微鏡観察ではガラスの付着が確認できなかった型穴でも軸孔内部にX線の吸収の大きい物質が認められる。

蛍光X線分析の結果、色調と対応して材質の特徴が異なることが分かった。まず主体となる紺色透明部分では、Na、Mg、Al、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Co、Cu、Pbが検出される。一方、所々に含まれる白色不透明部分では、上記の元素のうち、PbとCuの検出強度が相対的に高い。また、赤色不透明部分はAl、TiおよびCuが相対的に強く検出された。さらに、黄色不透明部分ではAl、TiおよびCuが相対的に強いとともに、Snが検出された。

以上から、この鋳型で製作された小玉の原料素材は、コバルト着色の植物灰ガラス (Group SIII) を主体とし、鉛ガラス (Group LII) が混合されていたことが分かる。さらに、銅着色および銅と錫酸鉛 (PbSnO₃) で着色された高アルミナタイプのソーダガラス (Group SIIB) も混合されていた可能性が高い。銅着色の高アルミナタイプのソーダガラスは赤色不透明部分に対応するが、赤色不透明ガラスが原料素材として利用されたかどうかは判断が難しい。すなわち、銅イオンで着色された淡青色ガラスが鋳型で再加熱時に何らかの条件で (炭の混入など) 還元状態となり赤褐色の金属銅コロイドに変化した可能性も考慮する必要がある。鋳型法によるガラス小玉生産では、同系色の破片が原料素材として選択される場合が多く、紺色を主体とした原料素材に赤褐色のガラスが混入したと考えるよりも、本来は淡青色のガラスが赤褐色に変化したと考えるほうが蓋然性が高いように思われる。一方、黄色不透明部分についてはSnが検出されており、Cuも相対的に多いことから、銅イオンと人工黄色顔料である錫酸鉛 (PbSnO₃) で着色された黄緑色ガラスが混合されている可能性が高い。

本資料では、ガラスが残存している型穴部分に対して、蛍光X線法による元素マッピングを併せて実施した (図版248: 上右)。その結果、上述の色調と元素の対応関係が確認できた。すなわち、紺色透明部分ではNa、K、Caが比較的多く、Pbは少ない。反対に、白色不透明部分ではNa、K、Caが少なく、Pbが多い。また、スポット状にCuが顕著に多い部分が点在するが、赤色不透明部分と概ね対応している。

No. 22 4 箇所の型穴にガラスが残存している。ガラスはすべて風化により白化し、本来の色調は失われている。X線透過画像ではガラスが残存している型穴部分のX線の吸収が極めて大きく、鉛系のガラスであることを示す。ガラスが残存する型穴では周辺にやや広くX線の吸収の大きい領域が広がる。型穴に残るガラス部分の蛍光X線分析を実施した結果、Pbが極めて強く検出され、着色剤とみら

れるCuも検出された。本来の色調は緑色であった可能性が高い。

No. 23 型穴内にガラスが残存している状況は確認できなかった。ただし、本資料は表面一面に白色粘土様物質が薄く付着しており、その表面にわずかに紺色透明のガラスが付着していることが確認された。このような状況はNo.9と類似する。紺色透明ガラス部分について蛍光X線分析を実施した結果、Na、Mg、Al、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Co、Cu、Pbなどが検出された。風化や胎土の影響でガラス部分の正確な化学組成は不明であるが、同色のガラスが確認されたNo.9、15、19、21と同様に植物灰ガラス (Group SIII) と考えられる。ただし、鉛ガラス (Group LIIB) が混合されていた可能性はある。白色粘土様物質については、No.9と同様に、胎土に比べてAl、K、Ti、Feの検出強度が小さく、Caが強く検出される傾向が認められた。同じ物質であると推定される。

No. 24 型穴の壁面に白化したガラスの風化層がわずかに残存している。X線透過画像では型穴壁面部分のみX線の吸収が大きいことがわかる。鉛ガラスの痕跡であると考えられる。型穴が塞がっているところもあるが、内容物はほぼ土壌成分でガラス質が残存しているのは型穴壁面のみと考えられる。

棒状土製品 (No. 1) 本遺跡では、多くの棒状土製品がガラス小玉の鑄型と強い相関をもって出土している。これらの棒状土製品の多くには表面に白色粘土様物質が付着している。蛍光X線分析では、Al、Si、K、Ca、Ti、Feが主要な構成元素であり、他にPやMnもわずかに検出されたが、Pbは検出されなかった。また、胎土と比較すると、ややAlが少なくCaが多いようであるが、大きな差異は認められなかった。X線回折分析ではカリ霞石 (KAlSi₃O₈) が検出されている (図版248:下)。なお、鑄型にも表面に白色粘土様物質が付着した資料が確認されている (No.9、23など)。鑄型表面に付着した白色粘土様物質については今回X線回折分析を実施できなかったため、物質の同定はできなかったが、蛍光X線分析による元素組成を比較すると、棒状土製品に付着した白色物質のほうがAl、K、Tiが強く検出されている点で異なる。

4 考察

今回調査を実施した24個体25点の鑄型のうち21点で型穴内もしくは型穴の周辺にガラスが残存または付着することが確認された。成分分析の結果、薬師堂東遺跡C地点出土の鑄型に残存するガラスには、銅着色で緑色の鉛ガラス (Group LIIB) を主体としたものと、コバルト着色で紺色の植物灰ガラス (Group SIII) を主体とし、鉛ガラス (Group LIIB) や高アルミナソーダガラス (Group SIIB) 等が混合されたものの2種類があることが明らかとなった。なお、本遺跡出土の鑄型については、今回の調査対象とした25点以外の資料についても肉眼観察を行っており、前者の割合が圧倒的に多く、後者のような植物灰ガラスを主体としたガラスが型穴に残存した鑄型は例外的であることを確認している。すなわち、本遺跡では鉛ガラスを主な素材とした小玉製作が行われていたと考えられる。

日本列島における鉛ガラスの流通は、弥生時代にも確認されるが (Group LIIA)、古墳時代前期から後期後葉までは流通が途絶えている。その後、鉛ガラスが本格的に流通するのは7世紀初頭頃からで、奈良時代に盛行する (Group LIIB)。これらの鉛ガラスについては、鉛同位体比分析によって産地推定が行われており、弥生時代後期～終末期に流通したものは中国産、7世紀初頭に北部九州を中心に流通するものは朝鮮半島の百済産、そして7世紀後半の飛鳥池遺跡成立以降は日本産の鉛を原料とし、奈良時代へ継続することが明らかとなっている (肥塚 2001など)。

以上を踏まえて、本遺跡出土の鉛ガラスの産地を明らかにするため、鉛同位体比分析を実施した（測定は(株)日鉄住金テクノロジーに委託）。測定に供した試料は、異なる6地点（SI131、SI135、SI135南西、SI150、SI157、SI271北西）から出土した8点の鋳型（No. 2、4、6、10、11、13、16、18）の型穴に残存していたガラスである。それぞれの鋳型につき、一つの型穴から分析試料を採取した。結果を第444表に示す。いずれもA式図（図版249：上）において Pb^{207}/Pb^{206} 、 Pb^{208}/Pb^{206} の値が比較的大きい範囲に直線的に並ぶのが特徴であり、韓国扶餘の王宮里遺跡および弥勒寺遺跡（金奎虎ほか

2007）から発見された鉛ガラス片やガラス玉未成品、および埴埴付着ガラスなどの鉛ガラス製造関連資料と重なる。すなわち、百済産の鉛鉱石が用いられた鉛ガラスであることが明らかとなった。百済産の鉛鉱石が用いられた鉛ガラスは、7世紀初頭から北部九州を中心に小玉としての流通が確認されており、このような小玉もしくはその破損品を原料素材として利用していることが明らかとなった。なお、飛鳥池遺跡の成立を契機として、7世紀後半には日本産の鉛鉱石を原料とした鉛ガラスに急速に変化するが、日本産の鉛を原料とした鉛ガラスは今回分析した試料には含まれていない。また、百済産の鉛ガラスと日本産の鉛ガラスが混合されている状況も認められなかった。

ところで、鉛ガラスを素材としたガラス小玉生産が行われたことと、本遺跡で大量の鋳型が出土したことには関連があると考えられる。本遺跡出土の鋳型は多くの場合、型穴にガラスが残存しており、小玉製作としては失敗している。鋳型によるガラス小玉の製作は、古墳時代前期から確認され、鋳型によって製作されたガラス小玉についても大量の出土例があるが、圧倒的に紺色を呈するものが多い。淡青色、黄緑色、黄色、黒色なども存在するが、原料素材として利用されたガラスはカリガラスやソーダガラスなどのアルカリガラスである。一方、鉛ガラスはアルカリガラスに比べて軟化温度が100～200℃低い。鉛ガラスは7世紀初頭に出現した新しい素材であり、薬師堂東遺跡C地点では、新しい素材である鉛ガラスに対して、従来のアルカリガラスを素材とした小玉生産の温度条件を適用した結果、失敗品が多量に出現したため、鋳型を大量に廃棄する結果となった可能性が考えられる。

なお、薬師堂東遺跡C地点は実際にアルカリガラス（植物灰ガラス）主体の小玉生産も行われているが、失敗して鋳型に残っている数は少ない。ただし、アルカリガラス主体であっても鉛ガラスとの混合が行われており、アルカリガラスのみの場合よりも軟化温度が下がっているため、少量ながら失敗品（型穴に残存）が出現していると考えられる。

第444表 型穴に残存鉛ガラス（Group LIIB）の鉛同位体比分析結果

試料名	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$
NBS-SRM-981（標準鉛）	16.893	15.433	36.516	0.9136	2.1616	
薬師堂東遺跡（No. 2）	17.621	15.623	39.0406	0.8866	2.2155	
薬師堂東遺跡（No. 4）	17.351	15.602	38.8731	0.8992	2.2404	
薬師堂東遺跡（No. 6）	17.336	15.589	38.8305	0.8992	2.2398	
薬師堂東遺跡（No. 10）	17.403	15.609	38.8953	0.8969	2.2350	
薬師堂東遺跡（No. 11）	17.977	15.690	39.1614	0.8728	2.1784	
薬師堂東遺跡（No. 13）	17.419	15.610	38.8942	0.8961	2.2329	
薬師堂東遺跡（No. 16）	17.765	15.659	39.0618	0.8814	2.1988	
薬師堂東遺跡（No. 18）	17.966	15.692	39.1686	0.8735	2.1802	
NBS-SRM-981（標準鉛）	16.897	15.437	36.5288	0.9136	2.1619	

※測定は(株)日鉄住金テクノロジーに委託

本遺跡では、製品であるガラス小玉は1点しか出土していないが、日本列島全体でも鉛ガラスを素材として鋳型で製作された小玉の出土例は少ない。鉛ガラスはアルカリガラスと比べて風化を受けやすいために遺存しなかった可能性も考えられるが、実際には温度管理が困難で、多くは製作されなかった可能性も考えられる。

おわりに

本調査では、薬師堂東遺跡C地点から出土したガラス小玉の鋳型24個体25点について、観察および分析的手法で材質・構造調査を実施した。その結果、本遺跡では鉛ガラスを素材とした小玉生産が中心であり、同時に鉛ガラスの利用こそが本遺跡における鋳型の大量廃棄（出土）につながった可能性が示された。さらに、鉛同位体比分析によって、本遺跡で利用された鉛ガラスは朝鮮半島の百済産の鉛ガラスであることが明らかとなった。このような鉛ガラスは、7世紀初頭から北部九州を中心に流通しており、入手経路の議論にも関連して注目される。

また、薬師堂東遺跡C地点が発見されるまで、古墳時代中期後半以降の鋳型の分布は畿内に集中する傾向にあった（田中 2007、京嶋 2009）。一方、製品である鋳型で製作されたガラス小玉の分布については、とくに古墳時代後期後半以降は三河以東の東日本で大量に流通しており、鋳型の分布域との不整合が問題となっていた（大賀 2010）。薬師堂東遺跡C地点出土の鋳型は多くが鉛ガラスを素材とした小玉の生産を行っていた点で直接の供給地とは言えないが、関東北部が東日本、特に東北地方で発見される大量の鋳型法によるガラス小玉の有力な生産地候補となったと言える。

以上のように、本調査では薬師堂東遺跡C地点から出土した大量の鋳型のうち、代表的な資料について限定的な調査を実施したに過ぎないが、小玉生産に利用されたガラス素材についての基礎的なデータを提示できたと考えている。芯棒および離型剤の材質や棒状土製品の用途など不明な点が多く残されたが、本稿が鋳型によるガラス小玉製作の実態を明らかにする手掛かりとなれば幸いである。

(註)

- (1) 本節で用いたガラス小玉鋳型および棒状土製品の番号は、試料番号であり、集成図中で示した遺物番号(第V章)との対応関係は、以下のようになる。なお、右側が集成図中の遺物番号である。

ガラス小玉鋳型 №1: №155、№2: №38、№3: №31、№4: №145、№5: №157、№6: №37、
 №7: №83、№8: №158、№9: №60、№10: №39、№11: №62、№12: №43、№13: №44、№14:
 №160、№15: №67、№16: №42、№17: №87、№18: №69、№19: №112、№20: №64、№21: №147、
 №22: №75、№23: №114、№24: №148。

棒状土製品 №1: №95。

引用・参考文献

- 諫早直人・降幡順子 2016 「藤原京出土ガラス埴塙の化学的特徴」『奈良文化財研究所紀要2016』
 伊藤 彰 1996 『ーガラスにおけるー炭と色の技術』アグネ技術センター
 大賀克彦 2010 「日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産の成立と展開」『月刊文化財』№566
 肥塚隆保 1995 「古代珪酸塩ガラスの研究ー弥生〜奈良時代のガラス材質の変遷ー」『文化財論叢2』(奈良
 国立文化財研究所創立40周年記念論文集)

- 肥塚隆保 2001 「古代ガラスの材質と鉛同位体比」『国立歴史民俗博物館研究報告』第86集
- 肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010 「材質とその歴史の変遷」『月刊文化財』№.566
- 酒巻忠史 1998 「東国における古墳時代の鋳造技術について—鶴ヶ丘1号墳出土のガラス小玉鋳型を中心に—」『君津郡市文化財センター研究紀要』Ⅶ
- 酒巻忠史 2002 「鋳造技法によるガラス小玉の特徴と類例」『國學院大学考古学資料館紀要』第18号
- 京嶋 覚 2009 「ガラス小玉鋳型出土の意義」『古代学研究』第182号
- 金奎虎・平尾良光・韓松伊・魯緹玟・金那瑛・林徳洙 2007 「益山王宮里遺跡関連のガラス及びルツボの鉛同位体比分析」『王宮の工房Ⅱ—瑠璃篇』(『國立扶余文化財研究所學術研究叢書』第44輯)
- 奈良文化財研究所・河南省文物考古研究所 2011 「關於古代日本・中國鉛軸陶器軸葉的鉛同位素比值測定」『華夏考古』2011年第2期
- 田中清美 2007 「「たこ焼き型鋳型」によるガラス小玉の生産」『大阪歴史博物館研究紀要』第6号
- 田村朋美 2017 「古代日本における鋳型によるガラス小玉の製作」『亞州鋳造技術史學會 研究發表概要集』11號
- Oga, K., Tamura, T. 2013. Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical Compositions, Chronologies, Provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in Yayoi-Kofun Period (3rd Century BCE-7th Century CE). *Journal of Indian Ocean Archaeology*, 9.

第2節 薬師堂東遺跡C・D地点出土の人骨・獣骨の同定

大妻女子大学博物館 楢崎修一郎

はじめに

薬師堂東遺跡は、埼玉県本庄市日の出4丁目に所在する。本庄市立本庄東中学校の校舎、プール棟の建設に先立ち、本庄市教育委員会による発掘調査がなされ、C地点(校舎部分)、D地点(プール棟)で多数の遺構を検出した。また、C・D地点からは人骨および獣骨が検出されたので以下に報告する(第445・446表、写真1～11)。

1. C地点出土人骨

C地点では、第381・394・404・427号土坑の4基の土坑から比較的残存状態の良い人骨が検出されている。時期は、いずれも中・近世に比定されている。

(1) 第381号土坑出土人骨(写真1～3)

- ①焼成方法：焼骨が検出されている。いずれも白色を呈しており、約900度以上で焼成されたと推定される。骨には、捻れや亀裂が認められるため、白骨化したものを焼成したものではなく、死体をそのまま焼成したと推定される。
- ②被葬者の個体数：火葬人骨の残存量は中程度であるが、明らかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。
- ③被葬者の性別：火葬による収縮を考慮しても、小さく華奢であるため、被葬者の性別は女性であると推定される。
- ④被葬者の死亡年齢：上顎右M3(第3大臼歯)は、



写真1 第381号土坑出土人骨
右上腕遠位端



写真2 第381号土坑出土人骨
左右尺骨近位端

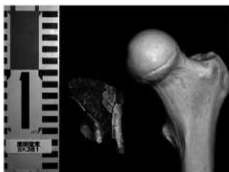


写真3 第381号土坑出土人骨
左大腿骨近位端

歯冠が残存していた。恐らく、上顎骨に埋伏した状態であったために残存したと推定される。頭蓋骨片の縫合部はまだ閉鎖していない状態である。上腕骨の骨端部は癒合している状態である。総合的に被葬者の死亡年齢は、約20歳であると推定される。

(2) 第394号土坑出土人骨 (写真4)

①被葬者の個体数：人骨の残存状態はあまり良くないが、明らかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

②被葬者の性別：残存している右側頭骨は大きく頑丈であり、歯も比較的大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

③被葬者の死亡年齢：歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。したがって、被葬者の死亡年齢は、約30歳代～40歳代であると推定される。



写真4 第394号土坑出土人骨
下顎大臼歯

(3) 第404号土坑出土人骨 (写真5)

①被葬者の個体数：人骨の残存状態は良くないが、明らかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

②被葬者の性別：出土歯は比較的小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。

③被葬者の死亡年齢：歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。但し、一部の歯は象牙質が面状に露出しているため、被葬者の死亡年齢は、約40歳代であると推定される。



写真5 第404号土坑出土人骨
下顎大臼歯

(4) 第427号土坑出土人骨

①焼成方法：焼骨が検出されている。いずれも白色を呈しており、約900度以上で焼成されたと推定される。骨には、捻れや亀裂が認められるため、白骨化したものを焼成したものではなく、死体をそのまま焼成したと推定される。

②被葬者の個体数：残存する火葬人骨は非常に少ないが、明らかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

③被葬者の性別：火葬による収縮を考慮しても、小さく華奢であるため、被葬者の性別は女性であると推定される。

④被葬者の死亡年齢：年齢指標の部位が出土していないが、頭蓋骨片の縫合部は、内板及び外板共に癒合していないため、比較的若い成人であると推定される。

2. D地点出土人骨

D地点では、第457～459号土坑の3基の土坑から人骨が検出されている。なお、人骨の時期は中世に比定されている。

(1) 第457号土坑出土人骨 (写真6)

- ①被葬者の個体数：人骨は、ほぼ全身骨格が検出されているが、残存状態はあまり良くない。
- ②被葬者の性別：人骨は大きく頭丈であり、歯も比較的大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。
- ③被葬者の死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質がわずかに露出する程度のマルティンの1度と2度の中間である。したがって、被葬者の死亡年齢は、約20歳代～30歳代であると推定される。



写真6 第457号土坑出土人骨
右下顎骨

(2) 第458号土坑出土人骨 (写真7)

- ①被葬者の個体数：人骨の残存状態は非常に悪いが、明らかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。
- ②被葬者の性別：出土歯の大きさは比較的小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。
- ③被葬者の死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、エナメル質のみのマルティンの1度の状態である。したがって、被葬者の死亡年齢は、約20歳代であると推定される。



写真7 第458号土坑出土人骨
上顎右臼歯

(3) 第459号土坑出土人骨 (写真8)

- ①被葬者の個体数：人骨の残存状態はあまり良くないが、明らかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。
- ②被葬者の性別：出土歯の大きさは比較的小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。
- ③被葬者の死亡年齢：出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質がわずかに点状に露出する程度のマルティンの1度と2度の中間である。したがって、被葬者の死亡年齢は、約20歳代～30歳代であると推定される。

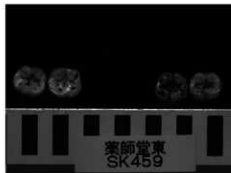


写真8 第459号土坑出土人骨
下顎大臼歯

3. 小 結

葉師堂東遺跡C・D地点から出土した主に中・近世の人骨について、以下の第445表にまとめた。

第445表 葉師堂東遺跡C・D地点出土人骨

地点名	遺構名	個体数	性別	死亡年齢	備考
C地点	SK381	1個体	♀	約20歳	火葬人骨
	SK394	1個体	♂	30歳代～40歳代	土葬人骨
	SK404	1個体	♀	約40歳代	土葬人骨
	SK427	1個体	♀	若い成人	火葬人骨
D地点	SK457	1個体	♂	20歳代～30歳代	土葬人骨
	SK458	1個体	♀	約20歳代	土葬人骨
	SK459	1個体	♀	20歳代～30歳代	土葬人骨

4. C地点出土獣骨

C地点出土獣骨は、第113・130・221・265・314号住居跡、第73号土坑の6箇所から検出されている。

(1) 第113号住居跡出土獣骨

馬歯片が検出されている。しかしながら、歯片であるため、歯種の同定は不可能である。

(2) 第130号住居跡出土獣骨 (写真9)

ウマ(馬)の上顎臼歯片が検出されている。しかしながら歯片であるため、歯種の同定は不可能である。

写真9 第130号住居跡出土獣骨
上顎臼歯

(3) 第221号住居跡出土獣骨

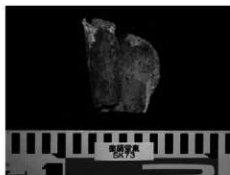
ウマ(馬)の上顎臼歯が検出されている。しかしながら破片であるため、歯種の同定は不可能である。

(4) 第265号住居跡出土獣骨

動物種名不明の四肢骨片が検出されている。しかしながら、破片であるため、詳細は不明である。

(5) 第314号住居跡出土獣骨

馬歯片が検出されている。しかしながら、歯片であるため、歯種の同定は不可能である。

写真10 第73号土坑出土獣骨
左腕尺骨

(6) 第73号土坑出土獣骨 (写真10)

ウマ(馬)の四肢骨片が検出されている。左腕尺骨の近位端であると推定される。ウマの場合、性別は大歯の有無で、また死亡年齢は歯から推定できるが、今回、歯は

検出されなかったため、詳細は不明である。出土遺物から見て、中世の馬骨である。

5. D地点出土獣骨

D地点出土獣骨は、第351・365・366・368号住居跡、第451号土坑、第2号堀跡の6箇所から検出されている。

(1) 第351号住居跡出土獣骨

動物種名不明の四肢骨片が検出されている。しかしながら、破片であるため、詳細は不明である。

(2) 第365号住居跡出土獣骨 (写真11)

ウマ(馬)の上顎臼歯片が検出されている。しかしながら、歯片であるため、歯種の同定は不可能である。



写真11 第365号住居跡(「SI362」は旧称)出土獣骨
上顎臼歯

(3) 第366号住居跡出土獣骨

ウマ(馬)の臼歯片が検出されている。しかしながら、歯片であるため、歯種の同定は不可能である。恐らく、乳歯であると推定される。

(4) 第368号住居跡出土獣骨

動物種名不明の四肢骨片が検出されている。しかしながら、破片であるため、詳細は不明である。

(5) 第451号土坑出土獣骨

動物種名不明の四肢骨片が検出されている。しかしながら、破片であるため、詳細は不明である。

(6) 第2号堀跡出土獣骨

馬歯片が検出されている。しかしながら、歯片であるため、歯種の同定は不可能である。

6. 小 結

出土した獣骨については、第446表にまとめた。

第446表 薬師堂東遺跡C・D地点出土獣骨

地点名	遺構名	動物種名	部 位
C地点	SI113	ウマ(馬)	馬歯片
	SI130	ウマ(馬)	馬歯片
	SI221	ウマ(馬)	上顎臼歯片
	SI265	不明	四肢骨片
	SI314	ウマ(馬)	馬歯片
	SK73	ウマ(馬)	左機尺骨
D地点	SI351	不明	四肢骨片
	SI365	ウマ(馬)	上顎臼歯片
	SI366	ウマ(馬)	臼歯片
	SI368	不明	四肢骨片
	SK451	不明	四肢骨片
	第2号堀跡	ウマ(馬)	馬歯片

第七章 まとめ

第1節 薬師堂東遺跡C・D地点出土の古墳時代中期～平安時代の土器について

薬師堂東遺跡C・D地点の調査では、古墳時代中期～平安時代のおびただしい数の遺構を検出した。主な遺構は竪穴住居跡であり、両地点合わせて359軒に上る。他に上記時期に収まる土坑などを検出した。本節では、主に竪穴住居跡より出土した古墳時代中期～平安時代の土器について、時期区分を行い、各時期の土器の様相について概要を記すことにしたい(第975～994図)(1)。

時期区分を行うに当たっては、カマド・貯蔵穴内出土土器や床面出土の一括性の高い土器を重視したが、すべての土器の厳密な共伴関係を検討できたわけではない。C・D地点の場合、住居跡の多くは、激しく重複しており、複数時期の遺物が1軒の住居跡の出土遺物に見られる例が少なからず見られた。個々の事例に即して、可能な限り選り分け記載に添えたが、時期的な推移を含む資料なのか、混入などにより時期的な乱れが見られるのか、確定できない例も多く残った。

時期区分に際し、一括出土資料を主としたことから、単独で出土した重要な資料を逸する結果となったこと、とくに資料数の乏しい時期に関しては、比較的現実な典型例を示すことしかできなかったため、中間的な段階の資料を例示することができない場合がままあり、また例示できなかった器種も多いことなどを記しておきたい。いずれにせよ、より充実した資料により補うべき点、修正すべき点が多々あることになる。

なお、児玉郡市域の該期の土器編年に関しては、これまでに多数の成果の蓄積があり(赤熊 1988、磯崎 1995、大谷 2007、大谷・福田 2011、恋河内 1996a・2003・2012、恋河内・松本 2008、昆・佐々木他 1988、篠崎 1992、鈴木 1983・1984、瀧瀬・磯崎 1997、田中・末木 1997、富田・赤熊 1985、中沢他 2000、中村 1979、増田 1987a・1987b・1989b他)、以下の時期区分は、従前の成果に拠るものであることを明記しておきたい(2)。

第1期(第975図)

薬師堂東遺跡C・D地点における集落の出発点をなす段階ではあるが、薬師堂東遺跡B地点では、古墳時代前期に遡る高坏脚部片が報告されており(太田 2013:「第2地点、SI-3」)、集落全体の開始期ではないようである(3)。

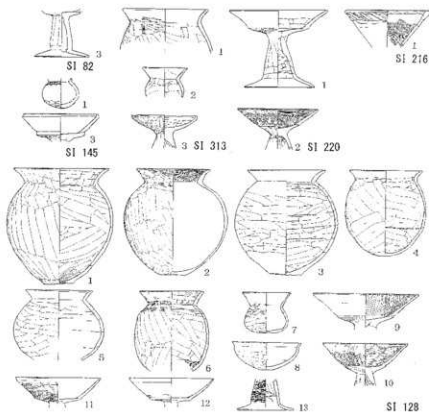
C地点の第128・220・313号住居跡出土土器、第216号住居跡出土土器の一部などが、この段階の土器と考えられる。また、第145号住居跡出土土器も、この段階に含まれる可能性を考えた。第82号住居跡出土の3は、他時期の住居跡覆土中から出土した高坏脚部ではあるが、参考までに例示した。

甕は、球胴状の器形の平底の甕を典型例とし、第128号住居跡1のように胴部下位が直線的にすばまる器形の甕や同住居跡4のような丸底の甕が見られようである。第216号住居跡1は、折返し口縁の小型甕である。後続する時期の住居跡から出土した破片資料である。口縁部外面には、独特の押捺が加えられている。押捺が異なるが、後張遺跡188号住居跡出土土器(増田・立石 1982・1983)中に

まとめ

類例が見られる。

小型直口壺が多出する段階と考えられるが、良好な資料を欠いている。第128号住居跡7の小型直口壺は、最盛期の小型直口壺に比べ、胴部が扁平化しており、その点第145号住居跡1や第313号住居跡2の小型直口壺は、古い特徴をもつかに見える。第128号住居跡8は、鉢である。少数の鉢が散発的に見られる点で、古墳時代前期以来の鉢のあり方に大きな変化は見られないようである。



第975図 第1期の土器

高坏は、第128号住居跡9～12、第220号住居跡1のような口径の大きい、脚部の高い、いわゆる「和泉式」の高坏である。第128号住居跡13のような脚部に見られる細かい横位のミガキは、畿内地方などの高坏に見られる手法である。第82号住居跡3、第145号住居跡3の高坏は、前段階の高坏と見るか、前段階の器形の特徴が残存したものと見るか、判断に迷うが、一応後者の可能性を考え、ひとまず本期に含めておく。

細分の余地を残すようであるが、断片的な資料が多いため、明確に選り分けることができない。よって、この段階を一括りして、古墳時代中期中葉と考える。

第2期 (第976図)

C地点の第93・99・231号住居跡出土土器などが、この段階の土器と考えられる。第1期と第3期の間を埋める段階と考えるが、良好な資料が揃っていないとは言えず、仮設的な段階に留まる。

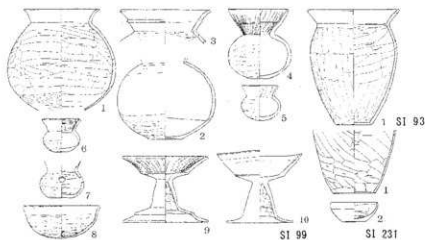
甕は、第99号住居跡1の一例のみである。第93号住居跡1、第231号住居跡1は、大型甕である。第93号住居跡1の大型甕は、時期的にやや下るのかもしれない。

壺は、中・小が見られ、中型壺は、第99号住居跡3のような口縁部下に明瞭な段を有する二重口縁壺に由来するものや同4のようなより小振りなものがある。第99号住居跡3は、口径は中型に収まるが、胴部は大きく膨らむ形態になろうか。口縁部下端の段は、比較的突出も明瞭であるが、頸部が短くなっている。小型の壺は、第99号住居跡5・6のような直口壺である。第99号住居跡7は、甕であろう。下田遺跡6号住居跡出土土器 (増田・柿沼・小久保他 1979)、七色塚遺跡B地点第73号住

居跡出土土器(恋河内・松本 2008)中に類例が見られるが、本例より時期的に新しいようである。

第99号住居跡8、第231号住居跡2は鉢である。この段階には、遺跡によっては、口縁部が屈折し外反する平底の鉢が、まとめて見られるようになると思われる。高坏は、第99号住居跡9の有段の高坏、同10があげられる。9の有段高坏は、突出の明瞭な段部を有するが、屈折部以下がやや低平化している。

好適な一括資料に恵まれなかったが、この段階を、古墳時代中期後葉と考える。



第976図 第2期の土器

第3期 (第977図)

C地点の第46・114・124・162・301号住居跡出土土器などが、この段階の土器と考えられる。

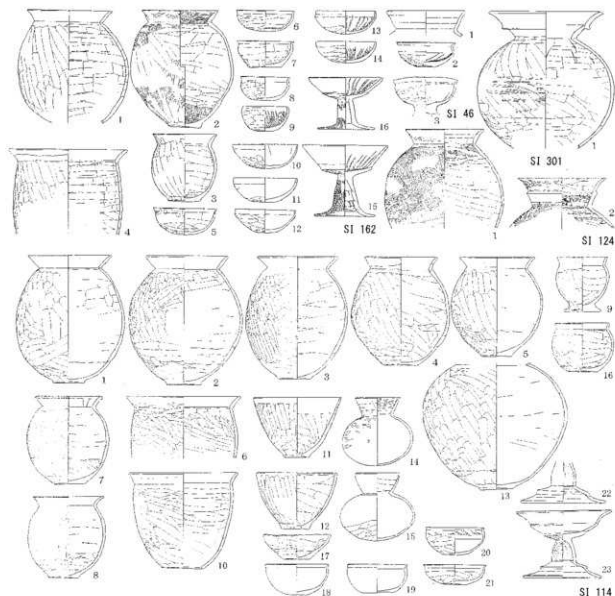
甕は、第162号住居跡2のような古風な器形をとどめるものが残る一方、第114号住居跡1～5のような胴部が均整のとれた球状の甕が盛行する。同7・8は、中型の甕、16は小型の甕あるいは鉢、9は、底部側縁が大きく突き出した小型甕である。甕には、第114号住居跡6・10、第162号住居跡4のような大型甕、第114号住居跡11・12のような小型甕の2種がある。

壺には、大型の第124号住居跡2、第301号住居跡1、中型の第114号住居跡14・15がある。遺跡によって、遅速があるようであるが、薬師堂東遺跡では、この段階以降、小型の直口壺は見られなくなるようである。第124号住居跡2は、二重口縁壺、第301号住居跡1は、折返し口縁壺の系統の壺である。後者の壺は、口縁部下端の段が明瞭で、胴部にミガキが残るなど、古い特徴を留める。

鉢、碗あるいは坏と呼称される小型の器種の内、平底のものを鉢、丸底のものを坏と仮に呼び分けるなら(底面が微妙なもの、丸い小さな凹底のものは、後者に含めた)、この段階に鉢、坏が混在しながら多出するようになることができる。鉢は、第46号住居跡2、第114号住居跡17～21、第162号住居跡7・8、坏は、第162号住居跡5・6・10～14である。ごく単純化して、鉢と坏の比率を新旧の目安とするなら、第114号住居跡出土土器から第162号住居跡出土土器への推移が考えられることになる。また、第162号住居跡出土土器にのみ須恵器との関連をうかがわせる10～14の坏が見られることも違いの一つである。第162号住居跡9は、碗に含まれようか。

第46号住居跡3は、脚付鉢、第162号住居跡15・16は、高坏、第114号住居跡22・23は、有段高坏である。高坏では、第162号住居跡15のように坏部が小振りになるとともに、脚部も短くなり、あるいは第162号住居跡16のように坏部の開きが弱くなるのが、この段階の特徴である。前段階に比べ、有段高坏も段部のめりはりが失われ、低平化するようである。

この段階を、古墳時代中期末葉と考える。



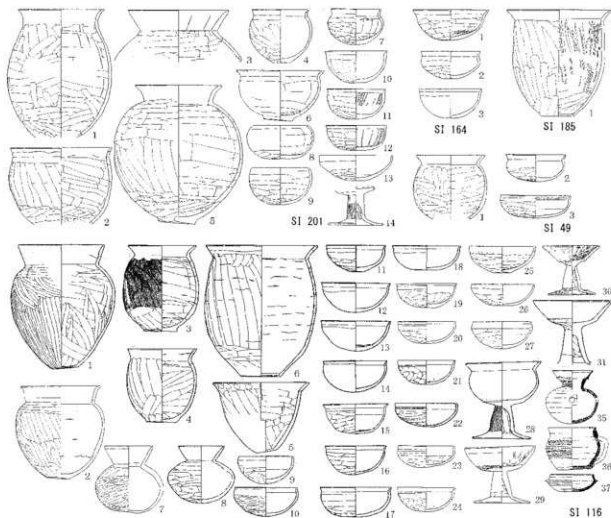
第977図 第3期の土器

第4期 (第978図)

C地点の第49・116・164・185・201号住居跡出土土器などが、この段階の土器と考えられる。

甕は、第201号住居跡1のように、前段階に比べ長胴化したものが見られ、また同3・5のように大きく球胴状に胴部が膨らむものも見られるようである。第116号住居跡1・2の口縁部が外反気味に伸長する特異な甕は、調整手法などかなり異なるが、あるいは後張遺跡C地点第204号住居跡の対の甕(恋河内 2005)などから連なる、いわゆる「山陰系S字甕」に由来する甕である可能性も考えられる。他に第116号住居跡3・4のような中型の甕、第201号住居跡4のような小型の甕が見られる。甕には、第116号住居跡6、第185号住居跡1のような大型甕、第116号住居跡5のような小型甕の2種が見られる。

壺は、第116号住居跡7・8の中型直口壺を上げうるのみである。8の直口壺は、胴部がかなり扁平化している。



第978図 第4期の土器

第201号住居跡6は、比較的大型の鉢である。坏と同等で明瞭な平底の鉢は見られず、ごく小さな丸い平底や凹底などの坏が一定量見られ、他はおおむね丸底の坏となるようである。形態は多様であるが、次段階以降の坏と同様な様態で、丸底の坏が定着し頻出するのは、この段階からと考えられる。

第116・201号住居跡出土土器を例にとるなら、形態的には、第116号住居跡9・10、第201号住居跡8・9のように体部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がる堦に類するもの、第201号住居跡7のように口縁部が屈折し外反する、いわゆる和泉型の鉢に由来するもの、第116号住居跡11～21・24、第201号住居跡10～12のように内斜口縁環に類するもの、第116号住居跡22・23・25～27、第201号住居跡13のように口縁部が体部からわずかに屈曲し、直立もしくは若干内傾するものなどが見られる。内斜口縁環に類する坏が多数を占め、総じて身の深い坏が目立つことなどが指摘できる。また、口縁部が体部からわずかに屈曲し、直立もしくは内傾する坏は見られるが、いずれも口縁部が短く、第5期以降盛行する須恵器坏蓋模倣坏に直接連なるような坏は見られないことも特徴である。整形・調整手法として、ケズリが目立たず、ヘラナデが卓越する点は、この段階までの特色である。

第116号住居跡28は、脚付鉢である。高坏は、第116号住居跡29・31のような通常の高坏に加え、同30のような有段高坏が見られる。30の有段高坏は、坏部内面、脚部下半に裝飾的なミガキが加えら

まとめ

れた精製的な小型高坏である。

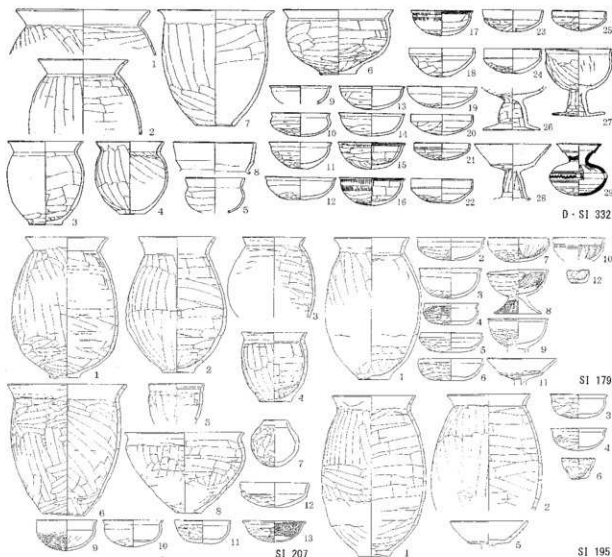
第116号住居跡35～37は、須恵器の甕、把手付碗、坏である。須恵器は、この段階から見られるようになる。

この段階を、古墳時代後期初頭(古相)と考える。

第5期 (第979図)

C地点の第179・195・207号住居跡出土土器、D地点の第332号住居跡出土土器などが、この段階の土器と考えられる。

甕には、第207号住居跡3、第332号住居跡1・2のような胴部が強く張るもの、第179号住居跡1、第195号住居跡1・2、第207号住居跡1・2のような長胴のものが見られる。長胴化が顕著になるのは、この段階からと思われ、第207号住居跡1・2のように胴部最大径が胴部下半にある下膨れの甕も見られるようである。第207号住居跡6、第332号住居跡7は、大型甕である。第207号住居跡5は、小型甕になる可能性がある。



第979図 第5期の土器

壺も好例を欠く。第207号住居跡7は、短頭壺と呼ぶべきであろうか、第332号住居跡8も壺の一種と思われる。

第207号住居跡8、第332号住居跡6は、大型の鉢、第332号住居跡5は、小型の鉢である。坏は、第179号住居跡4、第207号住居跡10、第332号住居跡10・11のように口縁部が屈折し外反する和泉型の鉢に由来するもの、第179号住居跡3、第195号住居跡3・4、第207号住居跡11・13、第332号住居跡9・12～17のように内斜口縁坏に類するもの、第179号住居跡5～7、第207号住居跡12、第332号住居跡18～25のように口縁部が体部からわずかに屈曲し、直立もしくは若干内傾するものなどが見られる。第207号住居跡13は、群馬県域に通有の体部内面に密なミガキを加える内斜口縁坏であり、この段階前後に特徴的に見られるようである。

前段階に比べ、体部が絶じて浅くなる傾向が見られ、第332号住居跡出土土器に顕著なように、口縁部が体部からわずかに屈曲し、直立する坏が優勢となる例が見られる。また、第207号住居跡12や第332号住居跡22～24のように、口縁部下端が段をなし、比較的長い口縁部が直立する、第5期に定着する須恵器坏蓋模倣坏に直接連なる坏が見られるようになることも、この段階の特色である。

第332号住居跡27は、脚付鉢、第179号住居跡8～11、第195号住居跡5、第332号住居跡28は、高坏である。高坏は、坏部が小振りになり、脚部も短くなっている。第179号住居跡8～10は、坏に脚部を付した形態の高坏である。

この段階であることが確かな須恵器は、第332号住居跡29の甕のみである。

この段階を、古墳時代後期初頭(新相)と考える。

第6期 (第980図)

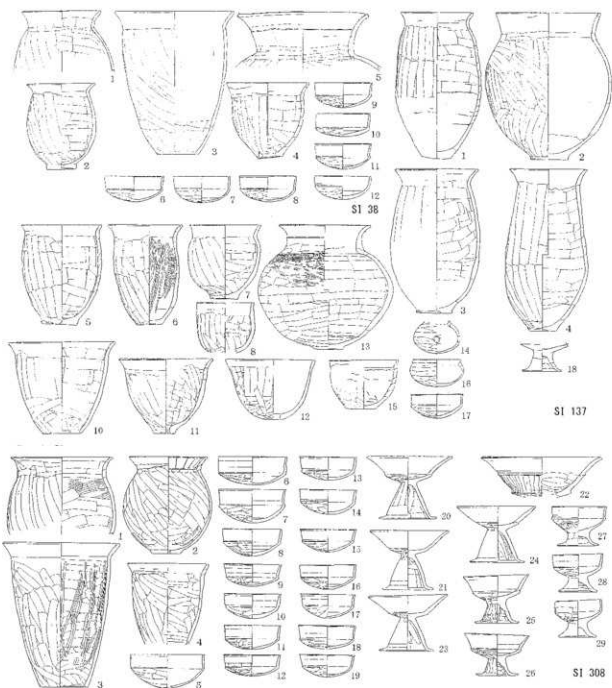
C地点の第38・137・308号住居跡出土土器などが、この段階の土器と考えられる。

甕には、大・中・小があり、大型の甕には、第137号住居跡1・3・4のような長胴甕と第38号住居跡1、第137号住居跡2、第308号住居跡1のような胴部の大きく張る甕が見られる。長胴甕は、長胴化が進み、第137号住居跡5・6のような中型の甕にも及んでいる。第137号住居跡4のように胴部下半が著しく膨らんだ甕も見られ、分割成形を強く意識したタテのケズリが施されている。甕にも大・中・小がある。第38号住居跡3、第308号住居跡3が大型甕、第137号住居跡10、第308号住居跡4が中型甕、第38号住居跡4、第137号住居跡8・11・12が小型甕である。大・中型甕には、前段階に比べ、胴部中位の張りの弱い、すんなりした器形のものが目立つようである。

第38号住居跡5、第137号住居跡13は、大型壺である。二重口縁壺の末裔であり、口縁部下端の屈曲は、沈線あるいは弱い段にまで形骸化している。第137号住居跡14は、甕であろう。すでに見られない小型直口壺の器形を踏襲しているかにも見える。

規格性の高い須恵器坏蓋模倣坏が盛行する。第38号住居跡7・12のような口縁部・体部界の段部が弱く、丸みのある坏は、過渡的な坏であろう。第137号住居跡16のような和泉型の坏も残存する。坏に関しては、第38・137号住居跡出土土器は、第308号住居跡出土土器に比べ、古い様相が見られる。第308号住居跡出土の坏では、5～7のような大振りな坏、8～14、16～19のような中型の坏、15のようなやや小振りな坏が見られる。

高坏には、第308号住居跡20・21・23～26のような和泉型の高坏と同27～29のような模倣坏類似



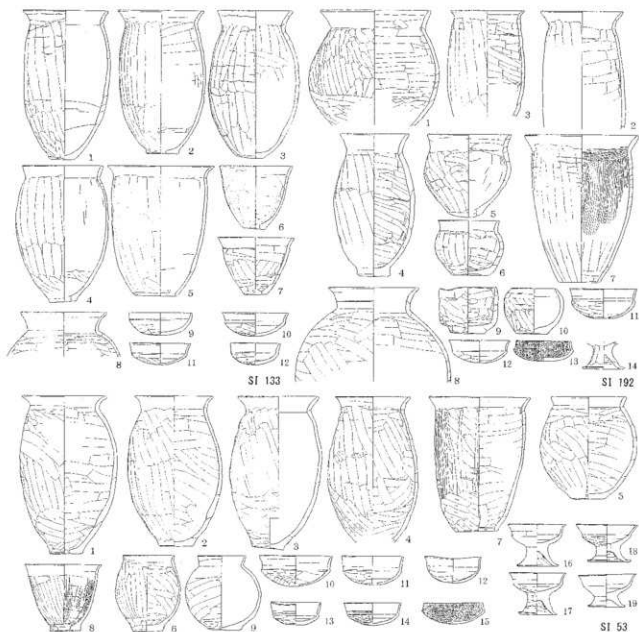
第980図 第6期の土器

の坏部に脚部を付した鬼高型の高坏と同22のような大型高坏の3種がある。

この段階を、古墳時代後期前葉と考える。須恵器坏蓋模倣坏の定着、盛行に関する限り、第5期の土器との間に懸隔が見られるようにも思われるが、現状では、他遺跡例に鑑みても第5期と第6期の中間的な様相を示す資料に限られることも事実である。当面この間の短期的な変化を考える他ないかと思われる。

第7期 (第981図)

C地点の第53・133・192号住居跡出土土器などが、この段階の土器と考えられる。



第981図 第7期の土器

甕には、大・中・小があり、大型の甕には、長胴甕と胴部の丸く張る甕が見られるのは前段階と同様である。甔には、第53号住居跡7、第133号住居跡5、第192号住居跡7のような大型甔、第53号住居跡8、第133号住居跡6・7のような小型甔がある。壺は、第192号住居跡8の大型壺があげられる。第53号住居跡9は、壺とも甕とも呼べる器形の土器である。

第192号住居跡9・10は、平底の鉢あるいは埴である。坏は、須恵器坏蓋模倣坏が盛行するが、口縁部が直立気味に立ち上がる前段階の坏に比べ、この段階の坏は、端部の面取りが省略され、口縁部が外反、外傾し、全体にやや扁平化し、規格性が希薄になる。前段階の坏の規格性が減衰するのに応じて、いくつかの階梯が予想され、それ相応の時間幅を見込む必要があると思われる。第53号住居跡15、第192号住居跡13は、坏身模倣坏である。第192号住居跡13のほうがより原型に近い。どちらの坏も内外面黒色処理されている。

まとめ

高坏は、第53号住居跡16～19のような鬼高型の高坏である。18・19は、共伴する坏よりも口縁部が大きく開く特徴が見られる。

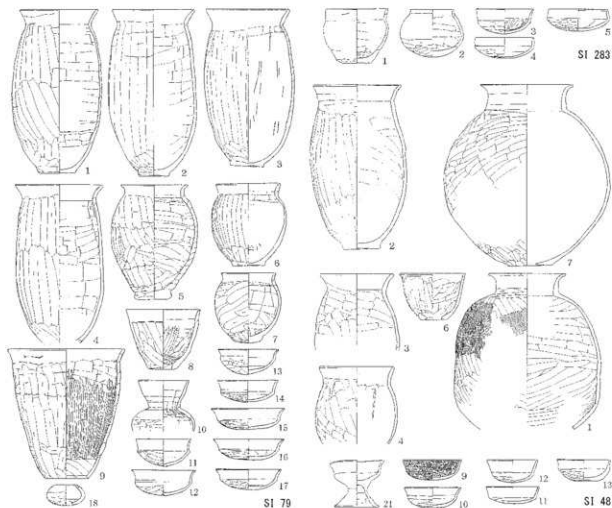
上述したように、この段階は、ある程度の時間幅が見込まれるとしたいが、推移の過程を的確に示すことができない。この段階を、ひとまず古墳時代後期中葉と考える。

第8期（第982図）

C地点の第48・79・283号住居跡出土土器などが、この段階の土器と考えられる。

甕は、長胴甕しか示しえなかったが、胴部の丸く張る甕も見られるようである。前段階に比べ、長胴化がいくらか進むようであるが、胴部中位に最大径をもつやや丸みのある器形に大きな違いは見られない。甕には、第79号住居跡9のような大型甕、同8、第48号住居跡6のような小型甕がある。第48号住居跡1・7は、大型壺、第79号住居跡10は、甕を模した有段口縁の壺である。第79号住居跡18は小型の無頸壺、第283号住居跡2は短頸壺であろうか。

坏には、坏蓋模倣坏の他、第283号住居跡5のような坏身模倣坏、第79号住居跡15～17のような口縁部が外反し大きく開く坏が見られる。坏は、前段階より全体に低平になる傾向が見られるが、周辺地域、周辺遺跡で顕著な低平で大振りな坏が盛行し、坏身模倣坏が増加する傾向を明瞭に捉えること



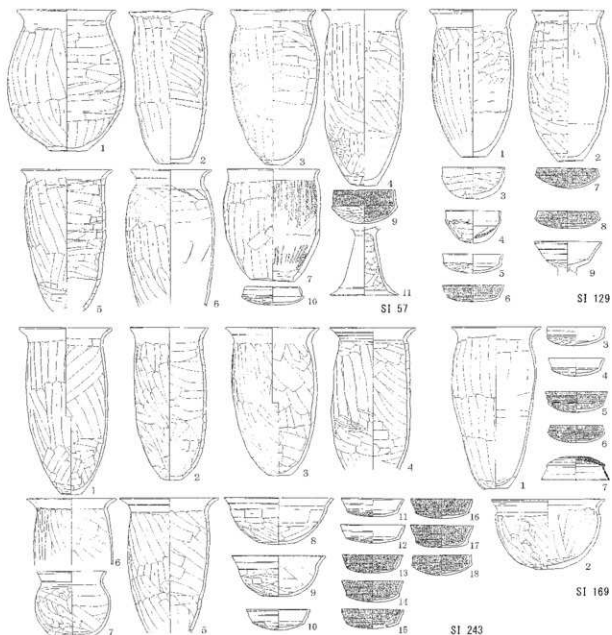
第982図 第8期の土器

ができなかった。また、この段階から有段口縁帯が出現するようであるが、良好な一括資料が乏しいこともあり、確実な資料は得られなかった。第48号住居跡21は、帯に脚部を付した器形の高坏である。この段階を、古墳時代後期後葉前半と考える。

第9期（第983図）

C地点の第57・129・169・243号住居跡出土土器などが、この段階の土器と考えられる。

大型の甕には、長胴甕と胴部の丸く張る甕が見られる。第243号住居跡7は、小型の甕としたが、平底の大きな底部など、あるいは他器種の土器の影響なのかもしれない。長胴甕の長胴化は顕著であり、第57号住居跡6、第243号住居跡3～5のように有段口縁帯と類似した段のある口縁部の甕や第



第983図 第9期の土器

243号住居跡1・6のように口縁部が大きく開く甕などが見られるようになる。その点、第129号住居跡1・2の甕は、古い様相を留めており、第129号住居跡出土土器自体微妙な位置にあると見ることでもできる。また、甕に限っても、第243号住居跡出土土器に比べ、第57号住居跡出土土器には、やや古い様相が見られるようである。第57号住居跡7は、大型甕である。

第169号住居跡2、第243号住居跡8・9は、大型の鉢である。坏には、前段階と同様数が減じながらも坏蓋模倣坏が見られるが、有段口縁坏が盛行するとともに、坏身模倣坏が増加する。有段口縁坏の多くは、内外面黒色処理されている。

第57号住居跡11は、長脚高坏の脚部、第129号住居跡9は、坏部に有段口縁坏と同じ段のある高坏坏部である。

この段階の遺構に確実に伴う須恵器はやはり少ない。第169号住居跡7は、須恵器坏蓋である。

この段階を、古墳時代後期後葉後半と考える。

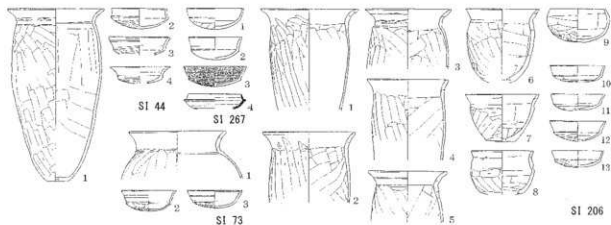
第10期（第984図）

C地点の第44・73・206・267号住居跡出土土器などが、この段階の土器と考えられる。

この段階以降、各段階に属すると考えられる住居跡の数が減少する。それに伴い各段階の指標となる住居跡出土土器も数が限られるようになる。

大型の甕は、長胴甕と胴部の丸く張る甕の2種で、前段階に一部見られた有段口縁坏と類似した段のある口縁部の甕や微段を境に口縁部が大きく開く甕が多数を占めるようである。口縁部下端の段が明瞭な甕では、段部下の斜めのケズリが顕著である。この段階の前後から、胴部の縦位の規格的なケズリが崩れ、斜位の不揃いなケズリの加えられた甕が散見されるようである。第206号住居跡8は、小型の甕あるいは鉢の一種であろうか。甕には、大小があるが、第206号住居跡7の小型甕しか例示できない。

坏は、坏蓋模倣坏の系統の坏と有段口縁坏の2種が主で、他に第44号住居跡2のような坏身模倣坏が見られる。坏蓋模倣坏は、次段階を先取りするように第206号住居跡10～13のように口径が11～12cm前後のものが多いようである。口縁部・体部界には、明瞭な段、あるいは稜が見られる。有段口縁坏は、段数の少ない、段部の形骸化したものに限られる。第206号住居跡9は、坏である。第267号



第984図 第10期の土器

住居跡4は、須恵器環である。

この段階を、古墳時代終末期前葉と考える。

第11期 (第985図)

C地点の第235・254・257・271号住居跡出土土器などが、この段階の土器と考えられる。

大型の甕は、長胴甕と胴部の丸く張る甕の2種と思われるが、後者を例示することができない。長胴甕には、第235号住居跡2、第254号住居跡1・2、第271号住居跡1のように、口縁部下端が明瞭に屈曲し、口縁部が大きく直線的に開く甕が多い。第235号住居跡2の口縁部には、有段口縁環同様の微段が痕跡的に見られる。甕は、確認できなかった。

第257号住居跡4は、小型短頸甕である。口縁部・胴部界に稜を有し、口縁部が直立気味に立ち上がる形態である。鈴木徳雄の分類による「5類」(鈴木 1988)に該当しようか。第235号住居跡3は、口縁部に微段を有する鉢である。微段は、有段口縁環と同種の手法であろう。

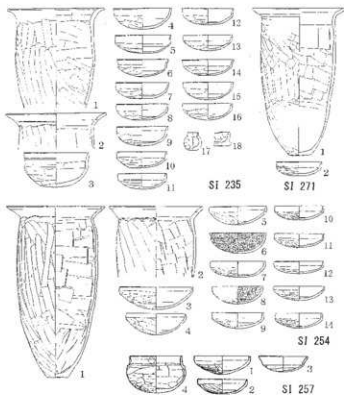
環には、坏蓋模倣環の系統の環と北武蔵型環の2種が見られる。坏蓋模倣環の系統の環は、全体に法量の縮減がさらに進み、口径11cm前後のものを主とし、本来の環の機能を果たしえたとはいえない口径9～10cm代の坏さえ一定数見られる。坏蓋模倣環の系統の環には、大きく分けるなら、口縁部・体部界が比較的明瞭な第235号住居跡5・8・10～13、第254号住居跡9～12、14、第257号住居跡2・3、第271号住居跡2と口縁部・体部界が不明瞭な第235号住居跡4・6・7・14の2種が見られる。後者では、口縁部の横ナデ、体部のケズリの違いが口縁部と体部の境になっている。

北武蔵型環には、第235号住居跡9・15・16、第254号住居跡7・8のように口縁部が屈曲せずそのまま立ち上がるものと第254号住居跡3・4・13、第257号住居跡1のように口縁部が短く内屈あるいは直立するものの2種がある。後者の内屈口縁の環は、体部の立ち上がりが強く、底面の接地面が狭い独特の形態のものが多い。

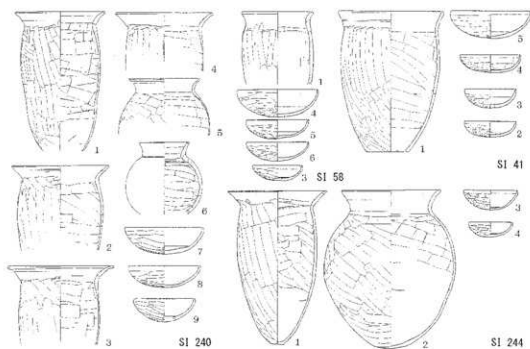
坏蓋模倣環の系統の環には、大きな違いは見られないが、第254号住居跡3・4・13のような大・中・小の口縁部の内屈する北武蔵型環が揃っていることを重視するなら、第235号住居跡出土土器より第254号住居跡出土土器の方がやや後出すると見てもできる。

他遺跡例では、この段階あるいは次段階まで段の形骸化の進んだ有段口縁環が残存するようであるが、適切な例を示すことができない(4)。

この段階を、古墳時代終末期中葉と考える。



第985図 第11期の土器



第986図 第12期の土器

第12期（第986図）

C地点の第41・58・240・244号住居跡出土土器などが、この段階の土器と考えられる。

大型の甕は、前段階同様に長胴甕と胴部の丸く張る甕が見られる。第240号住居跡1～4のように前段階と大きな違いの見られない長胴甕とともに、第244号住居跡1のように、口縁部が「く」の字状に外反し、胴部中位にかけ均整のとれた丸みをもつ、次段階への傾斜の見られる長胴甕も現れる。第244号住居跡1は、底部も小さく収束する。全体に胴部の丸みに関係するのか斜位のケズリが目立つようになる。第41号住居跡1は、大型甕である。有段口縁環と同様な段が見られる。第240号住居跡6は、壺の一種であろうか。

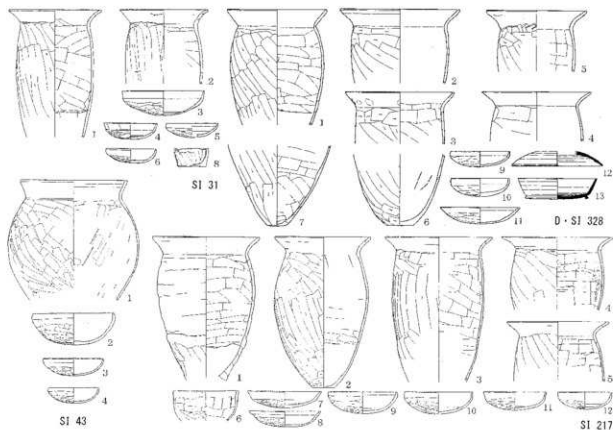
坏は、ほぼ北武蔵型坏のみとなる。北武蔵型坏には、大・中・小があり、口縁部が丸く収まるものも多く、第41号住居跡4・5、第58号住居跡3、第244号住居跡3のように口縁部が明瞭に内屈あるいは直立するものは少なくなるようである。また、前段階に比べ、底部・体部の立ち上がりが緩やかで丸みの強い器形のものが多くなり、やや扁平化するものも見られる。第41号住居跡3、第58号住居跡5のように横ナデされた幅広い口縁部を留める坏が少数含まれる。他遺跡例では、有段口縁坏は、この段階までわずかに残存するとされるが、好例を示すことができない。

この段階を、古墳時代終末期後葉と考える。

第13期（第987図）

C地点の第31・43・217号住居跡出土土器、D地点の第328号住居跡出土土器などが、この段階の土器と考えられる。

大型の甕としては、やはり長胴甕と胴部の丸く張る甕が見られるが、長胴甕の一部は、長胴化の流れとは別方向に向かう傾向が明瞭に見てとれる。第31号住居跡1、第217号住居跡3、第328号住居



第987図 第13期の土器

跡2・3・5のように胴部があまり張らない細身の長胴甕と第217号住居跡2・4・5、第328号住居跡1・4のように胴部中位にかけ滑らかな曲線を描き膨らむ長胴甕の2種が見られる。前者の底部は、第328号住居跡6のような通常の厚手の平底、後者の底部は、第217号住居跡2や第328号住居跡7の底部のように中央を薄く仕上げた小振りの平底になるようである。どちらの甕も口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部下端に横、斜めのケズリによる段を有する。第217号住居跡1は、胴部外面にケズリの施されない器厚の厚い特異な長胴甕である。

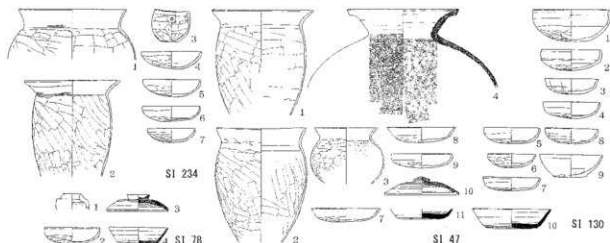
坏は、口縁部が直立あるいは内嚢気味に立ち上がる北武藏型坏が主になる。大・中・小があり、体部のケズリが下がり、無調整部分を残すものが多い。第217号住居跡8、第328号住居跡11は、北武藏型の皿である。第217号住居跡7も皿と呼びうる形態である。第217号住居跡6は、鉢の一種であろう。

第328号住居跡12は、痕跡的なかえりの残る須恵器蓋、第328号住居跡13は、須恵器高台坏である。13の坏は、底面が丸く突き出ており、高台端面と底面がほぼ同じ高さで接地している。湖西産のいわゆる「出っ尻」高台の坏、「高台坏身」（鈴木・向坂他 1998）に類似している。

この段階を、古墳時代終末期（後葉）末～奈良時代初頭と考える。

第14期（第988図）

C地点の第47号住居跡出土土器の一部、第78・130・234号住居跡出土土器などが、この段階の土器と考えられる。この段階以降、各段階に属すると認定できる住居跡の数がさらに減少するため、指標



第968図 第14期の土器

となる住居跡出土土器もより限られるようになる。各段階の十全な土器様相、組成を示すことは困難なため、特徴的な土器についてのみ略述することしかできない。

甕は、第234号住居跡2のようなやや細身の長胴甕が残る一方、第47号住居跡1・2のような胴部が丸く張る短胴化の進んだ甕が多くなるようである。口縁部も、第234号住居跡2では胴部よりぶ厚く作られているのに対して、第47号住居跡1・2では、胴部と同じような厚さになっており、全体的に薄硬化する傾向が見られる。第234号住居跡1は、胴部の丸く大きく張る甕、第47号住居跡3は、同種の小型甕である。第234号住居跡3は、無頸甕であろうか。口縁部が厚くなっており、あるいはより古い段階の土器である可能性もある。

坏は、前段階に比べ、扁平化が進み、ケズリも下降する傾向が見られる。第78号住居跡2、第130号住居跡5・7、第234号住居跡6のように扁平化の著しい坏では、平底に近い形態のものも現れる。第47号住居跡7・8は、北武蔵型の皿である。皿も前段階より扁平になっている。

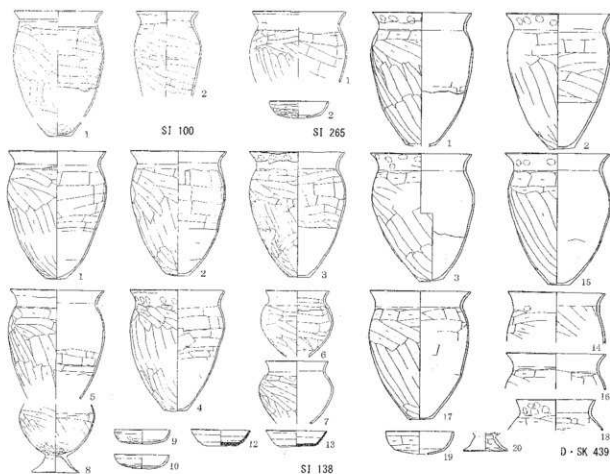
この段階の須恵器としては、第47号住居跡4の大甕、同10、第78号住居跡3の坏蓋、第47号住居跡11、第78号住居跡3の坏、第130号住居跡10の短い高台を有する高台坏がある。

この段階を、奈良時代前半と考える。

第15期（第989図）

C地点の第100・138・265号住居跡出土土器、D地点の第439号土坑出土土器などが、この段階の土器と考えられる。良好な一括資料が乏しいため、D地点の甕埋納遺構とも言うべき第439号土坑出土の土器を加えたことで、ほとんど甕ばかり例示することとなった。また、端的に言って、多くこの段階でも新しい様相の土器に偏した一断面を示す結果になった。

甕は、口縁部が「く」の字状を呈し、外面は、多くくびれ部直下に横位のケズリを加え、以下斜位のケズリで仕上げられている。前段階より口縁部の彎曲が強くなるようである。中型の甕ではあるが、第100号住居跡2のように長胴気味で細身の甕も残存するのであろう。長胴気味の甕がいくらか残存し、この段階の中で、上記した定型的な短胴の甕が確立すると考えられる。第138号住居跡6～8は、台付甕、第439号土坑20も台付甕の台部である。



第989図 第15期の土器

坏は、さらに扁平化が進むとともに、体部から口縁部にかけて内彎気味に開く平底に近い形態の坏が多くなる。ケズリが底部・底面付近までに限られる坏も見られる。

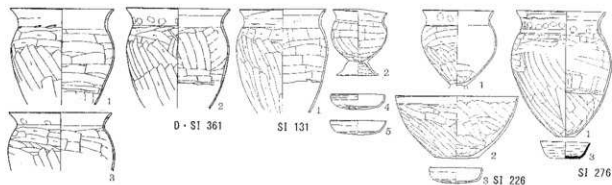
第138号住居跡12・13は、須恵器坏である。12は、口径12.8cm、13は、口径13.2cmとやや小振りである。この段階を、奈良時代後半と考える。

第16期 (第990図)

C地点の第131・226・276号住居跡出土土器、D地点の第361号住居跡出土土器の一部などが、この段階の土器と考えられる。

甕には、第361号住居跡2・3のような「く」の字状に開く口縁部の甕と同1や第131号住居跡1、第276号住居跡1のような「コ」の字状の口縁部の萌芽の形態の甕の2種が見られる。いわゆるコの字状口縁甕が定着する前段階と考えられる。第226号住居跡1は、中型の台付甕、第131号住居跡2は、小型の台付甕である。

第226号住居跡2は、この段階前後に特有の大型の鉢である。第361号住居跡では、土師器の蓋が出土しているが、より後出の段階の土器と考え、例示していない(5)。坏は、ケズリが底面付近に限られるようになり、底面と呼びうる部分がかなり明瞭になる。須恵器としては、第276号住居跡3の小



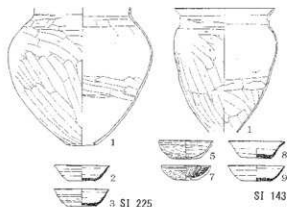
第990図 第16期の土器

振りな坏を上げることしかできない。

この段階を、奈良時代(後半)末～平安時代前期初頭と考える。

第17期 (第991図)

C地点の第143号住居跡出土土器の一部、第225号住居跡出土土器などが、この段階の土器と考えられる。この段階以降は、各段階の土器が出土する遺構もごく限られる。集落自体閑散とした状況になるのであろう。



第991図 第17期の土器

コノ字状口縁甕が定着、盛行する段階である。

コノ字状口縁甕には、第143号住居跡1のような通有の形態の甕とともに、第225号住居跡1のような胴部中位が強く張る形態の甕の2種が見られる。

第143号住居跡5・7は、土師器坏である。平底の底部からわずかに彎曲しながら体部が立ち上がる形態で、体部にはやや乱れた斜位のケズリが加えられている。7の内面には、放射状の暗文が加えられている。第143号住居跡8・9、第225号住居跡2・3は、須恵器坏である。

この段階を、平安時代前期前半と考える。

第18期 (第992図)

C地点の第107・144号住居跡出土土器、第200号住居跡出土土器、D地点の第486号土坑出土土器の一部などが、この段階の土器と考えられる。

甕では、コノ字状口縁甕の口縁部の「コ」の字の屈曲が崩れた甕が主となる。総じて口縁部が短くなり、屈曲と露出した輪積の接合痕が不分明となり、「コ」の字が崩れてゆくようである。第144号住居跡1のような胴部の丸く張る甕も見られる。第107号住居跡1は、中型の台付甕、第144号住居跡2、第200号住居跡2、第486号土坑4・6・7は、小型の台付甕である。器種として安定しているらしく、例示できる土器も多い。第17期の類例を例示することができなかったが、第16期の小型台付甕と比べて、明らかに台部が小型化、低平化している。



第992図 第18期の土器

坏は、いずれも平底で、第107号住居跡2、第144号住居跡4、第200号住居跡7、第486号土坑10のように体部・口縁部が直線的に開くものと第144号住居跡3、第200号住居跡6のように体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部がわずかに外反するものものの2種が見られる。

第200号住居跡4は、酸化焰焼成の須恵器蓋である。第144号住居跡5は、酸化焰焼成の須恵器坏、第107号住居跡3、第144号住居跡6、第486号土坑8・9は、還元焰焼成の須恵器坏である。前段階よりやや身が深くなり、口縁部が短く外反するものが多い。第200号住居跡10は、須恵器の皿である。本遺跡では、この段階から酸化焰焼成の須恵器、あるいは「ロクロ土師器」が見られるようになるようである。

この段階を、平安時代前期後半と考える。

第19期 (第993図)

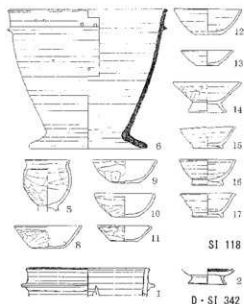
C地点の第118号住居跡出土土器、D地点の第342号住居跡出土土器などが、この段階の土器と考えられる。

土師器の甕は、第118号住居跡5の小型台付甕のみである。坏は、第118号住居跡8～11のような体部・口縁部が直線的かあるいは微妙な丸みをもって立ち上がる身の深い平底の坏が主となるようである。

第118号住居跡6は、還元焰焼成の大型甕、第342号住居跡1も大型甕であろうか。後者は、酸化焰焼成である。

第118号住居跡12・13の坏、同15～17および第342号住居跡2の高台付碗は、酸化焰焼成の須恵器である。第342号住居跡2の高台付碗は、内面が黒色処理されており、器形も他と異なる。在来の境ではないようである。資料が僅少なため細かな様相は判らないが、この段階以降、酸化焰焼成の須恵器が盛行することは間違いない。

この段階を、平安時代前期(後半)末～中期初頭と考える。



第993図 第19期の土器

第20期（第994図）

C地点の第40・123号住居跡出土土器、D地点の第345号住居跡出土土器などが、この段階の土器と考えられる。薬師堂東遺跡C・D地点における集落の、現状で確認できる最終段階と思われる。



第994図 第20期の土器

土師器である第345号住居跡2の小型台付甕以外は、いずれも酸化焰焼成の須恵器である。第40号住居跡1、第123号住居跡1、第345号住居跡1は羽釜、第345号住居跡3は坏、第123号住居跡2、第345号住居跡3は高台付埴である。

この段階を、平安時代中期前半と考える。

以上、薬師堂東遺跡C・D地点出土の古墳時代中期から平安時代にかけての土器を、第1～20期の20期に区分した。一応この間大きな断絶なく集落は、継続すると考えられる。各期の年代については、より細かな対比を経て確定すべきであろうが、周辺遺跡や他地域のこれまでの諸成果を参考にすれば、以下のような大まかな年代を一つの見通しとして当てることができるとと思われる。

5世紀代の年代観に関しては、極めて流動的であり、4・5世紀の境、5・6世紀の境について確言できる状況ではないため、古墳時代中期中葉～後期前葉とした第1～6期に関しては、5世紀代の年代をおおよその目安として考えておきたい。

古墳時代後期中葉、後葉前半・後半とした第7～9期に関しては、全体を6世紀代と見て、それぞれにおおよそ6世紀前葉、中葉、後葉の年代を与えておく。後期後葉後半、第9期に関しては、下限が6世紀代に取り切り切れるのか確定できる材料に乏しい。古墳時代終末期前葉・中葉・後葉とした第10～12期に関しても同様に、全体を7世紀代と見て、それぞれがおおよそ7世紀前葉、中葉、後葉の年代に当たると考える。古墳時代終末期末～奈良時代初頭、奈良時代前半・後半とした第13～15期には、それぞれ7世紀末～8世紀初頭、8世紀前半・後半、奈良時代末～平安時代前期初頭、平安時代前期前半・後半とした第16～18期には、それぞれ8世紀末～9世紀初頭、9世紀前半・後半、平安時代前期末～中期初頭、平安時代中期前半とした第19・20期には、9世紀末～10世紀初頭、10世紀前半の年代を暫定的に与えておきたい。

(註)

- (1) 第975～994図の遺物番号は、各挿図中の遺物番号と同じである。時期の異なる土器を除いたため、欠番が生じた場合がある。縮尺は、1/8に統一したが、第982図の第48号住居跡の1の大型壺のみ1/12である。遺構の略号に「D」を付したものは、D地点の遺構であることを示している。その他は、すべてC地点の遺構である。なお、遺構番号は、C・D地点通して付してある。
- (2) 周辺地域の編年案(赤熊 2000、岩瀬・大谷・栗岡 2003、佐藤 1998、富田 2002、福田 2002他)も、様々な点で参考にした。

- (3) A～D地点の調査により、この4地点を結ぶ範囲には、住居跡を主とする遺構が極めて稠密に分布することが分かっている。この範囲は、A～D地点の調査面積のおおよそ2倍くらいであるから、この範囲だけでも700～800軒の住居跡があると推定できる(第3図参照)。C地点の東・南側には、さらに住居跡の分布が広がる可能性が極めて高いし、西側では、本庄東中学校の校地をかなり離れた地点での試掘調査で、住居跡が重なり合い地山が見えないような状況が確認されている。葉師堂東遺跡は、上記推定した住居跡数をはるかに上回る住居が営まれた集落跡であることは、まず間違いない。これまでの調査範囲は、葉師堂東遺跡の限られた範囲における調査に過ぎないことに留意したい。
- (4) 本項では例示していないが、第253号住居跡では、第254号住居跡の坏に類似した北武蔵型坏と坏蓋模倣坏の系統の坏とともに、形骸化の進んだ有段口縁坏が覆土中より出土している。前者の坏の多くが準完形品であるのに対して、有段口縁坏は、いずれも破片資料であり、確実に伴うのかどうか判断し切れなかった。
- (5) 第47号住居跡でも、破片資料ではあるが、全形の分る土師器の蓋が出土している(第55図6)。第47号住居跡は、第14期の遺構と思われるが、覆土中より第18期以降の須恵器などが出土しており、土師器蓋もこの段階の混入品と考え、本節では例示していない。

第2節 葉師堂東遺跡C地点出土のガラス小玉鋳型、棒状土製品の時期について

葉師堂東遺跡C地点で出土したガラス小玉鋳型と鋳型の使用に関連する道具である可能性の高い棒状土製品に関して、出土遺構全体を通観することで、それらの帰属時期について検討したい。

ガラス小玉鋳型が出土した遺構は、堅穴住居跡42軒、土坑1基、棒状土製品が出土した遺構は、堅穴住居跡45軒、土坑1基である(第447表)⁽¹⁾。住居跡の群別から見るなら(第6図)、ガラス小玉鋳型出土住居跡は、C・E群各2軒、F・I群各3軒以外は、いずれもG・H群に属する(G群12軒、H群20軒)。棒状土製品も同様に、C・E・J群各1軒、F群5軒、I群2軒以外は、やはりG・H群である(G群13軒、H群22軒)。ガラス小玉鋳型、棒状土製品ともに、集落内の極めて限定された範囲の住居跡(G・H群)から集中して出土していることが判る(本書：第V章、第946・947図参照)。

ガラス小玉鋳型、棒状土製品の住居跡内での出土状況に関して、まず気付くのは、住居跡から出土しているにもかかわらず、住居が廃絶した時点で、土器などとともに遺棄、廃棄されたと思われる例が極めて限られることである。土器などの遺物が乏しく、重複関係以外時期を決める手掛かりのない住居跡から出土したガラス小玉鋳型と、主に確認時などに遺構検出面で出土し「遺構外出土遺物」に含めることとなったガラス小玉鋳型合わせて46個体(総個体数：188個体)、同様の遺物が棒状土製品で36個体(総個体数：163個体)にのぼるのは、ひとつには、ガラス小玉鋳型、棒状土製品ともに、多くは、土器などとともに遺棄(放置、置き去りなど)、廃棄(投棄、破棄など)されることなく、また多く覆土中から出土していることと関係すると考えられる。土器などとともに遺棄、廃棄された例が少ないということは、ガラス小玉鋳型、棒状土製品の特殊な性格、日常生活用品である土器などとは異なる性格を端的に物語るとともに、時期を考える際の直接的な障害となる。

第447表 ガラス小玉鋳型、棒状土製品出土個体数一覧

遺構番号	群別	ガラス小玉鋳型	棒状土製品	時期	遺構番号	群別	ガラス小玉鋳型	棒状土製品	時期
SI216	H		1	古墳中期後葉	SI111	G 11 (13)	15 (9)		古墳終末期末～奈良初
SI127	H	1		古墳後期初頭(新)	SI142	I		1	古墳終末期末～奈良初
SI179	H		2	古墳後期初頭(新)	SI150	H	8	9	古墳終末期末～奈良初
SI207	G		4	古墳後期初頭(新)	SI217	G	1		古墳終末期末～奈良初
SI119	E		1	古墳後期前葉	SI147	J		1	奈良前半
SI252	G		1	古墳後期前葉～中葉	SI130	H	6	4 (1)	奈良前半
SI168	H	1		古墳後期中葉～後葉前半	SI266	G		1	奈良前半
SI115	F		1	古墳後期後葉前半	SI109	H	1	5	奈良後半
SI104	H		1	古墳後期後葉前半	SI131	H	5		奈良末～平安初
SI113	F		1	古墳後期後葉後半	SI165	H	2	1	奈良末～平安初
SI157	H	2	1	古墳後期後葉後半	SI202	G		1	奈良末～平安初
SI167	H		1	古墳後期後葉後半	SI226	H		1	奈良末～平安初
SI237	H		1	古墳後期後葉後半	SI135	H	9	5	平安前期前半
SI105	F	1	1	古墳後期後葉～終末期	SI143	H	2	3 (1)	平安前期前半～後半
SI160	I	1		古墳後期後葉～終末期	SI107	H		3 (1)	平安前期後半
SI44	E	2		古墳終末期前葉	SI108	H	1		平安前期後半
SI180	F		1	古墳終末期前葉	SI200	H	3	1	平安前期後半
SI206	G	1	4	古墳終末期前葉	SI259	G		1	[古墳後期初頭以前]
SI221	H	16	16	古墳後期後葉～終末期中葉	SI233	H	1		[古墳終末期以前]
SI212	G		2	古墳終末期前葉～中葉	SI275	G 15 (6)	6 (3)		[古墳終末期中葉以前]
SI249	F	1		古墳終末期前葉～中葉	SI106	G	1	2	[古墳終末期中葉以降]
SI248	C	1		古墳終末期中葉	SI204	G	2		[古墳終末期中葉以降]
SI253	G	5	2	古墳終末期中葉	SI134	H		1	[古墳終末期中葉以降]
SI254	G 3 (4)	4 (6)		古墳終末期中葉	SI163	I		1	[奈良時代以前]
SI257	G	26	4	古墳終末期中葉	SI141	H	(1)	1	[奈良前半以前]
SI271	G	6		古墳終末期中葉	SI258	H	1		[奈良前半以前]
SI272	G	1		古墳終末期中葉	SI138	H	1	6	[奈良末～平安初以前]
SI166	H	2	2	古墳終末期中葉～後葉	SI269	C	1		不明
SI148	H	4	2	古墳終末期後葉	SK311		1		不明
SI230	C		1	古墳終末期後葉	SK404			1	不明
SI238	H	3	2	古墳終末期後葉	遺構外		15	15	
SI260	F		1	古墳終末期後葉					

* () 内は、床下出土の個体数。

* [時期]は、重複関係からの推定時期。

ガラス小玉鋳型、棒状土製品が出土した遺構を時期別に見渡すことから、2種の遺物について考えてみたい(第447表)。

ガラス小玉鋳型、棒状土製品が出土した遺構が大きく重なることは、第447表からも見て取ることができる(第946・947図参照)。第257号住居跡のような例外もあるが、とくにガラス小玉鋳型、棒状土製品がそれぞれ多数出土している住居跡では、2種の遺物が揃って多数出土する傾向がみとめられる。逆にガラス小玉鋳型、棒状土製品が1個体あるいは2個体しか出土していない遺構では、どちらか一方のみしか出土しない単独出土例がほとんどである。おそらく2種の遺物は、2種が揃って遺構内に入りやすい形で、遺棄、廃棄されていたのであろう。2種の遺物が、比較的狭い範囲に、混在した状態で遺棄、廃棄されていたとするのが素直な推定かと思う。単独出土例に関しては、偶発的に遺構内に混入した例が多いと見て間違いない。

ガラス小玉鋳型、棒状土製品が出土した遺構は、大きく3つの時期のまとまりに分けて考えることができる。

第1は、古墳時代中期から終末期前葉にかけての段階である。この段階には、第206・207号住居跡で棒状土製品が4個体ずつ出土している以外は、いずれも2種の遺物が1個体あるいは2個体出土している遺構ばかりである。しかも1個体の単独出土例が大半を占め、ガラス小玉鋳型は、ほとんどが小破片である。この段階には、ガラス小玉鋳型、棒状土製品ともに遺棄、廃棄されており、住居跡から出土した2種の遺物は、偶発的に混入した遺物と見てよいように思われる。

第2は、古墳時代終末期中葉である。この段階、全時期を通じて最も多数のガラス小玉鋳型、棒状土製品が住居跡から出土している⁽²⁾。いくつかの例外はあるものの、ガラス小玉鋳型の大型片が集中するのも、この段階の特徴である。また、この段階の第257号住居跡で、完形のガラス小玉鋳型と埴場片、古墳時代終末期中葉に属すると思われる土師器がまとまって出土していることも、重要な状況証拠である。

この段階には、ガラス小玉鋳型、棒状土製品ともに遺棄、廃棄されていたと考えられる。それらの多くが、住居の廃絶、埋没の過程で、住居跡内に流入したと見られる。廃絶した住居に直接廃棄されたものもあつた可能性があるが、ガラス小玉鋳型、棒状土製品ともに、何らかの形で集積した状態で遺棄、廃棄されたり、土坑やピットにまとめて廃棄された痕跡は一切みとめられない。ガラス小玉鋳型、棒状土製品の使用から遺棄、廃棄に至る過程を、特別長期にわたると考える理由はないとすれば、鋳型を用いたガラス小玉の製作がこの段階になされた可能性は高いと思われる。

第3は、古墳時代終末期後葉以降、平安時代前期後半に至る段階である。この長期にわたる段階を一まとめにしたのは、この間のガラス小玉鋳型、棒状土製品の出土状況について、はっきりした傾向を読み取ることができないからである。上記した古墳時代終末期中葉のガラス小玉鋳型、棒状土製品の出土個体数のピーク以降、2種の遺物は、多寡はあるものの途切れることなく住居跡から出土し続けている。

出土個体数の比較的多い時期には、ガラス小玉の製作が行われ、ガラス小玉鋳型、棒状土製品が断続的に長期間にわたって、遺棄、廃棄され続けたと見ることはできるであろうか。まず、これだけ例数の少ないガラス小玉鋳型、棒状土製品が、本遺跡に限って、断続的ではあれ長期間にわたり遺棄、廃棄され続けたと考えるのは、かなり無理がある⁽³⁾。また、現状では、ガラス小玉鋳型、棒状土製品ともに、大きさの違い、ばらつきを別にすれば、いずれの個体もよく似ており、複数のタイプに分けることがむづかしいことも、長期にわたるガラス小玉鋳型、棒状土製品の使用に関しては、否定的な材料である。

「出土個体数の比較的多い」住居跡、第130・131・135・148・150号住居跡は、いずれもH群とした住居跡群に含まれる。第135・150号住居跡は、ガラス小玉鋳型、棒状土製品が各16個体ずつ出土した第221号住居跡を切って造られており、2種の遺物が混入する条件は揃っている。第130・131号住居跡も、第221号住居跡にごく近い位置にある住居跡である。第148号住居跡は、この一群の住居跡とは多少離れた位置にあるが、古墳時代終末期後葉に属する住居跡と推定され、時間的な近接性が関係しているのかもしれない。いずれにせよ、「出土個体数の比較的多い」住居跡は、H群としたかなり狭い範囲に、漸次重複を重ね造られ続けた住居跡であり、ガラス小玉鋳型、棒状土製品の破片が住居の

廃絶、埋没の過程で、覆土中に混入することは、何ら不自然ではないと思われる。

ガラス小玉の製作に関連する痕跡は、ガラス小玉鋳型、棒状土製品などの遺物を除けば、調査範囲内では検出できなかった。現時点では、ガラス小玉鋳型、棒状土製品が集中して分布する調査範囲の南東縁から南東隅にかけての一角の東側、調査範囲外の場所に、ガラス小玉の製作がなされた空間があり、調査範囲内にガラス小玉鋳型、棒状土製品の一部分が、何らかの形でもたらされたと推定するのが一案であろうが、ガラス小玉の製作がどのような状況で行われたのか不明な現段階では、率直に言って、結論を下すことはできないと思う。また、この問題は、集落そのものの推移や構成からも検討すべき課題であり、向後に期す他ない。

繰り返しになるが、ガラス小玉鋳型、棒状土製品の時期に関しては、古墳時代終末期中葉に遺棄、廃棄されたと考えられ、ガラス小玉の製作も同段階であった可能性が考えられた。ただし、以降もガラス小玉鋳型、棒状土製品が多数出土した住居跡の近隣の、主にG・H群に含まれる住居跡では、2種の遺物が一定量遺構内に混入しうる状態にあったと見られる⁽⁴⁾。(松本)

(註)

- (1) 第447表の「時期」に関しては、遺物から確認できる住居跡の時期を記したが、時期をしぼることがむづかしく、ある時間幅でしか時期を特定できない場合、下限の時期をもって、その遺構の時期としてまとめた。
- (2) 第275号住居跡は、図化できる時期限定可能な遺物が出土しなかったため、重複関係から「古墳時代終末期中葉以前」と考えた。また、多数のガラス小玉鋳型、棒状土製品が出土した第111号住居跡は、第275号住居跡と大きく重なっており、第111号住居跡の方が新しい。第111号住居跡のガラス小玉鋳型、棒状土製品の多くは、床下出土とされ、それらの多くは、重複し下位にある第275号住居跡に伴う可能性が高い。第275号住居跡出土、第111号住居跡床下出土のガラス小玉鋳型、棒状土製品が、古墳時代終末期中葉に含まれるなら、この段階の遺構から出土したガラス小玉鋳型、棒状土製品は、さらに多くなることになる。
- (3) ガラス小玉鋳型の出土例が全国的に少なく、多く小破片が数点出土する例に限られるのは、やはり理由があることであろう。痕跡を残しにくい方法による遺棄、廃棄が徹底して行われたと考えるのが一法である。本遺跡でガラス小玉鋳型、棒状土製品が多数出土したのは、通常起こりえない異例かつ稀有な事態が生じた可能性があるように思われる。
- (4) 鋳型に付着したガラスの材質的特徴の自然科学的方法による分析から、本遺跡で出土したガラス小玉鋳型が7世紀代はかなり限られた時期の所産であることが示唆されている(本書：第IV章第1節)。本節の推定とおおむね整合するよう思われる。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 1988 『将監塚・古井戸 歴史時代編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 1999 『末野遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第207集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 2000 『熊野／新田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第251集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 赤塚次郎 2006 「東海系土器と東日本の墳丘墓」『古式土師器の年代学』大阪府埋蔵文化財センター
- ・早野浩二 2001 「松戸戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第2号、愛知県埋蔵文化財センター
- 荒川正夫 2001 『大久保山Ⅹ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告10、早稲田大学
- 石山 啓・鈴木 徹他 2011 『府中城跡』石岡市教育委員会
- 磯崎 一 1995 『今井川越田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第177集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 伊藤順一他 2018 『本庄中北原遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第54集、本庄市教育委員会
- 井上尚明 1986 『将監塚・古井戸 古墳・歴史時代編Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岩瀬 謙・大谷 徹・栗岡 潤 2003 『如意遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第285集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 梅沢太久夫・石岡憲雄・浅野晴樹他 1981 『六反田』大里郡都部町六反田遺跡調査会
- 上野真由美・田村朋美 2012 「埼玉県反町遺跡出土のガラス小玉とガラス小玉罎型について」『研究紀要』第26号、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 臼井洋輔 2005 「古代ビーズ製作法の研究」『文化財情報学研究』第2号、吉備国際大学文化財総合研究センター
- 2007 『謎を解めた古代ビーズ再現』吉備人出版
- 大賀克彦 2010 「日本列島におけるガラス及びガラス玉生産の成立と展開」『月刊文化財』No. 566、第一法規
- 大熊季広 2011 『西富田新田遺跡Ⅱ-B地点の調査-』本庄市埋蔵文化財調査報告書第26集、本庄市教育委員会
- 2013 『左口遺跡Ⅱ-B地点の調査-・本庄飯玉遺跡・北塚新田遺跡-D地点の調査-』本庄市埋蔵文化財調査報告書第34集、本庄市教育委員会
- 太田博之 2002 『東五十子・川原町』東五十子遺跡調査会
- 2007 『西五十子古墳群』本庄市埋蔵文化財調査報告書第5集、本庄市教育委員会
- 2008 『離濠遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第12集、本庄市教育委員会
- 2009 『離濠Ⅱ・笠ヶ谷戸・小島本伝』本庄市埋蔵文化財調査報告書第15集、本庄市教育委員会
- 2011 『本庄城跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第25集、本庄市教育委員会
- 2013 『本庄2号遺跡・栗師堂東遺跡（第1・第2地点）・御堂坂4号墳』本庄市埋蔵文化財調査報告書第33集、本庄市教育委員会
- 2014 『石神境遺跡・天神林Ⅱ遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第38集、本庄市教育委員会
- 2016 『天神林Ⅱ遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第47集、本庄市教育委員会
- ・松本 完他 2005 『四方田（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ次調査）・久下東（Ⅱ次調査）』本庄市埋蔵文化財調査報告書第31集、本庄市教育委員会
- 大谷 徹 2007 『夏目／夏目西／弥藤次』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第346集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- ・福田 聖 2011 『川越田遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第375集、埼玉県埋蔵文化財調

査事業団

- 大屋道則 1994 『清水上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第152集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 及川良彦 2011 『北区中里峠上遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第256集、東京都スポーツ文化事業団
東京都埋蔵文化財センター
- 小澤正人 1996 『大久保山IV』早稲田大学本庄校地文化財調査報告4、早稲田大学
- 鬼形芳夫・飛田野正佳 1986 『内出遺跡』内出遺跡調査会
- 神川町教育委員会編 1989 『神川町誌』神川町
- 上里町史編集専門委員会編 1992 『上里町史 資料編』上里町
- 京塚 覚 2009 「ガラス小玉錐型出土の意義」『古代学研究』第182号、古代学研究会
- 栗岡 潤・大屋道則・齋持和夫 1998 『築道下遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第199集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 齋持和夫 2000 『築道下遺跡III』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第245集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 志河内昭彦 1995 『飯玉II・高縄田・樋越・梅沢II・東牧西分・鶴崎・毛無し屋敷・石橋』児玉町文化財調査報告書第17集、児玉町教育委員会
- 1996a 『辻堂遺跡I』児玉町文化財調査報告書第19集、児玉町教育委員会
- 1996b 『辻堂遺跡II・南街道・宮田遺跡』児玉町文化財調査報告書第20集、児玉町教育委員会
- 2000 『天田遺跡-B地点の調査-』児玉町遺跡調査会報告書第11集、児玉町遺跡調査会
- 2003 『大久保遺跡(B地点の調査)』児玉町遺跡調査会報告書第14集、児玉町遺跡調査会
- 2004 『女池遺跡II(A地点の調査)』児玉町遺跡調査会報告書第16集、児玉町遺跡調査会
- 2005 『後張遺跡III(C地点の調査)』児玉町遺跡調査会報告書第20集、児玉町遺跡調査会
- 2008 『塚島遺跡III-E地点の調査-』本庄市遺跡調査会報告書第23集、本庄市遺跡調査会
- 2012 『久下前遺跡IV(D1・E1地点)・久下東遺跡V(F1地点)』本庄市埋蔵文化財調査報告書第28集、本庄市教育委員会
- 2016 『久下東遺跡IX(C2・D2・D3・E2・E3・E4地点)』本庄市埋蔵文化財調査報告書第49集、本庄市教育委員会
- ・藤根 久他 2018 『久下前遺跡VI(C2・C3・C4・F2・F3地点)』本庄市埋蔵文化財調査報告書第53集、本庄市教育委員会
- ・松本 完 2008 『七色塚遺跡II-B1地点-北堀新田前遺跡-A1地点-』本庄市埋蔵文化財調査報告書第7集、本庄市教育委員会
- ・的野善行 2010 『北堀久下塚北遺跡II-B地点-久下東遺跡IV-C1・D1・E1地点-久下前遺跡II-A1・B1地点-』本庄市埋蔵文化財調査報告書第19集、本庄市教育委員会
- ・————— 2014 『七色塚遺跡III(B2地点)・北堀久下塚北遺跡III(C・D地点)・久下東遺跡VII(A2・B2・B3・F2地点)・有勝寺北裏遺跡IV(C地点)』本庄市埋蔵文化財調査報告書第37集、本庄市教育委員会
- 肥塚隆保 1995 「古代珪酸塩ガラスの研究-弥生~奈良時代のガラス材質の変遷-」『文化財論叢4』(奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集)、奈良国立文化財研究所
- 2001 「古代ガラスの材質と鉛同位体比」『国立歴史民俗博物館研究報告』第86集、国立歴史民俗博物館
- ・田村朋美・大賀克彦 2010 「材質とその歴史の変遷」『月刊文化財』No. 566、第一法規

- 小久保徹・柿沼幹夫他 1978 『東谷・前山2号墳・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集、埼玉県教育委員会
- 小瀬康行 1989 「古墳時代ガラス勾玉の形成法について」『考古学雑誌』第75巻第1号、考古学会
- 児玉町教育委員会・児玉町史編さん委員会 1993 『児玉町史 自然編』児玉町
- 小林行雄 1964 『続古代の技術』塙書房
- 昆 彭生・佐々木幹雄・小川貴司・橋本博文・荒川正夫他 1980 『大久保山Ⅰ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告1、早稲田大学
- ・———・荒川正夫他 1993 『大久保山Ⅱ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告2、早稲田大学
- 埼玉県史編さん室編 1982 『新編埼玉県史 資料編2（原始・古代）』埼玉県
- 酒井清治 1984 『台耕地』Ⅱ、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 1986 「北武蔵における7・8世紀の須恵器の系譜—立野遺跡の再検討を通じて—」『研究紀要』第8号、埼玉県立歴史資料館
- 1987 「武蔵国における須恵器年代の再検討」『研究紀要』第9号、埼玉県立歴史資料館
- 酒巻忠史 1998 「東国における古墳時代の鋳造技術について—鶴ヶ丘1号墳出土のガラス小玉鋳型を中心に—」『君津都市文化財センター研究紀要』Ⅶ、君津都市文化財センター
- 2002 「鋳造技法によるガラス小玉の特徴と類型」『國學院大學考古学資料館紀要』第18集、國學院大學
- 坂本和俊・鈴木徳雄 1981 『金屋遺跡群』児玉町文化財調査報告書第2集、児玉町教育委員会
- 佐藤康二・渡辺清志 1998 『砂田前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第198集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤好司・増田一裕 1989 『諏訪遺跡（B地点）・久城前（B地点）発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第15集、本庄市教育委員会
- 三宮昌弘 2005 『舟橋遺跡Ⅲ』大阪府文化財センター調査報告書第129集、大阪府文化財センター
- 篠崎 潔 1992 『豊樹原・檜下遺跡Ⅳ 奈良・平安時代編3』豊樹原・檜下遺跡調査会報告書第4集、豊樹原・檜下遺跡調査会
- 清水眞一 1992 「ガラス小玉鋳型についての一考察」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV、同志社大学
- 白石太一郎 2006 「第3章 須恵器の暦年代」『年代のものさし』大阪府立近つ飛鳥博物館図録40、大阪府立近つ飛鳥博物館
- 鈴木徳雄 1983 「古代北武蔵における土師器製作手法の両期」『土曜考古』第7号、土曜考古学研究会
- 1984 「いわゆる北武蔵系土師器の動態」『土曜考古』第9号、土曜考古学研究会
- 1988 『中加遺跡 塚本山古墳群』児玉町遺跡調査会報告書第3・4集、児玉町遺跡調査会
- ・市川淳子他 1983 『阿知越遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第3集、児玉町教育委員会
- ・——— 1984 『阿知越遺跡Ⅱ』児玉町文化財調査報告書第4集、児玉町教育委員会
- 鈴木敏則・向坂鋼二他 1998 『梶子北遺跡 遺物編』浜松市文化協会
- 隅田 眞 1998 『松月院境内遺跡』板橋区教育委員会
- 瀧瀬芳之・磯崎 一 1997 『今井川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中清美 2007 「「たこ焼き型鋳型」によるガラス小玉の生産」『大阪歴史博物館研究紀要』第6集、大阪歴史博物館
- 田中広明 1991 「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給—有段口縁杯の展開と在地社会の動態—」『埼玉考

古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

- 1992 『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 末木啓介 1997 『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷一 尚 1991 「日本古代のガラス」『ガラスの考古学』ものが語る歴史シリーズ2、同成社
- 1993 『ガラスの比較文化史』杉山書店
- 玉田芳英 1991 「平成京・東京一条三坊出土のガラス小玉鍔型」『奈良国立文化財研究所年報1991』奈良国立文化財研究所
- 田村朋美 2013 「西方地域のガラス玉」『シルクロード・オリエントの世界—海の道むなかた館
- 常深 尚 2004 『東五十子城跡遺跡』本庄市遺跡調査会報告第11集、本庄市遺跡調査会
- 徳山寿樹・大熊季広 1997 『金佐奈遺跡-A1地点の調査-』児玉町文化財調査報告書第24集、児玉町教育委員会
- 1998 『金佐奈遺跡-A2地点の調査-』児玉町文化財調査報告書第29集、児玉町教育委員会
- 利根川章彦 1982 「古墳時代集落構成の一考察」『土曜考古』第5号、土曜考古学研究会
- 1998 『西富田・四方田条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第224集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富田和夫 2000 『大寄遺跡I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第268集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 2002 『熊野遺跡(A・C・D区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第279集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 赤熊浩一 1985 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第16集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 島羽正之 1995 『中宿遺跡 推定・榎沢郡正倉跡の調査』岡部町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第1集、岡部町教育委員会
- 竹野谷俊夫 2001 『熊野遺跡I』岡部町遺跡調査会埋蔵文化財発掘調査報告書第9集、岡部町遺跡調査会
- 宮本直樹・市川淳子 2004 『熊野遺跡III』岡部町遺跡調査会埋蔵文化財発掘調査報告書第9集、岡部町遺跡調査会
- 中沢良一 1998 『猪俣北古墳群・引地遺跡・滝ノ沢遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第9集、美里町教育委員会
- 2004 「埼玉県北部の集落出土の古式須恵器」『幸玉』北武蔵古代文化研究会
- 岡本幸男 1999 『鍛冶屋峯遺跡・川向遺跡・森後遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第10集、美里町教育委員会
- 逸見恵大・田島康弘 2000 『上野遺跡(A・B地点)』美里町遺跡発掘調査報告書第11集、美里町教育委員会
- 中島広顕・小林 高・小林理恵他 1995 『豊島馬場遺跡』北区埋蔵文化財調査報告書第16集、東京都北区教育委員会
- 中村倉司 1979 『宇佐久保遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第38集、埼玉県遺跡調査会
- 1989 『白山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告第17集、埼玉県教育委員会
- 1999 『岡部条里/戸森前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第217集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中山清隆 2007 「日韓地域出土のガラス小玉鍔型とその周辺—小さな鍔型が語る初期国家形成期の断層—」『利根川』利根川同人
- 中山浩彦 1995 『宮ヶ谷戸/根岸/八日市/城西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第172集、埼玉県埋蔵文

化財調査事業団

- 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 2000 『飛鳥池遺跡』飛鳥資料館図録第36冊
- 長谷川 勇・石橋桂一他 1985 『夏目遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第5集第2分冊、本庄市教育委員会
- 1987 『社具路遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第5集第3分冊、本庄市教育委員会
- 伴瀬宗一 1996 『今井川越田遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第178集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 坂野和信・村田健二・利根川章彦 1998 『桶の上・皇山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第205集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富田和夫 1996 「飛鳥時代の関東と畿内—北関東における7世紀の土器様相—」『東アジアにおける古代国家成立期の諸問題』国際古代史シンポジウム実行委員会
- 福田 聖 1998 『末野遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第196集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 2002 『大寄遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第280集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 藤野一之 2007 「古墳時代における藤岡産須恵器の基礎的研究」『群馬考古学手帳』第17号、群馬土器観会
- 2013 「古墳時代における藤岡産須恵器再考」『埼玉考古』第48号、埼玉考古学会
- 本庄市史編集室編 1976 『本庄市史 資料編』本庄市
- 1986 『本庄市史 通史編Ⅰ』本庄市
- 1989 『本庄市史 通史編Ⅱ』本庄市
- 増田逸郎・柿沼幹夫・小久保 徹他 1979 『下田・諏訪』埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書第21集、埼玉県教育委員会
- 立石盛詞他 1982・1983 『後張 本文編・図版編Ⅰ・Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15・26集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 増田一裕 1987 a 『南大通線内遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第9集第1分冊、本庄市教育委員会
- 1987 b 『東富田遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第10集、本庄市教育委員会
- 1989 a 『四方田・後張遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第14集、本庄市教育委員会
- 1989 b 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』本庄市埋蔵文化財調査報告第9集第2分冊、本庄市教育委員会
- 1990 『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅳ—御堂坂第2号墳の調査—』本庄市埋蔵文化財調査報告第16集、本庄市教育委員会
- 1991 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』本庄市埋蔵文化財調査報告第9集第3分冊、本庄市教育委員会
- 松本 完 2013 『久下前Ⅴ（F1地点）・久下東遺跡Ⅵ（G1地点）』本庄市埋蔵文化財調査報告第32集、本庄市教育委員会
- 2015 『北堀新田前遺跡Ⅱ（A2・A3地点）・北堀新田遺跡Ⅳ（A2・B地点）・久下東遺跡Ⅷ（G3地点）』本庄市埋蔵文化財調査報告第32集、本庄市教育委員会
- 大熊季広・藤波啓容・亀田直美他 2009 『浅見山Ⅰ遺跡（Ⅲ次）・久下東遺跡（Ⅲ次）A1・B1地点・北堀久下塚北遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告第13集、本庄市教育委員会
- 町田奈緒子 2002 『久下前遺跡第3地点発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第25集、本庄市

教育委員会

- ・の野善行 2010 『久下前遺跡（C1地点）・北堀新田遺跡（A1地点）・宍勝寺北裏遺跡（A1・B1地点）』本庄市埋蔵文化財調査報告書第23集、本庄市教育委員会
- 美里町史編纂委員会 1986 『美里町史 通史編』美里町
- 宮島義和 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査調査報告書26—更埴市内その5—更埴条里遺跡・屋代遺跡群』長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター
- 宮田忠洋 2008 『東五十子北町中遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第8集、本庄市教育委員会
- 宮本久子 2010 a 『秋山大町遺跡—B・C・D・E地点の調査—』本庄市遺跡調査会報告書第36集、本庄市遺跡調査会
- 2010 b 『秋山大町東遺跡 秋山諏訪平遺跡Ⅲ—D・E・F地点の調査—』本庄市遺跡調査会報告書第37集、本庄市遺跡調査会
- 山崎一雄 1987 「日本出土ガラスの化学的研究」『古文化財の化学』思文閣出版
- 吉田 稔・宮瀧交二 1991 『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 渡辺 一 1990 a 『鳩山窯跡群』Ⅱ、鳩山窯跡群遺跡調査会
- 1990 b 「南比企窯跡群の須恵器の年代」『埼玉考古』第27号、埼玉考古学会